Thomas Pynchon Complete Collection
1973

Gravity's Rainbow I

Thomas Pynchon

『重力の虹』［上］

トマス・ピンチョン

佐藤良明 訳

新潮社

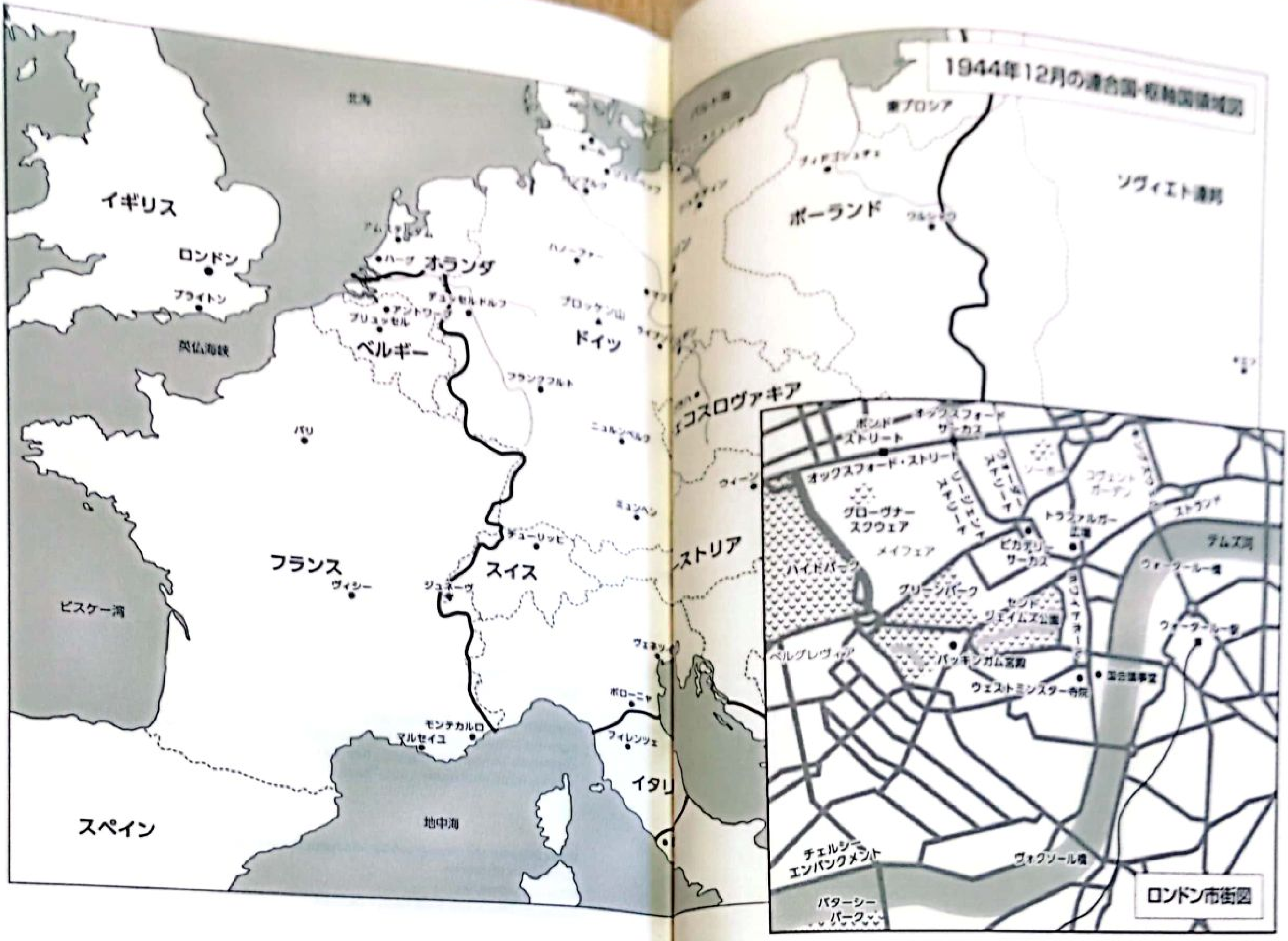
CamScannerでスキャン

目次

上巻
第一部　ビヨンド・ザ・ゼロ　011
第二部　カジノ・ヘルマン・ゲーリングでの休暇　343
第三部　イン・ザ・ゾーン　533

下巻
第三部　イン・ザ・ゾーン（承前）
第四部　カウンターフォース
解説——『重力の虹』とその時代
人物・事項索引
主なキャラクター

CamScannerでスキャン



CamScannerでスキャン

第一部　ビヨンド・ザ・ゼロ

CamScannerでスキャン

自然は消滅を知らず、変換を続けるのみ。過去・現在を通じて、科学が私に教えてくれるすべてのことは、霊的な生が死後も継続するという考えを強めるばかりである。*

――ヴェルナー・フォン・ブラウン

＊ ナチスのロケットの開発者フォン・ブラウン博士は、敗戦時に米軍に投降、アメリカに渡ってアポロ計画を主導した。この神秘主義的な言葉の出典はウィリアム・ニコルズ篇『生きるよすがとすべき言葉の本』（一九六二）に寄せた「私はなぜ不死を信じるか」という短文。

□□□□□□□

一筋の叫びが空を裂いて飛んでくる。[1] 前にもあった、だが今のは何とも比べようがない。いまさら手遅れだ。〈疎開〉は続くが、ただの見てくれ（シアター）でしかない。列車の中は真っ暗。わずかな光もない、どこにもだ。頭上に組み上がった鋼材は鉄の女王（アイアン・クイーン）と同じくらい古び、そのはるか上にガラス屋根。昼間なら光を通すだろうが今は闇だ。ガラスが落ちてきたらどんなことになるだろうかと不安になる――もうすぐ――壮観だろう。水晶宮（クリスタル・パレス）の崩落。[2] 漆黒の中にかすかなキラメキもないまま起こる、巨大な不可視のクラッシュ。

車輌の内部は何段にもなっている。ビロードのような闇の中、煙草もなく彼は腰を下ろしている。近くでも遠くでも金属が軋り合い、連結し、蒸気が噴霧となって圧を逃れる。車輌が振動するのが伝わってくる。宙づり感、みなぎる不安、まわり中すし詰めだ。虚弱者たち、第二の羊、[3] 運に見放され時から落ちこぼれた者――酔っぱらいも、二十年前の被弾のショックからいまだ立ち直れない退役軍人も、背広を着たハスラーも、浮浪者も、信じがたい数の子供を抱え憔悴した母親もいる。あらゆる者が一緒くたに積みこまれ救済のため運び出される。ごく近くの顔だけがほのかに浮かぶが、その顔もカメラのファインダ

1 ロンドンに最初のV2ロケットが落ちてきたのは一九四四年九月のこと。約一トンのアマトール爆薬を搭載した超音速ロケットは、ロンドンへは翌年三月までに、総計一三〇〇機以上が飛来した。市民の大規模な疎開は、V1（翼のついた無人飛行爆弾）による攻撃とともにこの年の六月に始まっている。

2 一八五一年のロンドン万博会場となった鉄とガラスの大建築物。一九三六年の火事で崩落。

3 カルヴァン派の教義「予定説」における「見捨てられし者」（プレテリット）の異称。

CamScannerでスキャン

ーで見るように銀色がかって、車を飛ばし街を逃げ出すＶＩＰの、防弾窓の向こうに想像される緑に染まった顔のよう・・・

動きだした。まっすぐに、中央駅から、中心街を抜け、旧市街のより荒廃した地区へ。これは脱出の道なのか。顔たちが窓のほうを向く。だが誰も疑問を口にしようとしない。雨が降りおちる。いや、これは解けていくのではなく、ますます縺れていく過程なのだ――アーチの入口にさしかかった。朽ちたコンクリートの秘密の入口、一見それはふつうのアンダーパスの円弧のようにしか見えない・・・黒ずんだ木組みの構造が頭上を過ぎた。石炭の匂いがただよう。遠い過去の匂い、ナフサ[4]の冬の匂い、交通の絶えた日曜日の匂い、成長する珊瑚のような謎に充ちた生の匂い・・・いきなりのカーブを曲がってさびれた支線を進む。鼻を突くサビの匂い。運行から見放された線路で、まぶしく深く空虚に向かう日々を通して進行していく酸化の過程。ことに夜明けの蒼い影に覆われた下で進展するそれは、出来事を〈絶対のゼロ〉へ運んでいく・・・奥へ進めば進むほど貧しい・・・荒んだ貧者の秘密の街、その名も聞いたことのない場所・・・壁が壊れ屋根がなくなるとともに光の可能性も減っていく。行く手はだんだん開けていくはずなのに、さにあらず、しだいに先細り、つっかえ、カーブも急になり、そして唐突に、こんなにも早く、最後のアーチの下に出た。掴みかかり飛び跳ねるブレーキ。審判が下ったのだ、上告などありえない判決が。

隊列は停まった。路線はここまで。疎開者はみな外へ出ろと。ゆっくりながら抵抗のない歩み。鉛色の帽章をつけた引率者は押し黙ったままだ。途轍もなく大きなホテル、異様に古くて暗いそこはすべて鉄製、まるで線路と転轍機の延長だ。・・・濃緑色に塗られ、何世紀も点灯されぬまま、複雑な形の鉄の庇から垂れたグローブライト・・・群衆はざわめか

4 原油を蒸溜して得られる透明な液体。プラスチックなど石油化学製品の原料となる。

ず咳もせず、まっすぐで機能的で倉庫の通路のような回廊を進む・・・ビロードの黒い表面が行進を包みこむ。古い木の匂い。流入する疎開者を受け入れるため長期の空白から呼び覚まされた遠隔の翼棟（ウイング）では、冷たい漆喰の壁に死滅した鼠たちの霊が洞窟に頑固な光のシミとなって張りついている・・・疎開者らはグループにわかれ昇降機へ入っていく——四方があいた処刑台のような木製のそれは、タールを塗った古いロープとS字型のスポークをもつ銑鉄の滑車で引き上げられる。昇降機が止まると、そのつど褐色のフロアで動きが始まる・・・明かりのない、黙りこくった何千もの部屋たち・・・

ある者はひとりで待ち、ある者は何ひとつ見えない部屋を他人と分かつ。そうだよ、不可視なんだ、ここに及んで部屋の備えがどうだろうと構うものか。彼らの靴が踏みしめているのは古い古い土くれ。都市が拒絶し、脅しをかけ、子供らに隠してきた、そのすべてが降り積もり固まったもの。先程から耳もとに、自分にだけささやくような不思議な声が聞こえていた。「まさか救われるなどと思ってはいないだろうな。さあ、われわれみんな、どういう人間か、正体は知れたのだ。誰もわざわざお前らなんぞを救おうとはしなかったということだ・・・」

出てゆくことはできない。横になって待つんだ、黙って身を横たえていろ。空を裂く叫びが止まった。それが落ちてくるのは闇の中なのか、それともそれは自身の光を携えてくるのか。光は先か、それとも後か？

おや、もう光がきている。いつからだろう。部屋に光が浸透しはじめ、朝の冷気と溶け合いつつ彼の乳首を横切るように流れ、酔いつぶれた人間どもの散らばりを示している。軍服を着た者、脱いでいる者、カラになったか残り少ない酒瓶を手にしたままの者、椅子

5　自分は「選ばれの身」だったのか「破滅の運命」にあったのかという、宗教的なテーマが絡む。

6　ピンチョン研究家スティーヴン・ワイゼンバーガーが、当時の新聞の天気欄やラジオ番組表に基づいて推断したところによると、一九四四年十二月十八日の朝が明けた（*A Gravity's Rainbow Companion* 改訂拡充版、二〇〇六、以下『GRC』と略記）。以後、しばらく同じ日の出来事が描かれ、86ページからの犬の捕獲のエピソードが、その晩の夜半過ぎということになる。

に覆いかぶさった者、火のない暖炉にうずくまった者、巨大な部屋の各層の長椅子、寝椅子、埃だらけの敷物の上で伸びている男たちから、不調和なリズムでガーゴー・ゼーゼー、いびきの自動コーラスがわき上がるさまを、ロンドンの、冬のしなやかな光がとらえる。中仕切り入りの窓と窓の間に光が広がる。消えつつも今なおたなびく昨夜の煙草のケムリの間に、天井の蠟引き梁のまわりに光が充ちる。横たわる戦友たちの顔はみんなバラ色、数分後には死から確実に復活する夢を見ているオランダ農夫のようだ。

彼の名はジェフリー・プレンティス。〝海賊(パイレート)〟の渾名で呼ばれる大尉である。[7] 体をくるむ分厚い毛布はオレンジと錆色と深紅のタータン織りだ。いま彼は頭がメタルになったように感じている。

その頭上四メートルの高みにある室内バルコニーの、何週間か前に誰かが激怒にまかせて黒檀の欄干を二本蹴りとばしたちょうどその位置で酔いつぶれたテディ・ブロートが、ずりずりと隙間から落ちそうだ。眠りこけたテディの頭と、左右の腕と胴体が、すでに大きく迫りだしている。尻のポケットのシャンパンの空瓶がたまたまうまく引っ掛かって彼の落下を防いでいるだけ——

狭くるしい簡易ベッドですでに身を起こしたパイレートが、瞬きながら周囲を見回す。なんてザマだ。ひどすぎる……そのとき頭上で布の裂ける音がした。SOE[8]の諜報部員として鍛えられた彼の肉体は瞬時に反応し、飛びのきざまにベッドを蹴るとキャスターがガラゴロ転がり真っ逆さまに落ちてきたブロートをど真ん中でキャッチする。衝撃に、スプリングが高らかに鳴る。ベッドの足が一本折れた。「おはよう」とパイレート。ブロートは一瞬ニヤリとして、パイレートの毛布にぬくぬくと潜りこみ、そのまま眠りに戻ってい

7 ギルバートとサリバンの喜歌劇『ペンザンスの海賊たち』（一八七九）の冒頭近くで子守女のルースが「操舵士 pilot」の見習いを「海賊 pirate」の見習いと聞き違えた。それに引っかけて、「見習い apprentice」と似た名前のプレンティスは「海賊」の渾名で呼ばれる。

8 Special Operations Executive＝特殊作戦執行部。ナチス占領下の欧州大陸で諜報・偵察・破壊活動を行いつつ、地下レジスタンス運動を支援

く。

ブロートもここの借家人のひとりだ。チェルシー・エンバンクメント[*9]にほど近い場所に位置するこの館は、前世紀にコリドン・スロスプなる、ロセッティ兄妹[*10]とも交流のあった男が建てた。スロスプはヘア・スモックを被った姿で屋上に上がり、幻覚系の植物の世話をするのを好んだ（その伝統は今日、年若いオズビー・フィールが受けついでいる）。中にはロンドンの霧と霜に耐えて生きのこったのもあったとはいえ、屋上の草はおおむね枯れて腐り、その奇なるアルカロイド分子と共に土にかえった。その土の上に、後をついだ住人が飼育した折紙つきのウェセックス・サドルバックの三頭の雌豚の垂れる糞便と、そのまた後をついだ住人たちが飾りに植えた木々の枯葉と、あまたの美食家が食べのこし吐きもどした名状しがたき食物が入りまじり、これを歳月の手がパテのようにこねまわして、厚さ数フィートに及ぶ、信じられないほど黒々とした極上の屋上庭園壌土ができあがった。この土なら、バナナだって育つことは請け合いだ。というわけで戦時のバナナ不足に胸を痛めていたパイレートは、ここにガラスの温室を作ることを思い立った。そしてリオ—アセンション—フォール・ラミ[*11]を廻っている飛行機乗りの友人にバナナの若木を持ち帰ってくるようにせがんだ。次に落下傘部隊の出動がかかったらドイツ製のカメラを分捕ってきてお返しすると約束して。

かくしてパイレートは、みずから催す〈バナーナ朝食会〉で名を馳せる。会食者はイングランド中からやってきた。中に名うてのバナナ嫌いやバナナ・アレルギーの者までいたのは、細菌のポリティックスとかいうものを観察するため。なにしろ、神のみぞ知る環（リング）と鎖（チェイン）の複雑な網目状の蔓延が、身の丈一フィート半に及ぶバナナーナの実を繁茂させた。驚

したイギリスの秘密組織。

9 テムズ河北岸の遊歩道のうち、都心の南西チェルシー地区を東西に走る。

10 ラファエル前派の代表的芸術家ダンテ・ゲイブリエル・ロセッティと、妹のクリスティーナ。兄はこの地区に一八六二年から八二年に没するまで住んだ。

11 アセンション島は南大西洋の英領の島。フォール・ラミは、当時の仏領赤道アフリカの都市で、現在のチャド共和国の首都ンジャメナの旧称。

CamScannerでスキャン

愕の事実である。

パイレートは便器の前、からっぽの頭で放尿している。それから腕をくねらせウールのローブを着こむ。裏返しに着るのは、ポケットに入れた紙巻煙草を他人に感づかれないためだが、効果のほどは微妙だ。熱気を発する戦友の体の脇を通り、観音開きのガラス戸を開け戸外へ出るなり、ウーと唸る。詰め物の歯に冷気がしみた。螺旋階段を屋上ガーデンまで上り、ひょいと立ち止まってテムズ河を見つめる。太陽はまだ地平線の下だ。きょうも降雨の気配はあるが、街の空気は今のところ珍しく澄んでいて、巨大な発電所も、その向こうのガス工場も鮮明だ。まるで朝のビーカーについた結晶の粒のよう、煙突と通気口と塔と配管と、捻れながら噴き上がる蒸気と煙……

「ハアーッ」パイレートの声なき咆哮。口から漏れた蒸気が胸壁（パラピット）を抜けていく。「ハアアアーッ！」朝の屋上が踊る。巨大なバナナの房々は輝く黄色、うるおう緑。階下の連中はバナナの朝食の夢を見ながら涎を垂らしているだろう。きょうもまたうららかな一日が何事もなく——

いや、それはどうか。遠く東、ピンクの空の下の緑、眩しいほどに煌めくあれは新星か、そのくらい明るい光だ。胸壁にもたれて見つめる、きらめく先端はすでに短い垂直の白線になった。北海を越えたどこか……そのくらいの距離はある……その下は凍えた光を塗りたくった氷原か……

何なのだ、これは。こんなこと、初めてだぞ。だがパイレートは実のところを知っていた。つい二週間ほど前、映画を見せられていた……飛行物体のあとに引かれる蒸気の尾——いまはもう指一本の幅に広がった——あれは飛行機の雲ではない。飛行機雲は垂直に

CamScannerでスキャン

は上がらない。こいつは新型の、いまだトップ・シークレットの、ドイツ軍のロケット爆弾だ。

「郵便でーす（インカーミング・メール）」とつぶやいたのか、それとも心に思っただけか。彼はロープの、ボロボロになった腰紐を締める。ロケット弾なら飛距離は二〇〇マイル超。二〇〇マイルも先の蒸気の尾が見えるわけが——

待てよ、可能だ。東の果て、地球の曲面のちょうど向こうのオランダは、今まさに太陽がのぼったところ——だとすれば、ロケットの噴射する排気、水滴、結晶に朝日が当たって、海のこちらのロンドンでもくっきり見えておかしくない…

空を伸びゆく白線が突然上昇を止めた。ってことは燃料の供給が止まったか…燃焼終わり。やつらの言葉で〈ブレンシュルッス〉と言った。英語にはない単語[*12]——あっても機密扱いだ。白線の根元、初めの星（オリジナル・スター）が見えたところはもう夜明けの朱に溶けつつある。だがロケットはパイレートが日の出を見る前にやってくるだろう。

白線がたるみ、二、三本の筋に分かれて空に垂れかかる。ロケットはすでに慣性飛行に入り、不可視のまま上空を上りつづけている。

おい、何か今するべきことはないのか…スタンモア[*13]の作戦司令部に連絡するとか。きっと彼らの海峡監視レーダーもとらえている——だめだ、そんな時間はない。ハーグからここまで五分とかからない（角の茶屋まで歩いただけで時間切れだな…太陽を飛び出た光がこの愛の星に届くほどの時間しかかからないんだから…）。通りまで走るか？　大声でみんなに危険を知らせるか？

バナナを摘もう。黒い堆肥を抜けて温室の中へ。彼の下腹でググッと糞が動いた。ミサ

12　Brennschluss＝英語に直訳すれば、burn-closing。

13　ロンドン北西の郊外。SOEの本拠地。

イルは今ごろ上空六〇マイルで軌道の頂点に達し・・・落下を始めたか・・・いまこの瞬間・・・

朝の陽が三角構造に組んだ鋼材を貫き、ミルク色した窓硝子が穏やかにほほえむ。どんなに灰色の冬も——今年の冬でさえ——この鋼鉄を老けこませることはできないだろう。風が吹けば、そいつは歌う。あれらの窓も、次の季節——たとえ偽りの、保存された季節であっても——へ向かって開くのだ。かき曇らされたりするものか。

パイレートは腕時計に目をやるが、何も頭に入らない。顔面の毛穴がチクチクする。心の中をカラッポにするのもコマンド隊員の技のひとつ、そのままバナナ園の湿った暖気の中へソロリと入る。熟れたバナナをもいでは、たくし上げたローブの裾に乗せる。バナナの数を数えるだけ、それ以外は考えない、トロピカルな薄光のなか、ぶらぶら揺れる黄色いシャンデリアの間を、脛毛の脚を出して進む・・・

ふたたび冬の冷気の中へ。東の空をまっすぐ上った雲は消えた。肌に乗った汗の玉が氷のように冷たい。

煙草にやっと火がついた。そいつが落ちてくるのは聞こえないんだ。音速より速いんだ[*14]から。最初の報せが爆発で、それを運良く生きのびられたら落下音が聞こえてくる。

そいつに脳天のど真ん中を直撃されたらどうなる。アアア・ノー！　一瞬、ロケットの突端を感じるのか。とてつもない重量で頭蓋骨にめりこむのを・・・

パイレートは肩を丸め、バナナを携えて螺旋階段を下りていく。

14　「燃焼終結」のあと、V2ロケットの機体はしばらく上昇を続け、八万メートルを超える高さに達して落下に転じる。落下途中に音速を超え、最大速度はマッハ4ほどに達した。

□□□□□□□

青いタイルのパティオを横切り、ドアを抜けてキッチンへ。ルーティンの手順——アメリカ製ミキサーの電源を差しこむ。去年の夏にアメリカ人から、どこだったか市の北の独身士官の界隈でやったポーカーで、賭け金代わりに巻きあげた代物だが、よくは憶えていない。……バナナを数本刻み、コーヒーを淹れ、クーラーからミルクの缶を出す。バナナ・ミルクのピューレだぞ、英国中の酒にやられた胃壁をこれで癒してやる。……マーガリンを一カケ（この匂いならまだオーケーだ）シチュー鍋で溶かし、もっとたくさんバナナを剝いて縦方向にスライスし、溶けてジュージューいっているマーガリンの上に落としたら、オーヴンに点火。ポン！　いつかみんな吹っ飛ぶぞ、ハハハ。グリルが熱くなってきたら、剝いたバナナを丸ごと入れて。マシュマロを見つけてくる……

パイレートの毛布を頭にかぶったテディ・ブロートがよろけて登場、バナナの皮に足をとられて尻から落ちる。「死ぬぜ」

「急ぐな、待ってりゃドイツ軍が殺してくれる。けさ屋上から何が見えたと思う？」

「V2が飛んでくるのが？」

CamScannerでスキャン

「当たりだ。A4」[*1]
「窓から見てたよ。十分くらい前。ヘンなやつだったよな。あとの音沙汰がない——ってことは、不能ロケットで海にポシャったか」
「十分前?」腕時計を読もうとする。
「少なくともな」プロートは床に尻をついたままバナナの皮を一輪、花（ブトニエール）代わりにパジャマの襟に差そうとしている。
　結局パイレートは電話機まで行ってスタンモアのダイヤルを廻す。例によってつながるまでに長ったらしい手続きを踏まなくてはならんのだが、実は本当にロケットを目撃したとは、もう自分でも信じていない。空の上から神の手が伸びてきて鋼鉄のバナナを一本もいでいっただけの話だろう。「こちらプレンティス、先ほどオランダ方面に何かキャッチしていませんか、レーダーに? そう、そうです。見ました、たしかです」これじゃ、日の出を眺める気も失せる、まったく。いったん電話を切る。「一発、むこうの沿岸に落ちたとよ。燃焼終結（ブレンシュルッス）のタイミングが早すぎたと言ってる」
「落ちこむことはないさ」プロートは破損した寝台に這いもどって、「次のやつがまた来るって」
　プロートというやつは万事において前向きだ。スタンモアの本部につながるのを待ちながらパイレートの頭の中に数秒間、考えがめぐる。危険は去り〈バナーナ朝食会〉は救われた、とはいっても執行が猶予されただけの話。そうだよな。いつまた別のロケットが自分の脳天めがけて落ちてくるか、今後どれだけの数を打ち上げるのか、両軍どちらもわかっていない。もう空を見るのはやめろってことかよ・・

1　「V2」とは、「報復兵器2号」という意味の俗称。ロケットの機種としてはA1から開発して四番目のモデルという意味で「A4」と呼ばれた。Aの意味は、463ページに。

CamScannerでスキャン

演奏者用バルコニーに立ったオズビー・フィールが、パイレートの温室産の特大バナナを縞のパジャマのズボンの穴から天井に向けて突き立てている。片手で、その屹立する黄色い曲面を、三連符を強調したブルースのリズムに合わせて撫でながら、夜明けを告げる歌のはじまりだ――

起きーろ、みんなケ〜ッあげ〜ろー（ハヴァ・バナーナ）
歯をみがけ、きょうも戦争に出かけるぞ
眠る祖国に、手を振って
夢のあの娘にゃキスしてバイバイ
グレイブルちゃん、いい子で待ってて[2]
VEデイまでおあずけだー[3]
帰ってきたら、めちゃくちゃパーティ（ハヴァ・バナーナ）
バブリー・ワインにグラマー・ガール
けどその前に、ドイツ兵野郎をつぶさにゃならん
だから笑って、白い歯みせて
というわけで、さっきも言ったが
起きーろ、みんなケ〜ッあげ〜ろ〜〜〜

二番の歌詞もあるのだが、そこに行きつく前に、バートリー・ゴビッチとデカヴァリー・ポックスとモーリス・（"サクソフォン"）・リードを先頭とする面々が飛びかかり、奪

2　アメリカ映画『ピンナップ・ガール』（一九四四）に出演した美脚の女優ベティ・グレイブル。

3　欧州戦線での勝利の日。ほぼ四ヶ月半後の一九四五年五月八日に実現する。

CamScannerでスキャン

いとったバナナで跳躍するオズビーをしたたか打ちのめした。キッチンでは、パイレートのダブルボイラーの上で、闇市から来たマシュマロがフニャリとシロップの中へ滑りおち、じきにトロトロふつふつ濃密な沸騰を始めるだろう。コーヒーが香る。木製のパブの看板をまな板にして、どでかい両刃のナイフを手にしたテディ・ブロートがバナナを切りきざんでいる。〈スナイプ＆シャフト〉の文字が消えずに残るこの看板は、あるとき酔ったバートリー・ゴビッチが大胆にも白昼の襲撃でせしめてきた。バナナを刻むテディ・ブロートの神経質な刃先の下に、パイレートの片手がさっと入って金色に輝く練り物を押しのけ、フレッシュ・エッグをからめたワッフルの練り粉の中へ落とす。この卵、オズビーが同じ数のゴルフボールと交換で手に入れてきたもの——この冬のゴルフボールは鶏卵以上に数が乏しいというのに。パイレートのもう一方の手は針金の泡立て器を握っている。混ぜたバナナをかき混ぜるには力の入れすぎに要注意。オズビーは仏頂面してフライパンとダブルボイラーの中のどき自分の口にも入れながら、ヴァット69の水割り入りの牛乳を、ときトロトロ加減を見ている。ブルーのパティオへの戸口付近には、コンクリート製のユングフラウの縮尺模型があって、これは一九二〇年代にひとりの一徹な男がまる一年、鋳型作りとコンクリ流しに励んでいるうち、ドアから出すのが不可能なほど大きくなってしまった。そのユングフラウの斜面に、デカヴァリー・ボックスとヒーキン・スティックが赤いゴム製の湯たんぽをぶつけているのは、バナナ・フラッペ用の氷を砕いているのだ。幾晩も伸ばしたヒゲ、起きぬけのクシャクシャ髪、目は充血し、毒気をはらんだ息を吐く両人を見ていると、酔っぱらった古代神が動きの鈍い氷河をせき立てているかのようだ。

メゾネットの別の場所では、ほかの酒飲み仲間が毛布とからんだ身をはがし〈パラシュ

ートの夢を見て、毛布の外へ屁をぶっぱなしたヤツもいる）、浴室の流しに小便をし、ヒゲ剃り用の凹んだ鏡の自分の姿を見てうろたえ、頭髪の退きはじめた額を無策にペチャペチャ湿らせ、サム・ブラウン・ベルト[4]を締め、はやくもやる気のなさそうな手で午後の雨に備えて靴に塗油し、うろ覚えのあやしげな節で流行歌を口ずさみ、仕切られた窓からこぼれ来る光だまりに身を横たえて暖まった気分になり、あと小一時間で始まる本日の軍務のウォームアップに仕事の話をぼそぼそ始める。首と顔面に泡を塗りたくり、欠伸をし、鼻クソをほじり、〝犬の毛〟[5]はないかとキャビネットや本棚を探し回る。手出ししたのはこっちだったが、その犬には、条件づけもあったとはいえ、昨晩こっぴどく噛みつかれた。

昨夜の紫煙と酒と汗の臭いに代わって今この部屋にたちこめる、〈朝食〉の繊細にしてバナナ的な芳香。花の香のような、充満する、驚くべき、冬の陽ざしの色より濃厚な香り。荒々しく鼻を突くのでも量で圧倒するのでもなく、細やかに入り組んだ分子の織りあわせによって支配を拡げる。組成に込められた魔法によって――〈死〉がこんなにきっぱりと蹴り出されることもめずらしい――遺伝子が織りなす連鎖は、ひとりの人間の顔を十世代、二十世代と保持し伝えるに充分な迷宮的複雑さを持つものだ。それと同じ〈構造による主張〉が、戦時の街に、朝のバナナの芳香を這わせ、くねらせ、行きわたらせる。窓を開けよう、すべての窓を。この優しい香りをチェルシー全体に敷きつめよう。落下してくる物体からの魔除けとして・・・

椅子を動かす音。砲弾箱を逆さにしてベンチやらトルコ風長椅子やらを引きずる音。〝海賊（パイレート）〟の仲間たちが巨大な会食テーブルの岸辺に集う。ここはもうコリドン・スロスプの冷んやりと中世的な幻想空間ではない。回帰線をまたいだ向こう、熱帯の島の岸辺だ。

4 ななめのショルダー・ストラップ。しばしば脇にホルスターもついた軍用ベルト。

5 「迎え酒」のこと。犬に噛まれたとき傷口に犬の毛をはりつける習わしから。

CamScannerでスキャン

黒々と木目うず巻く胡桃材の台地に上がった彼らはバナナ・オムレツ、バナナ・サンド、バナナ・キャセロールを攻めおとす。片脚立ちのライオンの英国紋章の形に造ったマッシュ・バナーナを生卵と一緒にフレンチトースト用の生地に混ぜこみ、筒先から絞りだしてバナーナ・ブラマンジェのクリーミーな地の上に、*C'est magnifique, mais ce n'est pas la guerre*[6] の文字を記す。〈軽騎隊の攻撃〉に際してフランスの将軍が口にしたというこの言葉を、パイレートはみずからのモットーとしていた……背の高い瓶に入れた淡色のバナナ・シロップがバナナ・ワッフルの上にトロリ。大瓶の中は、角切りにした去年の夏のバナナに蜂蜜と干葡萄を加えて発酵させてあり、そこから一人がマグになみなみ泡立つバナナ酒を掬いとる……バナナ・クロワッサンにバナナ・クレプラック、バナナ・オートミール、バナナ・ジャム、バナナ・ブレッド。リストは尽きない。ピレネー山脈の酒蔵──そこには秘密の無線通信機もあった──からパイレートが持ち帰った古い年代物のブランデーをかけて火であぶったバナナ……

電話が鳴っている。部屋をつんざき、二日酔いも、いちゃつきも、皿のガチャガチャも、まじめな話も苦笑いもみんなつんざく、二連発の金属音のオナラのようなベル。[8] おれだ、とパイレートは確信する。近くにいたブロートが、もう一方の手にフォークに刺したバナナ・グラッセを突き上げた恰好で受話器をとる。パイレートはバナナ酒の最後の一口をあおる。喉元をそれが降りていくのを感じる。まるで時そのものを──穏やかな夏のひと時を──飲みこんだかのようだ。

「おまえの雇用主だ」

「人使いが荒いぜ」パイレートが呻く。「まだ朝の腕立て伏せもすませていない」

6 フランス語で「見事ではあるが戦争ではない」。

7 クリミア戦争時の一八五四年十月、カーディガン卿の率いる軽騎隊が、バラクラヴァの谷を渡って、圧倒的に数で勝るロシア軍に攻撃を仕掛けたのを、丘から見ていたフランスのピエール・ボスケ将軍が言ったとされる。悲壮な戦いはテニスンの詩を通して有名になった。

8 イギリスの電話のベルはジン・ジーンと二回ずつ鳴る。

これまでに一度だけ耳にしたことのある声だった。去年この声で作戦指示(ブリーフィング)を受け、手も顔も黒くして正体を隠した一ダースの面々に混ざって聴いた。その同じ声が告げる——グリニッジに、パイレート宛てのメッセージが届いていると。

「なかなか愉快な届き方だった」甲高く、不機嫌そうなその声が言う。「私の知り合いに、そんな賢いのはいないな。私への手紙はみな郵便で届くよ。取りに来てくれるだろうね、プレンティス君」受話器を置く乱暴な音。回線が切れる。そうか、今朝のロケットが落ちた場所と、爆発がなかった理由がこれで解けた。「郵便でーす」か、まったく。[*9] 太陽光線の控え壁(バットレス)を通して朝食の光景を眺める。豊穣のバナナにむしゃぶりつく仲間たち。腹をすかせた男たちの濃厚な咀嚼音は、両者の間の朝の拡がりのどこかで失われ、彼の耳まで届いてこない。突然、一〇〇マイルの距離を感じた。戦争の網(メッシュ)の目の中に生きていても、孤独は襲ってくる。孤独は勝手気ままなものであって、はらわたを不意につかんで今も彼を引きずりこんだ。どこかの窓の向こうに立って、見知らぬ男らの食事シーンを眺めているような感覚が今また彼を捉える。

車で市街を走る。従卒(バットマン)のウェイン伍長[*10]が運転する凹みのあるグリーンのラゴンダは、ヴォクソール橋を渡り一路東へ。今朝の気温は日が昇るにつれて低下していくかのようだ。どうやら雲もたちこめてきた。近くの爆撃跡の片づけに向かうアメリカの工兵たちが道に吐き捨てるように歌う——

きょうの寒さはよ〜ぉ
越冬隊のジャケツ

9 19ページの自分自身のつぶやきへの言及。英兵の間で、飛んでくる爆弾のことを「郵便」と言い換えるスラングが流行っていた。

10 因みに、一九三九年に始まった漫画のバットマンの本名も（ブルース・）ウェイン。

魔女の垂れたパ〜イパイ
ペンギン・ウンコのパ〜ケツ
シロクマ〜のお〜ケツ
の冷たさぁだよ〜ぉ

違う、やつらはナロードニキの仮面をかぶって人民の味方のふりをしているが、俺は欺かれんぞ。あいつらはヤシの町の出で、コドレアヌに属する〈連盟〉[*11]の連中なのだ。首領の指示で殺す誓いを立てている。おれも狙われている……トランシルヴァニアのマジャール人というのは魔法の呪文を知っていて……夜になるとささやくのだ。……おっと、オッホン、ヘッ、ヘッ、パイレート様の〈海賊的コンディション〉というのがまたぞろ現れてきたようですな。まさかというときにかぎっていつも出現する。ここらでお話ししておきましょう、公的ファイルが「海賊プレンティス」と呼ぶのは、実に奇異なる才能で、どんな才能かって、これがすごい。他人の空想に入りこみ、当人に代わってその管理を引き受ける、いま入ってきたのは、ルーマニアからの逃亡者で、この先すぐにも必要になるかもしれない王党派の一員の空想だ。プレンティスのこの才能は〈ファーム〉[*12]にしてみたら、ありがたいことこの上ない。戦争のこの時期に、指導者そのほか歴史をつくる要人の精神衛生は是が非でも守らなくてはならないわけで、心に溜まってくる過剰な不安要素は取り除きたい。それを誰かに引き受けさせることができたら、そりゃもう、〈ファーム〉にとっては願ったり叶ったりだ。白昼夢など沸いてきたなら、そんなものに精神を消耗させず、汲みとりだして別の誰かに管理させる……熱帯の隠れ家の淡い緑の光の中で暮らしたり、

11 ルーマニアの反共・反ユダヤ活動は、一九二二年、ヤシ大学の学生だったコルネリウ・コドレアヌを中心に「国家キリスト教防衛連盟」を結成。さらに極右化を強め、二七年には「大天使ミカエル軍団」(通称「鉄衛団」)の成立を見る。

12 〈the Firm〉とは、SOE(特殊作戦執行部)の通称。

火星を吹きぬける熱い風を感じて、長いピアノのビブラートを飲んだのするのは、こっちの男にお任せあれ。席を替わって、お偉方の出入りする会議の玄関と向かい合い、きちんと見張って、彼らの無垢な心にこれ以上の負担を負わせないよう・・・奮起を感じてきたら代わりにしてさしあげる。医者たちが不適切と感じる想念をえんえん引きうけて・・・恐怖も感じずにすむよう代わりに感じてさしあげる・・・P・M・S・ブラケット教授[13]が言っていたじゃないですか、「感情の突風で戦争は導けない」と。まあ、教わった戯れ唄でも歌って、気を静めて、へまはやらかさないことだ——

そうさ、すい様、夢想の請負人
ひとつのチャンシーを身代わり
代わりに扱ってさしあげる
ささやはやっぱお膝にいたって
チャッピンズポ・ジョーンズさんがお茶に来なくたって
お声がかかれば出動だ、誰がために鐘が鳴ろうとかまやしない
「ここら参数のチャーチルよりロンボーンの密偵発音」
危険なんてなにもかまやしない
危険というなら屋根からは、とうに滑りおちた身だ
ある日すい様が出かけたきりになったなら
むかしの都々逸は忘れちゃえ
墓にお供えっかかえて、しかもショーは続けてくれ

13　素粒子研究の霧箱を開発して後にノーベル賞を得た物理学者で、戦争中は、空軍の対空作戦司令長官のアドヴァイザーや、海軍省の戦略研究部局のディレクターを務めた。

二回目のサビのところは、歌なしのバンド演奏。ここでパイレートは膝を高く上げ、前後にスキップ。W・C・フィールズ[14]の頭（ピンクの鼻つき・トップハットつき）を握りに彫ったステッキをクルリと回し、マジックもやってみせそうな調子。これに走馬燈幻影（ファンタスマゴリア）が伴う。実物の光影が、観客の頭越しにスクリーンの軌道の上に降りかかる。その断面はヴィクトリア朝風のチェスのナイトに似せた繊細なイメージで、繊細ではあるけれども卑猥ではない——そしてまた後方へ飛びさっていく、突入（イン）と退却（アウト）を繰りかえす映像の大きさの変化があまり急激なので、見ている方はときどきは薔薇色にライムの緑を混ぜたみたいな気分になる。投影されるのは、代理夢想人としてのパイレートの生涯のハイライト集だ。若き日の、蒙古斑のとれない脳が〈少年期の阿呆〉の印を、頭の中心から投射しまくっていたころのエピソードに遡る。自分が夢想することの中に、こんなものが含まれるはずがないということは、ずいぶん前から意識していた。いや、白昼にしっかり内容の分析したわけじゃないが、ピンときていた。そしてとうとう、彼の夢想の実の帰属者と初めて出会う日がやってくる。あれは公園の水飲み場の近くだった。ベンチが長く整った列をなして連なり、刈りこまれた小さな糸杉のすぐ向こうに海の気配がした。歩道のグレイの砕石は、フェドラ帽の緑のよう、寝ころんだら気持ちよさそうだなと見えたそのとき、ボタンのとれた、涎たらしの、こんなやつ誰も会いたくないよって感じの浮浪者がやってきて、ガールスカウトの少女がふたり、噴水の水の高さを調節している手前に立った。少女たちは気がつかずに屈みこむ、そして避けがたく白い木綿の下着（ニッカー）が丸見えとなる。その下の、まだポチャポチャした小さなお尻の曲面が、パイレートのイカレた性感も確実に刺激する。そ

14 当時まだ健在だった仏頂面の喜劇王。

れを指さして、浮浪者はケタケタ笑い、一瞬パイレートのほうを振り向いて、なんとも不思議なセリフを吐いた。「ガールスカウトのねえちゃんが水を飛ばす…おまえの音(サウンド)は身も焦げる夜…だな?」こう言ってパイレートの目を見つめる。まじめな表情。いやはや、このセリフ、まさに二日前の朝、目をさます直前に夢に出てきたものだった。何かのコンテストがあって、その景品のリストに、この言葉が何気なく含まれていたのだ。あたりはすごく人だかりがして危険な雰囲気で、室内のはずなのにチャコール色の通りが入りこんできて…記憶はあいまいなのだが…同じ言葉をまた聞いて恐怖を感じたパイレートは、「あっち行け、さもないと警察を呼ぶぞ」と言ったのだった。

それでその場はしのげたが、しかしいずれは誰か、彼の特異な才能に気づくだろう。そしてしかるべき目的に利用してやろうと考えるだろう。パイレートは長いこと、ある自前の夢想に悩まされた。これはウージェーヌ・シュー[*15]のメロドラマのようであって、ビルマの盗賊団(ダコイツ)かシチリアのマフィアかに誘拐され、口にできないような目的に使われそうになるのである。

ふつう睡眠とは見なされない状態で〝夢〟を見た最初は一九三五年[*16]——当時は彼は〈キップリング時代〉であって、あたり一面、野蛮なファジー・ワジーが群れる中にいた。ギニア虫症だの東洋瘤腫だのが蔓延し、まる一ヶ月もビールが飲めず、本国との交信も、なぜだか知らぬが忌むべき土人の宗主になりたがっている他の列強の妨害にあってままならず、話のタネも尽きた。おふざけ調子のケーリー[*17]・グラントが入ってきてパンチ・ボウルの中に象に使うクスリを混入するでもなく…英国兵なら誰もが聞いた懐かしの古典〈脂ぎったデカ鼻のアラブ人〉の話も底をついた…そんな、蝿のたかる午後四時、メロンの

15 海賊小説でも名を馳せたフランスの作家(一八〇四〜五七)。

16 英軍の侵略に対して勇猛に刃向かった東スーダンの民族の英兵による呼び名。〝縮れ毛の土人〟を意味する蔑称だが、ラドヤード・キップリングが彼らを賛美した詩(一八九二)のタイトルとして知れ渡った。

17 インドを舞台にしたキップリングの詩『ガンガ・ディン』の映画化作品(ケーリー・グラント主演、一九三九)に出てきたシーン。

CamScannerでスキャン

皮の腐った臭いがする中で、この前哨地の唯一の音盤――「衛兵の交替」オルガン演奏、サンディ・マクファーソン――の七千七百万回目の再生中のことであった。だからそれほど不思議というわけでもないのだが、豪華なるオリエンタル風の夢想がパイレートのぱっちり開いた眼の前に展開したのである。任務をさぼってフェンスのずっと向こう側、街の〈禁区〉へ忍びこむ。そこで乱交パーティを主宰するのは、まだ誰も正体に気づいていない〈救世主〉だ。彼と眼があった瞬間に確信が起こる。自分は彼の洗礼者ヨハネであり、ガザのナタンであって[18]、彼こそは神の子であると、本人にも周囲にも宣告し、そして彼を、地上的な意味でも、その聖なる御名においても愛するのだ、と。こんな幻想を抱くのは誰だろう、H・A・ローフのやつに決まっている。どの部隊にもこういうヤカラが一人はいる。イスラム信仰をもつ者は路上でスナップ写真を撮られたがらないこともポイと忘れてしまうヤツ……人のシャツを失敬して煙草を吸いきってしまうとあんたのポケットに手を伸ばして不法の紙巻きを抜き取り白昼の食堂で火を点けて、やがてニンマリ笑ってふらふらと憲兵のセクションまで歩いて行って、統括している軍曹にファースト・ネームで呼びかける。こんな野郎に、この幻想はお前のだなと確認を求めたのが運の尽き、彼の特異な才能はただちに上官たちの知れるところとなった。〈書類〉に書きこまれ、やがて〈ファーム〉へ送られ、あらゆる才の徹底利用を図る〈かれら〉の探索の眼にかかったらもう、ホワイトホール[19]への呼び出しは避けられない。ブルーのベイズ織りの野原のなか、トランス状態にされ、実験結果をペーパーまたペーパーに書きつけられ、眼球をぐるり廻され、眼窩に刻まれた太古の象形文字のような落書きを読まされるのだ……

最初の数回は反応が来なかった。夢想自体に不足はなかったが、意味ある人物のもので

18 ヨハネはキリストに洗礼をほどこし、いわば救世主として送りだした預言者。ナタンはダビデ王にヤハウェの意思を伝えた預言者。

19 首都の統治機構の中心をなす通り。ここに英国陸軍省、海軍省のほか、財務省、ロンドン警視庁などが並んでいた。

CamScannerでスキャン

はなかった。それでも〈ファーム〉は辛抱強く、「長期の展望」なるものを見据えていた。そしてついに、あるシャーロック・ホームズ的なロンドンの宵のこと、明かりの消えた街灯から、間違いようのないガスの臭いがただよってきて、前方、夜霧の中から現れいでた、こ、これは何だ、巨大な生物の器官か。注意深くにじり寄る黒靴のパイレート。そいつは敷石の上をぬるりぬるりと、カタツムリのように彼に向かって進み寄ってくる。通った跡の舗道に光るネバネバは、霧のせいでそう見えるわけじゃない。パイレートは恐怖によろけながら後退。両者の中央に交差点があり、怪物よりは早足だった彼が先にそこにたどり着いてとりあえず難は逃れたが、知ってしまったことは消し去りようもない。そいつはなんと、肥大扁桃腺(アデノイド)であったのだ！　いや扁桃腺といっても、すでにセントポールの大聖堂ほどの大きさがあって、時間の経過とともに肥大化していく一方なのだ。ロンドン中が、ひょっとしたらイギリス全土が、壊滅に瀕している！

　このリンパ肥大のモンスターはかつて、ブレイザラード・オズモ卿の高貴な咽頭をふさいだ経歴を持つ。当時オズモ卿は外務省でノヴィ・パザール担当のデスクにあって、前世紀英国の東方政策に祟(たた)られ、かつてはヨーロッパ全土の命運が懸かった[*20]この地に関する贖罪業務を、人知れず行なっていた。

地図のどこにあるのかー　誰も知らないー
そんなとこでこんなことに　なるだなんてー
モンテネグロ人も　セルビアの男もー
いきなりの砲撃に　身を構えるーーオー、ハニー

20　セルビア、モンテネグロ、コソボに挟まれた山間に位置するノヴィ・パザールは、長らくオスマン帝国の小さな行政区（サンジャック）のひとつだった。そこにオーストリア・ハンガリー帝国の進出と、それを阻止したいイギリスが対立、さらにボスニア・ヘルツェゴヴィナとセルビアとの民族間紛争が複雑に絡んで「ヨーロッパの火薬

CamScannerでスキャン

トランク出してー　スーツにブラシ
ぶっとい葉巻にー　火ーをつけて──
俺の住所なら　オリエント・エクスプレス
行き先はノヴィ・パザール行政区（サンジャック）

踊るコーラスラインの乙女たちは、バスビー・ハットにジャックブーツ。[21]別の一画でプレイザラード・オズモ卿が、ぐんぐん肥大してゆくみずからの扁桃腺に吸収されていく。これはエドワード朝[22]の医学ではまったく説明のつかない現象…ほどなくメイフェア広場は逃げだした男達のトップハットが散乱、イースト・エンドのパブの灯りの下は閑散として安香水の匂いだけがただよう中を、怪物ノドチンコが暴れまくる。といってもランダムに人を襲うのではない。この魔物にはマスタープランがあるのだ。使える人間だけを選り分けている。この英国にて今また始まった、新たなる〈選ばれ〉、新たなる〈見捨て〉[23]。内務省も手の打ちようがなく、痛々しいヒステリックな逡巡の症状…何をすべきか誰もわからず…そのままずるずるロンドン全域に避難命令発令となった。トラス構造の橋の上をガタゴト、黒のフェイトン四輪馬車が連なって動いていくさまは正に蟻の行列だ。空に観測気球が上がった。「見つかりました、いまハムステッド・ヒース[24]です。止まっています。い、い、息をしてます…吸ってえ、吐いてえ、みたいな…」「音は聞こえるか」「スゴイです。オゾマシイ、鼻の穴の怪物が鼻水をズルズル啜ってるみたいな音がします。あっ、動きました。あああっ、なんてことだ、こ、これは…とても放送できません、あ──っ！」突然、送信が途絶える。明け方の暗緑青（ティールブルー）の空を気球が昇っていく。キャヴェンディッシュ研究所[25]

21 〈衛兵を思わせる〉毛皮の高帽と騎兵用の軍隊ブーツ。

22 エドワード七世がイギリス国王だった時代。一九〇一〜一九一〇年。

23 キリスト教の教義の中心にある、神による天への救いに際する選別に言及している。「見捨て」と訳した preterition の原意は「無視して通りすぎる」こと。カルヴァン派では「救い」の対語として使われる。

24 ロンドン北西部、上流階級の居住区にある

から研究者チームがやってきた。ハムステッド・ヒースが巨大な磁石と電極、メーターやクランクだらけの黒い鉄製コントロール・パネルの輪で取り囲まれる。新型毒ガス爆弾を積みこんだフル装備の軍隊も到着——アデノイドは砲撃、電気ショック、毒薬散布に曝され、そちこちが変色・変形し、黄色く太い結節を木々の上に突き上げる……報道陣のフラッシュが焚かれるなか、アデノイドは軍が張った非常線のほうへ見るもおぞましき偽足を伸ばし、一瞬、ジュブルルルッ！という凄い音とともに、オレンジ色の粘液を噴出して、観測地点一帯を、ひとたまりもなく消滅させてしまった。その場に居合わせた者はあえなく消化されてしまうのだが、悲鳴はなく、楽しげな笑い声が聞こえるだけ……

パイレート／オズモの受けた使命はアデノイドとの交信を確立することだ。状況は安定している。アデノイドの体はいまセント・ジェイムズ公園の全体を占めている。数々の歴史的建造物は消え去り、政府諸機関も移転したが、広範囲に分散してしまった結果、お互い同士の連絡がきわめて不安定になってしまった。吹き出物だらけの蛍光ベージュの触手が伸びて、配達人の手から郵便を奪いとってしまうし、電信が伝わるか途絶えるかもアデノイドの意のままだ。毎朝オズモ卿は、山高帽（バウラーハット）を被りブリーフケースを手にして、この外交相手のところへ出かけて申し入れ（デマルシュ）を行うのだが、これがたいへん時間をとられ、ノヴィ・バザールのことがなおざりになってきたことに外務省は気を揉んでいる。一九三〇年代といえばまだ力の均衡（バランス・オブ・パワー）の考えが支配的で、外交官はみなバルカンのことでノイローゼ気味、オスマン帝国崩壊後この一帯の駐屯地には、異国風の名前をハイフンで繋いだ輩がたくさん潜んでいた。スパイらは上唇に、スラヴ系約一ダースの言語を駆使した暗号のタトゥーを彫り、その上に口髭を蓄えていた。髭を剃ってよいのは、権限を与えられた専

緑地。

25 ケンブリッジ大学の物理科学研究教育機関。

CamScannerでスキャン

門員がその任に当たるときだけ。その皮膚に、〈ファーム〉所属の形成外科医が新たな暗号を埋めこむ・・・傷(スカー)だらけの異様に白い上唇は、諜報員同士が互いを認識しあう、密やかな肉の羊皮紙となっていたのだ。

ノヴィ・パザールはいまなお、ヨーロッパの手相における「クロワ・ミスティーク」[26]。外務省としても結局〈ファーム〉の援助を仰ぐことになった。〈ファーム〉は適任者を知っていた。

かくして二年半の間、一日も欠かさずセント・ジェイムズのアデノイドを訪ねるのがパイレートの仕事となった。これは本当にたいへんだった。意思疎通のため混成語(ピジン)も少しずつ習得したが、アデノイド語特有の鼻音を発する器官がパイレートにはなかったために誤解が起きてばかりだった。両者がその鼻ズル的発声によるコミュニケーションに勤しむ間、黒い七つボタンのスーツに身を包んだ精神分析の専門家、それもフロイト博士の崇拝者の指揮の下、おぞましいアデノイドの灰色っぽい脇腹に立てかけた梯子をつたって新種の驚異の薬・コカイン[27]の白い粉のたっぷり入った石炭バケツがリレーで上まで運ばれ、脈打つ扁桃性クリーチャーの、腺の凹みで泡を立てている毒素に注がれる。それもしかし目に見える効果は生まない(もちろんアデノイドの気持ちなど誰が知ろう)。

しかしパイレートの働きによって、ブレイザラード・オズモ卿は、勤務時間のすべてをノヴィ・パザールに割くことができたのだった。その彼が、一九三九年、とある子爵夫人の館で謎の死を遂げる。タピオカ・プディングのなみなみ入った浴槽で窒息していたのだ。これに〈ファーム〉の関与があったとささやく者もいた。数ヶ月後、第二次大戦が勃発。

それから数年を経た今日、ノヴィ・パザールから危機の知らせは届いていない。海賊プレ

26 神秘十字線。人によって感情線と知能線の間にできるX字マークで、神秘的な能力を持つ印とされる。

27 医薬化された当初(一八八〇年代)、フロイトはコカインを、習慣性を持たずに幸福感と活力を与える物質として賞賛していた。

ンティスは見事にヨーロッパを救ったのだ——老人たちの夢見る目もくらむ壮大なバルカン最終戦争から。だが言うまでもなく、第二次世界大戦からは救えなかった。その戦時にも〈ファーム〉は彼にごく微量の平和は与えてくれた——平和への抵抗力を保つ同毒療法として。平和に毒されるほどの量はけっして与えてもらえなかったが。

□□□□□□□

テディ・ブロートの昼食時間。きょうのランチは、うーっ、蠟紙にくるまった湿ったバナナ・サンド。それを突っこんだハイカラなカンガルー革のミュゼット・バッグの中には、小型スパイカメラをはじめとする必需品一式を入れている。口ひげ用のポマード瓶。リコリスとメンソールと、「メロウな声にメロイズ飴」の宣伝で知られる唐辛子入りの飴が入った缶。マッカーサー将軍ばりの金縁の度つきサングラス。一対の銀のヘアブラシはどちらもSHAEF[1]の、燃える刀剣の形をしている。母親がガラード宝飾店[2]に作らせた特注品で、これがテディの自慢の品だ。

小糠雨のかかる冬の真昼時、灰色の石造りのタウンハウスへ向かう。グローヴナー・スクウェア[3]から少々入ったところにあるこの建物は、ガイドブックに載るほど大きくもなく、歴史的意義もなく、首都圏の正式な戦争遂行体制にも組みいれられていない。タイプライターの音が（八時二十分、その他の神話的な時間に）たまたま止むと——空に米軍の爆撃機が飛んでいたり、オックスフォード・ストリートの車通りがにぎやかすぎたりしなければだが——女子職員の作った巣箱から小鳥のさえずりが聞こえるだろう。

1 「シェイフ」と読む。連合国派遣軍最高司令部（Supreme Headquarters, Allied Expeditionary Forces）の略称。一九四三年十二月にロンドンのブッシー・パークにでき、以来アイゼンハワー将軍の下でノルマンディ上陸作戦等を推進した。

霧雨にぬれた敷石は滑りやすい。暗い、辛い、タバコの切れた、頭痛と胃痛の真昼時。百万人の官僚が死神につかえる仕事に励んでいる。自覚してやっている者もいる。多くはすでに二杯目か三杯目のビールまたはハイボールに手を伸ばし、ある種の絶望的な霊気(アウラ)をただよわせている。だが、砂嚢を積み上げた入り口（こんな間に合わせのピラミッドで、好奇心旺盛な神々の子孫の気をしずめようとでもいうのか）を通過するブロートには届いていない。もし捕まったらどんな言い訳をしようかと頭の中が大忙しなのだ。いや、捕まるようにはなってないんだけどね……

受付でガムを膨らませている気立てのいいATS*4のお姉ちゃんが、どうぞ上へと手を振った。スタッフの集まりやWCへ向かう、昼の休みに気合いを入れて酒をあおりに出かける、湿ったウール地の服を着た雇用者らが、視線を逸らしたまま会釈する。彼は知られた顔なのだ。あの、なんていったか、彼の友達だよね、オックスフォードで同級だったって、ほら廊下を行った先のACHTUNGの中尉……

この建物は、戦争のスラム化請負人によってすっかり細分化されている。ACHTUNGとは「連合軍情報局技術部、北ドイツ班」*5のことだ。古びた、煙の染みた書類小屋のようなそこは、いまはほとんど人気(ひとけ)がない。黒い大きなタイプライターが机から墓碑のように立っている。床のリノリウムは汚れ、窓はなく、黄色い電灯が安っぽい無情な光を落としている。ブロートは、ジーザス・カレッジの盟友オリヴァー・（通称〝速駆け(タンティヴィ)〟）・マッカ＝マフィック中尉の執務空間を覗きこむ。誰もいない。タンティヴィもヤンキーも昼食に出たか。これは好都合。ご愛用のカメラを出して、雁首型の照明をつけて、反射板の角度を調節して……

2 一七三五年創業。ヴィクトリア女王の時代から英王室の冠を担当してきたジュエラー。

3 メイフェア地区に位置し、アメリカ大使館と領事館がここにある。

4 Auxiliary Territorial Service の略称。「アッツ」と読む。志願した女子による陸軍の婦人補助部隊。

5 この小説の架空の部局のひとつ。Allied Clearing House, Technical Units, Northern Germany の頭文字を連ねた ACHTUNG（アハトゥング）は、英語の「アテンション」に当たるドイツ語。北ドイツのペーネミュンデは、ロケット開発の中心地である。

CamScannerでスキャン

この手の仕切り部屋はETO全域[6]にあるのだろう。三方をうす汚れた、すり傷だらけのクリーム色の繊維板の壁に囲まれ、上部は筒抜けだ。そこにタンティヴィとアメリカ人の同僚タイロン・スロースロップの机が二つ、直角に交わっている。椅子をキーキー九〇度回さなければ目と目が合わない。二つの机のうち一つは小ぎれいだが、もう一つのスロースロップのは凄惨な散らかりようだ。一九四二年以来、この机は一度も木肌を見せたことがない。基底層をなす官僚的屑垢。その組成は、積み上がった層を何年もかけてふるい落ちていった赤や茶の数百万個の消しゴムのカス、鉛筆の削りカス、乾いた出がらしの茶とコーヒー滓、砂糖とハウスホールド印のミルクの跡、大量の煙草の灰、タイプリボンから飛びちった細かな黒粉、成分が分解しつつある図書館用糊、粉砕したアスピリン。そのすぐ上の層に、四散したクリップ、ジッポの発火石、輪ゴム、ホッチキスの芯、煙草の吸いさし、つぶれた箱、落ちたマッチ、ピン類、ペン軸などが積み上がる。色鉛筆の使い残りは（レア物の薄紫や黄褐色を含んで）全色におよび、木製のコーヒースプーンと、スロースロップの母ナリーンが遠くマサチューセッツ州から送ってきたセイヤー社の〈スリパリー・エルム〉[7]喉飴と、テープ片、紐きれ、チョークがこれに加わって…そのまた上の層には忘れられたメモと、使い切った淡黄色の配給手帳、電話番号の控えと忘れられた手紙と、ぼろぼろになったカーボン紙が載っている。「米兵ジョニーがアイルランドで見つけた薔薇」[8]を含む十二曲のウクレレのコードのメモも見える（「あいつなかなか気の利いた編曲をやるんだ」といつか〝タンティヴィ〟が言っていた。「アメリカ版のジョージ・フォーンビーってとこだ、想像できるかな」と言われたが、ブロートは想像しないことにした）。その上にクレムルのヘアトニックの空瓶、いろいろなジグソーパズルの迷子のピー

6 European Theatre of Operations = 欧州作戦戦域。一九四四年二月以降はSHAEFが陣頭に立って、ヨーロッパにおける米陸軍の全軍事活動を司った。

7 アカニレ（slippery elm）の樹皮の内側に産する成分を利用した、アメリカ伝統の喉飴。

8 映画『ジョニー・ドーボーイ』（一九四二）で歌われてヒットしたウクレレ曲。

ス——ヴァイマル犬の琥珀色の左目とか、緑のビロード・ガウンの襞とか、遠景の雲に描きこまれた灰青色の筋とか、爆撃ゆえか日没なのかオレンジ色に光る雲とか、"空飛ぶ要塞（フライング・フォートレス）"の機体についた鋲とか、唇を突きだしたピンナップ・ガールのピンクの内股のピースとか・・・それから合衆国陸軍諜報部刊行の『週刊諜報摘要』が二、三冊、螺旋状に弾けて切れたウクレレ弦、糊のついた色とりどりの星の入った箱、懐中電灯の部品、（ときどきスロースロップが鏡代わりに自分のぼやけた顔を映す）ナゲット靴墨の真鍮の缶のふた。それらすべての上に、廊下を進んだ先のACHTUNG図書館から借り出された参考書類——『ドイツ語技術工学事典』、外務省刊行の『スペシャル・ハンドブック』、『都市計画（タウン・プラン）』——が積み重なり、加えて、誰かが盗んだり捨てたりしない限りはいつも熱心に購読している『ニューズ・オブ・ザ・ワールド』[*10]も載っている。

スロースロップの机のわきの壁に貼ってあるロンドンの地図を、いまブロートは小型カメラで懸命に撮影中だ。開けっぱなしになったミュゼット・バッグの口から立ちのぼる熟れたバナナの香りが、仕切り部屋に拡がる。ここの空気は流れない、侵入に気づかれないよう煙草でこれを隠そうか。シャッターを四回切る。カシャ、ジーッ、カシャ——もうすっかり慣れた。万一誰かが入ってきたらカメラをそのままバッグに落とせば、バナナのクッションが衝撃も音も抑えてくれるし、あぶないフィルムも隠してくれる。

このスパイゲーム、資金の出所がどこかは知らないが、カラーフィルムでないのが惜しい。カラーにする情報価値はあるだろうに、とブロートは思うのだが、それを訊ける相手がいない。というのも、このスロースロップの地図に貼りついた星は、色のスペクトル全域に及んでいるのだ。銀の星にはダーリーンと書き込みがあって、それが緑色のグラディ

9 バンジョーやウクレレを弾きながら歌って演じた一九三〇〜四〇年代の人気コメディアン。ビートルズ「フリー・アズ・ア・バード」のビデオにも登場している。

10 一時は世界最大の販売数を誇った、イギリスの週刊タブロイド新聞。

CamScannerでスキャン

ス、金色のキャサリンとともにひとつの星座をなしている。視線を回せばアリス、デロレス、シャーリー、二つのサリー、このあたりはほとんど赤星と青星ばかりだが、タワーヒルの近くに星団があり、コヴェント・ガーデン周辺は菫色が密集している。星雲はメイフェアからソーホーへと流れ、ウェンブリーを経てハムステッド・ヒースに抜ける。ロンドンのあらゆる方角へ、つややかなマルチカラーの、ところどころ剝げ落ちかかった天空図が、キャロラインの、マリアの、アンの、スーザンの星々の位置を示している。

もちろんこれらの色はランダムで、暗号ではないのかもしれないし、女の名前もでっち上げかもしれない。タンティヴィからここ数週間、何気なく聞きだして（**きみの同級生だということは知っているが、これに引きこむのは危険すぎる**）わかったことは、スロースロップが地図の作成を始めたのは去年の秋、ACHTUNGの指令でロケット爆弾の被害状況調査に出かけるようになったころからとのこと。この男には、死のサイトを歩きながら性の追求をする余裕があるらしい。しかし数日に一つずつ星を地図に貼っていくことの理由はなんだろう――これを見るのがタンティヴィ一人しかいないとすれば、自己宣伝が目的なのではないだろう。そのタンティヴィ、友好的な人類学者よろしく「罪のないヤンキー趣味だと思うけどね」と述べ、「みんなの居どころを把握しておきたいんだろう、ずいぶん複雑な社交生活を送っているようだし」と前ふりして話しはじめた――ロレイン嬢とジュディ嬢のこと、ホモ巡査チャールズとバサーから運びだされたピアノの話、グロリアとその妙齢の母親にまつわる奇怪なマスカレードの話。果てはブラックプール対プレストン・ノースエンドのサッカー試合に英貨一ポンドを賭けただの、「きよしこの夜」の春歌ヴァージョンを歌っただの、神の恵みの露が出てきてどうしただの、ブロートの報告の

CamScannerでスキャン

目的とは縮まない話ばかりが続いたのだった。

よしと。これで終わりだ。バッグを閉め、懐中電灯を消してしまい込む。〈スナイプ＆シャフト〉の店でタンティヴィがつかまるか。仲間同士の一杯といくか。ほの暗い黄色の電光のなか、ついたて（ビーバーボード）の迷路を引きかえすと、オーバーシューズを履いた女性陣の一行とぶつかったが、クールなブロートは笑顔も見せない。そんな、じゃれてる時間はない、これから大事な届け物をしなくてはならないんだ……

□□□□□□□

風は南西方向へと向きを変えた。気圧計の針の数値が落ちていく。午後まだ早いのに、雨雲がぐんぐん広がって、その下は夕暮れ時の暗さである。タイロン・スロースロップもきっと雨につかまるぞ。きょうは、経度ゼロ[1]への、長いオバカな追跡だった。成果のないのはいつものことだが。今度もまた爆発のタイミングの早すぎたロケットが、燃える機体のカケラを数マイル四方にわたって降らせたが、その大半はテムズに落ちて、まともな形で降ってきたのは一つだけ。それさえも、スロースロップの到着したとき、これまでになく堅固で無愛想な警備に囲われていた。スレート色の雲を背景に、色あせたベレー帽の兵士らが、ステン短機関銃マークIIIを自動にセットして立っている。太い上唇をたっぷり口髭で覆った、ユーモアなど通じない顔をして。アメリカの中尉ごときに見せられるものはひとつもないよ、今日はダメだ。

ACHTUNG（アハトゥング）というところは、どのみち連合軍情報局の、貧乏な親戚のようなものである。それでもきょうの調査にひとりだけということはなく、TI[2]から下っ端がひとり、あとからは三七年型ウルズリーワスプに乗って担当主任の男も騒がしく駆けつけてはくれ

1 王立グリニッジ天文台を通る経度ゼロは、スロースロップの勤務先から東へ約十キロほど行ったところ。

2 Technical Intelligence ＝陸軍の技術情報局。敵国の兵器等に関する情報

たが、二人とも、なんと、スロースロップに背を向けたままじゃないか。こっちからほほえみかけても反応がない。いらだたしいが、そこは機転のきくタイロン、ラッキー・ストライクなど差しだして粘ったあげく、このアンラッキーな襲撃（ストライク）についてのネタをどうにか聞きだした。

それは黒鉛のシリンダー。長さ六インチ、直径二インチ。焼け焦げた緑の軍用ペンキの薄片をいくつかくっつけた、そいつだけが爆発後に残った。明らかに、狙いどおりだ。中身は書類だろう。一等准尉が素手で拾って火傷し、「オー・ファック」と叫んで、部下の失笑を買った。みなSOEのプレンティス大尉の到着を待っているという（士官連中ってのは、何やるのにものろいからな）。その大尉がまもなく到着し、シリンダーを受け取り、車に乗りこんで去っていった。その風焼けした、バッドな顔（つら）はスロースロップの目にもしかと焼きついた。

フム、となると、ACHTUNGにできるのは、SOEへ部局間の要請書を出して（五千万回目だぜ、うんざりする）、シリンダーの中味についての報告を求めて、いつものごとく無視されることってわけだ。構わん。スロースロップに不満はない。SOEは誰をも無視し、ACHTUNGは誰からも無視される。それがどうした。次のロケットが落ちるのを待つだけよ、ずっと来ないでいてくれりゃ、それが一番いいんだけどね。

今朝受けとった書類で彼はイースト・エンドのある病院へ、特別出向を言い渡されていた。ACHTUNG宛ての配置換え依頼書のカーボンコピーには「PWEの検査プログラムの一環として」とあるだけで、それ以上の記載はない。検査だって？　PWEってのは、調べてみると「政治戦執行部」[3]とのことだ。またあのミネソタ式多面人格ナントカってい

収集に当たる。

3 Political Warfare Executive＝英国外務省の管轄下に実在した秘密の戦時組織で心理学者が中心。敵軍の戦意低下と自軍の戦意高揚を図るため、デマを含むプロパガンダを流すことを主要任務とした。

CamScannerでスキャン

うやつをやらされるのか。だが、このロケット狩りの仕事からの気分転換にはなるだろう。実はスロースロップ、これにいささか飽きがきていた。

はじめのうちは本気だった。そう、真面目に心配した。一九四四年以前の記憶は今では相当ぼやけているが。最初の「電撃空襲（ブリッツ）」が来たときのことは、穏やかな想い出としてしか残っていない。ドイツ空軍の落とすものが近くに降ってくることはなかった。だが今年の夏になって騒音爆弾（バズボム）がやってきた。通りを歩いていようが、ベッドで眠りかけていようが関係なく、突然屁をぶっぱなしながら飛んでいくものがある。いや音のピークが過ぎれば、あとは、飛んでいく先の人間が心配すりゃいいことだ…が、エンジン音が止まったとなるとたいへん、燃料タンクはバーナーから切り離されてしまったわけで機体は落下するしかない。せいぜい十秒。すぐにどこかに潜り込まんとヤバいのだ。それでも、コイツはそれほどのことはなかった。しばらくするうち慣れてきて、となりのマッカ＝マフィックと、次はどこに落ちるのかシリング硬貨を賭けたりしていた…

ところが九月になってロケットが来た。コイツには慣れようがない。打つ手がない。まるでないのだ。自分が心の底から怖がっているのを知って驚くなんて初めてのこと。酒が増え、睡眠が減り、チェーン・スモーキングが始まった。人の尊厳もへったくれもない。チクショー（クライスト）こんなのってありなのかい…

「スロースロップ、煙草なら、きみ、もう一本くわえてるぞ」

「もう、たまんなくてさ」かまわず二本目に火を点ける。

「ひとのを二本、ていうのはどうなんだろ」とタンティヴィ。

「二刀流だぁ」と言って、スロースロップは火の点いた先を二本、下に向けた。コミック

4 ミネソタ多面人格目録（略称MMPI）という性格テストを、当時のアメリカ人兵士は入隊時に課された。多数の質問表によって、被験者が「正常群」にあるか、それとも心気症、ヒステリー、パラノイアなど八項目に分類される「臨床群」にあるかをチェックする。

5 V1に与えられたニックネームの一つ。

スのキバの生えた悪党そのものである。ビールの影を通して中尉と中尉が見つめ合う〈スナイプ&シャフト〉の店内。高く冷たい窓の向こう側が日暮れていく。二人を分かつテーブルは木製の大西洋か。その片側でタンティヴィは「オー・ゴッド」と言って笑ったのか、それとも鼻を鳴らしたか・・・

この三年間、隔ての海ばかりだった。幾々世代も遡ったスロースロップ家の、最初の航海者のウィリアムが渡った大西洋より荒れた海もあった。野蛮な服、粗野な言葉、下卑た行いのアメリカ人——ある晩タンティヴィに招かれて〈ジュニア・アシニーアム〉に入ったスロースロップは泥酔した挙げ句、剝製のフクロウを持ち上げ、その嘴でデカウァリー・ボックスの頸動脈をつつく真似をしたら、ビリヤード台に追い詰められたボックスがキューボールをスロースロップの喉穴に押し込もうとして、二人とも店から追いだしを食らった。そんなことがウンザリするほどしょっちゅう起こるなか、どんな荒海にもめげず浮かんでいる一艘の優しさが、このタンティヴィ。赤面した、あるいはほほえんだ彼の顔が、肝腎どころでいつも付きそい、自分を支えてくれることにスロースロップは驚きを隠せない。

タンティヴィにならば、心に引っかかっていることをなんでもさらけだせる。いや、それって、本日のかわい子ちゃんレポートとは、実はあまり関係しない——で、きょうはノーマ（この子は女子高生の脚をしたアイオワ風のエクボちゃん）とマージョリー（長身でエレガントな体型はまさに〈ウィンドミル〉[6]の踊り子風）の話なんだが、土曜の晩のソーホーの〈フリックフラック・クラブ〉[7]で起こった奇妙なこと。ほら、多彩なパステルカラーのスポットライトがあやしくゆらめくタイプの店で、警察が、軍警察やら民間警察やらい

6 空襲下のロンドンでもなおラインダンスをやっていたという、ピカデリー・サーカスの脇の劇場。

7 ソーホー地区には当時いかがわしい店が多かったが、これは架空の名前らしい。

CamScannerでスキャン

ろんな種類の（でも今の時世で「民間（シヴィリアン）」ってどういう意味だ？）が監視にくるんで、しょうがないから立ち入り禁止とかジルバは踊れませんとかの注意書きをやたら貼っている、そんな店にどっちの子もたまに出入りしてるんだが、こんなことってありうるだろうか、きっと恐ろしい陰謀だろう、スロースロップが逢いにいったのは、どちらかひとりだったのに、店に入ったらふたりが同時に同じラインで踊っていた。その位置取りも、こっちの眼を完全に意識してのことだろう、ひとりは目の前でリンディホップ[8]を踊ってる三等機関士の青いウールの肩越しに見えたし、もうひとりは、グルリ回って宙に止まった女の子の愛らしい脇の下の位置にいた。肌は照明でラベンダーに染まっている、そして、パラノイアの水位上昇、ふたつの顔がだんだんこっちへ向いてきたんだ・・・

スロースロップの地図上でふたりはともに銀色なのだが、てことはどちらのお相手ともギンギラ気分だったってことか。陰鬱のブルーから光輝のゴールドまで、星の色はそのときどきの気分を表わしているだけで、ランクづけでは絶対にない——そもそも無理だよ、そんなのは。この地図はタンティヴィにしか見せないもんだし、それに、まったくもう、みんなホントにかわいいったらないのである・・・冬枯れの街を囲む緑と草花の中にも、喫茶店（ティーショップ）のテーブルからも、コートにスカーフを巻いた姿で並ぶ列からも、ため息をし、くしゃみをし、ライル糸のストッキングに包んだ足で舗道の縁石を踏んでヒッチハイクする娘さんも、ポンパドールの髪から黄色い鉛筆を突きだしてタイプライターを叩き書類整理をする女子職員も、スロースロップはあらゆる女性を見いだすのだ——家庭婦人、街の女、セーター姿の女の子——たしかにその欲求にはやや強迫的なところがあるかも・・・「この世に野生の愛と野生の歓びあり」——トマス・フッカー[9]は説教壇で詩った、「野生の

8 ジャズの熱狂とともにハーレムで始まった、男女のペアによる曲芸的ダンス。リンディ（リンドバーグ）の名は飛行機の曲乗りの連想から。

9 マサチューセッツ

CamScannerでスキャン

タイムやハーブがあるがごとくに。されど我らが欲するは、神みずから植えられし園の愛(ガーデン・ラヴ)、園の歓び(ガーデン・ジョイ)」と。いやはや、スロースロップ園は繁茂する一方だ。「乙女の庵(ヴァージンズ・バウワー)」に「忘れな草(フォゲット・ミー・ノット)」や「後悔草(ルー)」が咲きまくり、「怠惰な愛(ラヴ・イン・アイドルネス)」の紫と黄色にブツブツ咲き誇るさまはさながら顔面のニキビのようだ。*10

　スロースロップは好んでホタルの話をする。イギリス娘はホタルを知らない、ってことしか彼はイギリス娘について知らない。

　この地図にはタンティヴィも戸惑っている。ほら吹きのアメリカ人による精力誇示というパターンに収まるものでもないだろう。学生友愛会(フラターニティ)的なふるまいに順応している男が、虚空に放り出されたときに示す条件反射、ということなのか。それにしても、誰もいない実験室で、これほど激しく咆えたて、這虫(ワーム)のトンネル(ホール)のごとき廊下にまで大声を響かせることはないだろう。だってもうその必要もないわけだ。旧友はみんな第二次大戦に出て、それぞれの死とある確率で向き合っている。それに、スロースロップはそもそも女の話が好きではない。今でもタンティヴィがうまく誘い水をかけなければ乗ってこない。ここに着任したときから、ちょっと古風に紳士ぶったところがあった。それがタンティヴィのシャイな性格を知ってから変わった。タンティヴィが女友達を紹介してもらいたがっていることに気づいたのだ。それとほぼ同時に、タンティヴィもスロースロップが抱えている孤独の大きさに気がついた。再会のあてもない不定数の女の子以外、彼にはロンドンで誰ひとり、どんな会話をする相手もいないらしいのだ。

　そのスロースロップが、バカと境を接する律儀さで星のマークを貼りつづける。この地図は何かしらの流れを、なんらかの進行を祝福していると見ることもできるだろう——空

湾植民地の最初期のリーダーの一人で、初代知事のジョン・ウィンスロップや、ピンチョンの祖先ウィリアムと同世代人。引用は一六三七年の説教『自然のオリーヴへの魂の鼓吹』より。

10　これらの植物の和名は、順に「センニンソウ」「ワスレナグサ」「ヘンルーダ」「三色スミレ」。

CamScannerでスキャン

から突然やってくる破壊、（動いている気配はないのに）夜の黒々としたはたらきによって作られるミステリアスな支配、その進行に抗して、この一瞬を、そしてこの一瞬を、救いだすことができた。日々はふたたび冷えて、霜の降りた朝、冷たくなったセーターのウールの中に手を入れてジェニファーの乳房を暖める、石炭の煙がしみる廊下で（その建物が昼間みせる陰鬱な顔は永遠に知らないまま）…沸点にごくわずか満たないだけの牛肉茶（ビーフティー）で、彼のはだけた膝がやけどする。アイリーンもハダカでガラスの陽だまりの中にいて、伝線していないのはどれかと、一枚一枚かざしていくその貴重なナイロンの靴下が、冬の鉄格子を通って射しこむ冷光にきらめいている…アリソンの母親のラジオに付いた電蓄に乗った音盤の溝からは、鼻にかかったヘップな[*11]アメリカン・ガールの歌声が聞こえて…窓はぜんぶ防空用の暗幕で覆ったなか、肌をくっつけて暖を取ると、眼にみえるのは最後の一本の煙草の光。その燃える先端が、イギリスの蛍のように、彼女の指の動きに合わせて残像を引く、でもその筆記体が綴る言葉は彼に読めない…

「で、どうしたんだ」スロースロップは黙ったまま。「きみの二人の従軍女子（WRNS）は…きみを見て…」タンティヴィはこのとき気づいた——相棒はもう話を続ける気力をなくし、体が震えるに任せている。この震え、しばらく前から始まっていた。たしかにここは寒いが、おいおい、そんなに震えるほどか…「スロースロップ——」

「いやあ、なんてえか、まいった」だが、なんだろう、興味深いというより、気味が悪い。止めようにも止まらないのか。アイゼンハワー・ジャケット[*12]の襟を立て、手を袖の中に入れたまま、じっとすわっているだけだ。

やがて、息をついて、煙草の火を動かしながら、「アイツら、落ちてくるのが聞こえな

11 hipという言葉が登場する以前、スロースロップが大学生だった一九三〇年代なかばにはhepという言葉が流布していた。

12 第二次大戦中に米陸軍で着用された、丈の短いブルゾン・タイプ軍用ジャケット。

い」
〝アイツら〟とは何を指しているのか、タンティヴィにはわかる。目を逸らす。ちょっと沈黙の間があいた。
「それはそうだ、音速より速いんだからな」
「そうだけど——そういう話じゃないんだ」震えの波動の間隙から声が吹きだす——「V1のときは聞こえただろ？　聞こえるんなら、破滅を逃れるチャンスもあるさ。しかし今度のヤツらは、いきなり爆発があって、それでこっちがくたばっていないときだけ、後から落下音が聞こえてくるわけだ。殺られるときは、何も聞こえずにただ殺られる」
「歩兵とはそういうものじゃないのか。弾丸の音が聞こえたときには当たってる」
「しかしさ——」
「弾丸のきわめて大きいヤツと思えばいいんだよ、スロースロップ。尾翼の付いた弾丸だ」
「まったく」とスロースロップ、「なぐさめ上手だよ、きみは」
ホップの薫る褐色の暗がりを、心配そうに身を乗りだしたタンティヴィの上半身が、幽霊のようによぎる。だが彼の心配は眼前の友に取り憑いた震えにある。彼が知っている厄払いは常識的な方法だけだ。「落下した跡に行かせてもらえるようにできないだろうか……」
「どうして？　だってタンティヴィ、跡形もなくなっちまってるんだろ、じゃないの？」
「それはドイツ軍にもわからないと思うよ。しかし、おれたちがTＩのヤツらを出しぬくには、現場に行くしかないんじゃないかな」

こうしてスロースロップはV爆弾の事件の調査を始めるようになった。爆撃後の調査だ。毎朝――当初は――民間防衛組織の誰かがACHTUNGにきのうの落下のリストを渡しに来た。それが最後にスロースロップのところに回ってくる。鉛筆で書き殴った回覧表を引き剝がし、軍用車置き場からいつもの古手のハンバー[13]を出して巡回を始める。ドラゴンが去ったあとに聖ジョージ[14]が出かけていって、その糞――ドイツ軍の落としたハードウェアの破片――を突つき回すみたいなことだが、それもみんな持ち去られている。要約ノートにも情報らしきものは何もなし――単なる仕事療法ってことか。ACHTUNGへのインプットが早まってくると、捜索隊が活動中に現場に着いて手伝う回数も増えた。落ちつかないようすで筋肉をビリビリさせている英空軍（RAF）の捜索犬たちの後について、漆喰の匂いがただよう、ガスが漏れ長い裂片が傾き格子が凹んでいる中へ入ってゆく。女人柱像は倒れて鼻を失い、釘やらなにやら剝きだしになった導線の表面はすでにサビつきはじめている。〈無化する手〉によって埃もろとも放りだされた壁紙の、羽根を拡げる緑濃い芝生の先には古めかしいジョージア朝づくりの家並み、向こうにトキワガシの木立が見える……静かに！　声のする方を見ると、生きているのか死んでいるのか、剝きだしの手や、うっすら光る肌が見える。そうする以外ないときスロースロップはその場を離れ、最初のうちは――単なる習慣から――神に祈った。祈るなんて最初の空襲があったとき以来のことだ。死に生が負けることのないように祈った。だが、死んでいく者の数が多すぎて祈りに意味がなくなって、結局やめた。

　きのうは幸運だった。ひとり、子供の生存者がいた。小さな女の子が、モリソン・シェルターの中で苦しそうに息をしていた。担架がやってくるまでスロースロップは、寒さで

13　今はなき老舗の車メーカー。

14　ゲオルギオスの名でも知られるキリスト教の聖人。竜退治と村民を改宗させた伝説は、現在のトルコでの話。

CamScannerでスキャン

紫色になったその手を握った。通りで犬たちが吠えた。目を開けた少女の発した最初の言葉は「おじさん、ガムある？」こんなところに、二日も横たわっていたのだ。それなのにポケットにはセイヤーの〈スリパリー・エルム〉喉飴しか入っていない。なんてドジなヤツ。それでもこの子は連れていかれる前に彼の手に別れのキスをしてくれた。発火信号に照らされた頬と口は霜のように冷たくて、その瞬間、ロンドンの街全体が巨大な冷蔵庫に変わった。古い臭いのただよう、もはや新しい発見のない……そのとき少女がほほえんだ。かすかなスマイル、そう、スロースロップはこれを待っていたのだ。ワオ！　シャーリー・テンプルのスマイルだ。この子をこんな目にあわせたすべてをきれいに帳消しにしてくれるような。なんとバカバカしいこと！　彼は西部湿地に入植したピューリタン一族の三百年後の末裔であって、いまなお神とは、一種のデタント状態というか、おずおずと休戦協定を結ぶことくらいしかできない。毎朝訪ねていく廃墟はみな、虚栄についての説教なのか。ロケットの破片の一カケラも見つからないということは、死の営為がいかに分割不能かという教えなのか。スロースロップの歴程。天路ならぬ世俗のロンドンが教えてくれる。どの角を曲がっても、そこには寓話が待ちかまえている。

ロケットに自分の名前が書かれているんじゃないかという思いに、彼は取り憑かれている。もし彼ら——というのはドイツのナチスに限らない、もっとずっと大きな拡がりの可能性を持つ〈かれら〉が——本気で彼を狙ってるならそうするだろう、だって全部のロケットにスロースロップの名前を刷ったとしても、コストにはぜんぜん影響ないんだから、だろ？

「うん、まあ、そう考えても損はないだろう」タンティヴィはおかしそうな顔をして相手

15　ピューリタンの必読書だったジョン・バニヤンの『天路歴程 *Pilgrim's Progress*』のほか、ウィリアム・ホガースの八枚画「放蕩者一代記 *The Rake's Progress*」の反響もあり。

CamScannerでスキャン

を見つめる。「とくに戦場では、あえてそんな考えを装うことが役に立つこともある。一種の"作戦的パラノイア"とでもいうのかな。しかしだね――」

「狂ってなんかいるもんか」火を点けた煙草のけむりを前髪から打ち払って、「いいか、タンティヴィ、驚くな、おれなんかもう四年前に殺られてて当然なんだ。いつ飛んでくるかって、いまかもしれないし、次の瞬間かも、ソイツはいきなり・・・くっそー・・・一瞬でゼロだよ、無だ・・・そして・・・」

無しか見えず、無にしか触れられない、突然の空気の変化、空を走るヴァイオレンス、そして跡形も残らない・・・何の警告もなしに〈ことば〉[16]がささやかれて、それっきり。永久の沈黙。不可視の、ハンマーの一撃。運命の一振り。いやそんな使い古しの言い回しを越えて生身に感じるリアルな恐怖があるのだ。ドイツ的に精巧な確信をもって予言された死。彼らはあざ笑ってる、タンティヴィの上品な思いやりある表現を笑いのめしている。違うぞ、ただの尾翼つきの弾丸じゃない・・・〈ことば〉ではない、昼の光もひき裂く一つの〈ことば〉では・・・

振りかえれば去年の九月の金曜の晩、勤めを終えてボンド・ストリートの地下鉄駅に向かう途中のことだった。頭の中は週末の、二人の海軍婦人部隊員(WRNS)、ノーマとマージョリーのことでいっぱいで、どちらにどちらのことを知られてもまずいなぁとか思いつつ鼻クソ掃除の指を伸ばしたその瞬間、突然空に爆音が轟いた。背後数マイルのテムズ上流で、一発の死の表象が鋭く、重々しく、落雷とはまた違う炸裂音。数秒後、今度は前から、同じ爆音、ラウドでクリアな、ロンドン中に聞こえる音だ。まさに夾叉発砲をしている。こいつはバズ爆弾じゃない。いつものドイツ空軍(ルフトヴァッフェ)とは違う。「雷じゃないよなあ」と彼は不可

16 原文は大文字のWord。キリストの神とともにある永遠普遍の真理、というニュアンスを持つ。

解な気持ちを声にした。

「どこかのガスの本管でしょ」脇を歩いていた婦人が肘で背中を突いて言った。弁当箱を持ち、一日の仕事を終えた、ブッと腫れた目をしている。

「そうじゃないわ、ドイツ軍よ」連れの女性は、チェックのネッカチーフの下にブロンドの前髪を丸めている。両手を前に出し、スロースロップに向けて、何のモンスターの真似だろう。「この人を始末するために飛んできたんだわ。彼らの好みはコロコロ太ったアメリカ兵ですもの」ほどなく彼に歩み寄り、頬をつねってグリグリ回すのだろう。

「やあ、お嬢さん」とスロースロップ。名前はシンシアといった。電話番号はなんとかもらえたけれど、バイバイ、ふたたびラッシュの人ゴミに運ばれていく。

いかにもロンドンらしい、大いなる鉄の午後。呼吸する千本の煙突が黄色い太陽をからかうかのように、媚びを売りながら恥知らずにも煙を吹きかける。それは単なる日々の息でも暗黒の力でもない——この煙は命を持って動き回る帝国的存在だ。人びとは道路を渡り広場を横切ってあらゆる方角へ向かう。軋みながら走る何百台ものバス。それらが渡ってゆく長いコンクリートの陸橋は、お愉しみ抜きの無慈悲な使用に何十年も耐えた姿をさらしている。かすんだ灰色、べっとりとした黒、赤い鉛色、蒼白いアルミ色。集合住宅の高さにまで積み上がったスクラップの山の間をバスは抜け、車体をこすりそうにしてカーブを曲がり、軍のコンボイと他の背高のバスと幌を張ったローリーと自転車と車で詰まった道に入った。この街の人間は誰もみな違う目的地と始まりを持っている。流れ、時につかえる、交通の波。それ全体の上に、壮大なガスの廃墟のような太陽が、工場の煙突群と防空気球[17]の間に懸かる。電線と家庭の煙突は、屋内の老木と同じ褐色になり、その褐色が

17 敵機の低空飛行を阻止するために上げる、地上と索でつないだ気球。

CamScannerでスキャン

徐々に赤みを帯び、朱に転じる際に、ある一瞬を——日没における負の変転の一瞬を——通過する。しかしそれはきみにとっては単なるサイン、サインと慰安の色合いにすぎない。

英国ダブル・サマータイムで[18]六時四十三分十六秒、死のドラムのように打たれた空からは、まだ残響のうなりが聞こえる。と、スロースロップの——え、なんだ？ そうだよ。ら一配給のパンの中を覗いてみろよ。ギンギン起き上がって、飛びだそうとしているの。なんだなんだ、この勃起。ヘイ、偉大な神様よ、なんの所為なんだい？

彼の経歴に、そして、お助けあれ、彼の調査書類にも書かれている。この男、空に顕現するものに、きわめて特異な感受性をもって反応する。（しかし、勃起とは？）故郷マサチューセッツ州ミンジバラ[19]の会衆派[20]教会墓地にある、一つの片岩の墓石。そこに彫られた雲より出ずる神の手の、その指先は二百年の歳月の火と水の鑿に削られている。墓碑に彫られた言葉はこうだ——

コンスタント・スロースロップ
一七六六年三月四日　享年二十九
死は自然への負債なり[21]
我は返せり、いつしか君も

コンスタントは見た。それも単に心眼で見たのではない。俗世の雲間から、目もくらむ

18　戦中のイギリスは夏期（この回想は九月の出来事）に二時間時計を早めていた。

19　『スロー・ラーナー』所収の「シークレット・インテグレーション」（一九六四）の舞台でもある架空の町。

20　イギリス宗教改革期に、ピューリタンの中でもより穏健な「長老派」と分かれた「会衆派」教会は、植民地アメリカにおける支配的な権力となった。

21　ピューリタンの教

CamScannerでスキャン

ような光に縁どられた石の手が、彼をまっすぐに指さすのを見たのだ。緑なすバークシャーの大地、その河のせせらぎと丘のスロープの上空にそれを見たのは、息子のヴァリアブル・スロースロップも同じだった。[*22] 実は家系図の根っこのほうへ、九世代・十世代とさかのぼっていくと、みんな等しくそれを見ている。始祖ウィリアムを除いた一家はみな、沼地に接する長い斜面、楡や柳の冷たい影が覆い、ミントやミソハギの落葉の降りつもった豊かな腐土の中に溶けこみ、土と化した。墓石に刻まれた文様もとりどりだ。犬の長い鼻面をした天使、歯をむきだし眼窩をくぼませた髑髏(しゃれこうべ)、フリーメイスンの紋章、花壺、ケバ立った柳の葉が直立したり途切れたりした模様。[*23] ぐったりとして動かない砂時計。昇るのか沈むのか、地平線からキルロイ[*24]のような顔を覗かせている太陽もある。墓碑銘は、コンスタントのように清楚にして簡潔なものから、アイゼイア・スロースロップ中尉（一八一二年没）の妻ミセス・エリザベスのように、合衆国国歌の軽快なる替え歌を彫ったものまで、これまた色とりどりだ。

さらば友よ、我はつひぞ此処に来たりぬ
足るを知らざる死神の鎌にぞ刈られん
御子再来したりて萬人を救ふ日まで
我はねむる、御言葉のをしへる如きに
開け、我が叫び、天の理に抗ふ勿れ
知れ、栄えの中に、滅びもまたある事を
大いなる神の織機は暗空にて動きたまふ

義からすれば、死は神への負債でなくてはならない。それを「自然」と書くのは異端の考え。

22 コンスタント＝定数。ヴァリアブル＝変数。

23 "puritan tombstone" などのキーワードで画像検索すると、実例が見られる。

24 第二次大戦中に米兵の落書きで広まったキャラ。壁の向こうから、長い鼻をこちらに垂らして覗いている。『V.』第十六章に図あり。

CamScannerでスキャン

地にありし我らが苦難も、御心の織糸なりしか

われらがスロースロップの祖父フレデリック（一九三三年没）は、皮肉の味と狡猾さを売り物にした男だった。その彼が、無断引用して墓に彫ったのが、エミリー・ディキンソンの一節——

死のために立ち止まることができなかった私のために*25
死が立ち止まってくれたのです、ご親切にも

ご先祖様がそれぞれに自然への負債を返していきつつ、余りを、名の連なりの次のリンクへ遺していく。元はといえば毛皮商人、靴職人、ベーコンの塩漬けおよび燻製業、それがガラス職人になり、行政員（セレクトマン）*26に選ばれ、皮革工場の建設人、大理石の採掘人と変わっていった*27。そう、かの地が何マイル四方も大理石の粉で——神々の息のような、霊のような白い粉で——墓場都市（ネクロポリス）と化したことがある。共和国のよその地に、似非アテネ風のモニュメントが立ち並んだときのことだ。繁栄はいつも、よそにもっていかれた。家系図よりも入り組んだ投資一覧（ポートフォリオ）から資産はこぼれ落ちた。すなわち、バークシャーの家に遺った資産はまず森林に投じられ、その緑の何エーカーもが一度の伐採で紙へと変化した。トイレの紙、紙幣の紙、新聞紙——そう、クソとカネと〈コトバ〉の媒体ないしは礎となったのだ*28。この一族に家柄*29などはなかった。合衆国名門録（ソーシャル・レジスター）に名を連ねた者もいなければ、サマーセット・クラブに入ることのできた者もいない。この一族は死して教会墓地の土に眠るのと同

25 ディキンソンは、マサチューセッツ州アマーストに蟄居した女流詩人。引用は「ザ・チャリオット」（一八六三年執筆、一八九〇年死後出版）より。

26 ニューイングランド植民地の町は当初成人住人による直接民主制を敷いたが、人口増加とともに、立法から治安維持まで広範なケアを担当する行政員を選出する形をとった。

27 スロースロップ家とピンチョン家とは、アメリカでの〝始祖〟の名がウィリアムという、マサチューセッツ湾植民地西部を植民したという点で共通する。後に出てくるようにその始祖が異端の書を書いたという点で

様の静けさで、生前にあっては、周囲の動きに溶けこんだ日々の業を黙々と続けたのである。クソとカネと〈コトバ〉といえば、アメリカを代表する三つの真実、アメリカを動かす動力源。それに絡めとられたスロースロップ一族は、国の命運と不可分な暮らしを永続させてきたのである。

しかし繁栄は得られなかった…得られたのは存続であった——もっとも、その存続もまもなく相当苦み走ったものとなる。遠からぬ地に住んだエミリー・ディキンソンがこんな詩を書いたときには、すでにもう。

崩壊を形づくるはデヴィルのしわざ
一つまた一つと緩慢に進む
一瞬の崩落もて潰れるにあらず
はらはらと零れおつるが破滅の道なり[30]

それでもなお一族は居残った。他の者たちはといえば、誰でも知ってるアメリカの伝統にしたがい、どんどん掘って、動かして、ぜんぶ取りきったら西へ西へ移動した。そうすりゃもっと出てくるさ、と。だが、スロースロップ一家は偏屈にも、理由つきの惰性によって、東の地バークシャーに居残りつづけることを選んだのだ。水のあふれる石切場と、伐採された丘の斜面は、この葺屋根の褐色に覆われた、朽ちゆく魔女の地[31]に一族が遺した存在の証し。署名入りの告解のようなものだ。収益は落ちこみ、家族は増えつづける。ボストンの小さな銀行に預けた、さまざまな番号のついた信託金は、二、三世代に一度収益金

も共通する。スロースロップ家がベーコン＝豚ともかかわっていたという点にも注目。

28 『スロー・ラーナー』の序文によれば、バークシャーの歴史をピンチョンは一九三〇年代の作家支援プロジェクトによって作成された案内書で調べた。ここでの地域産業の変遷史は、木材の過剰な伐採と、紙幣づくりへの利用を含め、現実の歴史を反映している。

29 ボストンのビーコン・ストリートに一九七二年にできたギリシャ復古調建築。名門録（一八八七年以来出版されている年鑑）に掲載されたような階級が集まった。

30 一八六五年、南北戦争終結の年の作品。

を生んだが、その額も長期にわたって徐々に目減りする。毎期毎期、ほとんど目に見えないほど微かに減びつづけていくのだが、その無限級数は、いつまでもゼロにはならない・・・

〈大不況〉は、それまでの一家の歩みを、より純粋な没落へとみちびいたにすぎなかった。スロースロップが育った荒涼の山地は、ニューヨークの金持ちのなかば神話的な豪華さの別荘が点在するところ。屋敷を取り巻く生け垣が、緑の荒野や枯草の集積に変化(へんげ)するのを、クリスタル・ガラスの窓が一つ残らず破られ、ハリマン家[32]やホイットニー家[33]らの富豪たちが退散し、その芝生が雑草に乗っとられ、秋になっても遠くから馬車の蹄の音が聞こえることも、灯火の下にリムジンが乗りつけることもなく、ただ聞きなれた虫の音と、見慣れたリンゴの木と、ハチドリを追いかえす初霜と、東風と、オクトーバーの雨と、あとは間違いなくやってくる冬・・・それが彼の少年時代の風景だった。[34]

一九三一年、グレイト・アスピンウォール・ホテルの大火の年、タイロン少年はレノックスに住む叔父・叔母の家を訪れていた。四月だったが、階段を駆け下りる大小の従兄弟たちの物音に目をさまし、見知らぬ部屋で寝ぼけ眼をこすった夜中の数秒間、少年は冬を思った。冬の夜中によく、パパとホーガンに、こんなふうに叩き起こされたからだ。夢から醒めぬ目をパチクリさせながら寒気の中に連れ出されたオーロラ(ノーザンライト)の夜・・・〈北の光〉は彼をおびえさせた。光のカーテンがサッと開いたら、そこに何が見えるのだろう。北の霊たちは、あんなに装いをこらして、何を見せようとしているのだろう。

だがこの晩、季節は春で空は逆巻く赤と暖かいオレンジ色だった。ピッツフィールドとレノックスとリーからのサイレンが谷間にうなる——近隣の住民は玄関先に出て、山腹に

31 ニュー・イングランドの歴史に刻印をしるす魔女裁判とは、一六九二年の夏期に、十九人の男女が魔術を行った罪で処刑された事件。

32 鉄道王の金融家E・H・ハリマンの息子アヴァレル・ハリマン（一八九一～一九八六）はローズヴェルトの片腕としてニューディール政策や戦時外交で活躍。

33 初期マサチューセッツ植民者の家柄。"ジョック"・ホイットニー（一九〇四～八二）はロックフェラー家から来た母親の遺産も引き継ぎ、馬主として、ハリウッド映画への投資家として知られていた。

34 レノックス市の郊外にあった富豪向けのホ

火の粉が舞い落ちるのを眺めていた・・・「流星群のようだ」と言う者、「建国の日の花火だよ」と応える者。一九三一年の時点で、この火事を喩えるものはそのくらいだった。残り火はなお延々五時間燃えつづけ、子供たちはコックリし、大人たちはコーヒーをすすって、往年の火事の話に花をさかせる。

だがあれは何の〈光〉だったのか。いかなる霊の仕業だったのか。次の瞬間に、そのすべてが、夜全体が、制御を失い、カーテンが一瞬にして開いたとしたら、どんな展開になるのだろう。そこには想像を超えた、どんな冬が、姿を現すのだろう?

英国ダブル・サマータイム六時四十三分十六秒。いま空に、同じ展開が出現しようとしている。彼の顔が光に染まって深みを増す。周囲のみんなが走り去ろうとしている。彼の心も動転しそうだ。むかし故郷の光景から現れ出ようとしたのと同じ・・・秋の山腹のあちこちに見える教会の尖塔とおぼしきものは打ち上げ台の上の白いロケットだったのか。発射まであと数秒。教会の円花窓から朝の光、それを浴びた、説教壇上の顔は上気して、神の恩寵の真実のすがたを説いている・・・まさに、このようにして顕現されるのだ、そう、巨大な光り輝く手が雲間から伸びて・・・

テルは、四月の晩の午前一時ごろ火の手が上がり一大スペクタクルを提供しながら全焼、未明までくすぶりつづけた。

CamScannerでスキャン

□□□□□□□

壁には凝った模様の黒ずんだブロンズのバーナー。そこから出ているガスの炎が流麗にやさしく歌っている。前世紀の科学者が「多感の炎」[1]と呼んだ状態に調節された炎は、台座近く、孔から吹きだすあたりは目に見えず、徐々にスムーズな青い光となって数インチの高さに浮かんでいる。部屋の気圧の微細な動きにも反応する淡い光の小さな円錐は来客の出入りのたびに揺らめくが、集まる人びとはまるで確率のゲームを見守るように、中央の丸テーブルに礼儀正しい関心を向けている。卓を囲んだ面々はいっさい気を散らされることもない。ここには白い手袋も、光る金管楽器の類もない。[2]

スコットランドの将校たちが、パレード用のトルーズ・ズボンや青いゲートル、キルト・スカート姿で、アメリカ兵と会話しながら入ってきた。聖職者も、勤務を終えたばかりの国防市民軍（ホーム・ガード）や消防隊員も来ている。ウール地の制服の襞に煙草の臭いを染みこませた連中。みんなこれで睡眠の一時間がとられてしまうことを嘆き、顔に表して……絹クレープを着こんだ世紀初頭の恰好の老婦人もいる。ロシア系ユダヤ人らの強ばった子音連鎖のまわりで、カリブ出身者の発する柔らかい母音も聞かれる。ほとんどの者は聖なる円に対

1　空気の動きに敏感に反応して揺れる炎。霊には反応しないから、これが揺れていない限り、部屋の中の霊的現象は物理的な関与のないものと見なすことができる。ここ〈スノックソール〉という集まりの場で、いまPISCES絡みの降霊会が進行中。

2　白い手袋を鱗粉で光らせて死者が顕現したように見せかけたり、誰も吹いていないトランペ

して接線方向に滑るように進む。ここに留まる者も、また別の部屋へ出ていく者も、多感の炎の一番近くに、壁に背を向けてすわるほっそりした霊媒の気を散らすものはない。赤褐色の巻き毛がスカルキャップのようにピタリと頭にはりついた、この男性の広い額に皺はなく、黒ずんだ瞼が、ときに滑らかに、ときに苦しそうに、動いている。

「白の冥王の領空へ移行するや、ローランドはすべての徴しが自分に対してアゲンストになったことを見てとった……かつて地上の一員としてその位置と動きを研究した光が、こちらでは向こう端に集まって、意味もなくチラチラと踊るばかりだ。まったくブリケロらしくない。物事に進展というものがなく、何か新しい……異的なもの……。ローランドもまた風の存在を意識するようになった。生前にはまったく感じられなかったもの。矢の先が風にしたがって方向を変えることを、喜びとともに発見した。この風は一年中、毎年吹きつづけていたのだが、ここに来るまでローランドは地上の風しか……もとい、彼自身の風しか、感じることができずにいたのだ。それでも……セリーナ、風だ、まわり中が風だらけだ」

ここで霊媒は集中を解き、しばし押し黙る……呻くような声がひとつ……静かな、必死の瞬間。「セリーナ、セリーナ、行ってしまったのか?」

「いいえ、あなた」セリーナの頬には半乾きになった涙の痕。「聞いてるわ」

「制御の問題だ。すべてはひとつの困難に発する。制御をどうするのか。内側からの制御というのは初めてのこと。わかるかね、制御が内側に置かれた。今までのように〝外部の力〟に屈し、風向きにしたがって向きを変えることもない。まるで……

「マーケットの動きにもはや〈不可視の手〉が関与せず、マーケットみずからがそれ自身

トが突然鳴りだしたりするようなインチキはここにはないという意味。

3 弾道を内部から自動制御する技術は、事実ロケット開発の鍵となったし、ロケット開発は、制御の科学（サイバネティックス）の開発をうながした。

4 アダム・スミスの『国富論』とともにポピュラーになった、自由経済における自律的な動きを説明するための比喩。

CamScannerでスキャン

を創出することができる——内側から、おのれのロジックと、勢いと、スタイルとを。制御が内にあるということは、以前に事実として起きたことと、すなわちわれわれが神を見限ったこととの正しさを立証するんだ。が、それとともにより大きな幻想を抱えこんだことにもなる。制御という幻想だ。AがBを為しうる——これはしかし間違いだ、完全に。『為す』などということはありえない。物事は生ずるだけ。AもBも実体的なものではなく、そもそも切り離すことのできないパーツにつけた名前にすぎない」

「またウスペンスキー[5]の戯言ね」港湾労働者と腕を組んだ御婦人が低い声で言う。通りすがりに、ディーゼル・オイルとスールヴァン[6]の混ざった匂いがする。その戦前の香水にATSの軍服を着た薔薇色の若い娘が気づいて顔を上げる。ジェシカ・スワンレイク。彼女は婦人の召し物を想像する。そのフロック、ハロッズのデパートで十五ギニーのものじゃないかしら。クーポンを何枚足したのか知らないけど。わたしが着たほうがゼンゼン映えるのに。と、そのとき先の婦人が振り向いて、肩越しにあら、そう？ とでも言うかのごとくほほえみかけた。まあ、聞こえちゃったのかしら、場所柄からして、伝わっちゃうのよね、きっと。

ジェシカは、ウィージャ盤の載った卓の近くに立っている。その手には、壁のボードから何気なく引き抜いた数本のダーツが握られ、うつむいた彼女のブラウンのウール地の上に、頬の両側を垂れる渋茶の髪を透かして、蒼白い首筋と一番目の脊椎が見える。手の中で小刻みに震えるダーツは、真鍮の喉口も柄のふくらみも、彼女の血と同じ暖かさ。十字の羽根を指先でいじりながら、ジェシカは浅い催眠状態に入ったのだろうか……
いみで、遠くからまたもロケットが空をひき裂く。その押し消された音に窓が震え、床

5 ロシアの神秘思想家ピョートル・デミアノヴィッチ・ウスペンスキーは、師匠格のグルジェフと決別し、戦中はロンドンで活動していた。

6 「風の下」という意味のフランスの香水。

が揺らいだ。多感な炎が一瞬背をすくませるとテーブル上で影が踊り、向こうの部屋までぼやけながら拡がっていくが、次の瞬間炎は伸び上がり、影はまた内に向けて縮みこんだ。優に数十センチは跳び上がった炎はそのまま消えて、暗い部屋にガスの漏れる音がする。速記の手を止めて立ちあがり、栓を閉めに向かったのは、ケンブリッジ大学の優等卒業試験(トライポス)で完璧な成績をあげたミルトン・グローミングだ。

今こそダーツを投げるタイミング。一本。髪が揺れ、厚ぼったいウールの両襟の下で乳房が見事に揺れる。空気を擦る音、そしてズブッ、ねばついた繊維質の板の中心を射止めた。ミルトン・グローミングが視線を上げる。常に交信を集めている彼の頭(マインド)が新たなお相手を得たようだ。

霊媒はいま気を荒だて、トランス状態から流れでてきてしまう。〈向こう〉で何がどうなっているのか知るよしはない。この種の降霊会では、こちら俗界での息が合うことももちろん重要だが、それ以上に、四者一体の絆の、どの連結も破られてはならない——ローランド・フェルズパス(霊(スピリット))と、ペーター・ザクサ(支配霊(コントロール))、とキャロル・イヴェンター(霊媒(ミディアム))と、妻セリーナ(生者)の。[7] どこかで、消耗からか、方向変化か、エーテル[8]内に一陣のホワイトノイズが吹き荒れたかして、その一体性がほどけた。緊張がくずれ、椅子がきしみ、ため息や咳払いの音・・ミルトン・グローミングはノートに苛立ちをぶつけ、パシンと閉じる。

いまジェシカがゆったりと歩いてきた。あたりにロジャーの姿はないし、そもそもジェシカがここまで自分を捜しにくるのを望んでいるかも微妙だ。グローミングはシャイな人だけど、他のロジャーの友だちに比べたらかわいい方かも。

7　天界にいる霊(ローランド)の言葉が、どのようにして地上の「肉声」になるのか。日本語で「支配霊」(英語でcontrol)と呼ばれるコミュニケーションのエキスパートが、〈向こう〉から、地上にいる得能者=霊媒(ここではキャロル・イヴェンターという男性)の声帯が震えて物理的な音になる。円卓で霊媒の対面に、霊が語りかける相手(ここではローランドの妻セリーナ)がすわっている。

8　天を満たす物質または霊気としてさまざまに定義される。

CamScannerでスキャン

「ロジャーが言ってたわ。単語をぜんぶ書き留めてそれをグラフか何かにするんですって?」明るい声。ダーツの話が始まるのを避けようとして、すかさず言葉を差しはさむ。「それ、降霊会の場だけでするの?」

「自動記述のテクストをさ」女の子の前だとあがってしまうグローミングは顔をしかめ、うなずいて、「ウィジャ盤を使った結果を、そうそう、一、二回分集めて、きょ、曲線の特性を割り出すんだ。カーブの具合が、何かしらの症状に特徴的な形と結びつかないかと」

「よくわからないわ」

「つまりさ、ジフの〈最小努力の法則〉ってあるだろ。[*9] 任意の単語の出現頻度 Pn を対数座標の縦軸に、その順位 n を横軸にとって見ると」――反応のないジェシカに向かってまくしたてる、当惑した彼女の顔がまた可愛い、「ふつうはもちろん、だいたい直線っぽくなるもんだけど…しかし、ぼくらの集めたデータは、なんというか…ある精神状況の人たちの場合、それが変わってくるんだ――分裂症だと、高いところが平らで、それからだんだんカーブが急になる、弓の形みたい…このローランドって男はどうも、典型的なパラノイアだな」

「うん」その言葉ならジェシカに通じた。「against って言葉が出たとき、あなたの顔がパッと輝いたわよね」

「against と opposite。すごいよ、この二つの単語の頻度を見ると驚く」

「一番頻度の高い言葉ってなに?」ジェシカがたずねる。「あなたの第一位」

「こういう会には不動の一位があるんだ」そんなのは常識、とでもいうかのように、統計

9 ハーバード大学教授ジョージ・キングズリー・ジフ(Zipf)が、現実の発話について確率論的に調査した『言語の心理生物学』(一九三五)で展開した考え方。

学者は答える。「death」
　年老いた空襲監視員が、オーガンディ織りのような、華奢でこわばった動きで、多感の炎のところで爪先立ち、ふたたびそれを灯した。
「ところで、あなたのイカレたお友達、どこに消えちゃったのか知らない?」
「ロジャーなら、プレンティス大尉と一緒だ」手がそれとなく波打っている。
「例の、ミステリアスなマイクロフィルムの演習だろうね」どこかの遠い部屋へ回されたという感じ。偶然にほとんど支配されない「クラウン&アンカー」[*10]ゲームの前を過ぎ、絞った音量で流れるBBCのフォークマンとアパッチ楽団[*11]の演奏と、煙草の波と、おしゃべりの波を抜けて、ずんぐりしたパイント瓶とほっそりしたシェリーグラスの並ぶ前も通りすぎると、冬の雨が窓を打っている。引きこもりの時間。ガス薪暖炉の近くに行くか、夜の冷気を防ぐショールを巻くか、恋人や古女房と寄り添うか。さもなくば、気の合う仲間とここ〈スノックソール〉に集まる。ここはシェルター——戦争はこんなに長く続いているのに、戦争の利害に完全に絡めとられることなく、人々が心静かに集える場所は、ここ以外、ほんのいくつかあるだけなのだ。
　パイレート・プレンティスも同じ気持ちにならないわけではないが、彼の場合、どうしても階級的屈折があいだに入る。上流の人間たちと一緒のとき、彼はいつも強烈なニタリ顔を携える。古代ギリシャの重歩兵の行進みたいな笑い顔。これを彼は映画館で入手した——出典は、デニス・モーガンが、小さな出っ歯のイエロー・ラットを撃ちおとすたびに、噴きだす黒煙を見おろしながらニタリと浮かべる、あの悪戯っぽいアイルランド人の笑いなのだ。[*12]

10 王冠や錨のマーク付きの特別仕様のサイコロを回す、伝統的な賭けゲーム。

11 BBCラジオは戦時中も毎晩十時から十二時まで「トップテン」などの音楽番組を放送していた。原文テクストでFalkman となっているバンドリーダーは、『GRC』によれば、おそらく Lionel Folkman のこと。

12 言及されているのは、ワーナー・ブラザーズのトップスターの一人であるモーガンが、極東戦線で日本軍戦闘機を相手に活躍する *God Is My Co-Pilot*（一九四五）。

CamScannerでスキャン

これがとても役に立つ。彼らにとってのプレンティスと同じくらい有用である。〈ファーム〉といえば、誰でも何でも、裏切り者も人殺しも性倒錯者も黒人も、女でさえもおのれの目的に利用することで知られる。〈かれら〉は当初、パイレートの有用性を充分には確信していなかったのかもしれない。だが、事態の展開に合わせて、確信はゆるがぬものになっていった。

「少将、まずいでしょう。こんな方面のことに手を染めては」

「彼のことは四六時中見張っている。われわれの軍域を物理的に離れる気配はないのは確かだ」

「でも、彼には共謀者がいるわけで。催眠術とか、ドラッグとか、方法はともかく、その男に近づいて眠らせてしまえばどうなるか。まったく、次には、占星術に頼るとか言いだしそうだ」

「ヒトラーはやってるさ」

「ヒトラーには霊感があるんです。しかし少将、わたしらは公務についているわけですよ……」

最初に需要の波がきたあと、パイレートが指名されるクライアントの数はいくぶん減って、いま抱えている件数は楽な部類に入る。だが本当はこんな仕事はやりたくないのだ。それはしかし、通じまい、生まれと育ちのいい、SOEのマニアックなお偉方には。ああ、たいへん結構、大尉とか言って、行動指令の文書を早口で読み上げ、ブーツで床を擦り、眼鏡をかけた政府要人の言葉を繰りかえす。上出来だ、まあいつかクラブでわれわれのためにやってみせてくれたまえ。

CamScannerでスキャン

パイレートが望んでいるのは〈かれら〉の信用なのだ。彼らの、高級酒と舶来煙草の香る、荒々しい愛情を求めている。理解されたい相手は自分と同じ仲間なのであって、〈スノックソール〉に群れる本の虫や、へんてこな理論に走るフリークではないのだ。こいつらは〈科学〉に熱を上げ、何でも許容してしまう。彼にとって（ここに来たのは本当に不覚だった）よそ者以下の気分になるのは、戦争の帝国全土の中で、ここだけだ・・・

「彼らが何を考えてるのか」さっきからロジャー・メキシコがまくしたてている「まったく不可解だよ。魔術条例[13]ってのが二百年も前にできてるわけでしょ。ぜんぜん違う時代の遺物じゃないか、世界観からしてさ。なのに一九四四年になって、なんで突然、右から左から信者たちが入りこんでくるの。ぼくらのイヴェンター氏はね」と、部屋の反対側で若いギャヴィン・トレファイルと話している霊媒氏を指さして、「いつ警察に踏みこまれてもおかしくないんだ――わんさか窓から押し入ってきてさ、凶悪犯を扱うみたいにスクラブズ[14]へしょっぴいていかれちゃうよ。その容疑が、死者の霊魂をその場に呼び寄せその場に居合わせた生者と交信せしめた行いを偽造した罪――なあんて、こんな馬鹿げたファシストの戯言につきあってられるかよ」

「注意しろよ、メキシコ。大事な客観性をまた失ってるぞ。科学をやるものが、そんな非科学的な言葉づかいに走ったらまずいだろ」

「やめてよ、彼らの一味みたいなことを言うの。ほら、今夜、ドアから押しよせてきてるの、感じるでしょ？　パラノイアの洪水だよ」

「たしかにそれはおれの特技だ」と言いかけてパイレートは、発言の唐突さに気づき、その衝撃を弱めるように言いなおす。「いや、自分の頭が本当に多重（マルティプル）なことに関わってるの

13　一七三五年、英国議会は魔術を禁じる古い法を改正。新たに、魔術の能力を信じさせるような行いを、罰則をもって禁止した。

14　ロンドン西部のワームウッド・スクラブズ刑務所。

CamScannerでスキャン

かどうかはわからんのだけどね」
「ああ、プレンティス」眉も唇も、どこも歪ませない。ただ「ああ」と受け止める。
「うちにグロースト博士ってのがいるから、今度は彼の脳波検査の結果をもってきて、チェックしてもらうといい」
「ああ、ロンドンにいたらな・・・」明言は避ける。セキュリティの問題がある。うっかりした発言は身の安全を脅かす。メキシコのことも、油断してはならない。いま展開中の作戦はとにかく何重にも輪ができていて、外の輪から内側へ来るにつれて、機密の配布範囲はどんどん狭まり、廃棄リストは増えていく——すべてのスクラップ、殴り書きメモからタイプライターのリボンまで全部だ。

パイレートの勘によれば、メキシコは、ときどき下働きに駆りだされるだけだろう。〈ファーム〉がこのところ熱を上げている〈ブラックウィング作戦〉に、統計学の専門家として、敵国の士気に関するデータなんかを処理しているにちがいない。しかしそれだけではなく、この作戦のどこだか外縁のところでも動いている——ちょうどプレンティス自身が、今まさにこんなところまで出てきてメキシコと、自分の家の同居人のテディ・ブロートの仲介をしているように。

ブロートがどこかへ出かけ、何かをマイクロフィルム撮影していることは知っている。それがパイレートを経由して若いメキシコに渡ると、その先は〝白のおとずれ〟（ホワイト・ヴィジテーション）[15]に行くのだろう。そこにはPISCES（パイシーズ）[16]という、何でも屋の企画組織が入っている。Psychological Intelligence Schemes for Expediting Surrender——降伏促進のための心理学的諜報企画。誰の降伏を促進するのかは明記されていない。

15 英語のvisitationは、多くの場合「超自然的な力のおとずれ」という意味で使われる。

16 piscesとは十二宮の「魚座」。

アメリカが参戦し、亡命政府も一ダースほど来て、ロンドン周辺は連合国側内部にわけのわからない諜報活動グループが何千と浮上した。そのどれかにメキシコも参加しているのかという懸念がパイレートにはある。この状況で、奇妙にもドイツ相手の活動がすっかり影を薄くして、誰もが心配そうに周囲を窺うようになった。自由フランス軍はヴィシー政府の裏切り者に復讐を企て[17]、ルブリンに集結したポーランドの共産一派はワルシャワの傀儡内閣の打倒を狙っている。ＥＬＡＳは王党派の情報収集に勤しんでいる[18]。数々の国からやってきた、数々の言語をしゃべる夢想家たちが、王政の、共和制の、傀儡政権の樹立を、収穫の季節には消えてしまう一夏のアナーキーを、意志の力、暴力、祈りの力によって実現しようと画策している……惨めな姿で死んでゆく無名の者もある。イースト・エンドに落ちた爆弾のクレーターの、雪と氷の中に春まで埋もれている者。慢性的な酒酔い、阿片酔いによって、その日の不運をやり過ごす者。たいていの者は少しずつ魂を失い、信頼の気持ちを蝕まれ、ゲームの果てしない会話に捕らえられ、日々の自己批判にさらされ、すべての注意を奪われていく……そしてプレンティスの意識に具体的な形をとった外国人、それはたったいま彼のミラーグラスをよぎったあいつ、あの祖国のないインドの水夫、最貧層の亡命者ではないか……

ふむ、このメキシコも〈かれら〉によって複雑怪奇な仕事に引き入れられたのか、とパイレートは思う。アメリカ人関連のことか、それともロシア人関連か。"ホワイト・ヴィジテーション"は、心理作戦の遂行に専心すべく、各種の専門家を少数ずつ寄せ集めている。行動主義派がこちらに、パヴロフ派があちらに、パイレートの知ったことではないが、とにかくいろんなのがいる。だが、フィルムを届けるたびにロジャーの真剣さが目に見え

17　ドイツに敗北したフランスは、北部は占領下に置かれたものの、中南部はヴィシーを首都に、親独政権下で自立を保つことができていた。一九四四年六月ノルマンディ上陸以降の連合軍の逆襲でドイツが追われると、ドゴール率いる自由フランス軍がヴィシー政権を打倒。十二月までにはナチ協力者への裁判が始まっていた。

18　ＥＬＡＳは共産党系の「ギリシャ人民解放軍」で、ナチスの捕虜を呼びこみ、十二月なかばには「王党派」の後ろ盾をしていたイギリス中心の連合国勢力の追放をめざして攻勢をかけていた。

CamScannerでスキャン

て増してくるのが気になる。これは不健康だ。物事に耽溺していく者の眼つきだ。自分の友が――戦時の仮の友であろうと――なにやらいやらしい目的に使われている。

　自分に何かできるだろう？　メキシコがしゃべりたいと思っているなら、セキュリティがどうだろうと、何か方法はあるはずだ。〈ブラックウィング作戦〉がどのような機構で動いているのか、メキシコが語りたがらないでいる気持ちをパイレートは共有していない。何か恥辱の気持ちが働いているのか。封筒を受けとったときのメキシコの顔。眼球が部屋の隅を凄いスピードで見回していた。まるでポルノを手にした客の表情だ……プロートの趣味を知っているパイレートは、ほんとにそんな気がしてきた。フィルムに映っているのは若い女性と肉体派の若者との交歓シーンなのか？　いろんなポーズで？　だったら、この戦争が映しだした中で最高に健康的なものじゃないか……生命がある、少なくとも……

　あれはメキシコの女だ。いま入ってきた。若い女の清涼感――煙草も喧噪も寄せつけない――が目に飛びこむ……自分が見ているのはオーラだろうか。彼女がメキシコを見つけてほほえむ。とても大きな目だ。ダークな睫毛、化粧はしていないか、見た目にわからないほどの薄化粧。カールした髪の毛が肩にかかる。NAAFI[19]の軍人接待所（キャンティーン）でコーヒーを注いでるあたりがお似合いの女の子が、男女混成の対空砲火部隊で何をしているんだ。突然彼は、間抜けにも、うろたえた。肌にグッと痛みがきた。若いふたりへのシンプルな愛の気持ち、ふたりの安全を祈らなくてはいられない気持ち、彼はいつもこの気持ちを別なふうに呼びならわしてきた――ほら、「思いやり」とか、「好感」とか……

　一九三六年のこと――「T・S・エリオットの春」[20]と彼は呼んだが、実はもっと寒い季節に――パイレートは、とある重役夫人と恋仲になった。スコーピア・モスムーンという、

19　イギリス軍の厚生施設（Navy, Army and Air Force Institutes）。購買部のほか、クラブやレストランも運営。

20　モダニズム文学のバイブルとなったエリオットの長篇詩「荒地」The Waste Land（一

スクっと伸びる茎のような細身の女性だった。亭主のクライヴはプラスチック研究の専門家で、ケンブリッジを出てインペリアル・ケミカル社[21]にいた。キャリア組の軍人だったパイレートは、除隊して一、二年の市民生活をエンジョイ——というのか、はめを外した生活にのめりこんでいた。

その気持ちを抱いたのは、スエズの東、バーレーンのようなところをいくつか回っていたときのこと。ムハラク[22]から永遠に原油の臭いがただよってくる中で、自分の汗の混ざったビールを飲む。日没後はキャンプからの外出禁止——どのみち現地は性病感染率が九八パーセントだ——英仏海峡の東からの脅威に備え、シーク教徒の政権とオイルマネーを守っていた、砂漠の日に薄汚く焼かれた軍人らは、性的欲求不満と、蚤の痒さと、太陽が肌に作る水疱を抱え（この状態でマスターベーションするのは拷問に等しい）、大抵は酔ったままの一日を過ごしていたが、プレンティスの酩酊した頭にも、人生が無為に過ぎていくという思いは微かに訪れていた。

素晴らしい白黒の装いのスコーピアは、絹に包まれたイギリス実業界、壁に阻まれていた世界、に対するパイレート風の幻想を充たしてくれる存在だった。ふたりが逢瀬を重ねたのは、夫クライヴがICIの命で、よりによってバーレーンへとトラブル処理に出かけたとき。事の対称性が、パイレートの罪の意識を幾分弱めた。見知らぬ同士を装ってふたりはパーティに出かけた。広間の向こうに予期せぬ彼の姿を見つける危険を避けるべく、手を打ったことは一度もない（そうやって、雇用人の身である彼に同族意識を持たせてくれたのだ）。パーティのマナーも愛についても金のことも、何も知らない彼のことが彼女にはいじらしく、三十三歳の帝国軍人が時折見せる少年らしい振るまいが愛おしくてたま

九二二）は「四月は最も残酷な月」という行で始まる。

21 略称ICI。当時ドイツのIG（イー・ゲー）ファルベン、アメリカのデュポン社と並ぶ、イギリスの総合化学コーポレーション。

22 バーレーンの首都マナーマの対岸の小島で旧都。

らないというようすだった。歳相応の禁欲に入る前の、これは彼の最後の恋の炎だろうと彼女は思った——もっとも彼女自身若すぎて、「ダンシング・イン・ザ・ダーク」[*23]の歌詞が実際どういう意味なのかもわかってはいなかった・・・

彼は思いを封印しておくことに心を砕くだろう。だが、ときどき息苦しくなって彼女の踵に崩れおちずにはいられない——彼女がクライヴの下を離れることなどありえないと知りつつ、それでもあなたが最後のチャンスなんだ・・・あなたを失ったらもう時間がない。・・・だが彼は無理を承知で切望してはいなかったか、そんなケチな西洋人の時間割など無視することができたらどんなにいいか・・・だがどうやって・・・三十三にもなってどこから始めたら・・・。「そういうところが可愛いのよ」と彼女は笑い飛ばしただけだろう、その悩みの非現実的さに顔をしかめる代わりに、心から面白がって笑ったろう（もし本当に口にしたならば）——昂揚した彼に接して彼女自身、気を火照らせ、我を失い、常に彼に向かい、彼を受け止め、からだを開く（ペルシャ湾時代フランネルの軍服に射精した、それよりもっとヒリヒリする愛の刺草(いらくさ)が彼を締めつける）——その狂おしさに身を委ねずにいられないほど抑えがたく、それを夫への裏切りとも思わないほど狂おしく。

あの女(ひと)には、そりゃ手軽で便利だったろう。ロジャー・メキシコはいま、ジェシカを相手に、似たような状況にある。こちらの上流紳士の名はビーバー。パイレートはそれを傍で見てはいるが、話題にしたことはない。自分が迎えた苦い結末をロジャー自身味わうのを待っているというところもあるのは否定できない。他人が不幸をさらすのを——ビーバー自身とビーバーの世界をいくらつつき回しても結局は、クライヴのときのように、相手は不動であることを思い知ることになるだけだ——こんなに楽しげに待ち望むというのも

23 戦時中もアーティ・ショーのバンド・ヴァージョンが大ヒットした、ディーツとシュウォーツ作の、ミュージカル劇『バンド・ワゴン』（一九三一）の中の曲。

初めてのことだ。が、それとは別な、オルターナティブな――より"正しい(ディーセント)"と軽々しく呼んではいかんが――自分がいて、そいつは、パイレートが失ったものをこの男が手にしてくれたらいいと願っているようなのだ。

「貴方、本当に海賊(パイレート)なのね」どちらもまだそれが最後になるとは知らなかった日の別れぎわ、彼女は言った。「わたしを掠って海賊船に乗せたのよ。抑圧だらけの良家のお嬢さんをね、そしてレイプしたの。いま私は、外洋に名をとどろかす〈紅い雌犬〉なの」これはいい。なんていいゲームだ。もっと早く思いついてほしかった。最後の（すでに到来した最後の）日の午後の光もしだいにたそがれゆくなかで、腰を動かし、また動かし、組み合った手足をほどくことすらできないほど愛しあう。借りた部屋が穏やかに揺れ、それにつれて天井が一フィート下がるのを、照明が器具もろとも揺れるのを感じながら。テムズの河面から海の男の叫びが聞こえ、船のベルが……

だが雲垂れ込める海の彼方から、政府の犬たちが鼻をならして迫ってきていた。巡視の帆船がやってくる、法の執行者たるカッターズ船とほっそりした雌雄同船(ハーマフロダイト)が海賊の船に迫る。手慣れたもので、彼らの狙いは彼女を押収することだけ、"海賊"の処刑も逮捕も考えていない。彼らの論理は頑丈だ。充分な傷を負わせれば反省するだろう。かつてのハードボイルドな、固ゆで卵のような世界に戻り、あきらめの夜を重ねて、時間割の支配する世界に安住するだろう……

別れはウォータールー駅だった。駅には〈フレッド・ローパーのワンダー・ミゼッツ〉[*24]の一座がいて、彼らが南アフリカはヨハネスブルグの大英帝国博に出発するのを見送る人たちでごった返していた。素敵なフロックコート、細身のウエストのオーバーコートとい

24 二十人ほどの小人の一座。「小人の兵隊行進」などの演目をもって巡業していた。

ったダークな冬着に身を包んだ小人たちが、駅を走り回り、餞別のチョコレートを食べたり、並んでニュース写真のポーズをとったりしている。その中で、スコーピアの真っ白な化粧顔が、窓から、最後のゲートの最後の窓から見えて彼の心臓をズキンと打った。〝ワンダー・ミゼッツ〟とファンたちの笑い声とお別れの声が上がる。ふむ・・・パイレートは思案する、これでまた軍の暮らしに戻るってことか・・・

CamScannerでスキャン

□□□□□□□

ふたりは東へ向かっている。ハンドルを手に前方を見据えるバーバリ・コート姿のロジャーは、ドラキュラふうに背を丸めたまま。ジェシカの肩と腕をおおう淡褐色のウール地に百万粒の雨が、柔らかな光のレース模様をつくっている。ふたりだけでいたいのに、ベッドにいて、ゆっくりと、愛に埋もれていたいのに、でも今夜はテムズの南を一路東へ。ひとりの位の高い生体解剖学者と落ち合わなくてはいけないのだ。聖フェリックス教会の時計台が一時を打つ前に、ネズミたちが駆けおりたら、永遠に逃がしてしまいかねないから。[1]

息で曇ったガラス窓に寄りかかった彼女の顔は、それ自体がひとつのボンヤリとした明かりの塊。冬の光の遊びの一部。その向こう側を白く砕ける雨がよぎる。「その人、なぜわざわざ自分で犬を捕まえるの？　要職にある人なんでしょ？　手伝い（ボーイ）とか雇えばいいのに」

「ボーイじゃない、〝スタッフ〟だ」ロジャーが答える。「ポインツマン[2]のすることに、なぜだなんて聞かれたってわからないさ。パヴロフの信奉者だぜ、しかも王立協会の人間（ロイヤル・フェロー）[3]ときてる。そんな連中の考えがおれにわかるか。〈スノックソール〉にいる連中と変わらな

1　マザーグースの時計とネズミの歌（「ヒッコリー・ディッコリー・ドック」）を、実験用モルモットの捕獲に掛けた表現。

2　一般名詞としては、鉄道のポイントを切り替える「転轍手」の意味。

3　英国および英連邦の著名な科学者・技術者の会「ロイヤル・ソサエティ」のメンバー。

CamScannerでスキャン

いヘンチクリンなんだ」

今夜のふたりは気持ちが荒れ気味。なましかたを間違えたガラス板のように、緊張のマトリクスを抱え、ちょっと指が当たっただけでもピンと割れてしまいかねない——

「あわれなロジャー。あわれな子羊。いつもみじめに戦ってる」

「わかったよ」頭を振りふり、怒りのp音かb音を、破裂させずに押し止めた。そうしないとなかなか次の言葉が出てこないみたいだ。フロントグラスのワイパーがひっきりなしに音を立てる。「あのヘンな飛行爆弾さ、きみたち、たまに打ちおとすことができてたもんな。きみと彼氏の、ヌートリアっていったっけ？」

「ビーバーです」

「そうだった。きみたちの仲間って、見事なエスプリっていうので有名だもんな。でも、ロケットに変わってからは冴えないじゃないか。このごろ打ちおとせてないよね」シワの寄った鼻と目に、口をすぼめた意地の悪いスマイルを加える。「おれとかポインツマンより成果が上だってことはない。近ごろは誰が誰より純度が高いとかそういうことはなくなっただろう、え、どうなんだい」革のシートの上で体が跳ねる。

ジェシカの手はもう彼の肩にふれそうなところまで差し伸べられている。片腕に乗った頬。髪がこぼれ落ちる。ぼんやりとロジャーに向けられた眼。ジェシカとはまともな議論を続けることができない。いや、ずいぶんがんばってはみるのだ。でも彼女の沈黙が、優しく撫でる手のように彼をなだめ、部屋の片隅やベッドカバーの上やテーブルのまわりを静かに収めてしまう——ふたりの偶発的な空間を。…出会いの日からしてそうだった。

4 V1は飛行爆弾（フライング・ボム）とも、またその飛行音からバズボムとも呼ばれた。ATSの女子隊員も対空砲を扱った。

あのクサい映画『我が道を往く』*5を見に入った映画館で、手袋を脱いだジェシカの白肌の動きのひとつひとつに眼を留め、そのオリーヴ色の、琥珀色の、コーヒー色の眼が自分の肌をあちこち刺すのを感じていた。彼の忠実なジッポ・ライターを擦りつづけて何ガロンのシンナーを無駄にしたことか。勇ましく突き出ていた芯まで燃やしてしまった。それもみな発火した青い炎が闇、いく種類もの闇のエッジを明るくしてその時々の彼女の顔の躍動を映し出してくれるから。新しい炎はいつも、新しい顔を見せてくれるから。

向かい合っているとときどき、どちらがどちらの顔なのか区別がつかなくなる。そういうことが最近増えた。不気味な戸惑いにふたり同時に襲われる…鏡の中に自分をとらえてハッとするというのとは…すこし違う。というより、実際にふたりが合体して何か別の生き物になったという感じだ。どのくらいの間だろう。二分？ それとも一週間？ それはわからない。とにかく一体化して、ある時間を経て再分離。そして、ああそうなんだ、ロジャーとジェシカは溶けあって、自意識のないひとつのクリーチャーになっていたんだと理解する。…観察の彼方にある存在を信じるように言われるたびに悪態をついていたロジャーにとって、これは正真正銘初めての本物の魔法、論駁しようにもできないデータ…

それはハリウッド映画が好んで「キュート・ミート」と呼ぶ出会いだった。十八世紀の香りの残るタンブリッジ・ウェルズ*6の中心街、ロジャーは年代物のジャガーに乗ってロンドンへ北上中。ジェシカは路肩でパンクした自転車と魅力的に格闘中。黒っぽいATSの軍服のスカートがハンドルに絡まって、カーキ色のストッキングの上に、規則違反の黒のスリップと、透き通った真珠の太腿が露わじゃないか——

5 ビング・クロスビーがチャック・オマリー神父を演じ、オスカーを獲った一九四四年のヒット・ミュージカル。原題 *Going My Way*。

6 ロンドン南南東約五十キロにある町。正式名 Royal Tunbridge Wells。

CamScannerでスキャン

「おーい、きみ」ブレーキがきしむ。「〈ウィンドミル〉[7]の舞台裏じゃないんだぜー」意味が通じた。「ふうん」カールの髪が鼻の上にこぼれ、返事のトーンがちょっぴり刺々しい。「あんたみたいな未成年の子が入れる場所だとは知らなかったわ」

「それより」自分の幼いルックスのことは言われ慣れている、「ガールスカウトの招集、かかっていないのか」

「わたしハタチです」

「よかった、このジャガーに乗りこむ資格があるってわけだ。ロンドンまでオーケーだぜ」

「方向が逆よ。バトル[8]の近くなの」

「もちろんラウンド・トリップさ」

顔面の髪を振り払って「こーんなことしているの、お母さん、知ってるの?」

「おれの生みの母は戦争なんだ」と宣告し、身を乗りだしてドアを開ける。

「ヘンなこと言う人ね」泥になった靴の片方をステップに乗せたまま戸惑いを見せる。

「来いよ。きみの使命は、そこに自転車を置いて、車に乗りこむことさ。そしてそのさいスカートの裾に気を配ること。街の路上でみだらなことを始めたくないからね」

その瞬間。ロケットが降ってきた。なんとハリウッド的だろう。衝撃音に続いて、虚ろなドラムロール。落ちたのはロンドンの近くだから身の危険は感じないが、初対面の相手との一〇〇マイルを一挙に埋めるには充分に近くて大きな爆音だ。彼女の素晴らしい丸々としたお尻が長い弧を描く。バレエのようにくるりと回って助手席に落ちた。髪の毛が一瞬扇のように開く。アーミーカラーのスカートが翼のようにたくしこまれる。爆音がまだ

7　47ページ、註6。

8　ここから南へ三十キロほどの町。

響いている最中の出来事だ。

北の空に、雲が湧くより速く、深く、厳粛でごつごつした何かが立ちのぼるのが見える気がする。ここで彼女は映画みたいに身を寄せて、あたしを守ってとささやくのだろうか。ロケットが落ちようと落ちるまいと、本当に乗りこんでくるとは思ってもいなかったからロジャーは、ポインツマンのジャガーをローではなくバックに入れてしまう。メリメリという音がして、後ろの自転車はもうスクラップにするしかない。

「これであたし、あなたの意のまま」彼女が叫ぶ。「もうすっかり！」

「うむむ」ようやくギアを正しく戻したロジャーは、アクセルのプルルとウイーンに合わせて心弾ませながらロンドンへ。ただし、ジェシカは「意のまま」ではない。

そして戦争は――間違いなくロジャーの母親だ。戦争は彼の鉱物化した、雲母のきらめく、墓の指標のような心に取り憑いて、そこに散在していた柔らかく傷つきやすい成分を、希望や賞賛を、ぜんぶ吸いだし、灰色の、うめく潮流へと押し流してしまった。もう六年になる。視界の隅の、ギリギリ見えるところにいつも彼女はいた。最初に見た屍体のことも、生きていた人が死んでいく最初の光景もロジャーは忘れてしまっている。そんなにも長く続いているのだ。人生のほとんど、と思われるくらい。いまシティに行けば、そこは死神の館の待合室のよう。書類は記入ずみ、契約のサインも終わり、残された日数も決まっている。子供のころの壮大な、庭園の、冒険の都は消えた。いまの彼は「〝ホワイト・ヴィジテーション〟の陰気な若者」として、ひとり数字のクモの巣づくりにいそしんでいる。部局の連中とは仲良くやっていけてないし、別にそれを隠してもいない。だって無理だろう、まわりじゅう透視能力者、マッドな魔術家、テレキネシスの能力者、幽界のトラ

CamScannerでスキャン

ペラー、霊明の見者、そんなワイルドな連中ばかりで、ロジャーはただの統計処理屋。予知する夢、テレパシーのメッセージ、〈異界〉との直接接触、どれも経験したことはない。その種の力が実在するとしたら実験データに表れるはず・・・というところでいつもストップ。それ以上の話に明晰な頭で近づくことはできない。同じ下階の廊下を行き来する心霊(サイ)セクションの超常心理学者らは、全員が3σ(スリーシグマ)[*9]という感じに常軌を外れた人間なのだ。ロジャーの妄想が悪くても当然だろう。きみだって同じだろう？

霊魂というものを、どうしてあんなに、あからさまに信じずにはいられないのか・・・まあ、おれも同類には違いないが、しかしそもそも霊的(サイキック)なものをいったいどうやって科学の基盤に乗せようっていうの。こっちは自分が死ぬ確率の揺らぎを調べてるんだぜ。このカイ二乗計算[*10]のすぐ脇に、ゼナー・カード[*11]をめくる音の間に、霊媒のくぐもった呻き声がとぎれた静寂に、そういう不気味な場所があるのかよ。ロジャーも弱気なときには、人はこういう逆境に耐えてこそ強くなれる、と思わないでもないのだが、たいていはムシャクシャが先に立つ。どうして自分は消火部門で働いてないんだ、と罵っている。さもなきゃ爆撃機のグループごとに爆弾一トン当たりの標準的犠牲者率のグラフ作りとか・・・この動かしようのない〈死〉のビジネスへの、割に合わない介入に比べたら、どんな仕事だってましだろう・・・

屋根の線の向こう側が赤く燃えている。消防車がうなりながらふたりの車のわきを過ぎ、同じ方へ向かっていく。煉瓦の道と静寂の壁からなる、威圧的な地区だ。

土木兵、消防隊、そして白い寝間着の上にダークなコートを羽織った住人。ロジャーはブレーキを踏む。老婦人の夜の思いに、消防士はどんなふうに抱きこまれるのか――アラ

9 統計の正規分布図（ベル型曲線）の中心（標準）から遠く外れた例外域。

10 実際に観測された結果が期待値からどのくらいずれているかを数値化した値。（（観測度数－期待度数）の二乗÷期待度数）の総和、によって求める。

11 ランダム以上の確率でカードを言い当てるサイキックな能力があるか調べる、二十五枚一揃いのカード。五つのシンボル（サークル、クロス、ウェーブ、スクエア、スター）からなる。

CamScannerでスキャン

イヤダ、そんな大きなホースを出して、わたしにどうなさるおつもり……オーノー……そんなおそろしいゴム長をいつまで履いてらっしゃるの……そうよ、お脱ぎに——

数ヤードごとに兵士が立っている。ゆるい哨兵線。じっとしたまま。ちょっとあの世的(スーパーナチュラル)だ。バトル・オブ・ブリテン*12は、これほど儀礼的ではなかった。ところがこれら新型のロボット爆弾は、誰も声に出さないほどの集団的恐怖の機会を英国民にもたらした。細い脇道から漆黒のパッカード*13の車体がやってくる。ダークスーツを着こんだ民間人の白い襟が影の中に固く浮かび上がる。

「あの人たち、誰なの？」

彼は肩をすくめる。「彼ら」で充分だろ、「フレンドリーじゃないヤツらなんでね」

「誰かさんみたいに？」このときのふたりの笑みは習慣性のものだ。彼の仕事が彼女の神経にさわったこともあった——飛行爆弾についての可愛いスクラップブックを作っているの？　優しい人だこと……そう言われるたびに彼はため息をついた。ジェス、そんな血も涙もない科学の鬼みたいに言うなよ……

熱が顔を打つ。水で打たれた炎の発する激しい黄色が目を焼く。わき起こる風が屋根に架けた梯子を揺らす。屋根の上、空を背にして、防水衣を着た男たちが、同じ動作で手を振って指令を伝える。半ブロック先で照明灯が、焼け焦げと水浸しの中の救助活動を照らす。ポンプ車や重装部隊(ヘヴィ・ユニッツ)から伸びたキャンバス地のホースが水圧で膨らんでいく。急造の蛇行した消防隊が冷たい、身を切るようなスプレイの星を高く撒きちらす。火の手が跳ぶとそれが黄色く輝く。どこかの無線機に、別の隊を別の地区へ動かす、落ちついたヨークシャーの女性の指示が飛びこんでくる。

12 大戦初頭の一九四〇年に、英仏海峡および英国本土上空で行われた、独空軍と英空軍との航空戦。

13 アメリカからの輸入車。アメリカの上級将校や外交官が利用していた。

CamScannerでスキャン

以前なら足を止めたかもしれないが、ロジャーもジェシカもバトル・オブ・ブリテンの卒業生だ。早朝の黒さ、助けを乞う叫び声、押し黙ったまま動かない敷石と露わな梁、圧倒的な慈悲の不足の中をずっと引き回されてきた。……n人目の犠牲者をな、体の部分だけかもしれないが、n番目の瓦礫の中から引き出すころには、いいか、ジェシカ——と彼は一度、怒りとも嘆きともつかない声を上げた。それぞれの人間を思いやる気持ちなんて消えてしまうんだ……nの値は人によってまちまちかもしれないけどさ、残念ながらみんないつかは……

そしてすり切れた心に退却が訪れる。まだ戦争の国から身を切りはなしてはいないふたりも、しずかな撤退の糸口は見つけた……いやそのことを話す場所も時間もあったわけではないが、話す必要もなかったろう——それでもふたりとも確信していた。〈ホーム・フロント〉[14]の紙(ペーパー)と火(ファイア)と衣(クロース)と鋼(スチール)の中にいるよりは、お互い同士、ぬくぬくと過ごす時間のほうがいいと。〈ホーム・フロント〉なんてのは大ウソだ、ふたりをひき裂き、愛をつぶして仕事と抽象と苦痛の強制と惨めな死へ追いやるためのでっち上げだと。

ロンドンの南、防空気球の上がる区域にふたりは一軒の家を見いだした。四〇年に避難命令の出たままのこの町は、いまも国防省のリストに載る立入禁止地域。そこにロジャーとジェシカは侵入した。権力に対してそれがどの程度の挑戦になるのかは、捕まるまでわからない。ジェシカはそこに小さいときのお人形と、貝殻と、レースの下着と絹の靴下を詰めた叔母の鞄を持ちこんだ。ロジャーは何羽かの鶏を脅して何もないガレージに巣を作らせた。ここで会うときは、どちらかが一輪か二輪の花を摘んでくる。夜は爆音と輸送車の音が止まない。小高い草原を超えて吹きこんでくる風にはかろうじて最後の潮の香が残

14 物資調達その他で軍を支える市民の活動を戦争の一部と見なした表現。

っている。一日は熱い一杯とシガレットで始まる。折れかかった脚をロジャーが麻紐で結わえてつくろった、ガタガタのテーブルでのひと時。言葉の少ない、ふれあいと見つめあいとほほえみあいと、別れをののしる時間。周縁的な、ひもじく、寒々とした、でも見つかってしまうから火も焚けずに震えている時間。でもこの時間を保ちたい。これを保つためならプロパガンダが要求する以上を引きうけてもかまわない。ふたりは愛の中だ。戦争め。ファック・ザ・ウォー。

□□□□□□□

今夜の獲物の名前はウラジミールになるのだろうか――ドクターの気まぐれ次第でイリヤにも、セルゲイにも、ニコライにも――そいつが地下貯蔵室の入口に注意深く忍び寄る。ゴツゴツした入口の下は安全な穴蔵だ。いつか狼犬に追われて同様の暗がりに逃げこんだ記憶または条件反射を彼は持っている。そのときの相手は、見えた瞬間に襲いかかる、石炭の匂いを染みこませたアイリッシュ・セッターだった……それが悪童の群れだったこともあった。ごく最近、突然の轟音と光が降ってまわり中が崩れたときもここに逃げこんだ。そのとき左後部に負った傷はいまも癒えず、舐めていないといられない。だがきょうの追っ手は特別だ。暴力的というより組織的で狡猾で、こういう手合いは慣れてはいない。路上暮らしはふつうもっと直接的なものなのだ。

雨が降っている。めったに動かない空気が、実験室を知らぬ鼻に、嗅ぎなれない匂いを運んでくる。

エーテル臭の出所は、王立外科医師会会員[1]エドワード・W・A・ポインツマン氏。眼をつけたワン公の尻尾の先が、壊れた壁の向こう側に隠れてしまいそうになる瞬間、獲物に

1　ヘンリー四世の時代（十五世紀初頭）の床

気を取られて足下が不注意になった彼は、そこに口を開けて待っていた便器の白い喉口を思いきり踏み抜いてしまった。ぶざまに身をかがめ、瓦礫の中からエイヤとばかり便器を引き抜きながら、自分以外のこの世のすべての不注意者を——わけても、爆撃の犠牲になったかもしれぬ倒壊アパートのオーナー、あるいは誰であれ瓦礫からの便器回収を怠った者を——罵る。彼の足首は陶器の中にクサビのようにハマりこんでいる。

ポインツマン氏は、爆破された住宅の階段まで足を引きずり、犬を驚かさぬようそっと足を振り回して、焦げたオーク材の親柱[*2]の下半分に打ち当てる。しかし便器はカランという音を立てて跳ねかえり、柱を揺らしただけ。馬鹿にしおって。今度は中空で途切れた階段に腰を下ろし、憎たらしい陶器から足を引き抜こうと奮闘するがどうにもならない。見失った犬が、かすかな爪音を立てて地下室の聖堂に潜りこんでいくのが聞こえる。いまいましいブーツを脱ごうとするが、靴紐を解こうにも便器の中に手が入らない・・・

鼻のすぐ下に心地よいむずがゆさが感じられるよう防寒用バラクラヴァ帽の覗き穴の位置を直し、パニックに陥ってなるものかと決意してポインツマン氏は立ち上がるが、雨のそぼふる夜闇の中、一度引いた血の気がふたたび沸きたち、上へ下へ跳ねまわりながら百万の支線に均等に染みこんでいくのを待たねばならない。それからガランガランと片足を引きずって車へ戻る。若いメキシコの手を借りるためだ。やっこさん、電気提灯[*3]は忘れずに持ってきただろうな。

テラスハウスの通りで獲物を待ち伏せしているドクターをロジャーとジェシカが見つけたのは、これより少し前のこと。先日この場所に落ちた爆弾はちょうど住宅四軒を正確に、まるで外科手術のようにきれいに切除していた。時満たずして倒壊した家独特の柔らかい

屋外科医組合に遡る由緒正しい医師会。

2 階段の手すりの一番下の太い支柱。

3 ロウソクではなく電球の付いた、手持ちランタン。

木の匂いと、雨に打たれて光沢を減じた灰の匂いが立ちこめ、ロープが張られ、瓦礫と化した一画のすぐとなりに建つ家の戸口に見張番の男がもたれている。この男と外科医とは会話を交わしたのか、ふたりのようすからはわからない。バラクラヴァ帽の覗き窓からギョロリと見つめる、曖昧色のふたつの眼を見たとき、兜(キャスク)をかぶった中世の騎士をジェシカは思った。王様のために、これからどんなクリーチャーと戦いを演じようというのかしら。待ちうける瓦礫の山は段々に盛り上がって、こわれた後ろの壁まで、旋盤からでたらめな山型模様が削りだされて積みあがったかのような透かし細工が続く——フローリングも家具もガラスも漆喰の塊も、ひき裂かれた長い壁紙も、折れて裂け目の飛び出た小梁もみんな含んで。ひとりの女が長年かけてつくった巣がもとの藁屑にもどった。風に吹かれて闇に舞っている。残骸の中から真鍮のベッドの柱がきらりとウィンクした。そこに誰かのブラジャーが巻きつけてある。戦前のものだろう、白のレース編み、繻子(サテン)織りのついたそれがただポツンとそこにある…一瞬ジェシカは、抑えがたい目眩感覚の中で、哀れみの情のすべてがそのブラジャーへ向けてほとばしるのを感じた。岸に打ち上げられ忘れ去られた小動物でも見たかのように。ロジャーが車のトランクを開ける。二人の男が中をまさぐり、大きな粗布の袋とエーテル入りの水筒と網と犬用の笛を取りだした。だめ、泣いては。ニットの頭巾の窓からぼんやり覗く二つの眼は、わたしが涙を流したからって、〈怪物〉探しに真剣になるものでもない。だけどあの哀れな迷子のかよわい者は…夜の雨の中で所有者を待っている、もう一度部屋が閉じて自分を包んでくれるのを…

夜はこぬか雨が充ちて、ぬれた犬の匂いがする。ポインツマンは少しのあいだ、気持ちがどこかをさまよっていたようだ。「あたし、どうかしてるわね。いまはビーバーにぬく

ぬくと寄り添って、彼のパイプに火が点くのを見ているはずの時間に、こんなところで狩りのお供のギリー[4]と一緒にいるなんて。心霊学か統計学かもわからない、あなた、いったい何者なの――」

「ぬくぬくだ?」何かにつけてロジャーはわめく。「ぬくぬくするのか?」

「メキシコ」ため息混じりのドクターの声。足に便器をぶらさげ、ニットの頭巾がひしゃげている。

「こんばんは。そんな足じゃ歩きにくいでしょうに。ここまで上げて…まずドアのこっち側に入れて。こっちこっち、そう、これでいい」その状態でドアを閉め、ポインツマンの足元を挟む。今や便器がロジャーの座席を占めて、ロジャー自身は半分ジェシカの膝の上。「引っぱって、ほら、あらん限りの力を出して」

若造め、言いたい放題言いおって――ドクターはもう一方の足に体重をかけ、ぐい、ぐいっと体を揺らす。便器が前後にのたうつ。ロジャーはドアをしっかり押さえ、足の消えた先を覗きこんで詮索する。「ワセリンでもあればいいんだけど、なんか――滑るもの、待てよ! ここにいて、動かないでくださいよ。わかった、解決だ…」というが早いか、衝動的にクランクケース・プラグを取るため車の下へ。「そんな時間はないんだ、メキシコ。逃げてしまうよ、あれが逃げてしまう」とポインツマンが言うより早く。

「うん、逃げますよね」立ちあがって、ジャケットのポケットに手をつっこんで懐中電灯をいじり回しながら、「これで照らし出すんで、ネット張って構えててくださいよ。ちゃんと動けます? 犬が飛び出たとたんドタッと倒れこまれたんじゃみっともないんで」

「なんちゅうことを」ポインツマンはゴスン、ゴスンと瓦礫の山に戻っていく。「怖がら

4 「ギリー」とは、スコットランドで、富裕な主人の狩りや漁にお供する者をいう。

CamScannerでスキャン

せなきゃダメだぞ、メキシコ。ここはケニアじゃないんだ、できるだけ標準的な状態で捕まえたい」

「標準的？ 標準的にですか？」

「了解」と、ロジャーは大声を出し、懐中電灯で短・長・短の信号を送る。

「ジェンカ」と、ジェンカは小声を出し、二人の男に近づいていく。

「ここだ、ほらほら」ロジャーはなだめる。「エーテルのおいしい容器はこっちだよ」水筒を開け、地下室への入り口でそれを振って懐中電灯をつける。犬はそれを錆びついた乳母車越しに見上げる。舌はだらりと垂らし、表情は百パーセント懐疑的だ。「あらま、ヌースボム夫人じゃありませんか」いきなりロジャーの大声。水曜晩のBBCラジオ、フレッド・アレンの口調である。

「ラッシーだとても、おもってたの？」犬が答える。

足下を探りながら地下室の中へ。エーテルの臭いはかなり強い。「さあさ、すぐ終わるからね。あのオヤジ、唾液の数を数えたいだけなんだ。ほっぺたにちょっと差しこませてあげればいいの。ステキなガラス管だぜ、気にもならない。ベルがリーンって鳴ったりして、実験室っておもしろいぞ。きっと気に入るから」エーテル臭がきつすぎて、ロジャーは水筒に蓋をしようと一歩踏みだしたところで足が空隙にはまり、倒れそうになった体を支えようと手を伸ばしたら蓋が落ち、粉砕した家の底の瓦礫の中に永遠に紛れてしまった。頭上でポインツマンが叫ぶ。「スポンジだ、メキシコ、スポンジを忘れたぞ！」落ちてきた、丸く青白い、穴の凝集がポンと弾んで懐中電灯の光のなか、出たり入ったりを繰りかえす。「陽気なヤツめ」ロジャーは両手でつかみとろうとして水筒の中味をまわり中

5 日本語ではアメリカ発音の「ラジャー」で通っているフレーズ。

6 "Allen's Alley" という名のこの番組は、一九四三年にアメリカCBSで始まった。

7 英国ヨークシャーの話で、エリック・ナイトによる単行本 *Lassie Come-Home* の出版が一九四〇年、ハリウッド第一作『名犬ラッシー　家路』が一九四三年。戦後はロングランのテレビ・ドラマとして日本でも人気を博した。

に撒き散らした。懐中電灯の光でやっとスポンジをとらえると、乳母車から解せないようすの視線を向けるワン君に「いくぞ」とばかり、スポンジにぐっしょり、水筒が空になるまでエーテルを染みこませる。皮膚をつたって垂れる液がスーッと冷たい。スポンジを二つの指の間に挟み、懐中電灯でアゴの下から吸血鬼をまねた顔を照らしてヨタヨタと犬に近づく。「モーメント・オブ・トゥルース！」[8]と飛びかかったその瞬間、犬はななめに飛び退いてロジャーのわきを走りぬけ、入り口の穴に向かった。スポンジもろともロジャーが頭から突っこんだ乳母車が重みで潰れる。頭上からドクターの情けない声がぼやけて聞こえた——「逃げちまう、ロジャー、ほら急いでくれ」

「急いでって」スポンジを握ったロジャー、まるでシャツでも脱ぐようにして乳母車から這いだしながら、自分もなかなか運動能力が高いじゃないか、とか思っている。

「メキシコゥーオゥー」ドクターはほとんど泣きべそだ。

「はいよ」地下の瓦礫をずっこけながら這い上がって外に出ると、ドクターが捕獲網を高く掲げて犬に迫っている。そのタブローの上に雨が降り注いでいる。ロジャーは後ろに回って挟み撃ちを試みる。崩れずに残った壁を背に、犬は四つ足に力を込め、歯をむいた。ジェシカは途中まで足を伸ばして様子をうかがっている。両手をポケットに入れ、煙草を吸い、見つめている。

「コラッ」警備の男が叫ぶ。「おまえたち、バカッ、壁から離れろ、そいつは何の支えもなしに立ってるんだぞ！」

「シガレットお持ちじゃない？」とジェシカ。

「飛び出すぞ」ロジャーの大声。

8 「真実の瞬間」とは闘牛士がとどめを刺すときに言う決まり文句。

「おいおい、メキシコ、慌てんでくれ、たのむ」微妙なバランスで乗っている瓦礫の丘の上を、一歩ずつ確かめながらにじり寄る。梃子のしくみが崩れれば、一瞬のうちに崩落し、その犠牲者になりかねない。ふたりの男が接近する。犬はドクターとロジャーとに交互に眼を向ける、喉をふるわせてみる。追いつめられた部屋の隅の、直交する二つの壁を尻尾が規則的に叩いている。

光を持ったロジャーが後方に回ったとき、犬の脳のなんらかの回路に、光の記憶がともった。そのときも背後から襲ってきた。壮絶な爆発につれて光ったそれは、後から痛さと寒さが激しくしみる光だった。背後からの光は死のシグナル／網を持った人間が飛びかかるのは避けられる。

「スポンジ」外科医が叫ぶ。ロジャーが犬に飛びかかる——よりも一瞬早く犬はポインツマンの方向へ跳ね、そのまま道路へ向かう。ポインツマンはウウッとうなって便器のついた足を振りまわすが空振りした弾みでクルリと一回転、頭上の網がレーダーみたいに回った。鼻にエーテルをたっぷり浴びたロジャーは一歩踏みでた体をうまく整序できず、もう一回転してぶつかってきたドクターと鉢合わせして足に便器の痛打を浴びる。二人の男がもつれて倒れたその上に捕獲ネットが覆いかぶさった。裂けた梁がきしんでいる。雨にぬれた漆喰の固まりが降りおちる。ふたりの上で、支えのない壁が揺らぐ。

「そこを離れろ」見張りがどなる。だが網の中の男ふたりがもがく分だけ、壁の振幅は大きくなる。

「ああ、そうしよう」ドクターの身震い。本気なのか確かめようと、ロジャーは目を覗こうとしたけれども、バラクラヴァ帽の穴からは、白い耳と髪の毛が見えるだけ。

う。

「通りを走って行っちゃったわ」網から這いだすふたりに手を貸しながら、ジェシカが言

れ以上の破壊は引きおこさずに、どうにかジェシカのところまでたどり着いた。

動いたそのとき、壁の一部が倒れたが、幸いにも向こう側。捕獲網を被ったふたりは、そ

「転げましょう……」とロジャーがもちかけ、道路側へかろうじて二、三ヤードゴロリと

「犬の代わりは、どうするんです」

「いいから、忘れよう」

「でもまだ宵の口だから」とロジャー。

「いいのだ」ため息。「どうということはない」

ふたたび車を走らせる。運転席にロジャー、ジェシカを間に挟んで、便器をぶら下げた

ポインツマンの足が、半開きのドアから外に出ている。「これは何かの啓示かもしれん。

研究の転換をせよという意味だろうか」

ロジャーの素早い視線が走る。構うな、メキシコ。この男の口にすることを、いちいち

気にしないようにしろ。おまえの上司じゃないんだし。彼も自分も〝ホワイト・ヴィジテ

ーション〟の准将に報告する身で、その意味じゃ同等なのだ。だがロジャーは、ジェシカ

の胸を黒く包むウール地ごしに、ニットの頭にもういっぺん視線を向け、剝きだした目鼻

を見て思う——この男がほしがっているのは、おれの善意と協力だけじゃないようだ。お

れをまるごとほしがっている。実験に適した犬でもほしがるみたいに……

だったらおまえ、なんで今夜も犬さらいの手伝いなどをしているんだ。自分の中に、頭

のイカれた別人が棲んでいるのか？

「今夜はまた戻ります?[9] このご婦人を送り届けないといけないんだけど」

「いや、こちらに留まる。だがシティへ戻ってくれないか。ドクター・スペクトロと話しがあるんだ」

いま車は、横長に広がった煉瓦づくりの即興風建造物に近づいている。遠いむかしの時代ならゴシック教会建築へ結実したであろう精神がヴィクトリア朝風に変奏され、地上の混乱を抜け出て頂点におわす神のもとへ駆けのぼろうとする意志はすでになく、めざす方向の錯乱が形をなしたような建物だ。神の居場所がわからなくなり(ときには神の実在さえも疑わしく)刹那の感覚がつくるめまぐるしいネットワークは超越することなど不可能、だから建造者の意図はどこかの頂点へ収斂せず、恐怖からの逃走へと突き動かされる。単純な逃避。工場の煙と街路の糞便、窓なしの兎小屋のような家と無情な革の伝動ベルトの群れ、ネズミとハエの流れるように飛び動く執拗な影の王国——それらがその年の慈悲の可能性を告げてくる、そんな世界からの逃走が形をなしたような建造物。汚れの染みついた煉瓦の棟が不規則に伸びるこの建物は「天主の御姿の聖ヴェロニカ大腸肛門科呼吸器科病院」[10]として知られる。ここの在職者のひとりに神経科医で、パヴロフ学説の気まま な支持者であるケヴィン・スペクトロ博士がいる。

スペクトロは〈正典〉(ザ・ブック)[11]を最初に共有した七人のうちのひとりだ。これが何の本かと聞いたとしても、ポインツマンの冷笑を浴びるのがオチだろう。一週間ごとに共同所有者の間を回るこのミステリアスな〈書物〉の、今週の持ち主がスペクトロだとすると、彼のもとには時間を問わず、仲間の訪問が絶えないだろうとロジャーは察する。ポインツマンの持ち番のときは〝ホワイト・ヴィジテーション〟に深夜の訪問客が絶えなかった。ロジャ

9 メキシコとポインツマンの職場〝ホワイト・ヴィジテーション〟の所在地は、英仏海峡に面した架空の町イック・リージス。

10 St. Veronica of the True Image for Colonic and Respiratory Diseases ＝聖ヴェロニカは、十字架を背負ってゴルゴタの丘へと歩くキリストへ、ヴェールを差し出した女性。キリストが顔を拭くと、その布にキリストの

ーは彼らが廊下で行う策謀的な話を聞いたし、舞踏用のパンプスが大理石を踏む気どった靴音も聞いた。遠ざかっても消えてゆかない足音は、眠りにとっては破壊的で、なかでもひときわポインツマンの声と足取りは耳についた。足に便器を巻きつけた今はどんな音を立てるのだろう。

　ドクターは脇の入口で車を降りて、門を包む闇にまみれる。彼の消えたあとに、入口の横木(リンテル)にかかる判読できない金属の文字の線を、雨が伝わりおちる。

　ロジャーとジェシカは南へ向かう。ダッシュボードの上の明かりが暖かい。雨空を掻くサーチライト。細身のジャガーが震えるように路をゆく。眠りの中へただよっていくジェシカ。身を伏せたら革のシートがキュッと音を立てた。窓をつたう雨のしずくをワイパーが規則的に押しのける。ワープする雨滴がきらめく。もう二時を回った。家(ホーム)の時間だ。

顔が映ったという逸話が、「真の御姿 true image」の名の由来。

11 イワン・パヴロフの『条件反射学・第二巻——条件反射と精神医学』。生理学者パヴロフが精神の探究へ踏みだしたその巻は、一九四〇年、著者の死の四年後に刊行された。

CamScannerでスキャン

□□□□□□□

聖ヴェロニカ病院の、戦争性神経症の病棟を出てすぐのホールに腰を下ろし談義するふたりの男のいつもの夜。高圧滅菌の釜の中でスチールの骨がチンチンと繊細な音を立てている。たぎる蒸気が雁首型のランプの下を流れ、ときたまギラリと光ると、手振りをしている男の腕の影が短刀のように瞬時に伸びる。ふたつの顔は、しかしたいていは夜の光輪の中におとなしく収まっている。

病棟の暗がりは、苦痛のファイル・キャビネットとでも言ったらいいのか。半開きのフォルダのようなベッドから聞こえる叫びは、冷たい金属を打ちつける音のよう。ケヴィン・スペクトロは、今夜もまた十回ほど、注射器を手にして闇の中へ入ってゆき〝キツネ〟たちを鎮静するのだろう（患者のことを彼はまとめて〝キツネ〟と呼んだ[*1]——キツネのことを一度も考えずに建物を三べん回れたらどんな症状も治せると彼は言う）。スペクトロが出かけたあと、ひとり残ったポインツマンは、話の続きが始まるまで、薄くらがりですり切れそうな本の背表紙の金文字のほのかなきらめきとともに過ごすのだろう。それもまた悪くない。コーヒー滓のまわりをゴキブリが取り囲む。窓の外の雨樋を冬の雨が駆

1 「オオカミのことを一度も考えずに建物を三べん回れたらしゃっくりは治る」をまねた言い回し。

けおちる。
「あんたの顔色は相変わらずひどいね」
「ああ、あの老いぼれのせいだ。また提案を却下された。毎日が闘いだよ、スペクトロ、私は・・・」下を向いてシャツで拭う眼鏡に口をとがらせる。「あのプディング爺さんには、人知れず狡猾なところがあってさ、毎度毎度・・・よぼよぼのサプライズを投げつけてくれるんだ」
「齢だからねえ・・・」
「いや、耄碌っていうのなら太刀打ちできる。しかしアイツは極め付きの――悪党だぞ。夜な夜な陰謀に目を輝かせてる」
「齢を言ったのは、老いぼれという意味ではなく、事にのぞむ位置取りのことだよ。ポインツマン、あんたはまだ、ひとつのことで博打する歳には達していない。彼のように一か八かってわけにいかんのさ。あの年齢の老人を診たことがあるなら、あんたも知ってるだろ。ああいう、妙に自己満悦の強いところ・・・」
ポインツマン自身の〝キツネ〟は街の中で、戦利品として待っている。この建物内のこの小さなオフィス・スペースは、神託の洞窟なのだ。蒸気が垂れこめ、奥の暗闇からシビル[*2]の叫声のようなものが聞こえる・・・〈闇の王のアブリアクション〉[*3]だ・・・
「ポインツマン、訊かれたので答えるが、やっぱりまずいんじゃないかな、これは」
「なぜだい」沈黙。「人倫にもとるからかい?」
「人倫? ここにそんなもんがあるかね?」さっと腕を差しのべて病棟の出口を指す動きが、ほとんどファシストの敬礼を思わせる。「私もね、なんとか正当化できないか考えて

2 古代東方の女預言者。

3 Abreaction は「解除反応」とも「病的観念除去」とも訳される。第一次大戦の体験に由来する神経症の治療に関して、C・G・ユングが発表した試論に登場した言葉で、「トラウマ的経験について語り、あるいはそれを再体験することで、抑圧された感情的反応と意識的に向かい合うようにするメソッド」（ユング自身はほどなく、病因論としてのトラウマの考え方自体の有効性を疑うようになった）。スペクトロの勤務する聖ヴェロニカ病院は、爆撃のトラウマを抱えた患者を収容していて、繰りかえされるロケットの襲撃が、〈闇の王〉によるアブリアクションとなっている。

CamScannerでスキャン

るんだ、実験としてね。しかし、うまくない。相手が特定のひとりというのは」

「しかしスロースロップだぞ。ヤツのことは知ってるだろう。あのメキシコでさえ変な考えに……いや、例の戯言だ。プリコグニション、サイコキネシス。[4] そんなやつらに構ってはおられんがな。……しかし、考えてみてくれ、もしきみがある病変の、またとない症例を分析する機会に恵まれたら……その、完璧なメカニズムと向かい合えるとしたら……」

ある晩スペクトロはたずねてみた。「あの男が、ラスロ・ヤンフの手がけた子でなかったとしたら、ポインツマン、あんた、やはりそれだけ燃えますかね？」

「もちろんだとも」

「ふむ」

爆発の後から落下してくるミサイルを想像する。時間の逆転。時の一部が切りとられ……数フィート分のフィルムが逆回り……まずロケットの爆裂(ブラスト)が、音より早くくる――そしてそこから落下の轟音が伸びていく。すでに燃えているおのれの死骸に追いすがるかのような落下音……空のゴースト……

パヴロフは彼のいわゆる″対極の観念″[5] に魅せられていた。脳髄のどこかに、なんらかの細胞(ニューロン)の集団が生じ、それらが快楽／苦痛、明るい／暗い、支配／服従の分別に寄与している……ところが、なんらかの方法によって――飢えかトラウマかショックないしは去勢によって、あるいは彼らの覚醒した自己の彼方、〈均衡相〉と〈逆説相〉のさらに彼方にある〈超周辺相〉において――被験者の対立の観念を弱めさせていくと、突然、パラノイド的症状が生じるのだ。支配欲を募らせながら自分を奴隷と感じたり、愛を希求しつつ世界の無関心さに苦しんだり。ジャネに宛てた手紙でパヴロフはこう言っている。「対極概

4 「予知能力」と「念力での物体移動」。スロースロップの特異能力に関する心霊研究者の説明をあげつらっている。

5 英語では ideas of the opposite。パヴロフの生理学的心理学における生物的″思考″の基礎。

CamScannerでスキャン

念の弱体化が生じるその根本は、まさにこの超逆説相にあります」と。[6] 私らの狂人も、パラノイドの人間も、強迫行動も精神分裂者も、道徳的痴愚者も——

スペクトロが頭を振る。「反応が刺激に先行するだなんて」

「そうは言っとらんよ。考えりゃわかる。ヤツは実際、落ちてくるのを感じることができるんだ。それも条件反射でな。今この瞬間、空の中にある何かに対して反応しているんだ。われわれの粗雑な精神には感知不可能なものを、スロースロップはちゃんとつかんでるんだよ」

「しかしそうだとしたら、知覚外の出来事にならんか」

「〝見過ごされている感覚の合図（キュー）〟と言ってみてはどうだろうね。もとより存在し、観察も可能なのだが、誰も気づいていないという。われわれの実験ではしばしばこういうことが起こる……M・K・ペトロヴァだったかな[7]……この研究に最初からかかわっていた女性のひとりで、彼女が最初に指摘したことだが……ラボに連れていくと（とりわけわれわれの神経症生成実験のラボでは顕著だ）もうそれだけで……試験台や、技術者の姿、通りかかる影、部屋に吹きこむ風、なにが原因なのか特定はできなくても、ほんの些細な刺激で反応が起こってしまう——超周辺的（トランスマージナル）な状態に入ってしまうというんだ。

スロースロップのケースも、同じようには考えられんだろうか。街に出ただけで、あたりのようすが引き金となる——戦争そのものが一種のラボになっている可能性だよ。V2が落ちるときは、最初に爆発が来て落下の音はあとからだろ……刺激の順番がふつうと逆転している……それで、アイツの場合はどこかの角を曲がってどこかの通りに出た瞬間、特になぜというわけでもなく、突然感じる……」

6 フランスの心理学者で精神科医のピエール・ジャネは、トラウマの観念の提唱者。ユングの師のひとり。ジャネが発表した「被迫害感情」についての論文に対してパヴロフは公開の質問状を出し、それがゆくゆくは『条件反射学・第二巻』の第五十四章をなす。

7 パヴロフ研究所の共同研究者。犬を昏睡状態に陥らせた〝神経症生成実験〟で知られる。

CamScannerでスキャン

ただよってくる沈黙に、夢のうめきや、ロケットに被弾した隣家の苦痛のうめきが織りこまれている。〈闇の王〉の子供たちの声が。薬物臭のただよう病棟のよどんだ空気の上に垂れかかる。〈支配者〉の慈悲にすがる声たち——早かれおそかれみんなアブリアクションを受けるのだ。霜の降りる、掘りかえされたシティ全域で…

…ふたたび床は巨大なリフトとなって、いきなりきみを天井へ運ぶ。壁は外に向かって飛びちり、煉瓦とモルタルが降り注ぐなか、きみの体を突然の麻痺が襲う、死がきみを包み、意識を奪って、どうしたんだ気を失っていたのか気がついたら彼女はいなくて周り中火がボウボウ燃えて頭が煙でいっぱいだ…きみの動脈がむきだしになって血を吹いている、ベッドの半分は雪まみれになった屋根のスレート、スクリーンのキッスが途中で切れて、何かにはさまったまま動けないきみは苦痛の中でしわくちゃの煙草の箱を二時間見つめていた。左右の列から泣き声が聞こえるが動けない…部屋を満たす突然の明かり、耐えがたい静けさ、朝の陽光より明るい照明、ガーゼと化したような毛布をつらぬく、影ひとつできない、言葉にできない午前二時の夜明け…そして…

…超周辺相へのジャンプ——心の辺境の向こうへの降伏。対極の観念が崩れ、意味の対照が失われる。(スロースロップの場合も、あれは、本当にロケットの爆裂が問題なのか、それとも問題はこの極性喪失にあるのでは? 今夜の病棟を満たしている、神経症的混乱と同じでは?) いったい何度追体験したら消えていくのか、爆裂を何度生きなおしたら、この恐怖の想い出を手放すのか。でも手放してしまったら、それっきり二度と…ふたたび自分に戻ってこられる保証が、先生、あるんですか? 答えはきまって、信頼しなきゃ、だが天からロケットが降ってくるようになってからそんな答えはウツロに、猿回

しのように響くだけ——あなた方を信用する？——両者ともに知っている…スペクトロは詐欺師になった気がするが、やめはしない…その痛みが本物であるというそれだけの理由から…

そしてとうとう手放してしまった人たち——それぞれのカタルシスから新しい子供たちが生まれでる、その〈間〉の一拍のパルスにあっては苦痛もない、自我もない…まっさらな書字板（タブレット）に、あらたな書き込みがいま始まる、冬の陰鬱さの中にチョークをつかんだ手が上がる。支給品の毛布の下で震える、クスリの回った、人間の羊皮紙たち。彼らを浸した涙とハナミズ、その悲しみはあまりにリアル。自己のあまりに深いところから引きちぎられてきたものだから、自分自身のものとも思えず不意をつかれた気持になる…

なんとかわいい子供たちだ。ポインツマンは激しく劣情する。相手の無垢を利用して、彼らの上に自分自身の面白くもない世俗の言葉を書きつけたい、その欲望で彼の淡褐色のパンツの中は弾けそうだ。これは彼自身のレアールポリティーク[8]——それが実現するという甘美な思いに、魂の前立腺をじんめりと疼かせながら、いままで一度も…鉄製の寝台に一列に並んで寝ている。なんと誘惑的なんだ。純白のシーツ、なす術もなくエロティックに横たわる愛しの子供たち…

聖ヴェロニカ前のダウンタウンのバス発着場、そこは子供たちの交差路だ（このニセ寄木細工の空間に彼らは新たに到来する。なすりつけられた真っくろけのチューインガム、夜中の吐きもどしが作るつややかな皮膜は淡黄色で、神々の体液のように透きとおっている。誰にも読まれぬまま、鎌形にひき裂かれた新聞紙や宣伝ビラ、古びた鼻くそ、ドアが開くと弱々しく吹きこむ黒ずんだ煤ぼこり…）

8 ドイツ語の Real-politik は、ビスマルクの時代に広まった言葉で、選挙民の夢や理想ではなく、現実的基盤を見据えて国益や領土の拡大を図ろうとする政治を言う。

CamScannerでスキャン

こんな場所であんたも早朝まで待っていたことがある。室内が次第に白んでくるのとあんたは同期していて、バスの到着時刻だって暗記していた――虚ろなハートで諳んじることができた。子供たちがどこから逃げてきたのかも、この街中では誰も迎えに来るものなどいないことも。あんたは優しさを印象づける。自分の心の空虚さを彼らが見すかしているのかどうか、それはあんたにはわからない。子供たちはまだあんたの目を覗きこもうとはしない。ほっそりした脚がいつも動き回っている。ニットのストッキングは（ゴムがぜんぶ戦争に借りだされて）いつも下がっている。それもまた可愛い――小さな踵がひっきりなしにベンチの下のキャンバス・バッグやすり切れた旅行カバンを蹴っている。天井のスピーカーが発着情報をまず英語で、次にどこか亡命者の国の言葉で伝える。今夜の子は長旅の女の子だ。睡眠不足の目を赤く腫らし、フロック・ドレスもシワくちゃだ。外套は枕がわりになった。あんたはその子の疲労を感じる。その子の背後に拡がる、英国の眠れる国土の果てしなさを感じる。一瞬あんたは本当に我を捨て、欲を捨て、性も忘れ・・・その子の守り手になりたいと思う。それだけを思う。そう、あんたが〈旅の支援者（トラベラーズ・エイド）〉になる。

あんたの背後で、軍服を着た男たちの長い夜の列がおもむろに、ほとんど無言でAWOL（エイウォル）バッグ[9]を蹴りながら出口のドアに向かう。ドアはベージュに塗ってあるが、何世代もの別れの手垢でその端に釣り鐘形の、色濃い模様がくっきりできた。ドアは時々しか開かず、冷気を部屋に入れ一握りの兵隊を外に出すとまた閉まる。運転手か車掌か、ドアのところで切符、パス、旅行許可証をチェックしている。男たちは一人ひとり、漆黒の直方体の中へ踏みだしては消えていく。行ってしまう、戦争に引っぱられて。後ろの男がもう切符を差しだした。外で低くうなるエンジン音は、移送の手段というよりは、その場に固定され

9 軍隊を無断離隊（Absent Without Leave＝AWOL）した男が担ぐようなバッグあるいはズタ袋。

た機械の発する音のようだ。きわめて低周波の地震波のような振動が、冷気と一緒に入りこんで——部屋のなかの明るさから出たら何も見えないぞ、闇に殴りつけられたようになるぞと脅しをかける。……陸軍兵、水兵、海兵、航空兵。一人またひとり去ってゆく。煙草を咥える者は一瞬の時間稼ぎ——石炭のような火が弱々しいオレンジの弧を一、二度描き、そしてついえる。あんたは腰を下ろし、半分体をひねって出てゆく彼らを見つめる。うす汚れた身なりで眠そうにしている愛しの子供らがブックサ言いだすのを見つめる。だが無駄だ——果てしなく続く大量の出発を抱えこんだ白い明かりのフレームの中で、欲情したりするのがおかしい。そのドアから今夜だけで千人の子供らが出てゆくというのに、あんたのもとに来る子がひとりでもいる夜がどれだけある？　あんたの精液の沁みたスプリング・ベッドまで辿りつく子が。ガス工場をわたって隙間風が吹きこむ、湿ったコーヒーに生えたカビが匂い、ネコの糞が匂う部屋へだよ。隅に白っぽいポケットつきのセーターが雑に積んであったか——背をかがめたり、腕を広げたり。この言葉なく、時を刻むように進行する列……何千もがただ出て行く……本流に逆らって迷いこんでくるのは、軌道を外れた迷子の粒子だけだ。

かくも悶々とした挙げ句にポインツマンの手に入るのが、一匹のタコだけだとは。その通り——巨大な、ホラー映画の風体をしたタコ。名はグリゴリ。色はグレイ、ぬるぬるして、けっしてじっとせず、いまもイック・リージス[*10]の突堤わきに仮設した囲いの中で、スローモーな震動をしている……その日英仏海峡から吹きつける風はすさまじく、かのバラクラヴァ帽を被ったポインツマンの目は凍えそう、ドクター・ポルキェヴィッチ[*11]も厚手の外套の襟を立て、毛皮の帽子を耳に下ろしている。もう何時間もこの生き物にかかりきり

10 ブリテン島南岸にあるとされる架空の地名で"ホワイト・ヴィジテーション"の所在地。egregious（とんでもない）との語呂合わせか。

11 第二部、第二セクションの冒頭に登場する。

CamScannerでスキャン

で、ふたりとも息まで魚臭い。このクリーチャー、ポインツマンはいったい何に使う腹なのだ。

その答えがすでに、発生と成長を始めた。先程まで丸い胞胚にすぎなかった計画は、たちまちにして折れ曲り、分化する・・・

あの晩——たしかにあの晩だった——スペクトロはこう言った。「まわりがイヌばかりなもんで、あんたはそういう考えを抱くんじゃないかな。人間だけ対象にして研究していたら・・・」

「そう言うなら、一人か二人、わたしに献上してくれてもいいじゃないか。そんな、冗談みたいな大ダコの代わりに」ふたりの医師が見つめ合う。

「ヒトで、何を始めるのか気になるな」

「わたしもだ」

「タコにしときなさいよ」それは「スロースロップのことは忘れろ」という意味なのか。

一瞬の緊張。

するとポインツマンが大声で笑いだした。言葉を濁すことが身の保全につながるこの職業で、何度となく急場を救ってくれた笑い声だ。「私はいつも、動物を飼うように言われてばかりなんだ」彼が言っているのは、何年も前に（すでに去った）同僚から、実験室の外でも犬を飼うように勧められたときのことだ。そうすれば、もっと人間的な、暖かみが出てくるだろうと言われた。ポインツマンは試してみた。懸命に努力した。それはグロスターという名のスプリンガー・スパニエルで、人好きのするヤツだとは思ったのだが、試みは一ヶ月ももたなかった。そいつが逆向きの行動がとれないことが、結局どうしても

我慢ならなくなった。ドアを開けて、雨のなかを春の虫の中へ出ていくことはするくせに、そのドアを閉められない。ゴミ箱をひっくり返し、床に嘔吐をするくせに、その始末ができない。こんな生き物とどうして一緒に暮らせるだろう。

「タコはね」スペクトロがささやく、「外科施術の最中もおとなしいし、脳組織を大量に切除しても生きていられるし、獲物に対する無条件反射も非常に頼りになる。カニを見せたら一発だね。触手がパッと伸びて急所を突く。見事な毒殺と食餌の行動だよ。しかも、ポインツマン、こいつは吠えない」

「それは助かるが、だめだ……水槽、ポンプ、フィルター、餌だって特別のものが必要だろ……ケンブリッジだったら通る話かもしれないが、ここの連中はみんなシケていてさ。ルントシュテットの攻勢[*12]のせいだろ、そうにきまってる。……PWE[*13]は、直ちに戦術に役立つ研究でないと一切助成しないという通達を出してきた。それが先週のことだ。いやいや、タコを使うということは、あまりに手が込みすぎる。プディングも乗らんだろう。あの誇大妄想癖の男すらね」

「タコに教えられることは限りないんだがね」

「スペクトロ、きみは悪魔じゃないだろう」と言って顔を近づけ、「違うか？　われわれは確実な刺激が必要なんだ。スロースロップ計画というのは、全体が聴覚的でなくてはならない。逆転が見られるのは聴覚なんだ。……わたしだってタコの脳髄くらいは見てるよ。視覚野に大きな葉(ローブ)があることに気づかぬはずはないじゃないか、え？　きみは視覚型の生物を押しつけているんだよ。ロケットが落ちてくるとき、いったい何が見えるというんだね」

12　数日前（十二月十六日）、アルデンヌの森で始まったドイツ軍の突然の攻勢。「バルジの戦い」の名で知られる。

13　政治戦執行部。45ページ註3参照。

「空のかがやき」
「何だって?」
「ぼうっと燃える赤い玉だ。それが流星のように落ちてくる」
「たわけたことを」
「この間の晩、グウェンヒドウィが見たそうだよ。デットフォード[*14]上空で」
「わたしが欲しいのは」ランプのかがやきの中心へと体を傾げたポインツマンの白い顔面は彼の声より弱々しい。低い声は机上に直立する注射針の、燃える尖塔をよぎる——
「わたしに何が必要かって、そりゃあ、イヌじゃないし、タコでもない。きみのキツネだよ。おい、一体でいい、きみのキツネを献上してくれ……」

14 ロンドンの南東、グリニッジのすぐ西に隣接するテムズ河南岸の地区。医者仲間のグウェンヒドウィは、この貧しい地区の患者を診ている。

□□□□□□□

なにものだろう、〈煙〉の都をうろついて、痩せた少女らをさらってゆくのは。人形のような白くスベスベした肌をもつ少女たちをひとつかみにするのは。哀れな泣き声・・・人形の哀しみに充ちた声・・・そのひとりの顔が急に大写しになって、バサリ！　轟音とともに睫毛のこわばったクリーム色のまぶたが閉じる。人形の頭の中で長く反響していた鉛のおもりがゴロリと倒れ、同時にジェシカの瞼が飛ぶように開いた。吹き飛んで走りさっていく爆風の、その最後の残響を、覚醒してきた意識がキャッチする。厳粛で、鋭い、冬のサウンド。・・・ロジャーも一瞬目をさましたが「キチガイ沙汰だ」と罵るなり、眠りに戻っていってしまう。

　ジェシカの腕が伸びる。暗闇をまさぐる手が、カチカチいう時計にふれる。ケバの剝げたパンダのマイケルのフラシ天のお腹にも。空の牛乳壜にも――そこに一本ささっているトウダイグサの赤い花は、一マイル先の家の庭から失敬してきた。煙草が、あると思った場所になくて、上掛けから半分身を乗りだした彼女は、ふたつの世界の中間で宙吊り状態、凍てつく部屋に体操競技の緊張をつくる。仕方ないわ・・・温かな巣にロジャーを残し、ざ

CamScannerでスキャン

ちついた暗闇の中を震えながら歩を進める。冷たく引き締まった床張り材は、裸足で歩くと、水のようにつるつるだ。煙草は居間の暖炉の前、クッションの間にあった。ロジャーの脱いだ服が散らばっている。一服ふうっと吐いて、煙のしみる片目をつぶって、ロジャーのズボンをたたみ、シャツをハンガーに掛け、それから窓辺に進んで暗幕をめくって、窓にこびりついた霜を通して外を眺める。地面の雪に、キツネやウサギや、飼い主とはぐれて久しい犬や冬鳥たちの足跡はあっても、人間の跡はない。ガランとした雪の運河が、縫うようにして木立の中へ消えていく。その先にある町の名はいまだに知らない。彼女は煙草の箱を握った手をカップ状に丸くした。灯火管制は何週間も前に解かれ、記憶も薄れてどこか遠い時代の遠い国の出来事だったような感じなのに、それでも彼女は灯りを外へ漏らさぬ気配りを欠かさない。深夜のトラックが北へ南へと急ぎ、飛行機が夜空に充ちて、東方へ吸いとられるように飛びさっていったあとは、静けさのようなものが訪れる。

　ふたりでホテルに行くことなどできただろうか——空爆避難の用紙に書きこみ、カメラや双眼鏡がないか身体をまさぐられることに耐えて？　ロジャーの円弧とジェシカの円弧の交点にあるこの家、この町は、ドイツ軍のロケット弾に対しても、イギリスの条例に対しても、まったくの丸腰だ……危険な感じはないのだが、それでもまわりに人がいてくれたらと願わずにはいられない。ここがほんとうに村だったら、自分の村だったらいいのに、と。サーチライトが夜空を照らしつづけるのはかまわない、夜明けの空に丸々とした防空気球が浮かんでいてもいい——あらゆるものが、遠くの爆発でさえ、破壊の目的がないのなら……誰も死ぬ必要がないのなら……いまのままで構わない……ただの興奮、ただの音と光、夏の日の嵐の襲来（日々の暮らしをエキサイティングなものにする……）、やさし

い雷鳴、そうであってくれたらいいのに。

ジェシカはふわり幽体離脱して、闇夜を見つめる自分を見おろしている。翼を開いて宙に浮かぶ。肩当ての白さと夜着のサテンの光沢となって。ここにさえ落ちてこなければ、近すぎなければ大丈夫、安全は保たれる。ふたりを隠す銀青色の茎は夜になると雲にとどき雲を掃く。緑と褐色に身を包んだ夕暮れの一団、石のような目で遠くを見つめる兵士らが、コンボイをなして前線に向かっていくが、その高貴な運命もふたりには、不思議なほど無関係に響くのだった……ばか、戦争だぞ、わかってるのか？　それは知ってるけど——姉のお下がりのパジャマを着たジェシカと、素っぱだかで眠っているロジャーにとって、戦争なんて、ないも同然——

戦争がふたりに触れてくるまでは。空から落ちてくるまでは。前の飛行爆弾（V‐1）は、逃げる時間を与えてくれた。でもロケットはだめ。近づくのが聞こえる前に落ちている。まるで聖書か、北国の妖精物語みたいに不思議な話。だけど、これが〈戦争（ザ・ウォー）〉なのかしら。毎日ラジオが流している善と悪のたたかいとは違うでしょ。なのにこれが、理由もないまま、ただ続いていくだけじゃなく……

ロジャーはジェシカに統計的に見たV爆弾について説明しようとしたことがある。上空から天使の目で見たイングランドの地図上での分布と、地上で現実に生きる者にとっての被弾しやすさとの違いを。彼女はほとんど理解した。彼の示したポアソン方程式も理解の一歩手前までこぎつけた。が、両者をひとつに結び合わせることができない——静けさの中に身を押しこめた自分自身の毎日を、純粋な数値の横に置き、その二つを同時に視界に入れようとすると、どこかが必ず抜けおちたり、余計なものが混入してしまう。

CamScannerでスキャン

「ロジャー、あなたの方程式はどうして天使だけのものなの。地上にいる私たちには、どうして何もできないわけ？　安全な場所を見つけることができるような、わたしたちのための方程式があってもいいのに」

「どうして、僕のまわりにいる人間は」今日もロジャーは、いつものエゴを振りまわす、「どいつもこいつも統計音痴なんだ。逃れる道はないんだよ。集中攻撃の平均密度が一定である限りはね。ポインツマンなんか、そんなこともわからないんだぜ」

実際、ロンドンに降るロケットは、教科書のポアソン方程式どおりの分布を見せていた。次々とデータが入ってくるにつれ、ロジャーの様相はますます預言者らしくなる。廊下で会う心霊セクションの連中は、通りすぎる彼の後を目で追った。予知してるわけじゃないんだ、と、カフェテリアかどこかで演説でもしたい気分になる……僕は自分を自分以上の存在に見せたりしてはいないでしょ。誰でも知ってる方程式に、数値を入れてるだけなんですよ。誰だって、本を見れば、自分でできることなのに……

いまロジャーの小さな書き物机に広がる、うすぼんやりと光る地図は、冬のサセックス[*1]とは別の景色への覗き窓。名前が書きこまれ、蜘蛛の巣のように街路が這う、ロンドンのインクの亡霊。五七六個に分割されたマス目の一個は、四分の一キロ四方で、ロケット弾の攻撃を受けたところは赤マルがついている。ポアソン方程式にしたがえば、任意の数の被弾集合に対して、一発も落ちていないマス目の数が予測できる。一発、二発、三発と、落ちたマス目の数もわかる。[*2]

輪っかの上の三角フラスコが泡だつ。ガラスの内側では上昇する対流を、ブルーの光が乾いた音を立てながら練りなおす。古いぼろぼろの教科書や数学論文が机の上や床に散ら

1　〝ホワイト・ヴィジテーション〟の位置する、海峡に面した州。

2　縦二四マス、横二四マス、全部で五七六の区画に全体としてたとえば一〇〇発、五〇〇発、一〇〇〇発のロケットがランダムに降ったとしたとき、それぞれのケースで0度、1度、2度、3度……被弾する区画の標準的な数を、公式に当てはめて求めることができるということ。

3　一九〇二年に初版以来改訂を重ねた、ケン

ばっている。ロジャーがむかし使ったホイッタカー&ワトソン著の解析の教科書[3]の下からジェシカのスナップ写真がのぞいている。白髪の増えたパヴロフ派心理学者ポインツマンは、朝になると強ばった足を運んで、針のように細い体を実験室へ運ぶ——頬に穴をあけられた犬が、冬銀色の唾液を管からあふれさせ、蠟引きのカップや目盛りつきの試験管にそれを溜めて待つところへ。途中、メキシコの部屋の開いたドアのそばで足を止めた。戸口の向こうの空気が、煙草の煙で青い。凍えるような早朝の勤務の時間に吸いなおしたシケモクも混じった、そのムッとする空気の中へ入っていくのが、ポインツマンの日課だ。きょうもまた、朝の一杯と向かいあう。

自分たちのつながりが傍目から見てひどく奇異に映るだろうという自覚は双方にある。仮に〝反ポインツマン〟なる者が存在するとすれば、ロジャー・メキシコこそがそれだろう。この男が、心霊研究になびいているわけでないことは、ポインツマンも認めている。この若い統計学者が信じているのは、数(ナンバー)と方法(メソッド)であって、テーブル叩きでも、ご都合主義の理論でもない。だが、0と1、非在と存在とをつなぐ領域の中から、ポインツマンが把握できるのは0か1かに限られる。その両端のあいだを生きるという、メキシコの真似はできない。師と仰ぐI・P・パヴロフ同様、ポインツマンは大脳皮質を、小さなオンとオフとがモザイク状になったものとしてとらえている。常に明るく活発に動いている部分と、暗黒に抑制される部分とがあって、その明と暗とをくっきり分かつ輪郭は、変化しつづけてはいる。が、各点がとりうるのは、二つの状態のどちらかだ。覚醒か眠りか。イチかゼロか。[4]〝加重(サメーション)〟〝転位(トランジション)〟〝放散(イラディエーション)〟〝集中(コンセントレーション)〟〝逆誘導(レシプロカル・インダクション)[5]〟といったパヴロフ的な脳のメカニズムはすべて、安定した二点の存在を前提としている。ところがメキシコ

ケンブリッジ大学伝統の数学のテクスト。

4　「転轍手」の名の通り、ポインツマンは、AかBか、オンかオフという、either/or の思考の体現者として描かれる。

5　条件反射に関する長年の実験研究を二十三章の講義にまとめたパヴロフの著書『大脳半球の働きについての講義』(一九二七)は、英語圏では同年オックスフォード大学出版局から出た、G・V・アンレップ訳 *Conditioned Reflexes* が定本となっている。日本では一九三七年に林髞訳が出たが、一九七五年に川村浩訳『大脳半球の働きについて——条件反射学』が岩波文庫から出版された。本訳書の用語は川村訳による。

は、ゼロとイチのあいだの領域を有しているのだ。ポインツマンには信じられそうにない中間項、確率の世界である。メキシコが数え終えた時点で、ひとつのマス目に一度当たる確率は0.37、二度当たる確率は0.17なのだそうだ…

「どうやっても…わからないのかね」白衣の内側に縫いつけた隠し煙草のポケットからキノリノス・オリエントを一本抜いて差しだしながらポインツマンがたずねる。「この地図を見て、どの場所がもっとも攻撃を受けにくい安全な場所か」

「だめです」

「だって、きみ――」

「どのマス目も危険は同じ。クラスターができてはいないでしょ。平均密度は一定になってますよ」

地図を見れば言われた通りだ。典型的なポアソン分布が、静かに、きちんと、マス目の上に広がっているだけ。データは予期される形に向かって積み上がっている。

「だが、すでに何度も爆撃されたマス目があるだろう、つまり――」

「残念ですけど、それ、〝モンテカルロの誤謬〟って言うんですよ。あるマス目の中にすでにどれほど多く落ちていてもね、落ちる確率に変化は出ない。ある着弾が別の着弾に影響を与えることはない。爆弾は犬とは違うんです。お互い同士、リンクも記憶も条件づけも存在しないの」

これを言われたら、パヴロフ信奉者は立つ瀬がない。高邁でひとの気持ちを考えないのはメキシコらしい。それともわざと辛辣なことを言っているのか。ロケット弾相互の間に、本当に何の関連もないのだとしたら――反射のカーブも、負誘導の法則もないのだとした

ら……いったい。……毎朝恒例のポインツマンのメキシコ訪問は、痛みを伴う外科の受診にも似ている。相手の、まだあどけない顔つきと、学生っぽいからかい調子にだんだん怖じ気づいているものの、この訪問はやめてはならない。無制御（ランダムネス）と恐怖の象徴と、あんなに無邪気に戯れることができるのはどうしてだ。子供のようだ。おそらく自分でも気づいていないのだ、遊びの中で、歴史という優雅なつながりを破損し、因果律の概念そのものを危険にさらしているということに。メキシコと同世代の連中がみんなそんなふうだったら、戦後の時代はどうなってしまうのか。その場その場のバラバラな〝出来事〟の集合？　因果の連鎖も何もない？　それは歴史の終焉なのか？

「ローマ人はね」ロジャーが牧師のポール・ドゥ・ラ・ニュイ[*6]と一緒に飲んだくれていたときのこと。いや、酔っぱらっていたのは牧師だけだったか――「古代ローマの祭司たちは、道にふるいを置いて、その目からどんな草が出てくるかをじっと見守ってたんだってよ」

　ロジャーはすぐに話のつながりをキャッチした。「それって」あちこちポケットをまさぐって、ちくしょう、なんで、おっと、これだ――「ポアソン分布になるのかどうか……えーとですね」

「メキシコ」身を乗りだしてきた牧師の顔には敵意がありありだ。「ふるいから出てきた草は病人を治すために使われたんだ。ふるいってのは、彼らにとっちゃ、聖なる道具だったわけだよ。きみがロンドンに被せているふるいだがね、あれは何のためなんだい。死の網目を通って出てくるものをどう使うつもりなんだ」

「え、何の話ですか」ただの数式でしかないのに……

6　「夜のポール（パウロ）」とも「アンニュイのポール」とも読める。

CamScannerでスキャン

ほんとうは自分の話が他人に通じることを望んでいる。ロジャーの気持ちがジェシカにはわかった。他人に理解してもらえないとき、ロジャーの顔は実際くもって見えるのだ。ちょうど列車のうす汚れた窓ガラスを通して見たみたいに、ぼんやりした銀色の膜がふたりの間に割りこんで、彼を遠ざけ、その孤独感を薄めてしまう。出会ったときもそうだった。身を乗りだしてジャガーのドアを開けたとき、あたしが本当に乗りこむだなんて、これっぽっちも思ってなかった。彼の孤独が見えた気がした。あの顔にも、歯で爪をかみ切った赤い両手の間にも・・・

「それってフェアじゃないわ」

「この上なくフェアだね」ロジャーは皮肉のモードだ。ジェシカには少年のように見える。「みんな平等なのさ。命中する確率[*7]は変わらない。ロケットの目にはすべて平等だよ」

それを聞いて彼女はフェイ・レイの顔をしてみせる。目をまんまるくして、叫びださんばかりに赤い口を大きくあける。彼も笑いださずにいられない。「よせよ」

「ときどきね・・・」だがジェシカは何を言いたいのだろう？　いつも愛すべき男でいて？　あたしを求めて？　天使の目で空から見てるのはやめて？　地獄を見たこともないくせに堕(お)ちた天使のふりしないで、って言いたいのか？

「チープなニヒリズム」と、プレンティス大尉はそれを名づけた。ある日〝ホワイト・ヴィジテーション〟の近く、凍った池のそばでのこと。[*8]ロジャーは向こうで氷柱(つらら)をしゃぶったり、仰向けになって両腕を動かし雪上の天使を描いて遊んでいた。

「それは、ロジャーが代価を払ってないっていう意味かしら・・・」ジェシカが視線を上げる。少しずつ見上げていく。風焼けした〝海賊(パイレート)〟の顔は空まで続いているようだった。そ

7　一九三三年のオリジナル版『キング・コング』（メリアン・クーパー監督）の主演女優。

8　SOE直属の工作員プレンティスは、英仏海峡に面した〝ホワイト・ヴィジテーション〟

のつつましいグレイの瞳が、やっと彼女自身の髪に隠れた。パイレートはロジャーの友達だけど、ロジャーと違って戦争と戯れたり、戦争を出し抜こうとしたり、そんなダンシング・シューズでやる戦争なんてまるで通じない人みたいだけど——その必要もないわね、と彼女は思う。だってもう、ちょっと気が多すぎかしら・・・でもマジじゃないから、ただ彼のこの眼、何を考えているのかまるで見えないこの眼、あんまり素敵でうっとりしちゃう・・・

「この先向こうで発射されるV2ロケットの数が多ければ多いだけ、こちらにいる彼が被弾する確率も高まるんだから」とプレンティス大尉は言った。「最低限の支払いをしていないとは言えないね。だが、それはみんな同じだろう」

「へえ」このことを後に彼女から聞かされてロジャーは、焦点の合わない眼で考えながらこう言った。「カルヴィニストってさ、いつもそういう狂った事をいうのだ。支払いだ？ ヤツらってどうしていつも取引の言葉で考えるんだろう。プレンティスはどうしたいんだよ？〈ベヴァリッジ提案〉[9]のようなものを作れってか？ 人それぞれに〈悲痛度ポイント〉とかを与えるってか！ 素敵じゃないか——〈査定委員会〉ってのがあって、ユダヤ人だとポイントがグンと上がるんだ。強制収容所に送られれば何点、手足や臓器を失えば何点って、妻を、恋人を、親友を失えば——」

「怒ると思った」ジェシカがつぶやいた。

「怒ってないさ。プレンティスのいう通り、チープなんだよ。それはいいんだけど、だったらあの男は何をどうしたいのさ——」そういいながらロジャーが歩き回る。閉めきった、小さなうす暗い客間の壁のそちこちに、愛しの銃猟犬が強ばった姿で身構えている肖像画

を、どんな用向きで誘拐したのだろう。

9 戦時中に連立与党となった労働党で、ウィリアム・ベヴァリッジ議員を長とする委員会がまとめた社会保障プログラム。

CamScannerでスキャン

が掛けてある。そこに描かれているのは死についての幻想の中でしか存在しえない草原だ。アマニ油が時を経るにつれて変色して戦前の希いよりも黄金色に、もっと秋めいて、もっと死を内包して、輝いている。一切の変化がピタリと止まり、長い、静かな午後、かすみの中で雷鳥が永遠に飛びたとうとし、銃口は永遠になだらかな赤紫色の丘から青ざめた空に向けられ、猟犬は永遠の匂いに、永遠に今すぐ発砲されんとしている銃声に備えて身構えている――そんな希いがあまりに執拗に、あまりに無防備に描かれたその絵をロジャーは――自分のチープなニヒリズムが極まったときですら――外して、一面の壁紙にしてしまうことができずにいる――「毎日毎日わけのわからないこと喚いている狂人どもに囲まれてるのにさ、その僕から何を期待してるんだよ」ジェシカは、あーあ、とため息をついて、折り曲げた美脚を椅子にのせる。「あいつらは、死後の命なんてものを信じてるし、心と心の直接交信も、未来の予知も、透視術も、テレポーテーションも――信じてるの、いいか、ジェス！　それでさ、それで――」何かが引っかかって、次の言葉が出ない。ジェシカは自分のうんざりした気持ちも忘れ、ペーズリ織りのふんわりした椅子から立ちあがるとロジャーを抱きしめる。どうして彼女にわかるのだろう、スカートに包まれた暖かい太腿と恥丘の圧力がホットな勃起を引き起こし、口紅の最後の一塗りを、彼のシャツが、筋肉が、まさぐる手が、昂ぶる気持ちと上る血潮に戸惑う肌がこすり取っていく――どうして、ロジャーの言おうとすることがピタリとわかってしまうのだろう。

心と心の直接交信。ロジャーが眠っている夜更け。最後の石炭の残り火でつけた貴重なタバコをもって窓辺に立ったジェシカの胸は、泣きたい気持ちでいっぱいだ。自分には太刀打ちできない。それはあまりにはっきりしている。ロジャーを守らなくてはいけないの

にそれができない。空から落ちてくるものから、その日ジェシカにうち明けられなかった悩みから〈雪踏みしめる小道、氷の髭を生やして雪にたわんだ木々のアーケード…風が雪のクリスタルを払いおとした——紫とオレンジ色の生き物が彼女の長い睫毛の上で花開く〉そしてポインツマンの…あの、見るたびにゾッとさせられる、寒々しい…科学的中立性？　その彼の手から——彼女は身をふるわす。雪と静寂の中に動きがあった。外敵かもしれない。暗幕をめくっていた手を離す——犬だけじゃなく人にも苦痛を与えておいて、その苦痛を感じもしないあの手から、彼を守ってあげなくてはいけないのに…

カソコソと動く狐や逃げ腰のノラ犬、今宵の庭と小径を行き交うのはそんなところだ。オートバイが一台、戦闘機のような自信満々のうなりを上げて、村を迂回する道をロンドンへ向かって走りさる。真珠のようにまるまる育った大気球が空を流れる。空気はあまりに静かで、今朝がた短時間ふりしきった雪も高く張りめぐらされた鋼鉄のケーブル線につもったまま——夜闇の中をペパーミント・スティックの螺旋を描く白色が何千フィートも落ちる。そしてこの村の、からっぽの家々でいまも眠っていられたかもしれないのに吹きとばされてしまった人びと——ある者は永遠に——彼らはいま何の夢を見ているのだろう。ランプの灯りが一面に輝く都市？　ふたたび子供の無邪気さに戻ってクリスマスの夢を見ている？　むきだしの丘の上に身をさらしうずくまる羊となって〈星〉(ザ・スター)の恐ろしい光輝によって漂白される夢[*10]ではなくて？　それとも、目覚めて思いだすにはあまりに可笑しくて可愛くてあまりに真実(トゥルー)な歌の夢？…平和だったころの…

「戦争の前って、どんなだったっけ？」生まれてはいた。それは覚えている。子供だった。でも、そういう意味じゃなく。ラジオ——BBCの〈ホーム・サービス〉[*11]ステーションか

10　so bleached by the Star's awful radiance＝霊的な光の放散をイメージさせるradiant, radianceという語はキーワードのひとつなので、できる限り「光輝」という訳語で統一する。「ブリーチ」は、北西ヨーロッパ的な思考と信仰による"世界の脱色化"の意味を担うだろう。

11　戦時下イギリスのラジオは全軍向けの〈ジェネラル・フォーシズ〉と一般市民向けの〈ホーム・サービス〉の二本立てだった。

CamScannerでスキャン

ら雑音にまみれて聞こえてくる、縺れた脳みそを梳かすヘアブラシのような「フランク・ブリッジの主題による変奏曲」。[12] キッチンの窓辺に置いて冷やしているモンラシェの壜は海賊（パイレート）さんからのプレゼントだ。

「と聞かれても――」しゃがれたイジワル爺さんの声色だ。中風に震える手が、最高にいやったらしいやり方で伸びてきて乳房を握る。「どっちの戦争だね、お嬢ちゃん」ほら始まった、ゴホゴホと咳こんで、下唇の端にヨダレを溜めてあふれさせる。ツーとしたたり落ちる銀色の糸。なんて知恵の回る人なの、ロジャーったら、こんな気味悪い芸まで練習して――

「ふざけるのよして、こっちは真剣なのよ。ほんと、覚えてないんだから」

そう言われて考えこんで、ヘンな具合にほほえんだ彼の口の脇にふたつのエクボがへこむ。あたしが三十になったら、どんな毎日だろう・・・一瞬目に浮かぶ数人の子供たち、庭、窓、声、ママ、ほら・・・まな板の上はキュウリと狐色のタマネギで、目の前は、自生のニンジンが鮮やかな黄色の花を咲かせている青々とした芝生で、夫の声が――

「おれの記憶にある戦前って、バカバカしいだけさ。圧倒的にアホだったね。なんにも起こらない。おっと、エドワード八世が退位したっけ。その恋愛のお相手が[13]――」

「それは知ってる。雑誌を読めばわかる。あたしが聞きたいのは雰囲気よ」

「だから・・・ただもうアホクサかったんだ。それだけさ。どうでもいいことであれこれ気を揉んで――でもジェス、ほんとに覚えてないのか」

たしかに、いろんなゲームはやった。ピナフォアと、友達の女の子、足だけ白かった黒いのら猫、家族全員で出かけた休日のビーチ、海水、揚げた魚、ロバ乗り、タフタ織りの

12 二十世紀イギリスのクラシック界を代表する作曲家、ベンジャミン・ブリテンの作品。

13 世間を騒がせたシンプソン夫人との件は340ページの歌にも登場。

CamScannerでスキャン

ピンクの服、ロビンて名の男の子・・・
「ほんとはなんにも失ってはいないのね。二度と取りもどせないものはないでしょ」
「じゃ、おれの記憶をいうぞ」
「いいわよ」ほほえむふたり。
「みんなアスピリンを飲んでばかりいた。酒を飲んで酔っぱらって、背広が身体に合うかどうか心配したり、上流階級を軽蔑して、そのくせ一生懸命彼らのマネして・・・」
「そしていつもウィーウィーウィーウィー泣いてたの――*14」彼女は笑い崩れる。彼女の弱みを知っているロジャーの手が、セーターに包まれた脇腹の、一番くすぐったいところに伸びてきたからだ。身体を折り曲げ、身悶えして逃げると、彼がゴロリと彼女を乗り越え、ソファの背の向こうへ転がりおちたけれど、うまく体勢を立てなおし、彼女のほうはもう体中がくすぐったいのに、足首をつかまれ、肘も――
と突然、ロケットが落ちてきた。村を越えたごく近距離のところだ。ものすごい爆音に、周囲の空気も時の進みも一変する――爆風で一瞬内側に開いた窓が、ギーと木を軋らせてリバウンドし、バタンと閉まり、そのあとも家全体が揺れつづける。
心臓はバクバクと鳴り、耳の中は加圧リングに引っぱられた鼓膜が痛む。目に見えない列車が屋根のすぐ上を走りさっていく・・・
ふたりは壁の絵の中の犬のようになった。押し黙ったまま、身体を寄せ合うこともできない。〈死〉が食糧貯蔵室のドアから入ってきて、立ったままふたりを見つめる。不変の鉄の顔をして、ワタシをくすぐれるもんならくすぐってみなさいと。

14 子豚を歌ったマザーグースの童謡のひとつからの引用。

CamScannerでスキャン

□□□□□□□

（1）

TDY[*1] アブリアクション病棟
聖ヴェロニカ病院
ボーンチャペル・ゲイト、E1[*2]
ロンドン、イングランド
一九四四年冬

ザ・ケノーシャ・キッド様[*3]
留置郵便
ウィスコンシン州ケノーシャ、U・S・A

拝啓

僕があなたを、一度たりと、わずらわせたことがあったでしょうか。

1　一時的転属先＝temporary duty yon-der の略。45ページでスロースロップは「PWEの検査プログラム」のため、特別出向を言い渡されている。

2　住所は架空だが、「E1」は移民や労働者の多いイースト・エンドの一角。

3　一九二〇年代から四〇年代にかけて一定の人気があった、少年向け

敬具

タイロン・スロースロップ中尉
留置郵便
ウィスコンシン州ケノーシャ
U・S・A

数日後

タイロン・スロースロップ様
TDY アブリアクション病棟気付
聖ヴェロニカ病院
ボーンチャペル・ゲイト、E1
ロンドン、イングランド

親愛なるスロースロップ
You never did.[*4]

The Kenosha Kid

パルプフィクション・シリーズの主人公の名と一致する。

4 一度たりとありません。

（2）知ったかぶりの若者：うん、おれ、昔の流行ダンスならぜんぶ踊ったよ。チャールストンも、ビッグアップルだって！
ベテランのダンサー：You never did the Kenosha, kid.[*5]

（2・1）若者：何いってんだい。なんだって踊ったさ。キャッスルウォークだって、リンディだって！
ベテラン：You never did the "Kenosha Kid"[*6]

（3）雇われスタッフ：彼は私を避けるんですよ。どうもスロースロップの一件のことが原因じゃないかと思うんですが。もし私に責任があると考えているんでしたら
上司：（鼻で笑って）You! never did the Kenosha Kid think for one instant that *you*...[*7]

（3・1）上司：（信じられない表情で）You? Never! Did the Kenosha Kid think for one instant that *you*...[*8]

（4）そして輝かしき一日の終わり、天空に燃える文字で、われらに必要な凡ての言葉、今日われわれが辞書に収めている凡ての言葉が与えられた日の終わりに、幼な子タイロン・スロースロップの柔和な声が立ちのぼり〈キッド〉の耳に届いた。それは永らく歌や伝説で言祝（ことほ）がれてきた通りである――You never did '*the*,'[*9] Kenosha Kid!

5 「ケノーシャ」は踊っとらんだろ、お若いの。

6 「ケノーシャ・キッド」は踊ってないだろう。

7 おまえがだと！ ケノーシャ・キッドがそんなふうに一瞬たりと思ったなんてありえんことだ、おまえごときが……。

8 おまえをか？ まさか！ ケノーシャ・キッドが一瞬たりとおまえのことをそんなふうに……。

9 「the」をやってない

"You never did the Kenosha Kid" というテクストのこれらの変化がスロースロップの意識をとらえているさ中に、ドクターが白い背景から顔を覗かせ、スロースロップを起こし、きょうのセッションが始まる。痛くはない、ひじの曲がりにできる窪みのすぐわきに静脈注入されるアミタール・ナトリウム[*10]の一〇パーセント溶液は、一度にきっかり一ccだけ。

（5） あんたはフィラデルフィアをばかにして (fool)、ロチェスターをボロクソに言い (rag)[*11]、ジョリエットの町も笑いのめした (josh)。だが、you never did the Kenosha kid.

（6） (昇天と犠牲を記念する、国を挙げての祭りの日。脂が焦げ、血が滴りおち、塩気のある肉が褐色に焦げる・・・) シャーロッツヴィルの子豚はやったな。よし(チェック)。フォレスト・ヒルズの子馬は？ これもよし (しだいに小さく・・・) ラレードの子羊、オーケー。おいおい、待てよ。なんだこれは、スロースロップ。You never did the Kenosha kid.[*12] 気をつけー(スナップ・トゥ)、スロースロップ。

ボッキしてーる ペーニス
つかーんだ 怒るな
気を つけー、スロースロップ！

よ。

10 バルビツール系のドラッグ。犯罪小説などではよく真実告白剤として使われる。

11 ケノーシャをからかう (kid) ことはしていない。

12 ケノーシャの子ヤギをやっとらんじゃないか。

俺の知った　こっちゃねえ
〝ずだずたダック〟[*13]　くれろよ
気を　つけー、スロースロップ！

誰も愛して、わかって、くれない
俺を回すことしーか、かーんがえてない

脳天に　電気針
両腕に　注射針
気を　つけー、スロースロップ[*14]！

PISCES[*15]‥スロースロップ、きょうはボストンの話を続けてほしいんだが。前回はロクスベリー地区[*16]の黒人の話だったな。まあ穏やかではないテーマかもしれんが、がんばってもらいたい。ところで今、きみはどこだ、スロースロップ。何か見えるかね。

スロースロップ‥いえ、見えるっていうのとはちょっと‥‥

轟音を立てて地下鉄が高架を走る、ボストンならではの光景。鋼鉄と、古い煉瓦の建物を覆う炭素の経帷子――

リズムにハマった
オー・ベイビー、スイング、スイング、スイング！

13　ruptured duck＝名誉除隊のバッジの俗称。

14　『GRC』の指摘通り「バイバイ・ブラックバード」の節で歌う。もともとは二〇年代のポピュラーソングだったこの歌は、ヨーロッパでもジョセフィン・ベーカーのエロティックなショーで使われるなど、メロディ自体、黒人との連想が強い。

15　文脈を確認すると、聖ヴェロニカ病院に一時転属されたスロースロッ

イェイ、ストンとハマッた
すんげえ、世界中歌いだす
初めてだ、こんなスイート・サウンド
ベーシン通りの角でも鳴ってる
リズムにハマったからにゃ、オラ、チレン[※17]
スイング、スイング、スイング、
カモン・・・チレン、レッツ・・・スイング！

ブラックな顔・顔・顔、白いテーブルクロス、すごくシャープなナイフがソーサーの脇でギラリ・・・タバコと〝ゲージ(マリワナ)〟がトロリ混ざったケムリのせいで、眼ン中がワインみてえに赤くて渋いや。おめえら、このハーッシッシ、ちーと吸ってみ。脳のシワシワがシャン！となるぜ。間違いねえって、ビーンとのびちゃわ。

PISCES：「のびちゃわ」でいいのか、スロースロップ？

スロースロップ：たのむよ・・・そんな・・・

ステージの上の「コンボ」にむけて白人の男子学生が大声のリクエスト。いかにも東部プレップ・スクール風の声でasshole(アスホール)と言おうとしたら、唇が括約筋のように動いてchisshehwle(エーイシェーウル)みたいな発音になった・・・みんな大声で浮かれてる。あたりはジャングルの緑だ。葉蘭、巨大なフィロデンドロン、棕櫚(シュロ)の葉、さまざまなグリーンが暗がりの中へ垂れこめる・・・色白で細身の口髭男はカリブの島の出身だろう。その相棒は夜会用の手袋をはめた手みたいに黒い。バーテンたちがせわしなく動く向こうは壁一面の鏡が深い海洋の

ブの心の深層を、PISCESのドクターが、薬物を使って探っている。狙いは、アメリカ人である彼がとりわけ黒人性に対して、いかに条件付けられているか知ることにあるようだ。

16 ボストン市街の南西にある、黒人の多い地域。

17 chillun は children の黒人訛り。

CamScannerでスキャン

ように、そのメタルな陰の中へ、部屋の大部分を飲みこんでいる・・・わずかの間光を保持していた百本の酒瓶も鏡の中へ流れこむ・・・誰かが背を屈めて点火するライターの炎もダークな日没のオレンジとして映じるだけ。スロースロップの眼に自分の肌の白さは見えない。が、テーブルからチラリと彼を見やる女性の目つきが、彼が何者かを告げている。ポケットにしまいこんだマウスハープ[*18]が真鍮の塊と化す。ただの重り。ただのジャイヴな[*19]アクセサリー。だが彼はどこへ行くにも、そのハープを手放さない。

ローズランド・ボールルーム[*20]の二階のトイレのスロースロップ。なかば意識を失いながら、便器を抱えて跪いて吐きもどす――ビール、バーガー、フライドポテト、フレンチドレッシング入りシェフお手製サラダ、ボトル半分のモクシー[*21]、食後のミント、クラークのチョコバー、ソルト・ピーナッツ一ポンド、それにラドクリフ大の女子大生の、オールドファッションドのグラスの中のサクランボ。スロースロップの眼から涙があふれ、それとともに彼のハープが、何の警告もなく、ポチャンと落ちた。*aagghh!*[*22] ゲロだらけのトイレの中に落ちてしまった。微細な泡が楽器の金属面を滑りあがり、木調仕立ての、ところどころ口でこすれてニスが剝げかかった面をすり上がって、ハープが便器の白い頸部へ向かうとともに銀の種子となって浮き上がっていく。それからさらに夜の深みへ・・・この先いつかUSアーミーがポケット・ボタンの付いたシャツを支給するだろう。戦前のこの時期に、胸ポケットから物を落とさずにいる手だては、真っ白なアローのワイシャツにパリッとノリをきかせておくことくらいだ・・・しかし、バカなことに、ハープはもう、落ちちゃった。便器に当たったその一瞬、低音のリードをふるわせて歌い（窓を打つ雨がどこかで聞こえる、屋根の上のトタンの通気孔も、冷たいボストンの雨が打つ）、最後に吐いた

18 ハーモニカの別称。単に「ハープ」ともいう。

19 jive は、特に一九四〇年代のジャズ文化で流行した言葉。黒人っぽくかっこいいという意味。

20 ボストンの南の黒人の多いロクスベリーにあるダンス場。『マルコムX自伝』第三章によれば、少年時代に彼は、実際ここで働いていた。

21 コカ・コーラより早くマサチューセッツで誕生したソフトドリンク。

22 ピンチョンお得意の漫画風感嘆詞は原文表記のままとする。

23 「レッド」とはマルコムXのニックネーム。『自伝』によると、彼がローズランドで靴磨きを

胆汁色の液が水面にグルリととぐろを巻くところにベチョンと落ちて静かになった。もう呼び戻せない。彼の歌を響かせるチャンスは永遠についえたか。それとも、勇気を出して、後を追っていこうか。

後を追う？　黒人の靴磨き少年レッド[*23]が、埃だらけの革椅子のわきで待っている。荒廃したロクスベリー地区の黒人たち、彼らはあらゆるところで待っているのだ。後を追う？　階下のダンスフロアの、ハイハットとストリングベースと無数の踊る足音から、むせぶような「チェロキー」のメロディが立ちのぼってくる。フロアは薔薇色の照明が動き回って、ハーバードの学生さんも連れの女性も、青白い顔色が飾り立てた赤肌のインディアンのようだぜ。いま流れているこの曲だって、白人の犯した罪をいつわってるわけだ[*24]。だがこの曲、最初から最後まですんなり吹ける代物じゃない、途中まごつく奏者のほうが多いんだな。なが〜い長い音符ばっか連ねて‥兄さん、そんなチンタラ音を間延びさせて、その間に何か企んでんの。インディアンの精霊の陰謀かい？　ちょうどいま、ニューヨークで——車を飛ばせばまだ最後のところ見られるぜ——七番街の一三九丁目と一四〇丁目の間の店だ、"ヤードバード[*25]"パーカーがまさに今夜新しい吹き方を見いだしたんだってよ——コードの構成音を高く駆け上がってメロディを崩すの、どうやるんかと思えばすげえ何だマシンガンかよこれすげえ音だぜアイツ狂ったか32分音符（デミセミクウェイバー）[*26]じゃねえかデミセミクウェイバー言ってみな早口の〈デミセミクウェイバー〉マンチキンの声で言ってみな。それが〈ダン・ウォールのチリハウス〉[*27]って名前のこの店から通りへ流れるんだ想像（ディグ）しろよ——あらゆる通りにだぜ（ヤツの旅（トリップ）は三九年にはもうすっかり進行してた。圧倒的なソロの内奥で、死神のコンコンチキのおっさんがナマクラ面白半分の韻律をドゥンドゥドゥン

始めたのは一九四〇年六月。

24 "Indian Love Song" という副題がつくこともあるこの歌は、イギリス人バンド・リーダー、レイ・ノーブルの作品。歌詞は大草原のインディアンの少女への愛を歌う。

25 ビバップを創始したサクソフォン奏者チャーリー・パーカーの通称。単に"バード"とも。

26 映画版『オズの魔法使い』（一九三九）でドロシーたちを案内する小人たち。一般語としては「ムシャムシャ食べる小鬼」のイメージを持つ。

27 一九三九年十二月にハーレムのこの店で、チャーリー・パーカーが、ギタリストのビディ・フ

CamScannerでスキャン

って鳴らしてた）電波に乗って流れる、社交界で演奏される、いつか街中のエレベーターやスーパーの壁に隠れたスピーカーから人知れず流れる、そして白人体制が流す子守唄に栖つく、ストリングスを録りかさねた果てしなくふぬけた音楽を転覆させる。…ほら、その預言が実現しそうな予感を、ここ雨降りのマサチューセッツ・アヴェニューで感じないかい、最近、ここのホールで演奏される「チェロキー」のサックスの音もほら、ヘンテコに変わってきた、こんなの聞いたことあったかい…

　ハープを追って行くなら、スロースロップ、頭から便器に突入していくほかないが、そりゃまずい。無防備なケツが宙に浮いてしまう。まわりにニグロのあんちゃんがウロウロしてるところで、そういうことはしたくない。だって、汚物だらけの暗黒に頭を埋めているときに、褐色の太い確かな指が延びてくるってどうなんだい。あっというまにズボンのベルトが抜きとられ前のボタンが外れて――ってのはゾッとしない。筋骨隆々の腕がきみのおまたをグイと開く――太腿がライゾール臭つきの空気でヒンヤリしたと思ったらパンツ取られちゃってんの、色鮮やかなスズキのルアーとマスの毛鉤模様のパンツがさ。必死の思いで便器の奥の暗がりへ、もがく身を滑りこませると、臭う汚水を通してモワンと聞こえてきたのは、オッソロしい、白人用男性トイレに押し入ってきた黒肌のギャングたちが陽気にワイワイいってる声、それがヘルプレスに身をよじらせるだけのスロースロップのまわりに集まってきて、「ヘーイ、マルコム、タルコムパウダーちっとよこしな」連中特有の歌うようなジャイヴなしゃべりのリズムに応えて聞こえてきたのがほかでもない、ありゃ靴磨きのレッドの声だ。いままでに十回も膝をついてボロキレもってキュキキュッキュッてビートを取ってスロースロップのエナメル黒靴を磨いた…ヒョロリ長身の髪の毛

リートとのセッション中、この特別な奏法を作り上げたことは、ジャズ（ビバップ）の歴史の有名な逸話。

をド派手な赤毛をコンクにした[28]その少年、ハーバードの学生にはただの「レッド」で通ってる――「なあ、レッド、シークのゴム[29]、一丁欲しいんだけどさ」「幸運の電話番号、もってたりしないか、レッド？」――このニグロ少年の実の名前を、トイレに半分潜りこんだスロースロップは――ゼリーかクリームか、ヌルリとした太い指が、尻の割れ目からケツノアナに伸びて恥毛を（地勢図の谷間に這う等高線のように）二手に分けた瞬間に――初めて耳にしたのだ。ほんとの名前はマルコムってのか。あのブラックの兄さんたちはみんな以前から馴染みだった――ブッとんだニヒリストのレッド・マルコム。そのマルコムがいう――「驚いた、こいつ、ほんとに、ぜんぶケツノアナじゃん」それにしてもスロースロップ、こりゃまったくひどい恰好だ！　なんとか先へ潜りこんで、いま便器から突き出ているのは二本の足だけ、尻のふくらみは水面ぎりぎりのところ、蒼白いアイスの球みたいにゆらゆら浮沈している。白い便器の壁に外の雨と変わらず冷たい水しぶきが跳ねる。「逃がすなよ、捕まえろ！」「オーライ！」彼の脛やら足首に遠い手が伸びる。靴下留めがパチンとはじかれ、ハーバードの入学祝いにとママがせっせと編んでくれたダイヤ模様の靴下が引っ張られる。その靴下に御利益があったか、単に充分深く潜っていたのがさいわいしたのか、スロースロップは彼らの手を・・・

地上の世界の最後の黒い接触をスルリすり抜け、いまは自由な魚さん、ケツの童貞も守られた。それを聞いてみなさんはホッと胸をなでおろすのか、それともツマンネーと文句をおっしゃるのか知りませんが、スロースロップ本人は黙ったまま何も言わない――ほとんど何も感じてないから。なくしたハープがどこへ行ったか、いまなお手掛かりひとつない。ここは光もダークグレイで、あたりはほのかにしか見えず、スロースロップの意識

28　水酸化ナトリウム液などを使って縮れ毛を伸ばした黒人のヘアスタイルを「コンク」という。

29　マルコム少年が、ドラッグストアで安くコンドームを買ってはリッチな大学生に売りさばいていたというエピソードも『自伝』にある通り。「シーク」はアメリカのコンドーム・ブランド。

CamScannerでスキャン

はしばらくの間、糞によって占められた。セラミックの（もうすでに鉄に変わった）トンネルの壁に細妙なパターンをなしてこびりつく、どんな水流も流しさることのできない糞、鉄水が含むミネラルと一体化して褐色のフジツボのようにこびりついた、豊かな意味をもつ便界のロードサイン。気色悪くてベトついて、謎めいて彫金的[30]なこれらの形態が湧ぼんやりと現れてはスムーズに通りすぎていくなか、長い曇った排泄の道をスロースロップは進んでいく。上方でいまもほのかに脈打つ「チェロキー」のビートが、海へと向かうこの旅にお伴する。これら糞の痕跡のうちあるものは、ハーバードの知り合いの、どいつの糞かが明白になる。中には当然ニグロの糞もあって、そういうのはどれも同じで見分けがつかんけど。〈ヘイ、こりゃあの〝がっつき〟ビドルの糞じゃないか、ケンブリッジの〈風愚亭〉でみんなして中華（チャプスイ）を食ったときのか、見ろよモヤシがついてるぜ、ブラムソースの痕跡もわずかに残ってる…おい、なんか感覚が、すげえ鋭くなってる…〈風愚亭〉かよ、ありゃ何ヶ月も前のことだったな。おっ、そして〝ダンプスター〟・ヴィラードのじゃん。あの晩、あいつ便秘してたろ、この松ヤニみたいに黒くこびりついたのが、いつの日かダークに澄んで永遠の琥珀となるのか。それが壁に、ぶっきらぼうに、イヤイヤへばりついている（こびりついているのではない、その逆だ）のを前にすると、糞に対して感度の上がったスロースロップは感じることができた、前学期にダンプスターが自殺を図ったときのヤツの哀れな胸内が伝わってきた。微分方程式はきれいに解けてくれないし、母親はああだし（つばの垂れた帽子に絹のストッキング姿でテーブル越しに身を乗りだしてスロースロップのカナディアン・エールの嚢を飲み干してしまったことがあったっけ）、ラドクリフの女の子は避けるように行っちまうし、マルコムが売りこんでくる黒人

30 原文は [illegible] と、韻を踏んだ名調子。

女が「ドル刻み」でやってくれるのは性的虐待ばっかで、苦痛か財布に限界がくるまで(母親からの仕送りが遅れりゃそうなる)痛いのが続くだけ。そんなダンプスターの糞の浮彫も上流のくすんだ光の中へと消えて、スロースロップはいまウィル・ストーニーブロークの、J・ピーター・ピットの、そして大使の息子のジャック・ケネディ[31]の残したしるしを通過する——ジャックは今晩どこなんだよ。ハープを救ってくれるやつがいるとすりゃ、あいつ以外ない。スロースロップもジャックを遠くから敬愛していた——スポーツマンで、ジェントルマン、クラスの人気も集めていた。だけど、歴史のことになると狂ったように夢中になるんだよな。ジャック…ジャックなら、重力に逆らって、あのハープが落ちていくのを食い止めてくれるかも。いま、大西洋へ向かうこの航路にただよう塩と草と腐敗の臭いが、砕け散る波音のように微かに押し寄せてくる。そう、ジャックだったらできたかも。演奏される音楽が変わる日のために…可能性の中に浮かんでいる百万ものブルースラインのために、オフィシャルなピッチからずらした楽音（ベンド）[32]、まだスロースロップには吹き鳴らすだけの息（テク）がない未来の楽音のために…いまはだめでもいつか…もしあのハープが見つかったら、そのときはたっぷり水をふくんで自由に吹き鳴らせるかもしれない、と、そんな希望を抱きながら、ウンコと一緒に運ばれていく…

トイレを下る、なんたる姿
バカにもほどがあるだろに
みなさんオシッコしないでよ
チャップチャップ　ラランのラン…

31 後の大統領ジョン(〝ジャック〟)・ケネディの父ジョーゼフが駐英大使だったのは一九三八年から四〇年まで。ジャックは一九三九年にはイギリスからハーバード大学に戻っていた。

32 ブルースらしく音程を低めにスライドさせる奏法をベンディングという。

まさにそのときだ。押し寄せてきたのだ。津波のような轟音が。排泄と嘔吐と紙と糞便を詰めこんだビックリ箱大の騒擾モザイクが。パニック状態のスロースロップを直撃すべく、不運の犠牲者目がけて突進するMTA[33]の地下鉄車輪の迫力で。逃げ場はない。金縛りになったまま肩越しに振りかえる。迫りくる壁は糞紙の長い触手をたなびかせている。衝撃波がぶつかる——GUSHHHHH! ぎりぎりの瞬間に彼は華奢なカエルキックを返すけれど、糞便の汚物塊はすでに彼を押し、背骨の上部にそって黒いコールドビーフのゼラチンを這わせ、巻き付いてきたトイレットペーパーが唇と鼻の孔をふさいだ。襲撃の去ったあと、たまらない汚臭の中で腕をバタバタ、睫毛についた微細な糞片を払いのけるって、こいつぁジャップの魚雷攻撃より悲惨だろ！ 褐色の濁流がすごい勢いで通りすぎ、グルリグルリと彼の身体を回して——いるんだろうか、暗黒の糞嵐のなかじゃそれを視覚的に確かめる手だてもない……ときどき身体が下生えをかするような感触がある。それとも何か小さくて繊細な樹木なのか。そういえば、固い壁にふれる感覚が消えた。身体がグルグル転げるような感じになってからは一度もだ……

スロースロップを包む茶褐色の闇があるとき明るくなりはじめた。ほんとうの夜明けのように。頭から眩暈感が消えていき、最後に残ったちぎれ紙も半分とろけて……悲しく、水に溶けて消えていく。うす気味の悪い光が彼の身体を徐々に照らしだす。淡い、大理石の筋のついた光だ。何を映した光だろう。見たくない。早く消えてくれないか。だが、こういう荒涼とした土地には連絡員がいるものだ。なじみの人びと。ここは古い石造の遺跡、細かく崩壊した部屋のひとつのなかだろうか。多くは屋根もなく風化したままの小部屋

33 ボストン市営交通局

厚な貴なん、黒ずんだ服など身に衰え、錆びついた業務用サイズのライ豆の空き缶で焚か
れ立ち、その微かな煙がひび割れから立ちのぼる。男たちはすり減った敷石に腰を下
ろして、何の象徴だろう……スロースロップに確かなことはわからないが……漠然と宗教
的な感じがする。……寝室はフルに家具つき。変化し赤々と輝く照明、壁と天井から下が
るビロード地、青い蜘蛛玉が人知れず、ケーブハートのラジオの下の埃の中に埋もれてい
る。干からびた蜘蛛の死骸。カーペットの複雑なケバ立ち。家々の構成の細やかさにスロ
ースロップは驚かされる。ここは避難所だ。災難からの。いや、トイレに流されることとか
らのとは限らない。この地では、一面の青空に変化を与える、空の彼方の異常現象以外に
「フラッシング」[34]は観察されない。この地は、別の災難に激しく曝されている。それは
何か。ダシュダシュにぬれた寂れた姿のスロースロップには見えないし、聞こえもしな
い……毎朝が真珠湾攻撃のようなのだ。空から不可視のまま落ちてきて炸裂する。……彼
の髪にはトレペがからみ、右の鼻の穴にはケバ立った厚い紙片が詰まっている。らへっ、ら
へっ。衰弱と崩壊はこの地では音もなく進行する。太陽もなく、月もなく、ただゆっくり
と滑らかなサイン・カーブを描いて明と暗とが入れ替わる。これは黒人のディングルベリ
ーだろう。彼にはわかる。指をつっこんでまさぐるが、真冬の鼻クソのようで、固くてと
れない。指の爪からは血が出てきた。彼はひとりだ。部族共有のコミューン空間を出て、
ひとり。砂漠の朝に身を包まれている。赤茶色の鷹が一羽、二羽。気流に乗って舞い上が
り。地平線の彼方を見ている。寒い。風が強い。孤独を感じる。みんな中に入ってほしい
ようだが、それはできない。一度中に入ると、血判を押したみたいなことになりそうで。
二度と放してもらえなくなりそうで。何かをするように頼まれない保証はない……何かと

34 flushing＝トイレを流すことのほか、顔を赤らめること。空が暖色系の色に染まることをいう。

CamScannerでスキャン

でも・・・

はがされた石のすべて、アルミの薄片、木くずや布きれのすべてが舞い上げられ落下する。一〇フィート上がったかと思うと鋭い音を立てて舗道に叩きつけられる。光は水の中のような澱んだ緑。通りに散在するすべてのガラクタが、まるで深い規則的な波に揉まれるかのように、リズムに合わせて上下動を繰りかえす。その垂直のダンスから距離感をつかむのはむずかしい。舗道を叩く音は、規則的なビートだ。12拍子の12拍目をスキップする・・・アメリカに昔からある歌のリズムだ。・・・通りにはひとっ子ひとりいない。夜明けだろうか、さもなくば夕暮れか。ガラクタの金属部分が、強烈に、青くみえるくらい執拗に輝く。

レッド・マルコム、覚えてないか、
悪魔（デビル・ライ）の灰汁で髪の毛まっ赤にした子だよ・・・

登場したのはクラッチフィールド、またはクラウチフィールド。西へ向かう男。西進する男の「原型」ってんじゃなくて、西へ向かう唯一の男。いいかい、たったひとりなんだぜ。こいつと戦ったインディアンもひとりだった。たった一度の戦い。勝利もひとつ、敗北もひとつ。それで大統領も一人、暗殺者もひとり、選挙も一回だけ。そうなんだ。万物すべてはひとつだけ。あんた、唯我論というのは考えたことあるよね。建物のなかの、あんたの階にひとりだけしかいない、他の階のことはノー・カウント——でも実際は、それほど孤独の場所でもないんだ。そりゃスカスカだけど、まったく独りってのよりはぜんぜ

CamScannerでスキャン

んマシさ。すべての物がひとつずつある。悪くないよ。ノアの方舟の半分だって、ないよりゃましだろう。[35] このクラッチフィールドって男は太陽と風と土埃を浴びて肌は褐色だ。納屋や馬小屋の濃い褐色の前に立つと、質感の違う材木が立ってるってふうだ。紫の山の斜面を背にして、なかば太陽を見つめる姿は、気立てのいい屈強な男といったふうだ。男の影が、納屋の中へ粗々しく伸びる——梁、柱、馬屋の仕切り、飼葉桶の組み脚、垂木、陽のさしこむ天井板、それら木材のネットワークによって運びこまれて。陽の傾いたこの時刻も、天上世界は目もくらむほどの明るさだ。離れの小屋の裏で、誰かマウスハープを吹いている。音楽の大食漢（グラトン）というべきか、大きな五音コードをいっぺんに吸いこみながら、鳴らすチューンは——

《赤い河の谷間（レッド・リバー・バレー）》

スイセーンの　クソと　流れる
にいさん　よってらっ　しゃいなぁ
トイレーはどこにも　逃げません[36]
ここらーのウンチは、　サイコーよ

たしかにレッドのリバーだ、ウソだと思うなら〝レッド〟に聞けや、どこにいるか知らねえけど（「レッド（アカ）」の意味を教えてやろう、アカってのは、FDR（ローズヴェルト）のお友達さ、なんでもかんでも自分らの物にしようって手合いだ、女のアカは膣毛を生やしてて、自分らの物

35　「ノアの方舟」にはすべての種が、一対ずついた。原文は「パンは半斤（half a loaf）だって、ないよりゃまし」という言い回しをもじっている。

36　このメロディは、日本でも「サボテンの花さいてる／砂と岩の西部——」の詞で知られている。〝レッド〟には「インディアン」の意味もある。PISCESの探査のテーマは、黒人に対する無意識の感情からインディアンへのそれへと変化した。

CamScannerでスキャン

にならねえってーと、夜中に爆弾破裂させて黒鉄のまわりに血の雨を降らすんだ、灰色帽子のポーランド人の上にもオクラホマの百姓にもクロンボにもそうさとりわけクロンボだ・・・）

えーと、こっちではクラッチフィールドの相棒[37]が納屋から出てきた。相棒っていっても、当座の相棒さ。クラッチフィールドってヤツは、広大なアルカリ土の平原で次々と相棒をつくっちゃバイバイしてきた。サウス・ダコタじゃおつむの弱い男をひとり、

サン・バードゥーでひとりのかわいい博打うち、
線路仕事から逃げだした中国人のかわいいの
黄色いケツが、フー・マンチューと一緒！
淋病がひとり、甲状腺がひとり、
ひとりは末期のハンセン病、
右足ビッコ、左のビッコ、
両足ビッコで合わせて三人！
オカマがひとり、オナベもひとり
クーロンボがひとり、ユダ公ひとり
バッファローつれた、インディアンもひとり
ニューメキシコの、ハンターもひとり・・・

どこまでも続く。どれもこれもひとりずつ。このクラウチフィールドはテール・モーヴェ[38]

37 原文は partner の訛った pard。ローン・レンジャーに対するトントのように、アメリカのポップ・カルチャーでは有色人種（あるいは何らかの意味で「他者」）が選ばれることが多い。

38 不毛の地「バッド

の〈白いチンポマン〉なのであって、男女を問わず、動物の種別を問わず、どんな相手ともやりまくる。ただしガラガラヘビだけは別だ。いや別だったんだが、このごろはそのガラガラヘビ（これまた一匹しかいない）とやるところを夢想しはじめたようす。包皮をくすぐる二本の牙・・・青白く開いた口、悦に入った恐怖の三日月の眼。当時の相棒が、ワッポというノルウェー人と黒人の混血で、そいつが馬具に対して性的興奮を感じるヤツで、馬具収納室で汗と革の臭いにまみれながら鞭打たれるのがたまらない。ふたりの旅はきょうで三週間め。相棒とのつき合いがこんなにもつのは珍しい。ワッポの召し物は輸入もののガゼル革のカウボーイ・パンツ。これはクラッチフィールドがイーグル峠でアヘン吸いの賭博の胴元、焦熱のメキシコの荒野へ向けてリオ・グランデ河を渡りつづける男から買ってやったものだ。マゼンタとグリーン[*39]のバンダナ（これは規制品目）もワッポの大のお気に入り。（クラッチフィールドの故郷「ランチョ・ペリグロッソ」の家にはこの手の絹のスカーフが押し入れいっぱい詰っているらしく、西部の岩肌と河床の道へ繰りだすときは、鞍袋にスカーフを必ず一、二ダース入れておく――ってことは、「なんでもひとつ」の規則が当てはまるのは、相棒のような生き物だけで、バンダナのようなただの物品に対しては当てはまらないということか）。ワッポはまた日本産の絹で作った、つやつやしたオペラハットをかぶっている。きょうの午後、納屋から歩み出たワッポ君、実にとってもキマっている。

「あっ、クラッチフィールドさんだ」片手をひょいと挙げる。「わざわざ出向いてくれるなんて、感激だなあ」

「おれが来るの知ってたくせに、このぉ」ワッポがこんなに油断のならんやつだとは。主

ランド」を意味するフランス語。

39 サイケデリックな配色の典型として以後も（208ページ等）ピンチョンのテクストに繰り返し登場する。

CamScannerでスキャン

人の心のスキを突いて、アフロ＝スカンジナビアンの蒼黒い尻に鞭跡をつけてもらおうと画策するんだ。暗黒大陸の種族特有の丸みと、われら北方人種の血統の、たくましきオラフ王の高貴に張った筋肉を併せ持つ可愛いオケツ。ところがクラッチフィールドはプイと背を向け遠くの山々を見つめるだけ。ワッポがむくれる。頭上のトップハットに、近づきつつある大虐殺が映りこんだ。だが白人男である彼には、「トロ・ロホ[40]が今晩くるぞ」みたいなセリフは、冗談にも口にできない。それはふたりとも重々知っていることだ。あの生臭いインディアンの臭いを運んでくる風が吹くだけでわかる。おうおう、撃ち合いだ、うんざりするほど血が流れ、その血を強風が運んで木々の北側を照り焼きの色にするだろう。インディアンは犬を連れてくるだろう、この灰だらけの荒野にいるただ一匹のインディアンの犬。そいつはワッポと格闘したあとラス・マドレス[41]の埃だらけの広場の露店肉屋に吊される。大きく見開いた目で、疥癬だらけの皮はまだ生きているときのまま。広場の向こうの教会のモルタルや石造りの壁が陽に照らされ、吊された皮膚を黒く跳び回るノミの姿まで見える。ワッポの歯が頸動脈を咬みきったあたりは（頭が一方に傾いているのは首の腱までかみ切ったのか）血が黒く固まっている。吊鉤が刺さっているのは二つの脊椎骨の間だ。メキシコの女たちがつつくたびに、死んだ犬は億劫そうに揺れる。広場は昼前の市場の匂い。揚げ物用の青いバナナや、〈赤い河の谷間〉でとれた甘いベビーキャロット、形のくずれた種々の青果物、ジャコウの香りのシラントロの葉、強烈なホワイトオニオン、陽を浴びて弾けそうなほど発酵したパイナップル、山キノコを積み上げた大棚。ケースが積まれ、衣服が吊された中を縫うように進むスロースロップ。その姿は誰にも見えない。透明人間として、馬と犬と豚の間を、褐色の制服に包まれた国民軍とショールで赤

40 「赤い雄牛」を意味するスペイン語。

41 メキシコの東シエラ・マドレ山脈をさす。

ん坊をくるんだインディアンの女たちと、向こうの山の中腹のパステル色のお屋敷から買い物に来たメイドの間を動き回る。広場は生命の躍動感に充ちる。スロースロップは困惑する。あれれ、ひとつずつしかないはずじゃなかった？

A　そうだ。

Q　じゃあ、インディアン・ガールもひとり・・・

A　生粋のインディアンがひとり。メスティーサ[*42]がひとり。クリオーリャ[*43]がひとり。それにヤキ族がひとり。ナヴァホがひとり。アパッチがひとり――

Q　待てよ。インディアンはそもそもひとりだけだったんじゃないか。クラッチフィールドに殺されたのが。

A　そうだ。最適化の問題として考えてみるといい。国がもっとも効率的に養えるのはそれぞれひとりだけだろう。

Q　それ以外はどうするんだ。ボストン。ロンドン。都市に住んでるインディアンは、存在するの、しないの。

A　存在している人もいるし、存在してない人もいる。

Q　じゃ、その存在している人は必要なの、必要じゃないの。

A　それはきみが抱いている考え次第だろう。

Q　よせやい、おれ、考えねえよ、そんなこと。

A　わたしらは考えるのだ。

一瞬、アルデンヌの森[*44]の、雪の下に埋もれる一万体の死者が、ディズニーのキャラクタ

42　白人の血の混じったインディオの女。

43　これもかつてのラテン・アメリカでの人種カーストの言葉で、純粋なスペイン系の血を持つ現地生まれの女性を示す。

44　105ページ註12の「ルントシュテットの攻勢」参照。物語の「現在」は十二月二十日ごろと想定され、まさにドイツ軍の攻勢の最中。

CamScannerでスキャン

ーのような笑顔をふりまいた。白いウールの毛布にくるまり、番号札をつけて、まるでニュートン・アッパー・フォールズ[45]かどこかの家族に引きとられていくのを待っている嬰児のようだ。そのイメージは一瞬で消え、次の瞬間には作られつつあるクリスマス・ベルがすべて、ピタリと息を合わせて今にも鳴りだしそうだ。いつもランダムに打ち鳴らされるサウンドが、このときばかりは完全なハーモニーをなして、具体的な慰安と手近な喜びを約束してくれるかのよう。

　だが場面はロクスベリーの坂道へ移っている。アーチ型に踏みしめられる雪。黒いゴム底がつけるギザギザ模様。足を動かすたびに、オーバーシューズの留め金がチリンチリンと鳴る。スラムの闇の中の雪は、ネガ・フィルムで見る煤のよう……夜の闇から闇へただよう……朝の光が映しだす煉瓦（夜が明けそめて初めて彼はそれを目にする、オーバーシューズの中で痛む足を引きずり、坂道を昇り降りしてタクシーを探しながら）は繰りかえす霜の襲来に深く芯まで燃えるように腐食している。ビーコン・ストリート[46]でもこんなふうに時が経過していたなんて、スロースロップは知らなかった。

　陰に男が立っている。顔面は黒と白とのパンダ模様。よく見れば傷の癒えた跡やらふくらみだらけだ。この密売人（コネクション）と会うために、はるばるここまで歩いてきたのだ。その顔は飼い犬のように弱々しく、顔の持ち主は肩をすくめてばかり。

　スロースロップ：やつはどこだよ？　なぜ来ない。あんた誰だ？

　声：キッドはサツにパクられた。だがスロースロップ、おれのことを忘れたかい、ネバーだよ。

　スロースロップ（まじまじと見て）：You. Never?（ポーズ）*Did the Kenosha Kid?*[47]

45 ボストンの西に隣接する住宅地域。

46 ボストンの中心区を抜けて西へ向かうこの通りは、アメリカを動かしてきたWASP（白人プロテスタントの支配階級）の象徴として、以後も繰りかえし登場する。「ビーコン」の意味は「導きの光」。

47 「あんたが、ネバー？　ケノーシャに一杯食わされたのかよ」

□□□□□□

〝クリプトザム〟[1] とは、ドイツ国防軍最高司令部ＯＫＷとの研究委託契約によってＩＧ（イー・ゲー）ファルベン[2]が開発した安定的チロシンを特許登録した製品であり、精液に含有される、現時点［一九三四］では正体不明の因子との接触において、当該チロシンの、メラニンすなわち皮膚色素への転化を促進する。[3] 精液の存在がなければ〝クリプトザム〟は不可視に留まる。この分野で使用しうるいかなる試薬も〝クリプトザム〟の可視色素化を生じさせることはない。暗号文書への適用にあたっては、性器膨張ならびに射精を確実ならしめる刺激が同時に渡るように計るとよいであろう。受信者の性的嗜好を完全に把握しておくことは極めて有用であると思われる。

——ラスロ・ヤンフ教授博士
「クリプトザム」（宣伝用小冊子）ベルリン、アグファ社、一九三四年

クリーム色の厚紙、GEHEIME KOMMANDOSACHE[4] と黒い文字で銘うった下に、フォン・バイロス[5]かビアズリー[6]の作風を思わせる、細いペン先できめ細かく描きこまれた絵。描かれている女はスコーピア・モスムーンとうり二つだ。いつか一緒に住みたいとふたりで語ったことはあっても実際目にしたことはない部屋は、フロアから一段下がったところにプー

1 ギリシャ語の「クリュプトス」（隠れた）と（ドイツ語の）「ザーメン」を合体させた、ピンチョンの造語。

2 一九二五年、化学・繊維・染料・薬品関連企業六社の合併によって成立。有機化学産業における世界最大級のコンツェルン（一九三八年の従業員数二十一万八千）を形成しつつ、ナチ党と結託しその戦略を支えた。この小説の隠れた主役ともいえる存在。

3 チロシンとメラニンの働きについては、283ページに註記した。

4 ゲハイメ・コマンドザッヘ＝極秘指令文書。

5 フランツ・フォン・バイロス侯爵は世紀末ド

んがあり、天井からは網のドレープがテントのように下がる　まさにデミル映画の世界だ。オイルを塗ったほっそりとしたお付きの女性が控え、頭上に真昼の光が降り注いでいる気配がある。厚い紗の間に透かしみえるスコーピアはベルギー・レースのコルセットと、黒のストッキングと、靴を履いたままの姿。彼女のこの姿態を彼は何度想像したことか。ただ一度も。

そう、もちろん一度も。彼女に漏らしたりはしてない。誰にも告げたはずはないのだ。英国で育った若者の常として、彼もある種の"物"に反応して勃起し、おまけにその反応を恥と感じるよう条件づけられているのだから。どこかに自分の調査書類が存在するのだろうか？　思春期以来、彼が見たり読んだりしたすべてが〈かれら〉に――〈かれら〉？――モニターされていたのか……それ以外どうやって〈かれら〉はこんな情報をつかむことができるんだ？

「たまってて」彼女がささやく。オリーヴ色の太腿をそっと撫でる指先。コルセットのトップからは露わな胸がこぼれ出そうだ。顔は天井を向いているが、目はしっかりパイレート自身の目に向けられている。欲情した切れ長の目。長い睫毛の向こうでキラリとする二つの点……「あの人とは別れるわ。ここでふたり、暮らしましょう。ずっとベッドの中で愛しあうの。わたしはあなただけのもの。ずっと前からわかってた……」舌先が小さくとがった歯を舐める。すべての光が集まる中心に巻毛のデルタがある。彼の口腔内に、例の味覚が広がりだして……

おっと、あぶない。ズボンから引きだした瞬間にはもう。まわり中に飛びちらせてしまっている。だが、大丈夫だった。絵と一緒に封筒に入っていた白紙の紙になすりつける

インの春画のほか、ダンテの『神曲』の挿画などでも知られる。

6 アール・ヌーボー期を代表するイギリス画家のひとりオーブリー・ビアズリー。今も人気の作品として『サロメ』の挿画、『ヴィーナスとタンホイザー』の挿画など。

7 セシル・B・デミル監督の『クレオパトラ』（一九三四）への言及だ。

だけの量は確保できた。真珠光沢の膜を指で塗りひろげる。おもむろに、ニグロの褐色となって浮かんでくる――彼に宛てたメッセージだ。シンプルな換字式のニヒリスト暗号だ。[8] およそのメッセージは暗算で了解できた。キーワードのいくつかは数字の並びのまま言い当てられる。およそのメッセージは暗算で了解できた。時間、場所、助けの依頼。[9] その暗号は燃やす。大気圏外から落ちてきて、零度の子午線から取り出されたメッセージは燃やして、絵のほうは取っておく。手を洗う。前立腺が疼く。事の全体が見えているわけではないのだ。どこかで援助を得られるわけでも、訴えでる場があるわけでもない。言われるまま出かけていってその諜報員を連れもどすだけ。このメッセージは最高レベルからの命令と同等なのだ。

遠くから、雨を通して、いままたもう一機、ロケットが炸裂した。きょうはもう三機目だ。空がヴォータンの激怒の軍隊[10]のように暴れまくっている。

パイレート自身のロボットの手が、必要な証票や書類を求めて、引き出しとフォルダをまさぐる。今夜は眠れないぜ。途中で一杯のコーヒーかシガレットを口にする機会すらないだろう。なぜなのだ？

8 一八八〇年代に帝政打倒を謀るロシアのニヒリストが使った、数字による暗号。

9 誰がヘルプを求めているのか、そのメッセージがなぜV2内のシリンダーに入っていたのか、やがてヒントが得られる。

10 ヴォータンは北欧神話のオーディンに相当する、ドイツ神話の戦争の主神。

□□□□□□□

ドイツでは、終わりが近づくなか、壁にいつもの言葉が満ちる。WAS TUST DU FÜR DIE FRONT, FÜR DEN SIEG? WAS HAST DU HEUTE FÜR DEUTSCHLAND GETAN?[1][2][3] "白のおとずれ(ホワイト・ヴィジテーション)"の壁の言葉もいつも同じ——氷である。日射しのない日の、氷のグラフィティ。黒ずむ血のような煉瓦とテラコッタに透明な皮膜をかけ、この使用法の忘れられた旧式の装置を、ひとつの建築ドキュメントとして、透明な博物館的プラスチック・シートで気象の作用から覆ってしまおうというのだろうか? まちまちな厚さをなす氷の凹凸が刻むメッセージは、冬の盟主たる土地の〈氷師(グレイシスト)〉らが読み解き、彼らの論集で議論すべき事柄だろう。海岸よりの、坂をのぼっていくほうには、いにしえの修道院が建っている。風吹きつける窓にまるで光のように雪がはり付いているその建物の屋根は、そのむかしヘンリー八世の躁病的気まぐれによって破壊されたままだ。[4] 残った壁はいまも建ちつづけ、聖人なき窓穴とともに塩の風を和らげている。風の走る草の床は季節に応じて緑からブロンドへ、そして白へ、変化をリプレイしつづける。パラディオ建築[5]の屋敷の向こう、恨みのこもるうつろな薄闇に見える景色といえばこれだけだ——修道院か、さもなくば大きな

1 あなたは戦地のために何をしているか。

2 勝利のために

3 ドイツのため今日あなたは何をしたか。

4 ローマ教皇と対立して「国王至上法」を成立させたイングランド王ヘンリー八世により、一五三〇年代後半、四百近くの修道院が王のもとに没収された。

緩な勾配のなだらかな登り坂。崖は海を視界から隠しているが、日によっては潮の具合で、嗅覚が海をとらえることがある——太古にまで遡る先祖の悪臭もろともに。一九二五年のこと、"ホワイト・ヴィジテーション" に収容されていたレグ・ル・フロイドという患者が逃げだした——町を抜けて坂を駆けおり、崖の淵に立ってふらふら揺れた。髪の毛も、病院の寝間着も風になびき、何マイルもの南海岸のコーストラインの視界が揺れた。右も左も突堤と遊歩道、それが消えていく先は海から立ちのぼる霧のなか。ル・フロイドを追う野次馬の、先頭を走るスタグルズ巡査が叫んだ。「飛びこむな」

「そんなことは頭にない」ル・フロイドは海を見つづける。

「だったら何をしに来た、言いたまえ」

「海を見たかった」ル・フロイドが説明する。「海を見たことがないんだ。海とぼくとは、ほら、血がつながってる関係なのに」

「ああ、そうかい」と、その間にも、抜け目なく距離をつめているスタグルズ、「ご先祖さまに会いにきたってわけだ。たいへんけっこう」

「〈海の王〉(ロード・オブ・ザ・シー)の声が聞こえる」ル・フロイドは、驚異にうたれて叫んだ。

「ほう、そうかい。で、その王様の名前はなんてえの?」ふたりとも顔からしずくを垂らしながら風に向かって叫んでいる。

「知らないよ。何かいい名前あるかな」

「バートってのはどうだ」と応えながらも、この巡査、右手で相手の左肘をつかむのだったか、左手で右肘をつかむのだったかを思いだそうとしている。

ル・フロイドが振り向く。その目が初めて、追ってきた男の姿と、背後に群衆をとらえ

5 十六世紀のベネチアの建築家アンドレア・パラディオに由来する、古代ローマを模した様式。

CamScannerでスキャン

る。彼の目が丸く、穏やかになる。「バートか、いいだろう」と彼は言って一歩下がり、虚空を踏み抜く。

イック・リージスの住民が〝ホワイト・ヴィジテシーョン〟について知る、気晴らしの逸話といえば、これがひとつあっただけ。ブライトン市からあふれ出てくる、ピンク色に日焼けしたりソバカスだらけの海水浴客を眺め、フロッツァムとジェッツァム[6]が日々の世相を歌にするのを聞き、落日の遊歩道を歩く夏の日、写真機の絞りは海の光のまぶしさに応じて閉じたり開いたり、風は身に気持よく、凪は空をやさしく見せる、眠れぬ夜はアスピリン、そんな繰り返しからの解放を土地の人たちに提供してくれた唯一つのエンタテインメントが、ル・フロイドの身投げの話だったのだ——この戦争が始まるまでは。

ポーランドの敗北を受けて[7]、突如として大臣らを乗せた車列が、排気音も漏らさず、帆船(スループ)が漂着するようにしずかに、〝ホワイト・ヴィジテーション〟へ乗りつけた。一夜を通して現れつづけたクロームの光りもない黒塗りの車体は、星明りのもとでは黒光りしたけれども、闇夜であれば、いまにも正体の割れそうな顔々をカモフラージュし、遠く記憶の底へ沈めてしまう。……そしてパリが陥落[8]したとき、この崖岸にはアンテナを大陸に向けたラジオ送信局が建った。アンテナ自体が厳重に警備され、陸線通信のケーブルは草地を越え建物までミステリアスに続いていたが、その建物の警備がまた厳しく、特別な恨みを抱く、鞭打たれ、腹をすかし、人が近づけば無条件に飛びかかって殺す犬どもが、昼夜を問わず巡回していた。お上(かみ)のトップの誰かが、さらに高く舞いあがって、プツンとイカレてしまったのかね? うちの陣営は〈ゲルマンの鬼畜〉の士気を挫くために、狂人のめちゃくちゃな思考とか罵倒の言葉とか、放送で浴びせているのかい? そりゃまるでスタグ

6 Mr. Flotsam and Mr. Jetsam の芸名(日本語にすれば「ガラさん・クタさん」か)で一九二〇年代から活躍した、自作のコミックソングを歌う二人組。

7 一九三九年九月一日、東部へ侵攻したドイツ軍は、連合軍の反応が遅れるなか、同月のうちにポーランドを制圧した。

8 一九四〇年六月十七日。

9 架空のキャラクター。

10 ヤーコプとヴィルヘルムの兄弟の仕事は、童話の収集や辞典の編集に留まらない。ヤーコプがゲルマン民族の神話的過去を記述した大著『ド

ルズ皇香の話とそっくりだ。ディープでさ、もの珍らしい。答えはイエス。お上はそれ全部やっている。いやもっとだ。

〝ホワイト・ヴィジテーション〟の人に聞いてごらんよ。BBCの饒舌なマイロン・グラントン[9]のマスター・プランは何かって。その溶けたタフィーのような声、覚えてるね、何年も、ブークレ織りの布のすり切れたラジオ・スピーカーからイギリス人の夢の中へ、フォッギーな古い頭へ、半分聞いていない子供たちの心へ染みこんでいた。・・・グラントンは、ずっと待っていた。最初のうちは、データがなかった。自分の声を放つしかなかった。なんのサポートもなしに、なんとかゲルマンの心に響くテーマを工面しなくてはならなかった――捕虜の尋問文書、外務省の手引書、グリム兄弟の著作[10]、自身の旅行者としての記憶を手当たりしだい織り交ぜて（ドーズ時代[11]の若き不眠の日々の旅の記憶断片といえば、ライン南岸の斜面を彩る、陽光に緑まぶしい葡萄畑と、夜は、もうもうとした煙草の煙のなか、ウーステッド地がきらめくキャバレー、カーネーションが連なるような長いフリルのついたサスペンダー、細やかに交差するライティングに照らされた絹のストッキング・・・）。だが、ついに米軍が来て欧州連合国派遣軍最高司令部（SHAEF）ができあがり、たまげるほどの予算が流れてきた。

その計画の名は〈ブラックウィング作戦〉。準備に五年もかけた、凝りに凝った計画だ。誰ひとり、グラントン自身でさえ、自分が考え出したなどとは言いだせない。「真実の戦略[12]」という名前で、基本のガイドラインを敷いたのはアイゼンハワー将軍自身。物語を吊すための〝リアル〟なフックがないといかん、と将軍は主張した。銃弾の穴だらけになった処刑場の壁にフックを掛けて、そこに物語を吊るせとばかりに。そうしたところへ、S

イツ神話学」（*Deutsche Mythologie*, 英訳 *Teutonic Mythology*）は、作家ピンチョン自身の主要情報源となっている。たとえば、ル・フロイドの語る「海の王」の名が Bert であるのは、おそらく同書で触れられている、船乗りをみちびく白き女神 Bertha からの連想と思われる（『GRC』）。

11 チャールズ・ドーズは、合衆国の予算局長官として、一九二四年「ドーズ案」によって第一次大戦のドイツ賠償方法を画定し直した。この方法は一九二九年に再度見直される。

12 ファシスト政権のプロパガンダに対抗するには「真実」を流すのが一番、というアメリカの宣伝戦略のモットー。

OEの〝海賊〟プレンティスがみずから仕入れた機密をもってきた。ドイツには本物のアフリカ人がいる。旧独領南西アフリカ、ヘレロ族の男たちが、秘密兵器プログラムに従事しているというのだ。マイロン・グラントンはふとひらめいて、ある晩、完全なアドリブでマイクに向かった。以下の放送が、最初の〈ブラックウィング作戦〉の発令へとつながったのである。「かつてドイツは、厳しいけれども慈愛に充ちた養父のようなやり方でアフリカ人を扱い、必要だった折檻が死をもたらしたこともよくありましたね。覚えてますか？　しかしそれは遠い南西アフリカでのこと、[*13]あれから一世代が経ちました。いまヘレロ族は養父の家で暮らしています。お聞きのみなさんの中にも、ご覧になった方がおいででしょう。いまヘレロ族の人間は消灯時刻を過ぎても眠らず、眠れる養父を見守っています。おのれの肌の色である夜に守られ、その姿は見えません。何を考えているのでしょう？　あなた方の、黒い、秘密の子供たちは今夜どこにいるのでしょう？　いまこの瞬間に何をしているのでしょう？」さらに、この〈ブラックウィング作戦〉は、一人のアメリカ人を見いだした。スロースロップ中尉が、軽い昏睡状態に入って、アメリカの人種問題の深層を照らす貴重な次元のデータを提供してくれたのだ。終わりのころには、外国人の士気に関するデータがどんどん入ってくるようになった。クリップボードを手にしたアメリカの調査班が、真新しい防水ブーツやゴム長をきしらせながら、柔らかい雪の衣に被われた、解放された破壊の地から摘んできたというデータ——それは、古代人が信じたように、嵐の日の稲妻の襲撃によって生まれた真実のきのこ（トリュフ）である。その海賊版コピーが作られ、〝ホワイト・ヴィジテーション〟でも活用可能となった。プロパガンダのための組織PWDのアメリカ人と関係する男の仕事である。〈シュヴァルツコマンド〉という名を提

13　一九〇四年、反乱を起こした南西アフリカの民族に対するフォン・トロータ将軍の無慈悲な対応は、現地人虐待史の中でも特筆すべきもの。ピンチョンは『V.』で、独領南西アフリカの荘園屋敷を舞台とする「モンダウゲンの物語」（第九章）を書いたが、その後日談を『重力の虹』が引きついでいる。

CamScannerでスキャン

奪ったのが誰なのかははっきりしない。マイロン・グランドンは「激怒の軍団」という意味で、「ヴュテンデ・ヘーア」[14]というネーミングを気に入っていた。大神ヴォータンを頭に、夜の荒野を猛り狂って餌を追う霊たちこそ、その名にふさわしいと思った。だが、北方の神話だから南独バイエルンでは充分な効力が得られないかもしれないと言われれば、マイロンも認めるほかはない。

効力というのは、じつにアメリカ的な異端の考えだが、〝ホワイト・ヴィジテーション〟では、誰もがそれを口にする。中でも声高なのがポインツマン氏だ。しばしばロジャー・メキシコから得た爆撃の統計資料をもとにしてしゃべる。ノルマンディ上陸[15]のころには、ポインツマンはすっかり鬱の季節に入っていた。大陸での大挟撃作戦は勝利をもたらす。となると、自分がすっかり住み慣れたこの〈戦争〉の国は滅んで〈平和〉に併合され、再建の運びとなる——〈平和〉から彼は仕事の上でほとんど何も得られたことはないのだ。各種レーダー、マジック魚雷、飛行機やミサイルの予算は降りてくるが、一方で、国防戦略全体から自分の居場所が消えてしまう。自分は一時期、店を任されたということで終わってしまうのか。アブリアクション研究施設（略称ARF）を率い、一ダースほどの部下を集めたということで。バラエティ・ショーの舞台に出ていた犬の調教師と、獣医学専攻生が一人かふたり、そして非常にラッキーだったことに、大粛清[16]以前にコルトゥーシ研究所[17]でパヴロフの同僚だった亡命者のポルキェヴィッチ博士が来てくれた。犬は、毎週新しいのが十匹もくる。そのそれぞれに番号をつけ、体重を計り、ヒポクラテスによる気質の分類をし、檻に入れ、しかるべく実験にとりかかる。それから〈正典〉の共同所有者、名づけて「オリジナル・セブン」。その生き残りはみなどこかの病院に勤務し、海峡を渡

14 Wütende Heer 「激怒した一団」「狂乱の一」という意味の wütende は雷神ヴォータンに由来する。

15 一九四四年六月六日。「Dデイ」と呼ばれる。

16 一九三七年と三八年の二年間だけで、スターリン政権が処刑した〝政治犯〟の数は六十八万人以上に及んだという統計が公表されている。

17 レニングラード近郊の村コルトゥーシにあったパヴロフの生理学研究所。

って送られてくる戦闘性神経症や砲弾ショックにやられた兵士や、本国で爆弾ないしロケット・ノイローゼにかかった人びとの処置にあたっている。V爆弾の落下が激しさを増してからは、かつてなら数世代に一度くらいしかお目にかかれなかったアブリアクションに頻繁に立ち会うようになり、新しい研究の方向も多面的に開けてきているというのに、PWE[18]からの資金はポタポタと滴のようにたれてくるだけ。必死の訴えも、組織の網の目の中でかき消され、ARFに降りてくる予算では、戦争の帝都のコロニーにはなりえても、とても一国としてやってはいけない。……統計学をやっているメキシコの同僚たちは、唾液の数、体重、電圧、音のレベル、メトロノームの周期、鎮静剤の投薬量、切断された求心性神経の数、除去された大脳皮質のパーセント、麻痺、視覚聴覚の機能停止および去勢の日付と期間を図表化してくれるし、〈心霊セクション〉の連中の——世俗的な野心は持たず、黙々と我が道をゆく彼らの——協力さえ得られているというのに。

年老いたプディング准将は、この霊魂信奉者の一団とは、うまくやっていける。自身、そちらのほうにちょっと傾いているふしがあるのだ。しかしネッド[19]・ポインツマンは苦手である。この、研究費をせしめることしか頭にない男を相手にすると、ただにらみ返すのが精一杯。事務的にふるまうのにも苦労する。父親は知っているが、息子の方が背は低く、顔つきも一段と不健康だ。父親はサンダー・ブロッド連隊[20]の軍医で、ポリゴンの森[21]で腿に榴散弾の破片を受けた。七時間も静かに横たわってたっけな、助けが来ていきなり一言もなく……あの、泥と恐ろしい悪臭の中でさ、そうだよ、ポリゴンの森だ……待てよ、あの男は——あの生姜色の髪をして帽子を被ったまま寝るやつは別な誰かか、ああ、記憶が。いいか、ポリゴンの森だぞ……だが薄れていく、無数の倒木、その枯れ果てて滑らかな灰

18 45ページ注3参照。PWEが統括する数々の組織のうち心理作戦を担当するのがPWDである。

19 エドワードの愛称。

20 この架空の名は、「雷神の刺し針」とも読める。

21 ベルギーのイープルの近く。「パッシェンデールの戦い」として知られる一九一七年七月から十一月までの攻防のうち、九月二十六日に連合軍が仕掛けた攻撃の舞台。幾多の犠牲を払って得たわずかな前進も、結局押し戻された。

色になった木の、木目の渦巻きは霧が凍りついたみたいに……生姜か……雷か……だめだ、もうだめだ、消えてしまった、またもや消失。またひとつ、オー、オー……

この老准将、年齢は定かでないが、八十歳が近いことは間違いない――一九四〇年に軍に復職したのだが、戻った先は新たな空間だった。戦場ばかりではない。前線の形が毎日毎日、金色に照らされた意識の境界のように揺らめき変わる（だがここは、あまり不吉な表現は避けるべきだ、まるで彼らと同じになる……ここは「輪縄のよう」としておこう）というのもプディングには驚きだったが、それに加えて〈戦争組織〉そのものが別物だった。プディングはときどき、部下のいるのもかまわず愚痴を漏らす。「政治戦争」[22]などというところに入れるとは、どこの敵がワシをそんなに嫌っているのかと。〈戦争（ザ・ウォー）〉の組織には、次々と名前の付いたエリアができて、お互い同士協調が大事だとはいいながら、実際は驚くほどの不和の中で事が進む。体系的な死を目的とする事業では〈母なる都市（マザー・シティ）〉のコロニーができていくのだ。PWEの領分は、情報省とも、BBCヨーロッパとも、SOEとも、経済戦争省とも、そしてフィッツモーリス・ハウスにある外務省の政治諜報部とも重なりあっている。いや、もっとだ。そこへアメリカがやってきて、彼らのOSS、[23]OWI、[24]および陸軍心理戦部門との調整が必要となった。やがて英米合同のSHAEFにPWDができて、ここからの報告は直接アイゼンハワーに上げることになった。それらの全体を統轄するのが、ロンドンの情宣協同委員会であるのだが、これは実際の力をまるで持っていない。

誰がこの、はびこるイニシャルと実線点線の矢印、大小の記入枠、印字され記憶される名称の迷路を、迷わず進んでいくことができるだろう。アーネスト・プディングには無理

22 軍事行動に対し、プロパガンダや心理作戦による戦いを「ポリティカル・ウォーフェア」という。

23 Office of Special Services＝戦略事務局は、一九四二年にウィリアム・ドノヴァンを長官として発足。欧州戦線に勝利した後は、〝東部富裕層の共和党員〟であるアレン・ダレスを長官としてCIAに生まれ変わった。

24 Office of War Information＝戦時情報局。ニュース配信とプロパガンダ活動の拠点として数多くの支局があった。

CamScannerでスキャン

だ。それができるのは、頭に緑のアンテナをつけた新人類の若造たちだけだろう。彼らは権力の発信波をキャッチし、利用する才がある。アメリカの政治言語に強く、OWIのニューディール推進派とOSS戦略事務局のバックにいる東部富裕層の共和党員だってちゃんと見分けられる。他人の心の奥底も、弱点も、茶飲みの習慣も、性感帯も、それらの情報をみな自分の脳内ファイルにしまっておいて、いつかそれを利用できる日を待っている。潜在的に利用可能なすべての人の情報をだ。

アーネスト・プディングは〈命令の連鎖〉を文字通り信じて育った世代である。ちょうど何世紀か前の聖職者が〈存在の連鎖〉[25]を信じたのと同じこと。新しい結合形態は彼にはワケがわからない。戦場で彼が偉大な勝利をつかんだのは一九一七年、ベルギーはフランダース地方のイープルの塹壕戦。毒ガスのただよう世界最終戦の雰囲気をたたえた汚物だらけの闘いだ。そこで、無人地帯の輪縄の線を、最大で四〇ヤード前進させた――隊の兵力損失率はたった七割に抑えて。[26]そして世界が大不況の時代を迎えたころ引退し、年金生活に入る。デヴォン州の人気のない屋敷の書斎で、昔の戦友の写真の、誰ひとり正面を正視していない顔に囲まれ、退役将校お気に入りの暇つぶしである「組合せ論」[27]に、熱気ただよう真剣さをもって取り組んでいた。

ヨーロッパでのバランス・オブ・パワーの探究に趣味の時間のすべてを捧げることになったのも、かつて自分がフランダースの悪夢のなか、目覚める希望も失われたまま、長期にわたる均衡喪失の病理（くるしみ）にみずから堪えたからである。いきなり書きだした大著のタイトルが『ヨーロッパの政治において起こりうること』[28]、その第一章はもちろんイングランドだ。「はじめに」と彼は書いた、「いわば〝ベレシス〟――ラムゼイ・マクドナルド[29]が死ん

25 神を頂点に、天使、人間、動植物を経て鉱物に至る存在のヒエラルキー。

26 イープルの、泥と糞にまみれた塹壕戦は、前後三回。一九一四年、一五年（このときはドイツ軍が毒ガスを使用した）の戦いに続き、一七年の「第三次イープル会戦」は、地名から「パッシェンデールの戦い」と呼ばれ、大雨による沼地の中で両軍あわせて数十万の兵士を失いながら、決着はつかなかった。

27 「順列・組合せ」などを含む数学の分野。

28 ヘブライ語の旧約聖書・創世記の最初の言葉。

29 労働党党首として

だと仮定する」その死によって引き起こされうる政党間の提携と閣僚ポストの可能な組み合わせの議論を終えたとき、ラムゼイ・マクドナルドはすでに故人となっていた。「無理だな、これは」――というのが毎朝執筆にかかる前の彼のつぶやき。「書いているそばから状況が変わっていく。なんと変わり身が早いのだ」

ドイツ軍の爆弾がイギリス本土に落ちてくるころまで事態が進行したとき、プディング准将は、みずからのオブセッションを放り投げて、もう一度国のために働くことを志願した。もしそのときに行き先が〝ホワイト・ヴィジテーション〟になることを知っていたなら……そりゃ、戦場行きの指示がくるとはさすがに思っていなかったが、諜報関係の仕事とかもあるって話じゃなかったか？　その代わりに得たのが、使われなくなった精神病院と、形ばかりの患者が数人、誘拐してきた犬の大群、心霊研究家と寄席芸人と無線技師と[30]クーエ療法信奉者、[31]ウスペンスキー信奉者と[32]スキナー箱の実験者と[33]ロボトミー手術愛好家とデイル・カーネギー崇拝者の集まりだ。平和な時代が続いたら、それぞれの失敗を味わっていたにちがいない、マニアックな趣味の研究から、開戦とともに飛びだしてきて、さあて、プディング准将は、どれだけの資金を取ってきてくれるだろうかと期待している。〈戦争〉だもの、希望がもてるぞ、〈戦前〉の田舎暮らしとは違うんだ、と。その彼らに対して――犬に対してもだ――プディングは、旧約聖書的ともいうべきスタイルで対応するしかない。スタッフ内部の裏切りにあっているのだと想像し、困惑と傷心を抱えて――

高い壁の無数の窓硝子から雪明かりが差してくる。ダークな昼の褐色のオフィスの中に、チラリ、チラリ、炎のような光が揺れる。アシスタントが暗号化する。目隠しをした霊験者の[34]ゼナー・カードの図柄を言い当てる声が、隠しマイクに収まる。〈ウィーブ……ウィ

一九二四年に初めて首相となった後、第二期を経て、大不況の時代に挙国一致政府の首相を三五年まで務めた。三七年に死去。

30　エミール・クーエ（一八五七－一九二六）はポジティブな自己暗示による精神療法を提唱したフランスの心理・薬理学者。

31　64ページで言及された神秘思想家。

32　アメリカのB・F・スキナー（一九〇四－一九九〇）は、迷路のネズミを[illegible]

「ーヴ……ハリス……スター……」地下室のスピーカーに流れるその声を、〈心霊セッション〉の誰かが記録する。このアードハウスの建物は隙間だらけだ。冬の冷気が容赦なくしみこんでくる。秘書たちは、ウールのショールを羽織り、ゴムのオーバーシューズを履いているが、かちかち鳴ってるのは、タイプライターだけじゃない。彼女らの歯も一緒だ。セシル・ビートンが撮ったアスキスの肖像写真のような挽み姿を見せてすわっているのはオード・チャイテス、紅茶とロールパンの夢を見ているのか。

ARFの棟では、さらわれてきた犬が眠り、体を掻き、やさしく接してくれたかも知れない人間たちのほの暗い匂いを思いだし、ネッド・ポインツマンのオシレーターとメトロノームを滴も漏らさず聞いている。カーテンが引かれた中に、ドアの向こうから流れこむ光はわずかだ。分厚い観察窓の向こうに見える、白衣姿の技師たちは海中にでもいるかのように、白衣も緑がかって、いつもよりゆっくりと翻る。……ある種の無感覚が、暗転の気配が、あたりを包む。毎分八〇のメトロノームがいきなり木の反響音を響かせると、実験台につながれた犬のヴァーニャの唾液が垂れ始める。メトロノーム以外の音は押さえこまれる。ツボを支える梁は部屋に敷きつめた砂に埋もれ、サンドバッグと藁と死んだ男たちの制服が窓なしの壁の間の空間を覆っている……かつてここでは収容された狂人たちが腰を下ろし、顔をしかめ、酸化窒素の匂いを嗅ぎながらケラケラ笑い、Eメジャーのコードが G シャープ・マイナーに転調するのを聞いてむせび泣いた。それが砂漠のキューブに、砂の部屋に変わったいま、鉄の扉で密封した部屋の中は、メトロノームが絶対的に支配する。

犬のヴァーニャの顎下腺の管は、もうずいぶん以前に、首の付け根のところから引っ張

33 アメリカの著述家（一八八八〜一九九九）。『白い聖母』などのベストセラー作家として知られる。

34 82ページ註11。

35 ファッション写真家でコスチューム・デザイナーのセシル・ビートンが、イギリスのアスキス首相の妻を撮って『ヴォーグ』誌に載った挽み向きの写真。

り出され、別の管に縫合されている。唾液を集める漏斗は、伝統にしたがい、松脂と酸化鉄と蜜蝋をまぜたオレンジ色の〈パヴロフのセメント〉で顎に固定されている。*36 負圧をかけて吸いこまれる分泌液は、ひと滴ずつ、ぎらつく管を通って赤い油との界面をすこしずつ右へ押しやり、管に刻まれた目盛りによって垂れた滴の数を示す——実験条件は自由に変えられるから、一九〇五年のサンクトペテルブルク*37での数値がここでそのまま再現されるわけではないのだろう。それでも、この実験室で、犬のヴァーニャを、八〇ビートのメトロノームで刺激するとき、唾液の滴りおちる数はそのつど予測可能なのだ。

ヴァーニャはいま、〈均等相〉にある。これは〈超周辺相〉の最初の段階であって、彼と外界の界面には、ほとんど気づくことのない薄膜が広がっている。内的世界にも外的状況にも変化はないが、そのインターフェイス——犬の大脳皮質——が、予測のきかないやり方で変わっていってしまう、というのが、この「トランスマージナル」な現象の奇妙なところなのだ。もはやメトロノームのボリュームは関係ない。刺激を強くしても、強い反応が得られるわけではなく、したたる滴数には変化が出ない。消音した部屋の遠くの隅にメトロノームを持って行っても同じ。箱の中に入れても、「Memories of Brighton」と綴った文字をミシンで刺繍した枕を被せても同じ・・・そればかりか、そのチクタクをマイクロフォンで増幅し、一拍一拍、叫ぶように響かせても、垂れおちる唾液に変化はないのだ。管の中の、透明液と赤い液との境界線は同じ値に留まりつづける。

ウェブリー・シルバーネイルとロッロ・グローストが抜き足さし足、廊下を進む。まだ吸える可能性のあるシケモクを求めて、あちこちの部屋へ忍びこむ。いま研究室には人気はない。我慢強い、または自虐性的な職員はみな、よぼよぼの准将相手にいつもの儀式を

36 『大脳半球の働きについて』第二講に解説されているパヴロフの実験環境の引き写し。英訳本 *Conditioned Reflexes* には図が載っている。

37 パヴロフは帝政ロシアの首都サンクトペテルブルクの軍医アカデミーで生理学の教授を務めていた。ノーベル生理学・医学賞受賞は一九〇四年のこと。

CamScannerでスキャン

とり行なっているのだ。

「あのジイさん、ハジをしりませーん」、ゲザ・ロージャヴェルディが、陽気な絶望調子で、両の手をプディング准将のほうへ突き立てた（彼もまた亡命者で、強度のソ連嫌い。ARF内に緊張を引き起こしている）。その弾んだ、ハンガリー・ジプシーのようなハスキーな声が部屋一面、タンバリンのように響き渡り、聴衆をそれぞれに刺激するのだが、ひとり老プディングだけはまったく動じるようすを見せず、説教壇からしゃべりつづける。この部屋は、マニアックな時代でもあった十八世紀には私的な礼拝堂として使われたところ、そのときの説教壇が、いまプディングの〈今週の講話（ブリーフィング）〉の打ち上げ台になっているのだ——老人的観点と、職場パラノイアと、（しばしば機密漏洩をも含む）戦争ゴシップと、フランダースの想い出を取り混ぜた、圧倒的な放談の銃火……空に現れた石炭箱（コール・ボックス）が唸りをあげてきみの上に落ちてくる……彼の誕生日の晩などその集中砲火（ドラムファイア）は夜の闇をミルク色に輝かせ……何マイルにもわたる砲弾によるクレーターの水たまりは侘びしい秋の空を映して……サスーン[38]少尉の戦闘拒否に関して、ヘイグ[39]が食事どきに最高の機知を発揮して語ったことにはな……流麗な緑のローブをまとった砲撃手らは今が青春の盛り……夜明け前の杏色の薄明に、道ばたで腐りゆく馬たちの姿が……置き去りにされた大砲の車輪の十二本のスポーク——泥まみれの時計だ、泥まみれの十二宮図だよ、陽光のなか、微動だにせず、さまざまな色合いの褐色に錆びついていた。フランダースの泥は踏まれて練られてほんのりゼリー状になった人糞と混じりあい、積み上がるその糞土に敷板が渡され、塹壕が掘られ、砲弾の穴があいた。四方八方、何リーグにもわたって、一面の人糞なのだよ、木の切株でさえ糞に覆いつくされ見えないのだ——ここで、留まるを知らぬ饒舌芸人

38 詩人のシーグフリード・サスーン中尉は第一次大戦の塹壕戦で負傷し、英国での治療休養中に英国を批判する反戦詩を書いた。

39 ダグラス・ヘイグ卿は、ドイツ同盟軍との塹壕戦を統帥した連合国元帥。

CamScannerでスキャン

は、旧の剣のサクラ材の説教壇が、あたかもパッシェンデールの、あの水平次元しか存在しなかった恐怖の最たる部分であるかのようにそれをつかんで揺さぶろうとする・・・プディングは停まらない。しゃべる。しゃべる。しゃべる。甜菜大根を美味しく食べるための百通りの調理法について、〈アーネスト・プディングの瓢箪サプライズ〉などという、ウリ科的にありえないテーマについて——そうさ、タイトルに「サプライズ」なんて言葉を入れるとは、サディズムもいいとこだ、腹をすかせた者はいますぐに食べたい、ビックリなんてしたくない。ポテトが出てくりゃ、その（ため息）そのポテトをガブリとやりたいと思うだけで、その中にビックリするものは入っていないという確証のほうが欲しい。ナツメグのやつなんかが「サプラ〜イズ！」なんていって出てきたら嫌だろ、ザクロか何かの真っ赤な、つぶれた果肉が中に詰まっていたりしたら・・・ところが、そういうのこそ、プディング准将お気に入りの、品格疑わしきジョークなのだ。あのとき准将、大笑いしてたね、ほら、ディナーの客が、すっかり信用しきって、ヨークシャーの練り粉で揚げたという〈穴の中の蝦蟇（トード・イン・ザ・ホール）〉にナイフを入れたときさ。ブフッ！　なんですか？　これ[40]甜菜（ビート）のリッソール？　甜菜に詰め物をしたの？　それとも、きょうは素敵なサムファイアのピューレなのか。海の匂いもする（週に一度、魚屋の太っちょの息子が、白亜の絶壁の上まで息を切らし、自転車を漕いでやってくるので、食材はそいつから手に入るのだ）。そんな異様な野菜で作ったリッソールが、そこらにいる「蝦蟇（がま）」と似ていたりするはずはないのだが、戯歌（リメリック）に出てくる「キングズ・ロードの若者たち」が「関係を持つ」ような、堕落した、邪悪で鈍感な輩とは似ていなくもない。プディングはこういった調理法を何千と知っていて、恥じらうでもなく、ＰＩＳＣＥＳの連中に教えて回るのだ。そればかりか、この毎週の独演会では

40　海辺に密生する緑葉。

CamScannerでスキャン

あとのほうで、「肩にイーグルをつけた大佐と、膝にチキンを抱いた兵卒、きみはどっちになりたいの」[*41]の歌が出てくる。それを、八小節ぶん歌うのだ。それが終わるとおそらく、予算取りの困難に関しての具体例に立ち入った長話が始まる。それがどれもエレクトラ・ハウス・グループ[*42]すら登場していない大昔の話なのだ・・・ヘイグ元帥を非難する連中を相手に自分は『タイムズ』で大論争をやったんだとか・・・

みんなただ、すわっている。黒ずんだ、鉛の交差する高窓の下にすわって、老人が愚行にふけるに任せている。犬の研究班は、部屋の一隅を占め、メモを回し体を傾けささやいている（彼らは策謀する、その策謀はけっしてやまない）、心霊セクションの連中は、きれいに分かれて逆サイドに陣どる——まるで何かしらの議会をやっているかのよう・・・各自がみな何年も同じ座席、同じ角度で、老人が肝斑のシミに染まった肌を赤らめ熱弁するのに相対している。その両翼に、パワーの均衡を信じる第三の信念が、党派をつくらずに広がっている——ここ〝ホワイト・ヴィジテーション〟になにがしかのパワーがあったとしての話だが。

ロージャヴェルディ博士は、「ゲームを上手に進められれば」可能性も充分あると睨んでいる。問題はサバイバル、その一点。対独終戦（VEデー）という恐るべきインターフェイスを通過して、感覚も記憶も現在のまま、真新しい〈戦後（ポスト・ウォー）〉へいかにして移行するのか。PISCESが、やかましい他の家畜どもと一緒に、叩きつぶされることがあってはならない。光が焦点を結ぶように、全員を集結し、終戦の向こうの数知れぬ年月へと導いていくだけの強力なリーダーまたはプログラムが出現しなくてはならない。それも今すぐ。ロージャヴェルディとしては、リーダーよりもプログラムであってほしい。理由は、いまが一九四

41 一九一八年のヒット曲で、第二次大戦中にもリバイバルした。イーグルは大佐の紋章、チキンは「女の子」の意味。

42 旧イースタン電報会社が、一九〇二年にウォータールー・ブリッジ近くの〈エレクトラ・ハウス〉に移り、この名で呼ばれるようになった。

た生まれるかだ。闘争、からみ合う死と暴虐と破壊の背後に、リーダーの原理というものがあんなに広く感じられてきたろうか。しかし人格というものが、抽象化された権力によって置き換えられるのなら。企業で開発するテクニックを活用して、国家自体が、より合理的に生きていくことができるのではないだろうか。〈ポスト・ウォー〉の時代にもっとも熱く求められること。それはカリズマという恐ろしい病のはびこる余地を消しさること…われらに時間と余力があるうちに。カリズマの合理化が進展することではないか[43]…

スロースロップ中尉という人物を焦点にした最新のプロジェクトに関しても、ドクター・ローシャヴェルディは、いまの論点こそが重要だという意見だ。被験者の調査書にある。大学時代以来のすべての心理テストは、病的性格を示している。〝ロージィ〟博士は、しゃべりながら強調のためファイルを手で叩く。そのたびにスタッフ用のテーブルが震える。「たとえバ、この男ハ、MMPI[44]の偏向値ガ、フツーじゃナイ。セイシンの異常へ、ビョー的な状態への傾き、ツネに大きいデス」

だが牧師のドクター・ポール・ド・ラ・ニュイはMMPIがそもそも嫌いだ。「ロージィ、対人関係の特徴を示す尺度って、ないんだろうか？」鷹の鼻がまさぐるよう、目線は落として柔らかな人当たりを演出する。「ヒューマンな価値の尺度というのかな…信頼、正直、愛といった——ないものねだりだったら悪いけど——宗教的な尺度というのは、もしかして、ないものかとね」

そりゃ無理だよ、牧師さん。MMPIが開発されたのは一九四三年ごろ、戦争のまっただ中で生まれた鬼っ子なんだ。牧師のポール・ド・ラ・ニュイが「より人間的」と感じるようなテストには、三〇年代初期のオールポートとヴァーノンの「価値についての研

43 社会学者マックス・ヴェーバーは権力の三つの支配類型として、①君主専制、②官僚支配、③カリズマ、を分類し、カリズマへの熱狂が冷めて官僚支配に移行することを「ルーティン化」または「合理化」と呼んだ。

44 ミネソタ多面人格目録。46ページ註4。

究」[45]とか、一九三五年にフラナガンが改訂した「バーンロイター人格目録」[46]とか、戦争の前の時代のものにはある。しかしMMPIが測定しようっていうのは、その人間が良き兵士に向いているかどうかってことだけなんだから。

「今の時代は、牧師さん、兵士の需要がすごく高くてね」ポインツマン氏がつぶやく。「いや、彼のMMPIのスコアがあまり重視されるのはどうかと言ってるだけで。あれはとても限られたもんでしょう。人の人格全体の広い領域を切り捨てていませんか」

「ダカラこそです」ロージャヴェルディが飛びついた、「ワレワレはスロースロップに、まったくチガった種類のテストをティアンしています。ワレワレがいまキカクしてるのが"投影"テスト。ロールシャッハのインクのシミは有名ですね。ようするに、コウゾウ化されていない刺激、もわっと形のない経験を与えると、被験者のほうでそのうえにコウゾウをアテがおうとしますよ。無形のもの、いかにコウゾウ化しようとするかという点に彼の心のニーズとホープが現れる――そしてかれの夢と空想について、マインドのもっとも深い部分のありさまについて、手がかりを与えてくれます」眉毛が分速一マイルの速度で動いている。手振りは異様なほど流麗で優美――これはきっと意図的なものだ。いや、自分の国の出身者で一番の有名人[47]のしぐさを活用しようとするのも無理からぬこと――もっともそれには、悪い副作用が避けがたく付いてまわる――"ホワイト・ヴィジテーション"の北正面の壁を、頭を下にして這いおりる博士の姿を目撃したなどという証言がスタッフから飛びだしたり。「だから、ワレワレも、牧師さんと、同意見。MMPIのようなテストは、この意味で、不テキトー。コウゾウある刺激を与えてしまうと、被験者は、反応をいつわることもできる――意識的に、ウソつくこと、無意識のうちにヨクアツすること

45 一九二〇年代に作られたこの人物の類型づけには「理論的」「経済的」「美的」「社会的」「政治的」「宗教的」の六項目が性向のカテゴリーとして使われた。

46 一九三一年にスタンフォード大学のバーンロイター教授が開発。「自立性」「内向 - 外向」「支配 - 服従」「神経症的傾向」に関して測定。それを精緻化したジョン・C・フラナガンは戦時期に空軍に所属し、パイロットの適性検査プログラムを主導した。

47 ハンガリー出身の俳優、ベラ・ルゴシのこと。トッド・ブラウニング監督の『魔神ドラキュラ』（一九三一）で、ドラキュラ伯爵のイメージを決定づけた。

[illegible]投影という方法を、使うならば、被験者が、意識と無意識で何をしようと、妨害されない。ほしい知識、手に入ります。ワンワンは手綱を握ったまま。被験者は、ジブンをさらして見せるだけ」

「どうも、あなた好みの世界じゃないようですね、ポインツマン」と、口元をほころばせてドクター・アーロン・スロースターがいう。「あなたがたが使う刺激は、構造化されたやつですよね」

「こういうのにも、一種恥辱的な魅力があるのは、感じられるね。どうだろう」

「どうだろうって、やめときましょうよ。あなたの繊細なパヴロフ的な手さばきを、この実験から完全に引っこめるって、そりゃいかんです」

「完全にとは言っていないよ、スロースター君。ま、君からその話が出たので言うのだが、われわれは同時に非常に構造化された刺激を与えることも考えている。そもそもわれわれの関心を掻きたてたのと同じ刺激をね。落下するドイツのロケットに、スロースロップを晒そうと思うのだ……」

頭上、型板づくりの石膏の天井は、メソディスト派の解釈によるキリスト王国の図柄で埋まっている。ライオンが子羊と一緒に寝そべり、紳士と淑女の、羊飼いと乳しぼりの娘の腕の中や、足下に果物があふれる。どの生き物も表情がふつうでない。弱い者が冷笑し、強い獣は鎮静剤を打たれたよう、人間たちは互いの目を避けている。だが、〝ホワイト・ヴィジテーション〟で常軌を逸しているのは、その天井ばかりではない。ここは建築的悪ふざけの見本のような建物で、食糧貯蔵室は、今や理由を知るよしもないが、さながら小さなアラビアのハーレムといった趣向で、絹と雷文細工と覗き穴だらけだ。書斎のひとつ

CamScannerでスキャン

はある期間、家畜の遊び場として使われた。三フィート低くした床の上に敷居の高さまで泥が盛られ、そこで巨大なグロスターシャー・オールド・スポット種の豚がブーブー浮かれ騒ぎ、夏の日の涼をとり、あるいは布装の本が並ぶ壁を見つめながら自分が食われる日のことを想った。ホイッグ党員の奇天烈な趣味が、この屋敷では不健康の極みに達している。三角形の部屋、球状の部屋、迷路になるように壁を配した部屋……どこを歩いていても突然肖像画や奇形生物の標本がニュッと顔を出す。トイレのフレスコ画では、プラッシーの戦いでクライヴ率いる象の軍団がフランス軍兵士を踏みつぶしているし[48]、噴水はサロメが持ち上げる洗礼者ヨハネの頭の、耳と鼻と口から水を噴きだすものだし、床のモザイクは、モンスター人間をあしらった模様を並べている——単眼のキュクロプス、麒麟人間、半人半馬など当時人気の獣人をかたどるパターンが四方八方へ延びている。いたるところにアーチあり、小洞窟（グロット）あり、漆喰の花模様あり。壁にはすり切れたビロードやら紋織やら、バルコニーが思いもかけない場所で途切れ、頭上に樋嘴（ガーゴイル）が張りだし、その怪物の牙に、初めての訪問者はしばしば頭をぶつけて、いやらしい傷を負う。だが怪物は、大雨の日も、よだれ程度の雨水しか垂らさない。というのも雨樋が何世紀も放置されてきたため、雨水はスレートの上を狂ったように滑りおち、軒下を這い、ヒビ割れのある付柱を下り、ぶらさがったキューピッドに飛沫を飛ばし、すべての階に面しているテラコッタ、見晴らし台、粗面積みにした接合部、疑似イタリア風の円柱に、かすんだ尖塔、傾きゆがんだ煙突をつたって落ちるのだ——この自己表現の狂宴のような屋敷を、離れた場所から二人の観察者が同じように見たとしても、同じ建物を見ることはないだろう。代々の所有者が好き勝手な趣向を塗り重ねたうえに、いま〈戦争〉に徴用された。装飾的に刈りこまれた木々が車

48 一七五七年、インド・ベンガル地方でクライヴ率いるイギリスの東インド会社の軍が、ムガール帝国ベンガル太守とそれを支援するフランス勢力に圧勝、イギリスのインド支配を確立した。

進んでいく先は、唐松と樅の木が続く、砕石敷きの道路沿いに、家鴨、鶏、蝸牛、天使、障害競馬の騎手が並び、その列が淡黄褐色の沈黙へ、ため息を漏らす木々のトンネルの影の中へと消えていく。歩哨も立っている。白い帯紐をつけ、控え銃をした姿が、光覆いをつけたヘッドライトの中に浮かびあがって、きみは車を停める。林の中から、きみを食い殺すように仕向けられた犬どもが見ている。やがて夜の到来とともに辛辣な雪片がチラチラと舞いはじめる。

□□□□□□□

お行儀よくしていないと、ドクター・ヤンフのおうちに送りかえしますからね。
ヤンフ博士も、こんな子を条件づけるだなんて、刺激の無駄使いもいいところだ。
ヤンフ博士が今日いらしたでしょ、あなたのその、ちっこいのを見に。

『ニール・ノーズピッカー、侮辱の言葉、五万選』
§6・72「できの悪い我が子」
ネイランド・スミス出版[1]
ケンブリッジ(マサチューセッツ州)一九三三年

ブディング　…しかしこれは――
ポインツマン…なんでしょう?
ブディング　…なんというか、下賤な行為ではないかね、ポインツマン。他人の心をそ

1 この架空の出版社は、『怪人フー・マンチュー』シリーズに登場する警部の名前を社名にしている。

んなふうに、いじくるというのは、

ポインツマン：准将、われわれは一連の実験と探求を引き離いてやっているだけです。ハーバード大学の、合衆国軍隊の。それを下賤とおっしゃる？

ブディング：ポインツマン、ダメだ。けがらわしい。

ポインツマン：しかし彼にはすでにアメリカ人の手垢がついてるんです！　わかりませんか。なにも初物（ヴァージン）を犯そうってわけじゃないんで――

ブディング：アメリカがやるからわれわれもやれというのか。アメリカがわれわれを堕落させるのはかまわんと。

一九二〇年ごろラスロ・ヤンフ博士は次の考えを表明している。ワトソンとレイナーが〝アルバート坊や〟を条件づけて、毛皮の襟巻きをした母親を含む[2]、すべてのケバだった物に恐怖心を抱かせることができたのだったら、自分にだって〝タイロン坊や〟を使って同じことができないはずはない、その幼児の性的反射を条件づけられないはずはないと。その年ヤンフはダルムシュタットからハーバードに客員で来ていた。研究人生のまだ初期のころ、有機化学に鞍替えする（一世紀前にケクレ[3]が建築から有機化学へ移ったのにも匹敵する運命的な進路変更を果たす）前のことである。彼の研究には全米研究評議会（NRC）から、ささやかながら補助金が出ていた（欧州大戦中、将校を選抜し、徴集兵を分別するために始まった心理学的研究が継続していて、その中に位置づけられた）幼児の勃起をヤンフが研究対象に選んだのは、研究費の乏しさが理由だったのかもしれない。パヴロフのように、分泌液を測定するとなれば外科的施術が必要だった。また、ワトソンが選んだ反射反応である「恐怖」の測定には主観が入りすぎた（恐怖とは何だろう。どのくらい

2　パヴロフの古典的条件づけを人間に応用した実験で、行動主義心理学の創始者ジョン・ワトソンと共同実験者ロザリー・レイナーは、生後十一ヶ月の子アルバートを使い、白ネズミなど毛のふわふわした動物やオモチャを与える度に、鉄の棒をガンガン鳴らすことで、恐怖の対象が毛皮のあるすべてのものに及んでいくことを確認する実験を行った。実験結果の公表は一九二〇年。

3　ベンゼン環の構造を発見し、有機化学の礎を敷いたアウグスト・ケクレは、一八四七年にギーセン大学の建築科に入学後、化学者ユストゥス・フォン・リービヒの講義に接して転向を決めた。

CamScannerでスキャン

の恐怖なら「多量」と見なせるのだろう。その判断は誰が下すのだろう――恐怖とはフィールドで起こるその場限りのもの、委員会の審査判定にかけるための緩慢なプロセスを待ってはくれないのだ）当時は、計測器の環境も整っていなかった。利用できたものといえば、せいぜいラーソンとキーラーによる三変数の「ウソ発見器」どまり[4]。それすらも当時はまだ実験段階だったのだ。

それに比べて、勃つか勃たないかは二つにひとつ。実にすっきりしている。その観察なら、学生にもやらせられる。

無条件刺激＝消毒した綿棒でペニスを撫でる。
無条件反応＝勃起
条件刺激　＝x
条件反応　＝xに対し常に起きる勃起。撫でる行為はもはや不要、xの出現だけで
　　　　　　勃起は起こる。

て、そのxって何なんだい。きまってるじゃないか、かの有名な「謎の刺激」よ。何世代もの行動主義心理学専攻生を魅了してきたアレさ。学生が構内で発行しているユーモア雑誌に好んで取り上げられた。一年間の平均値で、コラムの長さにして二センチ七ミリくらい――実はその数値、皮肉なことに、ヤンフ博士の報告にある〈T坊〉の勃起したペニスの長さの平均値とピタリ同じなんだってさ。

さて、この種の実験では、幼児は条件づけを解除されるのが習わしだ。ヤンフもしかる

4　ジョン・A・ラーソンが「血圧」と「呼吸」の測定から考案した装置の信頼性を、レオナード・キーラーがトランプのマジックを使った心理操作によって高めたもの。

イ、条件反射の——パヴロフ派の用語でいうところの——〝消去〟を行ってから、その子を世に出したと、そう考えるのが妥当であろう。だがイワン・パヴロフ自身の言葉によれば、「条件反射の部分的および全面的な消去について語るだけでなく、消去の過程が反射をゼロにする段階を超えて進行する可能性を認識せねばならない。消去の度合を判断するに際して、残余する反射の強さ、または残余の非在を言うだけでは足らない。なぜなら、ゼロの彼方にサイレントな消去が存在しうるからである」（傍線はポインツマン氏による）

植えつけられた条件反射が、一個の人間の中で、二十年も三十年も眠ったまま生きつづけることが可能なのか。ヤンフ博士は消去をゼロ地点まで行っただけだったのか——幼児が刺激xに接して勃起量がゼロになるまで待って、そこで消去を止めたのか。「ゼロの彼方」の「サイレント消去」のことはどうしたのだろう。忘れたのか、それとも知っていて無視したのか。無視したとすれば何故なのか。〈全米研究評議会〉に問いただしてみたら何か答えが出てくるだろうか。

一九四四年も押しせまってスロースロップが〝ホワイト・ヴィジテーション〟によって発見されたときは——もちろん彼のことを有名な「タイロン坊や」として知っていた研究者は少なくなかった——まるで新大陸の発見のようだった。さまざまに異なる人たちが、さまざまに異なる物を発見したと考えたのである。

ロジャー・メキシコは、これを統計上の異変と見ている。しかし、統計学の基盤が少々ぐらつくのも感じている。単なる異変では揺れるはずのない深みが揺らぎだした。変だ、変だ、変だ——このoddという言葉にしても、考えてみると締めのDの舌打ちに、こんな

5 引用部を含むパヴロフのテクストは、『大脳半球の働きについて』（川村浩訳、岩波文庫）第四講で読むことができる。これは英訳（G・V・アンレップ）を訳したもの。

だから絶対零度があって、舌先が口蓋の舌止めを突きぬけて向こうへ——ゼロの彼方へ——わかってしまうような感じをあたえている。もちろん実際に超えるわけではないのだが、想像力を働かせれば、本質的に超えてしかるべきだということは理解できる。

ロロ・グローストは超感覚的な予知能力を考えている。「スロースロップはロケットが落ちる位置と時刻を前もって知ることができるのだ。いまも生きていること自体、事前の情報に基づいて、落下時間にその場所から出ていたことの証拠ではないか」と。だが、ロロ・グロースト博士の見解からは、セックスがそれにどう絡むのか、または実際絡んでいるのかどうかさえ、見えてこない。

だが心霊研究者のなかでも、最もパブロフ寄りのエドウィン・トリークルに言わせれば、スロースロップの有する能力はサイコキネシスである。すなわち自身の心的な力によって、ロケットをしかるべき場所に引き落としているというのだ。物理的に、ロケットに合図を送って——その空中での進行を仕切っているというのではないか、電気的に、ロケット誘導システム内部の信号をいじっているということは考えられなくもない。その方法はともかく、トリークル博士の理論には、セックスとの関連が含まれている。性的な〈他者〉の痕跡を抹消せずにはいられない気持ちが意識下にあって、この男はそれを、意味深くも、アナル的な色のマークで地図に表している。アメリカの小学校の教室に溢れかえっている、よくできた子を顕彰するための、あの肛門加虐性愛的なマークでね……」

スロースロップが記録している女の子との「遭遇マップ」を、みんなが気味悪く思っている。色のマークは、ロジャー・メキシコ作成の弾道爆弾落下地図と同様、ポアソン分布をなしているのだ。

CamScannerでスキャン

いや、分布のタイプが同じというだけじゃない。両者はまったく同一なのだ。ひとマスごとにピッタリ重なりあう。テディ・ブロートが撮ってくるスロースロップの「マップ」のスライド写真をロジャーの地図に重ねて映写すると、二つのマーク、女の子を示す星とロケット落下を示す丸がきれいに重なり合うのだ。

ありがたくもスロースロップはほとんどの星に日付を入れてくれていた。で、☆のマークはつねにロケット落下の前にくる。☆とロケットとの間隔は、最短で二日、最長で十日。平均で約四日半である。

仮に——と、ポインツマンが論じる——ヤンフの与えた刺激xが、ワトソン＝レイナーの実験と同様、大きな音だったとしよう。またスロースロップの勃起反射が完全には消されていなかったとしよう。その場合、彼がヤンフの実験室で味わった不気味な状況に引きつづいて何か爆音が生じれば、それに対し勃起の反応を示すはずではないか。それでいくと、V1なら理屈に合う。飛び上がるほど近い距離に空飛ぶ魚雷が飛んでくるなら、それはスロースロップを勃起させるはずだ。エンジン音がぐんぐん近づいてきてパタリと止まり、宙ぶらりんの沈黙があって、爆発。すると、ピクーンと勃起するという次第。だがそうじゃない。そうじゃなくて、この一連の流れが逆転するときにだけスロースロップは勃起するのだ。最初に爆発があり、次にロケット音が聞こえてくる。これがV2なのだよ。

しかし、ともかく、刺激はV2ロケット以外ではありえない。ロケット自体に先行してその霊が現れるのだろうか？　なんらかの分身（ダブル）が、スロースロップにとっては霊として作用しているのか。乗合バスの乗客に見られる笑顔のパーセントとかいう形で可視化されているんだろうか。ロケットの霊が、女性の月のめぐりをミステリに動かすとか？　女たち

か無料で彼に体を提供する気にさせるとか？　セックス市場もつねに揺れていて、ポルノも売春も変動しているということか。もしかして、それは証券取引所の株の上下と連動しているのか。われわれ品行方正の輩には知る由もない作用によって。前線からのニュースがかわいい股間の疼き具合に影響を与えているのか。欲望のうずきの度合は、突然の死が襲ってくる可能性に、正比例するのか反比例するのか。悔しいじゃないか。われわれの目の前に指標が存在しながら、われわれの知性にハートの細やかさが欠けていてそれをとらえられないのだとしたら……

だが、それが、もし今、ここに、この大気中にあるのだとすれば、その後かならずロケットはやってくる。一〇〇パーセントの確率でだよ。例外なし。そのなにかが発見できれば、この世のすべてが精神も含めて、堅牢な因果の決定性のもとにあることを、あらためて示すことができる。すべてに希望の余地が生まれる。この発見が、いかに重要なものであるかは、きみもわかるね。

雪の吹き溜まった大柵の列をふたりは通りすぎる。ポインツマンはグラストンベリーの手袋と子鹿色のスカーフで英国風に寒さをしのぎ、メキシコはジェシカに編んでもらったばかりのマフラーをドラゴンの真っ赤な舌のように陸地のほうへたなびかせる。本日はこの冬一番の寒さ、霜の三九度を記録した。ふたりは崖縁から人気のない浜辺へ降りていく。顔が凍てつく。波が寄せて引くたびに、残された氷の三日月の、きめ細かい肌が弱い陽の光をまぶしく反射する。ブーツを履いたふたりの男はザクザクと砂や小石を踏みつける。一年の底だ。海峡を越えてはるばる、フランダースの砲火の音がきょうは風に乗って聞こえてくる。崖の上には廃墟となった修道院が、灰色の水晶のように立っている。

6　華氏三二度（氷点）から一度下がるごとに、逆に一度プラスする言い方で、「霜の三九度」は華氏二五度（摂氏マイナス四度くらい）に相当。

昨夜、立入禁止になった町の外縁の家で、ジェシカが身を寄せ、浮遊しながらささやいた。ふたりで眠りに落ちる一瞬前に——「でもロジャー……女の子たちは？」彼女が口にしたのはそれだけだった。しかし、その言葉でロジャーはすっかり目がさめてしまった。棒のように疲れた体を横たえて、それから一時間も、女の子たちのことを考えていた。

ここは聞き流すのが一番。でもロジャーは。「エドウィン・トリークルのいうことが正しかったとしたら？　ほら、サイコキネシス説。スロースロップが、それと意識もせずに、落としたいところへ落としてるんだとしたら」

「そうなったら、きみら確率論者はとんだ騒ぎになるだろうな」

「でも……どうしてあの男なんだろう。スロースロップが訪ねた先にかならずロケットが落ちるって——」

「彼は女性に敵意があるのかもしれんよ」

「真面目に聞いてるんです、おれは」

「メキシコ、きみは本当に気がかりなのか」

「どうなんだろう。例の〝超逆説相〟というのと、何かしら絡んでるのか、と思ったのかな。たぶん……あなたの研究の真の狙いは何なのか知りたいのかもしれないですよ」

ふたりの頭上で、通常の飛行航路を大きく外して、どこか特別な目的地へ向かうB-17の編隊のエンジン音が響く。これら〝空飛ぶ要塞（フライング・フォートレス）〟*8の背後に、ひんやりとした雲がブルーの下腹を見せている。その穏やかにうねる波間にブルーの筋が伸び——ところによっては、褪せたピンクや紫の色合いも見える。……機体の翼と安定板は、雲から落ちる暗灰色（ダークグレイ）の影の中だ。胴体とエンジン室の曲線のあたりは柔らかく明るくケバ立っている。

7　一九四四年の冬至は十二月二十二日。

8　「空飛ぶ要塞 flying fortress」とは四発重戦略爆撃機B-17のこと。その後日本本土に飛来したB-29の前身で、一九四三年からドイツ本土への戦略爆撃を繰りかえした。

CamScannerでスキャン

カウリングに包まれた暗闇からスピナーが突き出て、不可視の速度でプロペラを回している。その脆そうな回転面は、空の光を受けて一様にどんよりとした灰色。飛行機はゼロの空に霜を作り霜を散らし、氷の畝を引きながら、堂々たるうなりを上げて飛んでいく。その色は雲の表面のある陰影具合と重なりあって、小さな窓と開口部は柔らかい黒となり、風防ガラスの鼻先には永遠にねじれて流れる雲と太陽とを映している。機内は黒曜石の黒だ。

ポインツマンが語っていたのはパラノイアと『対極概念』[9]の問題だった。例の〈正典〉に、彼は書き込みをしている。パヴロフがジャネに宛てた被迫害感情（サンティマン・ダンプリーズ）についての公開質問状[10]や、第五十五章「強迫観念及びパラノイアの生理学的解釈の試み」のページの余白には「！」のマークや「いかにも」との書き込みがある。一人が一ギニーずつ出しあって買い求めた共有者の七人は、この貴重な正典に書き込みはしないことを申し合わせていたのに、ポインツマンはこの暴挙を抑えることができない。闇で入手した本だった。独空軍（ルフトヴァッフェ）の空爆のさなかの暗闇でこっそり手渡された（現存していた巻のほとんどは、〈バトル・オブ・ブリテン〉の開始[11]まもなく、倉庫の中で焼失してしまっていたのだ）。売り主の顔をポインツマンは見ていない。空襲警報解除のサイレンが耳をつんざく夜明けに、男はその正典を研究者の手にあずけて消えたのだった。ものいわぬページの束は握られた手の中ですでに温まり、湿っていた……などといえばまるで稀少な好色本の話をしているようだが、粗い手組みの活字はたしかにそんな雰囲気をただよわせていた……刷ってある言葉も、その粗々しさは、まるで翻訳者のホルスレイ・ガント博士が奇妙な暗号を使って、陵辱された原文が恥辱の悦楽と悪徳の恍惚を並べたてているかのよう……そして彼の実験室にやっ

9 98ページ参照。ガントによる英訳は、idea of the opposite。

10 『条件反射学・第二巻』の第五十四章をなすこの質問状は、人間精神の異常を論じるときも「主観的」な心理学の言葉ではなく、生理学の実験的な事実に基づいた言説に依拠すべきだと主張している。

11 一九四〇年夏。

てきてはスタンドに縛りつけられる、それぞれに麗しき犠牲の犬心は、ネッド・ポインツマンにどれだけ届いたのだろう……このボンデージには鞭も杖も必要ない。メスとゾンデが、快楽の絵図を充分に飾り立ててくれるだろう。

〈正典〉に先立って出版された四十一講のレクチャーを、二十八歳のポインツマンが手にしたときは、まさに山中のヴィーナスから、抗うことのできない召喚状が届いたかのようだった――ハーレー・ストリート[*12]から離れなさい、逸脱して、条件反射研究の甘美なる迷宮へ入っておいで。と。その迷宮へ、彼は十三年ぶりに戻っていこうとしている。過去に自分が通った跡を確認し、そちこちで、若かったころの自分が両手を開いて研究に飛び込んでいった結果に直面しながら……だが彼女は警告したではないか――そうだろう？ちゃんと聞いていなかったのか――後払いで、全額支払ってもらうと。ヴィーナスにしてアリアドネー[*13]！そんな相手からいくら請求されるかは想像を超えていたが、迷路は彼ら――もうひとりの、内緒のポインツマンを、みずからの運命と引き合わせる薄明の斡旋業者――にはあまりに複雑多岐であるから、中にいれば見つかることはないと思っていた。だが今は知っている。これほど深入りして、今さら直面したくはないことだが、彼らが落ち着き払って自分を待っているということはわかっていた。このまま進んで迷宮の最奥の間に達したとき、彼ら、すなわち、彼女からも上がりを分捕るシンジケートの手先らが、落ちつき払って待ち構えていることはわかっている。……アリアドネーも、ミノタウロスもみんな彼らが所有している。ひょっとしたら、とポインツマンは戦慄して思う――この自分まで？このごろ彼らの姿がチラリと見える気がするのだ。裸体の男たち、中心宮のまわりで運動選手のような体勢で、息を荒くしている、その突き立ったペニスは

12 ロンドンの、王立医学会の所在地で医学の権威の代名詞。

13 山中でヴィーナスとの愛に浸るのは、中世のタンホイザー伝説。アリアドネーから手渡された糸玉を手探りに、怪物ミノタウロスの棲む地下の迷宮を進むのは、ギリシャ神話の英雄テセウスの物語。ポインツマンの場合は、探究が性的快楽そのものだから、ふたつの女神が一致するのだろう。

CamScannerでスキャン

鉱物のよう。それは彼らの眼も同じ——霜と雲母の薄片にきらめいているが、しかしそこに欲情はない。彼を求めてはいない。単に彼らの職務をこなしているだけだ・・・

「そのピエール・ジャネだが、こいつはときどき、東洋の神秘家のように話す。概念の対極化がきちんとできていないんだ。『傷つける行いと傷つけられる行いが、傷害という行動において結ばれる』だと。そんなことを言いだせば、話者と聞き手も、主人と奴隷も、処女と誘惑者も、都合よく不可分のペアになってしまうだろう。どうしようもなく怠慢な逃げ口上だよ、メキシコ君、こういう陰陽(インヤン)の戯言[14]は。そんなふうに言って実験室の厄介事のすべてから逃げようとする。だがそれで何かを言ったことになるのかね」

「宗教の議論を始めたくはないんだけど」寝不足のためにメキシコはいつもより不機嫌だ。「でもあなた方の話を聞いてると、ちょっと分析の価値を信じすぎてるんじゃないかって思うんですよ。つまりね、すべてをきれいにバラバラにするっていうのは、いいんです。その研究に、おれは真っ先に拍手を送ります。でも、それって物事が断片になってそこにあるってだけのことでしょ。あなた方こそ何を言ったことになるんですか」

どうもポインツマンにとって楽しい議論にはなりそうもないが、この赤マフラーの若き秩序破壊者を鋭く見つめながら——「パヴロフは信じたんだよ。科学に携わるわれわれの理想の目標は、真に機械的な説明に行きつくことだということをね。いやパヴロフも現実主義者だから、生きているうちにそこへ到達できるなどとは思っていなかった。数世代たっても無理だろうとね。それでも努力の連鎖でだんだん目標に近づいてはいけるという希望を持っていた。精神(プシケ)の生命活動の純粋に生理学的な基盤を見いだすこと、そこに彼の最終的な信念はあったわけだ。原因のないところに結果は生まれない。明確な因果の連鎖を

14 パヴロフの"対極の概念"がピューリタンの「救い」と「破滅」のように対極化されているのとは対照的に、「巴」のパターンで図解される陰と陽の二項は、相補的で不可分であることを強調する。

信じたのだ」

「こういう議論は、おれはもちろん得意じゃないけど」相手の機嫌を損ねることは避けたいと思っているメキシコだが、口をつくのは――「でも、因果論のやり方じゃ、もう来るところまで来てしまったっていうか。この先科学が前進していくには、そんなに狭くないというか、もう少し・・・不毛でない前提群から出発したほうがいいんじゃないかって。因果関係への執着を完全に振り払う勇気をもったとき、次の大きなブレイクスルーがやってくると思うんですけど。どこか別のアングルを攻めるっていうか」

「それは、攻めることじゃないだろう。後退することだろうが。メキシコ、きみももう三十歳だろうにわからんのかね。別のアングルなどありはしないだろう。前進する――中へ、進む――か、逆行するかのどちらかしかない」

ポインツマンの外套の裾を風が吹きあげるのをメキシコは見ている。カモメがうるさく鳴きながら、凍てついた段丘にそって飛んでいく。聳えたつ白亜の崖は死のように冷たく動かない。この沿岸の近くまで渡ってきた太古ヨーロッパの蛮人らは、霧の中にそびえ立つ白い障壁を見て、死者の連れていかれる先を知ったのだ。

向きなおったポインツマンが・・・なんと、ほほえんでいる。同志の関係を信じきったその姿勢にはあまりに古代的なところがあって――今ではないが、この先数ヶ月後、春になってヨーロッパの戦争が終結したあかつきに――ロジャーはこの笑みを思いだすだろう――いまだかつて人間の顔に浮かんだことのないほど邪悪な表情として、それは彼に取り憑くだろう。

ふたりは歩みを止めた。ロジャーが相手を、〈アンチ゠メキシコ〉を、見かえす。ふた

CamScannerでスキャン

りはそのまま〝対極の概念〟だ。だが、どんな大脳皮質の、いかなる冬半球に位置しているのか。どんな破滅的なモザイク・パターンが、〈荒廃〉の外部と相対しているのか……都市のシェルターを抜けて外へ……外を旅する者だけが解読できる……遠くから見える眼だけが……蛮族の……騎手たちだけが……

「われわれはふたりともスロースロップを手にしている」と、いまポインツマンがそう言った。

「あなたは研究から、栄光以外の、何を得ようとしてるんですか」

「パヴロフが得ようとした以上のものではないな。奇妙に見える行動の、その生理学的な基盤をつかむこと。それがSPR[15]でどの分野に収まるかはわたしの知ったことではない――きみらの中でまだテレパシー説を持ち出した者はいないのが解せないんだがね。ひょっとしてスロースロップは向こう岸の誰か、ドイツ軍の発射スケジュールを知っている男とテレパシーで通じ合ってるんじゃないかね。それか、自分を去勢しようとした母親への恐ろしいフロイト的復讐劇か。その手の壮大な理論はどうでもいいのだ。わたしとしては、謙虚に、メソッド通りにいくだけ――」

「謙虚」

「そう、限界があるのだよ。手持ちの事実も限られている。ロケットの落下音の逆転現象と……あの男の（おそらくは聴覚刺激による）性的条件づけの臨床記録、そして因果関係の逆転とおぼしき現象。わたしはきみのようにあっさり因果関係を捨てたりしないが、しかしどうしても修正が必要となれば――それはそのときだ」

「だけどそれで何を捕らえようというんです。目的は？」

15　一八八二年以来、ロンドンを本部に活動している「心霊研究協会」。

16　MMPIの性格検査の4つの評価軸のひとつで、テスト中の「好ましくない行動」の度合いを示すもの。意図的にね

〈きみはヤツのMMPIを見たことがあるね。Fスケール[*16]：曲解、ねじまがった思考過程。……スコアにそれがはっきり出ている。病といえるレベルの逸脱だ。強迫観念に囚われ、潜在的パラノイアだといえる。ところでパヴロフによれば、強迫観念やパラノイア妄想の原因は、脳のモザイク・パターンをつくる、何というか——まあ細胞、ニューロンと呼んでいい——それが過度に興奮し、相互誘導の過程を経て、周辺域全体がすべて抑制の状態になってしまうからだ。燃えかがやくニューロンの一点のまわりがすべて暗闇となる。いわば闇が呼び寄せられた状態だ。そのためおそらく一生にわたって、他の観念から、感覚から、自己批判から切り離されたままになるんだ。異様な輝きを減じて正常に戻してくれる回路が欠落しているんだからね。その一点をパヴロフは〈病理的不活性ポイント〉と呼んだ。われわれは現在研究中の犬はだね、刺激の強弱にかかわらず同じ数の唾液を流す〈均等相〉はすでに抜けたし、〈逆説相〉——強い刺激のほうがかえって反応が弱くなる段階——も通過した。きのう、そいつを〈超逆説相〉へ引きこんだよ。彼方(ビヨンド)へだ。メトロノームを鳴らすと、それは食事を意味したので以前は犬のヴァーニャの頬から涎が泉のようにわき出たよ。それが顔を背けるようになった。それでメトロノームを停止すると、今度は向き直って、クンクンやって舌で舐めたり歯を立てたり。静寂の中へ消えてしまった刺激を探し求めるみたいにする。[*17] パヴロフは、精神の病いのすべてが、将来この〈超逆説相〉の考えによって説明されるだろうと考えた。すなわち、大脳皮質に生じる病理的な不活性の点が正と反の概念を混乱させることで引き起こされるとね。その理論を基盤に、実証データを得ようと実験に取り組み始めたところで亡くなったのだよ。[*18] だが、わたしは生きている。わたしには資金も、時間も、意志もある。スロースロップの精神はいかにも鈍

し曲げた回答、異様なふるまい、注意散漫などを含むが、その値とテスト全体から、パラノイアなどの病的な性格が割り出される。

17 簡単にまとめ直すと、刺激と反応の強弱が逆転するのが「逆説相 paradoxical phase」、正の刺激が負の反応を生じさせるものが「超逆説相 ultraparadoxical phase」。

18 一八四九年生まれのパヴロフが、犬を使った実験成果を人間の精神病理に当てはめようと試みたのは八十歳を越えてからのこと。八十六歳半ばで死去する日まで闘志を燃やすが、ポインツマンの〈正典〉である『条件反射学・第二巻』は、死から四年後の一九四〇年の出版となった。

垂で、ひとつの相から別の相へ動かすのは容易じゃなさそうだ。最後は飢えや恐怖を与えないといかんのかもしれん・・・どうだろう、まあ、そこまでいかずにすむかもな。だが、わたしはヤツの脳神経の不活性の点々(ポインツ)を見つけ出してみせる。そのためには頭蓋骨切開だろうと何だろうと厭わない。その点々がどのように隔離されているのか、それを突き止めることで、ロケットがヤツの回りに落ちてくる仕組みが解明されてくるかもしれん——そう言うのも、まあ、きみを引きこみたいからだ、それは認める」

「なぜなんです」ほら、不安になってきたか、メキシコ——「どうしておれが必要なんですか」

「理由はわからんが、必要なんだ」

「取り憑かれてるのはあなたのほうじゃないですか」

「メキシコ君」ポインツマンは身じろぎもしない。寄せる波が三度、不毛な薄氷を岸に残して引いていくのを見る間に海に向けた顔の半分が、五十歳も老けた感じだ。「手助けをたのむ」

そんな、他人の手助けだなんて、とロジャーは思う。なのに、その気にさせられるのはなぜだ。危険だし、おまけに変質的、なのに手をさし伸べたい気持になる。ジェシカが、**でも女の子たちは?女の子はどうなの?**と案じる、それと同じ、収まりの悪い不安な気持ちを、スロースロップに対して抱くからだ。〈心霊セクション〉で孤立しているせいだろうか——まわりの人間が抱いている確信を自分は共有できない、といって棄てさることもできない・・・連中の信念、あの苦虫男のグローミングさえ信じている・・・五感の彼方に、死の彼方に、ロジャーにとってのすべてである〈確率〉を超えたその彼方(ビヨンド)の世界を信じる

ここから自分ひとり除け者になっている・・・ああ、ジェシー、背を向けて眠る彼女の肌に細やかな背骨と腰が浮かび、ロジャーは背中に顔を押し当てる。おれには深すぎる世界だ・・・

海と、不揃いな海辺の草。両者の間に長く伸びるパイプと有刺鉄線が風に鳴る。黒の格子模様を、より長い筋交いの斜線が支え、槍の先が海に向かって突き出ている。置き去りにされた数学的文様、それは力のヴェクトルの形を露呈して、それをその場に押しとどめ、ところどころ前後二つの列を形作り、ポインツマンとメキシコがふたたび歩きだすと、直立線の繰り返しが斜線の繰り返しと視差を伴って重なるために、分厚い斑紋(モアレ)をなして後ろに後退する。そのパターンに下の鉄線のもつれが絡んで干渉する。遠方でカーブして霞みの中へ消えていくところでは、透かし細工の塀は灰色だ。昨晩の雪の後は、その黒書きの線の一本一本に白いエッチングの刻み込みができていたが、きょうは風と砂が吹きつけて元の黒鉄の姿をさらし、潮気のために生じた小さなサビがそちこちに浮きたって・・・あるいは氷と陽光が、この塀を電気のような白いエネルギーの軌跡に変えている。

そのこちら側、埋められた地雷や腐食しかけたコンクリート製の戦車止めの杭のあるところを上って、断崖から半分ほど来たところ、ネットをかけられ芝土におおわれたトーチカの中で、若いドクターのプレーと看護婦のアイヴィがいま面倒なロボトミー手術をすませてくつろいでいる。いつもの手順で汚れをこすり落としたドクターの指がすばやく入りこんで女のガーターベルトをグイと引っ張って放すと、パツンという音が響いてドクターはハ、ハ、ハと笑い、女は跳び上がって笑いながら身を引く——あまり本気で引かないように注意して。ふたりが横たわる下は、色あせた古い海図と修理手引書、破れた砂袋とこ

ぼれた砂、マッチの燃えさし、かなり前に吸い捨てた煙草からとれたコルクの吸い口。それらの煙草は一九四一年の夜をすごす慰めとなり、海で光る明りをちらっと見て、ズキンと痛む心を慰めてくれたものだった。「先生、ご乱心」と彼女がささやく。「発情期なもんで」と言ってブレーは笑い、もう一度ガーターをパツンと鳴らす。まるでパチンコで遊ぶ少年だ。

高台にはキング・タイガー[*19]を無力化すべく設置された円筒形ブロックの列が、もはや敵軍の上陸はなくなった沿岸の、ところどころ淡雪と露出した薄ライム色の岩盤に彩られた焦げ茶の牧草地の上に、白いマフィンでもつなげたように、一本の鎖となって続いている。小さな池ではロンドンからやってきた黒人男がアイススケートをしている。ズアーブ兵[*20]が滑る。ありえないこと。その堂々とした姿は、砂漠の申し子というよりスケートと氷の申し子のようだ。町の子供が彼の前に散らばっている。ターンするたびに、その湾曲した軌跡から舞い上がる氷粉が頬に当たるほど近くに。男が笑顔を見せるまで、誰も口を開かない。ただピタリと後を追い回し、ちょっかいを出すだけ。笑ってほしいのだが、ほんとうにニコリとされたら怖い、それでも笑顔が欲しい。…黒い男の魔法の顔を、子供たちは知っている。池の縁ではマイロン・グラントンとエドウィン・トリークルが矢継ぎ早にタバコに火をつけ、〈ブラックウィング作戦〉のことであれこれ考えこんでいる。黒の軍団〈シュヴァルツコマンド〉の存在を敵は信じるだろうか。コマンドの、いわば原型として連れてこられた〝マジック・ニグロ〟を見つめるふたりの研究者はどちらも、子供たちの見ている前で氷の上に乗ろうとはしない――フェン・スケートのスタイルであれ何であれ。宙づりにされた冬――空は一面、荒んだ輝きを発するジェルだ。浜辺に降りたポインツ

19 一九四四年になって登場した最大最高性能の戦車。ドイツ語名は「ティーガーII」、一般に「タイガー戦車」の英語名で知られるのは「ティーガーI」。

20 十九世紀のアルジェリアから調達され、フランス植民地主義者のために戦った現地人の傭兵。

アンは鼻をかむために、ポケットからトイレットペーパーを一巻き取りだす。その一枚一枚にステンシルで「*PROPERTY OF H.M. GOVERNMENT*」[21]と刷られている。ロジャーはときどき頭髪を帽子の中へ押しこむ。どちらも口をきかない。ポケットに手を入れ、また出し、トボトボ歩くふたりの姿が小さくなっていく。子鹿色（フォーン）と灰色（グレイ）の色調にひと刷毛の緋色（スカーレット）をくっきり浮かばせ、足跡にできる疲れ切った星形が、岸辺に長く、凍てつきながら続く、そのガラス化したビーチが反射する曇り空の光はほとんど白色だ。・・・ふたりの姿は見えなくなった。さきほどの、初期の会話を聴いたものはなく――偶然のスナップショット一枚残らなかった。ふたりが歩み去ったあとを冬が覆いかくし、その後を残酷な英仏海峡が氷で閉ざしたのだろう。もう誰ひとり、二度と彼らを、まるごと取りもどすことはできない。その足跡に氷が満ちた。それはまもなく海へ運ばれていった。

21 「国王陛下の財産政府」

CamScannerでスキャン

□□□□□□□

沈黙のなか、物陰に隠れたカメラが追う、部屋いっぱいの空間をわざと無目的に歩きまわる女、長い脚で少女のように伸びやかなストライド、肩のあたりをちょっと丸め、髪はそこらのオランダ娘とはまるで違えた流行のアップスイープ、それを古い変色した銀のかんむりで留めてある。きのうパーマをかけたばかりのブロンド髪は型くずれもせず無数の渦を巻き、ダークな飾り細工の間からも輝きぐあいが見てとれる。きょうの午後はこのところの記憶にない大雨で、[1] カメラの絞りは最大に開きタングステン灯を照らしての撮影だ。ときどき遠く南や東のほうで爆発するロケットの振動がこのメゾネットを訪れ、雨水の流れおちる窓は無視してドアだけを震わせる。ゆったりとしたノックが三、四回。まるで哀れな精霊が仲間を求めて、中へ入れてくれ、ほんの一瞬でいいからと、必死に訴えているかのよう・・・

家には他に、身を隠したカメラマンと、キッチンのオズビー・フィールのふたりがいるだけだ。オズビーは屋根の上から収穫してきたキノコで何やら謎めいたことをしている。カップ型のキノコの笠は輝くような赤橙色で、随所に灰白色の薄膜を立てている。せわし

1 一九四四年十二月二十三日の天気と合致する（『GRC』）。

ない軌道の幾何学は彼女をときたま就寝の戸口に導き、キッチンのなかのアマニタ・ムスカリア[2]（「破壊の天使」と呼ばれる毒キノコの興味深い親戚、これがオズビーの、宙をさまよう意識を引きつけている）を少年らしい手さばきで扱うオズビーにチラリと視線がふれる。その瞬間に女が送る親しみを込めたほほえみに、オズビーは世慣れと洗練と悪意を感じとる。オランダの女の人と話したのは初めての彼には、その人の履き物が木靴でなくハイヒールであることが驚きだ。服はばっちりコンチネンタル風だし（と彼は想像する）、知性的な雰囲気が、ブロンドの睫毛に縁どられた目からも、外出時のサングラスの奥からも、子供っぽい丸みを残す頬からも、口もとの左右にできる笑窪からも感じられ、実のところ頭がグランとするほどの衝撃をくらっている。（クロースアップでとらえた彼女の肌はほぼ完璧ながら、薄く粉を叩き紅を引いた跡は見え、睫毛をわずかに濃くした跡も、二本か三本眉毛を抜いた跡の毛穴も明らかだ…）

この若者の心の中で、いったいどんな考えが廻っているというのだ。今は柿色のキノコの笠の内側を丹念にこすり、残りを細切りにしている。追い立てをくった小妖精たちが屋根の上で、早口でしゃべりながら駆けまわっているとでも？ 目の前には橙と灰色の混じったキノコの細片が積み上がっていく。それをひとつかみして、沸騰している鍋の中へ。前からコンロにかけておいた分も煮立って、黄色いアクの浮く、どろどろの粥になってきた。それを掬いとって〝海賊（パイレート）〟のミキサーに入れる。そしてキノコピューレができたら、クッキーを焼く鉄板の上に延ばし、オーヴンをあけ、石綿製の鍋つかみで中から焼け焦げた粉の付いた鉄板を引きだし、それと交代で、いま用意したものを入れる。できあがったものを乳鉢と乳棒で細かくすりつぶし、ハントリー＆パーマーズ[3]の古いビスケット缶の中

2 和名はベニテングタケ。

3 一八二二年創業の老舗で、その缶には大英帝国を象徴するさまざまな図柄が使われた。

CamScannerでスキャン

に入れ、少しだけ残したやつをリズラ・リコリス・ペーパーに手際よく巻き、火を点け、煙を吸いこむ。

だがイヴビーが音を響かせかまどの蓋を開けたままにそのとき、たまたま彼女が覗きこんだ。カメラのとらえた表情に変化はない。だが、ドアのところにピタリ動かず立ち止まった理由は何だろう。この一コマを停止させ、縦に伸びる新鮮にして変色した黄金の瞬間として固定すること？ イノセンスを微視的に隠した彼女は肘をすこし曲げ、手は壁にやり、指を肌色の壁紙に扇形に広げている。まるで自身の肌にふれるかのようだ、物憂げな触りかたで。……いつまでも降りしきる外の雨は氷を孕んでシリコンのよう、中世ふうの窓ガラスに荒涼たる音を立て、スローな腐食をもたらす。流水のカーテンが煙のように、テムズ河の向う岸を視界から隠す。広域にわたって爆弾に刺し貫かれた〈都市〉。どれほど刺されても果てない強ばった、殺られの都市……その肌は輝くスレート屋根、煤だらけの煉瓦、それらがあふれる雨水に浮かぶ、その下の、灯りがついたり消えたりの窓は、冬の日の暗鬱に対して無防備な口を開けたシティの開口部だ。雨は洗い流し、水浸しにし、眠いながら溝をゆく。都市は動じない。肩をすくめ、いつまでも雨を受けとめつづける。

……かまどの蓋がギーギーと軋む音を立てガチャンという金属的な音とともに閉まった。だがカッチェにとって、かまどは永遠に開いたままだ。きょうは何度となく鏡の前に立った。髪も化粧も完璧だという確信はある。ハーヴェイ・ニコルスから彼らが買ってきたフリッタドレスはほとんど透けそうなクレープ地で、パッド入りの肩から胸の谷間へ流れるよう。この国で「ニガー」と呼ばれる濃いココア色をした、デリシャスな絹地を何ヤードも使ったそのドレスをウエストのあたりでゆるめに結んで柔らかなプリーツを膝の上に垂

4　一八八〇年フランスで創業した煙草用ローラ紙専門メーカー。おなじみのロゴ「RIZLA＋」は、フランス語で「リ・ラ・クロワ」と読む。

5　ロンドン中心、ナイツブリッジ地区、ハロッズ百貨店の近くのファッショナブルな店。

6　以下は、海峡の対岸における、ほんの数日

らす。ふんだんに使われたクレープの波動から思いがけない視覚効果が得られることにカメラマンを喜ばせる。窓から差しこむ雨光の前をカッチェが通りすぎる瞬間、シャッターが数コマ分開閉する間、クレープ自体がうす暗いガラスと化す。炭色の染みた、古めかしい、雨風に傷んだガラスに。ドレスも、顔も、髪も、手も、ほっそりしたふくらはぎも、その宙づりのセルロイド的瞬間、すべてガラスと透明塗装(グレイジング)に変化する――近くに遠くに落ちるロケットの爆風に一日揺れつづける、半透明の降雨の守護神。巻きとられるフィルムが通過する間、その下向きの、暗黒の、破壊の力が地(じ)となって、彼女の像を浮き立たせる。鏡に映る自分の像にカッチェみずからが、カメラマンの悦びを感じている。だが心の内奥は彼女自身にしかわからない。高価な服地で、死んだ細胞で、どれだけ念入りに覆っていたとしても、自分の中身は朽ち果て燃え尽きた灰殻なのだ。[6] こんな残酷な想像は誰にもできないだろうが、実は彼女は〈かまど〉に隷属していた……〝デア・キンダーオーフェン〟。[7] この単語を発音する大尉殿の、長い恐ろしい、鮮褐色に腐りかけた歯が思いだされる。ブリツェロ大尉[8]の黄色い歯、網目状に走る汚ない裂け目。その口から吐かれる夜の息が思いだされる。大尉自身の暗いかまどにはつねに腐敗のささやき声が渦巻いて。……最初に思いうかぶのはいつも彼の歯だ。歯は〈かまど〉からもっとも直接的に益を得る――その〈かまど〉は彼女とゴットフリート[9]のために用意されたもの。大尉はけっして言葉で脅すことはしなかった。ふたりのどちらにも、面と向かって言葉をかけることとさえなかった。告げるべきことは、彼女の訓練された繻子の太腿越しに、夜の客にむかって告げた。あるいはゴットフリートの従順な背骨の上を伝わらせて(例のイタリア人がやってきた夜、その背骨をブリツェロ大尉は「ローマ＝ベルリン枢軸同盟」と呼んだっけ。みんなして円

前までの出来事の回想。

7 der Kinderofen＝「ヘンゼルとグレーテル」の物語には出てこない言葉だが(『GRC』)、直訳すれば「子供竈」の意味。なお、V2ロケットの燃焼室も「オーフェン」と呼ばれた。

8 ラテン語としては「ブリケロ」、英語圏では「ブリセロ」と読まれるだろうが、ドイツ語発音の「ブリツェロ」を採用する。電光石火の攻撃(blitz)と、ストイシズム(Blitz spirit)のイメージを併せ持ち、語源的には漂白(bleach)とも関連するらしい、本名ヴァイスマン(白の男)のコードネーム。

9 Gottfried＝英訳すればGod-peace。

形ベッドに乗り、大尉の一物がゴットフリートの突き上げられた尻の穴に収まったのと同時に客のソレが彼の美麗な口に突っこまれて）カッチェはひたすら受身。からだを縛られ、猿轡(さるぐつわ)を咬まされ、つけ睫毛をして、今宵はイタリアの客の香水をつけた白髪の巻き毛（腐り始める一歩手前の薔薇の花と脂肪の匂いがした）をのせる人間枕になっている・・・発話のひと言ひと言が閉じた蕾、この先無限に開花して内実を啓いていくのだろうか（カッチェの脳裏に浮かぶ関数は、一般項のない冪(べき)級数を、無限に、くろぐろと——しかし完全な不意打ちということもなく——花開かせていく）[10]・・・大尉の口から発せられた「神父(パードレ)イグナシオ」[11]はスペインの異端審問官へ展開し、さらに黒いローブへ、褐色の弓形の鼻へ、胸が詰まるような香の匂い ＋ 聴罪司祭にして死刑執行人 ＋ 暗い告解室にふたり並んで跪くカッチェとゴットフリート ＋ 凍えて痛む膝を〈かまど〉の前について誰にもいえない秘密を小声でうち明けるグリム童話の兄妹 ＋ ふたりを疑うブリッツェロ大尉の魔女的パラノイア（カッチェはNSB[12]のお墨つきがあるにもかかわらず）＋ 聴き手かつ復讐者である〈かまど〉＋ ブリッツェロ大尉の前に跪くカッチェ。大尉は黒いビロード服にキューバンヒールの靴という最高レベルの女装(ドラッグ)だ——肌色の革のサポーターの中に押しこんで隠した一物の上に、人工膣と黒貂(クロテン)製の陰毛がついている。どちらもベルリンから手にした悪名高きマダム・オフィール直々の手になる作品だ。疑似陰唇と派手な紫の陰核は——マダムはみじめな顔で物不足を嘆いていた——合成ゴムとポリ塩化ビニルの新素材「ミポラム」で・・・本物そっくりのピンクに濡れ、ステンレス製の小さな剛毛を何百本も逆立てたソコを、跪いた姿勢で舐めるカッチェの唇と舌は傷つき出血し、その唇のキスが〝兄〟ゴットフリートの白塗りしていないブロンドの背中に血の抽象画を描く。兄というのは奴隷のブ

10 カッチェは理系の精神を持ち、ロケットのテクノロジーに通じている。以下「＋」記号でつながれているのは、次々と開いていくイメージの一枚一枚を級数としてまとめた花全体の数式。

11 オーウェン・ウィスター作の小説『神父イグナシオ』（一九〇〇）の主人公。「異端審問官」とは正反対の、やさしく賢明な存在。

12 オランダでは「国家社会主義運動 Natio-nal-Socialistische Be-

レイの中での話……この館が初射前だったのだ、発射場近くの、徴用されたオランダの家
かっ王権から東へ、ふたつの干拓地に挟まれて舌状にヴァッセナールへ向かって伸びる、小さな農場や屋敷を含んだ森と野原の一帯にロケットの発射台は隠れていた。[13] 居間の大きな西側の窓から射しこむ秋の陽だまりに初めて見たゴットフリート青年は、飾り鋲つきの犬の首輪だけ身につけて跪き、ブリッツェロ大尉の命令がくだると、メトロノームのようにカチカチと自慰を始めた。その白い肌に午後の陽が当たり、人の肌にはとても思えぬ輝くオレンジ色に染める。ペニスは充血の一枚岩、その口がカーペットを敷きつめた沈黙の中で深く喘ぐのが聞こえる。上を向いた顔は（きっといつもそうなのだろう、伏し目がちに）天井を、天井にある何かを、あるいは幻影の中でこの天井が表している大空を仰いでいる――のぼりつめ、堅く締まり、達するときの青年の顔は、幼いころからカッチェが鏡の中に覗き見てきた自身の、研究して身につけたマネキンの眼差しにあまりにも似ていて彼女は一瞬息を呑み、心臓の早打ちを感じるが、一瞬後には彼女自身、同じマネキンの眼差しをブリッツェロに向けている。大尉は満足顔だ。「そうだな」とカッチェに告げる。「おまえの髪を切ろうか」それからゴットフリートに笑いかける。「そしてこの子が髪を伸ばす」[14] 砲兵中隊の整列点呼で恥ずかしい目に遭うのは彼にとって好ましいことだ。発射台（シュスシュテレ）3号の近く、平和だった時代には賭に負けた観客のため息のさ中を競走馬が疾走した場所で、毎朝行う検査にそのつど失格しながら、それでも大尉に庇護されて懲罰をまぬがれるゴットフリートは、その代わり発射の合間、昼夜を問わず、寝不足のまま、気儘な時間に大尉自身の〝魔女の折檻（ヘクセンチュッヒティグング）〟を受けるのだ。だがブリッツェロがカッチェの髪を切ったかどうかはもう思いだせない。一、二度ゴットフリートの軍服を着せられたのは憶えている（髪の

[illegible]」が、ナチスによる占領下で唯一の合法的政党だった。

13 ハーグ市街の北、富裕層の屋敷の建つヴァッセナールにも、事実ドイツ空軍のロケット発射隊が陣取った。

14 敵軍の偵察を恐れ、V2の発射はすぐに移動できる発射台兼用車（マイラーヴァーゲン）から行われた。

毛を、そう、軍帽の下に押しこんで。それだけで、わけなく彼の分身(ダブル)になれた。「檻の中で」寝かされた。それが大尉の定めた規則だった。ゴットフリートはといえば、カッチェの網のストッキングにレースのエプロンと帽子、繻子とリボンのついたオーガンディの薄地のドレスを着せられる。だが、事が済むと、檻に戻るのは彼のほう。その規則は変わらない。兄妹のうちメイドはどっちで、肥えた鵞鳥になるのがどっちか、それは明確。その点が揺らぐのを大尉殿は許さない。

カッチェはどれほど真剣に役を演じているのだろう? 征服された祖国、占領されたオランダに生きる自分には、屋外で日夜、形なく、まともな輪郭もなく続く出来事——即決の死刑執行、逮捕、殴打、ごまかし、パラノイア、恥辱——をもろに浴びるより、それを形式化し合理化した物語に入っていくほうがましだというのが彼女の考えだ。こんなことを話しあいはしないけれど、カッチェもゴットフリートもブリツェロ大尉も、古い〈北のお話〉は、親しんでいるだけに居心地がよい。その、迷子の子供たちと、食べられる家に住む森の奥の女主人による、囚われ肥やされ〈かまど〉で焼かれる物語をルーティンとして保つことと。外で進行している、誰にも耐えられない〈戦争〉から、「偶然」の絶対的支配から、自分たちの身の上のおぼつかなさから逃れるためのシェルターとして……

家の中も安全とはいえなかったけれど……ロケット弾の打ち上げ失敗はほとんど毎日。十月の末に、この敷地からあまり遠くないところに一発のロケット弾が尻から落ちて爆発し、地上整備員が十二人も死に、周囲数百メートルにわたって窓が壊れた。*15 カッチェが初めてお話(ゲーム)の中の兄の、金色のからだを見た居間の、西窓も壊れた。軍から流れた話によると、燃料と酸化剤が爆発しただけだというが、ブリツェロ大尉は震えるような——カッチ

15 一九四四年十月十二日に実際に起きた事故。

ェなら〈偶無的〉と言わざるをえない——悦びにひたりながら、弾頭に積んだアマトール[16]も一緒に爆発したんだと言った。これじゃ発射基地なのか爆撃目標なのかわからんな。……まるで全員死の宣告を受けているようなものだ、と。その一軒家はデュインディフト競馬場[17]の西にあって、ロンドンとは正反対の方向なのだが、そのぶん危険が少ないことにはならない。しばしばロケットは狂うのだ。でたらめに方向を変え、恐ろしい嘶き(いなな)をあげたかと思うと狂乱のままに落下する。そうなると打つ手なし。後々まで、修正は不能なのではないかとささやかれている。ロケットの発射だけではない。タイミング的に間に合うときは、のたうち回る機体を空中で破壊するが、その合間に英軍の空襲がある。夕食の最中にもスピットファイアは轟音を立て、暗い海面を低空飛行してやってくるのだ。町のサーチライトはふらふらとして狙いが定まらず、サイレンの残響が公園のぬれた鉄製ベンチの上空にただよい、手探り状態の高射砲からポンポンと弾丸が飛び出す合間に、森林地に、干拓地に、ロケット部隊が駐屯しているはずの住宅地に、爆弾が降りおちる。

爆撃はゲームに彩りを添え、音色を微妙に変える。いつかは知れぬ未来のその日、ゴットフリートを待ち構える〈かまど〉に〈魔女〉を押しこむのはカッチェの役目。大尉も彼女が英国スパイか、オランダ地下組織のメンバーではないかと疑いだしたに違いない。ドイツ軍の必死の努力もむなしく、情報はオランダを通してイギリス空軍の爆撃部隊へ確実に流れつづけ、部隊の展開のようすも、補給ルートも、暗緑色の木立のうちのどこにA4ロケットの砲床が隠れているかも筒抜けなのだ。データは毎時変えているし、ロケットも付属設備も次々と移動しているというのに、スピットファイアは発電所[18]を、液体酸素補給所を、砲兵中隊司令官の宿舎を狙い撃ちにする……興味をそそる問題だ。カッチェはいつ

16 硝酸アンモニウムとTNTの混合火薬。V2の弾頭にはこれが一トン近く積まれていた。

17 ハーグの豊かな郊外ヴァッセナールに現存する、由緒ある競技場。

18 いつのまにか語りはブリツェロの意識をたどっている。視点人物の流動的な入れ替わりは、この小説の特徴的なテクニック。

CamScannerでスキャン

の日かイギリスの戦闘爆撃機をほかならぬこの家に、このゲームの牢獄に呼びよせるのか。そして、みずからの死をもって任務完了とするつもりなのか。ブリツェロ大尉[19]にはわからない。困惑の苦悩も、一定限度内なら、彼にとっては喜びだ。ミュッセルト政権にとって彼女の履歴はもちろん完全無欠。匿われていたユダヤ人家族を少なくとも三世帯は嗅ぎだし、会合にも欠かさず出席していた。スヘーフェニンゲン[20]近くのドイツ空軍保養地でも働いていたが、そこの上司たちは彼女が有能で明朗で手抜かりがまったくないことを褒めていた。党への熱狂をもって自分の能力不足をカバーしようとする、よくいる手合いとは大違いだ、と。まあ、その点は、唯一疑いの影を投げかける点とはなろう。情緒的にかかわっていない——ということは、入党には何かしら理由があるということだ。数学の心得があって、かつ理由（リーズン）を有する女。……「変身を欲せよ」とリルケはいった、「おお、焔に感激するがいい！」と。[21]月桂樹へ、ナイチンゲールへ、風へ……[22]欲する、引き入れられることを、抱き留められ、五感のすべてを満杯にすべく燃えさかる炎へ向かって落ちてゆくことを……愛する、というのではない、行為としての愛などありえぬ中で、隷属としての愛に無力のまま留まること……

だがカッチェは違う。蛾のように炎へ飛びこんでいったりはしない。あの女は人知れず、〈変化〉を恐れているのではないかと結論せざるをえない。変えるのは、つまらぬ装身具や衣服ばかり。政治信条も彼女にとっては服装倒錯（トランスヴェスティズム）にすぎないのだ。ゴットフリートの服を着るだけではない。長身でストライドも長く、髪はブロンド、探索的な肩に翼の存在を感じさせる、そんな形では不恰好だろうに、マゾヒストの定番であるフレンチ・メイドの服を着た——単にプレイをしているだけ……プレイのごっこをしているだけ。

19 ドイツ占領下オランダのファシスト党の党首。ユダヤ人の捕囚を含め、積極的にナチス体制を推し進めた。

20 ハーグの中心から数キロほどのところにある、北海に面した地区。

21 リルケの『オルフォイスへのソネット』第二部、12、富士川英郎訳。テクストの英文は、"Want the Change. O be inspired by the Flame."。

22 リルケだけでなく、月桂樹を好んでうたったウィリアム・ワーズワースを始め、P・B・シェリーの「西風に寄せる歌」や、ジョン・キーツ……

CamScannerでスキャン

大尉にできることはない。息絶えだえの第三帝国、命令の通達も無力な紙切れと化す中で彼はカッチェを、ゴットフリートの尻を必要とする。手に残る革鞭のリアルな感触と、カッチェのうめき声、ゴットフリートの尻を赤く這うミミズ、カッチェとブリッツェロの唇、ブリッツェロのペニス、指先、爪先——冬のあいだはこれらが頼りになる——理由を言葉にすることはないが、ブリッツェロの心は信頼していた。もはや、おそらくこの形しか、あらゆるお伽噺(メルヘン・ウント・ザーゲン)と伝説の中でもおそらくこれしか頼れない、魔法のかかった森の家だけは守られる、ここが偶然に爆撃されることはありえない。裏切られているとしたら別だ。カッチェが事実イギリス軍のスポッターとして指示を送っているとしたら——しかしそれは不可能だとブリッツェロは確信している。なんらかの魔法によって——発声が骨をふるわすこともない魔法の言葉によって——イギリス軍の爆撃が、彼を〈かまど〉の鉄へ、最後の夏(ファイナル・サマー)へ押しやるという可能性だけは禁じられている。結末は、来るべき彼の運命は、それではない——だがその日はやってくる。…Und nicht einmal sein Schritt klingt aus dem tonlosen Los.…大尉はリルケの詩の中でもこの第十の悲歌*24をもっとも愛していた。どの一節を思いだしても、ラガービールのような〈切望〉の苦みが、涙腺と鼻孔を刺激するのを感じる…死して間もない若者がこの世に残された最後の絆である〈悲嘆〉だけを抱き、女性である悲嘆とのかろうじて人間的な接触にも永遠の別れを告げる。たったひとり、最後まで高く踏みのぼっていく、〈原苦〉の山の奥深くに。頭上には見なれぬ星座の煌々たるきらめき…。「やがて跫音さえ、音の無いその身の末からひびかなくなる(ウント・ニヒト・アインマル・ザイン・シュリット・クリンクト・アウス・デム・トンローゼン・ロス)」*25。…山の登り手は彼、ブリッツェロ自身だ。第三帝国の焔を抱きしめるずっと前から、もう二十年も登りつづけてきた。リルケの焔を抱くよりはるかに前、南西アフリカ以来…ひとりで

の「ナイチンゲールに寄せるオード」など、ブリッツェロのロマン派詩人への傾倒が幅広い物であることがうかがえる。

23 天使の翼のイメージは、カッチェだけでなく、作品中の他の白人女性の描写にも使われていることに読者は気づくだろう。

24 一九二三年、死の三年前に出版された『ドゥイノの悲歌』の「第十の悲歌」。このパラグラフではその第一〇四〜五行に焦点を当てている。

25 手塚富雄訳『ドゥイノの悲歌』(岩波文庫)より。

CamScannerでスキャン

登ってきた。そこには人喰いの魔法使いをなだめるための肉体はあったし、苦痛の手段に欠けることはなかった。だが精神において彼は孤独を貫いている。〈魔女〉の役は演じていても、彼／彼女を定義する空腹というものがわかっていない。ただ弱気になった瞬間に一緒に自分の体に、そいつが共存していることに気づいて当惑するのである。運動選手と彼の技術とは、別々のものだ。同一の意識には帰属しない。……若きラウハンデルもそれだけは言っていた……あの平和な時代からもう何年になるだろう……ブリツェロはこの若き友人に目をつけて（このときすでに東部戦線のどこかで悲惨な破滅を遂げることが明白だったにもかかわらず）、あるときは酒場の中で、あるときは路上で、窮屈でぎこちない背広姿のときも、華奢なシューズを履いているときも、誰かが戯れにトスを投げこむサッカーボールに対してこよなく優美な反応――不死の妙技！――を返すのを見てきた。即興的な蹴りが信じがたいほど高く舞い上がり、完全な放物線を描いて何マイルも上昇したボールは、フリードリヒ通りのウーファ劇場の二本の、男性のシンボルのような電飾柱のド真ん中を通過した……ヘディングを続けながら、くっきりと詩うような足取りで街を何ブロックも、何時間も歩き進むことができる。……それでいながら、たずねられても頭を振るだけだ、人なつっこい顔から、言葉が出てこない。「どうやってって、そう動いちゃうんです……筋肉――」それから昔コーチに言われた言葉を思いだし、「筋肉的な反応なんで」と続けた。笑い顔は晴朗、だが、そのときにはすでに雑兵に徴兵されて大砲の餌食になることは目に見えていた。短く刈り上げた頭を青白い酒場の灯りがガリガリとさする。「反射っていうんですか。……おれじゃなくて。……反射の運動なんです」この時代、ブリツェロに変化が訪れたのはいつだったろう。それまでの欲情が単純な悲しみに変わった

のは、自分の才能を語る言葉をもたずに驚くだけのラウハンデルと同じように、言葉なき悲しみに陥るようになったのは。ラウハンデルと同じ青年たちをブリッツェロは数え切れないほど見てきた、特に三九年以降は。いつも同じくミステリアスな客人をかくまってきた。特異な存在とはいえ、弾丸が落ちてこない場所にいつも身をおく能力をもつという以上の変異者でもない……その、原材料である彼らのうち「変身を欲する」者がいたか？　そもそもわかっているのか。そうとは思えないのだ。……彼らの反射能力はただ使われるだけ。一度に何十万という規模で、他の人間たちに使われる――〈焔〉に感激して飛びこんでくる誉高い蛾どもに、だ。この問題に関してブリッツェロはもう何年も前にすっかり無垢を失っていた。だから、おのれの行き先は〈かまど〉しかない。自分はガスと灰に焼かれ、煙突から出発する、その一方で、迷子の子供たちのほうは、何も知らず、ただ制服を変え身分証のカードを変えるだけで、生き栄えていくだろう。そういうことなのだ。〈苦痛〉の山のワンダーフォーゲル。[*26] それはもうあまりにも長くつづいている。このゲームを選んだのも、結局は自分に終わりをもたらすため、そうじゃないか（ニヒト・ヴァール）。自分も歳だ。風邪もなかなか抜けなくなった、胃はしばしば一日中きりきり痛む。眼も検査のたびに見えなくなっている。“現実”に棹さすばかりで、英雄的な死はおろか、軍人らしい死に方さえ望んでいない。望むのはただひとつ、この冬から抜けだし、灼熱の〈かまど〉の暗黒に、鋼鉄のシェルターに入ること。扉が閉じてゆき、キッチンの灯りがなす背後の明るい長方形が細くなって永遠の闇に変わること。それ以外は、なにもかも前戯なのだ。

　だが気になるのだ。子供らのことが、必要以上に気になって、そのことでまた当惑している。動機は何だ。彼が〈かまど〉を求めるのと同様に彼らが切望しているのは、身の自

26　Wandervogel というドイツ語の原意は「渡り鳥」。二十世紀初頭の三十年間ほどドイツの青年の間で盛り上がった運動は、父なる国土である自然との有機的（ときに神秘主義的、中世回帰的）な一体化を模索するもの。リルケもその推進者だったこの運動への参加者は、第一次大戦を熱烈に戦った兵士層および敗戦後ヒトラーに追従した層と重なる。

CamScannerでスキャン

由なのか。その偏屈さが、頭から離れず、彼の気を滅入らせる。繰りかえし想い描いてしまう、一枚の無意味な破滅の図。森の中の家だったものが、パン屑とベトつく砂糖の汚れに変わり果て、〈かまど〉だけが黒く不屈に居残り、かつての甘美なエネルギーもしぼみつつある子供らが、早くも始まった空腹を抱え、空虚な森の緑の中へさまよい戻っていくという図。・・・どこへ行こうというんだ？　夜はどこに身を寄せる？　子供たちの備えのなさ・・・そして自己破壊をもたらさずにはいない〈かまど〉に依存せずにはいられないという、彼らの〈ミニ国家〉の矛盾。

だがそもそも、真の神というものは、そういうものではないのか。作り上げる一方で破壊する。キリスト教の風土で育った彼にこれを理解するのは容易でなかった。南西（ズュートヴェスト）アフリカへの、彼自身の私的な征服の旅を敢行するまでは。肌を掻きむしるようなカラハリの炎天、あたり一面、空と火と水とのシートが広がる海岸で彼は学んだ。そのヘレロ族の少年は、宣教師から長期に責められた挙げ句、キリスト教の罪に怯えていた。ジャッカルの幽霊みたいな、恐ろしいヨーロッパのハマオオカミみたいなものに追いまわされ、魂を——背骨に生息する大切な虫を——食べられてしまいそうな気持ちになっていた。その上今度は、昔ながらの神々が、言葉の罠で追いつめられて動きが取れない、差しだしなさい、野蛮な心は捨てさりなさいと、言葉に恋をしているらしいこの学者風の白人は迫る。この男の手荷物の中に一冊の詩集が入っていた。南西アフリカへの旅立ちの日、出版まもない『ドゥイノの悲歌』を港で母が手渡してくれたのだ。乗船した古い貨物船が熱帯の回帰線を越えて進む、新しいインクの臭いが彼の夜に眩暈をもたらす・・・空にはいつしか見知らぬ星座が〈苦しみの地〉に輝く新しい星々のように輝いて、地球は季節を反転していた

27　一九〇四年にドイツ人支配層に対して反乱を起こし、大虐殺を受けたヘレロ族の生き残りは、一九二二年、仇敵だったボンデル族やホッテントットと結託して立ちあが

・・・上陸は、暑い太陽の下で。それは二十年前、蜂起を起こしたヘレロ族の鎮圧のため、青いズボンの兵士たちを鉄製の停泊船から送りこんだ船だった。彼はもといた奥地へ向かう。そしてナミブ砂漠とカラハリ砂漠の間を長々と走る崩れかけた山々の奥地に、彼自身の忠実な土民を、彼の〈闇の花〉を見つける。

太陽の砲撃を浴びて炸裂した岩々が行く手を阻む・・・峡谷が何マイルもどこに向かうともなくねじれ曲がりながら続き、午後の時が伸びて、川底で白い砂が冷たい、女王風のブルーに変わる。・・・今したいです、ンジャンビ・クルンガ[28]したいです、オムホナ[29]・・・燃えさかる茨の枝越しに少年はささやいた。焔のまわりの光の外側に存在するエネルギーを、手にした一冊の薄い本で呼び起こそうとしているドイツ人。彼はハッとして視線を上げた。強度の冷気が彼をつつむ。こいつは俺とやりたいという。しかし、その行為をヘレロの神の名で呼ぶ。神への冒瀆を、こいつはライン宣教師協会[30]から習ったのか。その邪悪な悦びを宣教師が教えたのか。よりによって砂漠の中で。町中でも白昼の光の下でも、それを名づける勇気も出ないほどの危険が群れる大陸で。腐肉を食らう鳥たちが、羽をすぼめ、ハゲた尻を冷たい砂につけて待つところで。・・・今宵、彼は言葉の一語一語にこもる力を感じる。言葉はいま、それが指すものから、ほんの小さな瞬きひとつ離れているだけだ。聖なる名前を耳にしながら少年を犯す、その危うさが彼を狂おしく欲情させる。焔の外側からたちまち復讐がやってくるという恐怖。その覆面(マスク)に直面すると欲情がそそりたつ・・・だが少年にとって、愛のまぐわいはンジャンビ・クルンガをあらしめるものにすぎない。神は創造者にして破壊者、太陽にして暗黒、黒も白も、男も女も、すべての対立二項を一身に体現する・・・そして彼は純なままンジャンビ・クルンガの子になるという（時に見捨て

その「蜂起」をピンチョンは、ヴァイスマン自身も登場する『V.』第九章でフィクション化して描いている。

28 Njambi Kurunga はヘレロ神話の創造主。同時に死神でもある。「ンジャンビ」が天なる男神を、「クルンガ」が太母の地神を表すという意味では両性具有でもある。

29 ヘレロの精神的指導者オムホナは、「最初の人」ムクルがこの世に姿を表したものと見なされた。

30 ドイツのヴッパータールで作られたルター派の団体。アフリカ人の改宗をうたって、一八四二年に南西アフリカの植民拠点ヴィントフークに到着。

られ、歴史から容赦なく振りおとされた部族の者が、みんなそうなったように)。ヨーロッパの男の汗と、胸板と、下腹筋と、男根の下で(少年自身の筋肉は何時間とも思える間、固く引き攣らせたまま、その力で、彼は言葉を圧殺しようとしているのではない、ただふたりの上を通りすぎる、長い、性痙攣的な、ぶ厚い夜の切り身と闘っているだけ)。

結局俺はアイツを、何にしたのか・・・ブリッツェロ大尉は知っていた。そのアフリカ人はいまこの瞬間に、すでにドイツ国土をなかば進んで、ハルツ山地[31]に深く入りこんでいる。この冬に〈かまど〉が中に自分を閉じ込め蓋を閉ざしたとしても、すでにアイツとは最後の別れを交わしている。大尉は、這いうごめく胃と、疾患で詰まり気味の消化腺を抱え、ペンキを濃密に塗った打ち上げ制御車内のコンソール盤の上に屈みこむ。モーターと操縦パネル担当の軍曹らは外で煙草をふかしながら休憩中——彼ひとりが制御盤に面している。うす汚れたペリスコープを覗くと外では身を起こし影のように立つロケットの胴体タンクに液体酸素が注がれているところだ。そこを腹帯のような霜がまぶしく取り囲み、ねじれた霧が立ちのぼる。木々がすぐそこまで繁っている。頭上の空はロケットの上昇をゆるすだけの広さしかない。発射台(ボーデンプラット)は何本もの鋼材を渡した上をコンクリート板で固めたもので、これを三本の木が縁どる空間に設置する。その三本には、ロンドンの位置する二六〇度の角度を正確に割りだすための三角測量の目印がある。その模様は、赤い円の中に太く黒い十字を描いた粗野なマンダラだ。古代の日輪十字(サン・ホイール)に見えるそのマークを分断して鉤十字にしたのは、迫害を免れるための初期キリスト教徒の智慧だったと言い伝えられている。十字の中心には二本の釘が打ちこまれ、ペンキのマークが並ぶその最西端の脇に誰かが、銃剣の先で切り刻んだ——IN HOC SIGNO VINCES. コノ印ニ因リテ汝ハ勝利ヲ得ン[32]、と。

31 V2を製造していたノルトハウゼンの地下工場はドイツ中央部のハルツ山中にあった。

32 コンスタンティヌス

砲兵中隊の連中を調べても白状する者はいるまい。きっと〈地下組織〉の仕業なのだ。だが消去せよとの命令もない。発射台のまわりで、木の切り株が薄黄色にまばたく。新鮮な木っ端やおがくずが古びた落葉と入り混じる。幼い日の、深みあるその匂いを、ガソリンとアルコールの臭気が掻き乱す。雨の脅威、きょうはおそらく雪になるだろう。灰緑色の砲手たちの動きは落ちつかない。黒光りした蛇のようなインドゴムのケーブルが森の中へ消えた先にはオランダ標準の三八〇ボルト屋外電源。待機中（エアヴァルトゥング）・・・

どうしたことか、このごろブリツェロは思い出すのが容易でない。この三角柱に枠づけられた汚れたくぐもりが、森の中に毎日新たに拓かれる三角形の空間で日々繰り広げられる儀式が、メモリーのランダムな漫歩に、罪なきイメージ採集に、入れ替わってしまったのか。打上げのテンポが速まるにつれ、カッチェとゴットフリートといられる時間も短縮され貴重になった。ゴットフリート青年はいまもブリツェロ大尉の部隊にいるのだが、勤務中に彼の姿を見ることはほとんどない――無線基地までの距離を測定する技師らを手伝う一筋の金色の動きを、彼のきらめく髪が風になびいて木々の間へ消えていくのを、目にすることはもはやない・・・なんと不思議な対照だろう、あいつのイエローとブルーは、あのアフリカ人と補色をなしている。大尉はあるとき、感情のあふれるまま、それとも未来を予知したのか、我がアフリカ少年にエンツィアン（りんどう）の名を与えた。リルケの詩にうたわれた山道に咲く、北方人の色をしたりんどうの花。谷間へ持ち帰るべき純粋なる言葉――

Bringt doch der Wanderer auch vom Hange des Bergrands
nicht eine Hand voll Erde ins Tal, die alle unsägliche, sondern

ス大帝がキリスト教に改宗したときの逸話による。三一二年、ローマ帝国統一に向けての「ミルウィウス橋の戦い」の直前に、空に十字のマークとともに、この文字が表れた。

ein erworbenes Wort, reines, den gelben und blaun Enzian

とすればこうだ。登山者は山上の懸崖から
言葉にはなりえぬ一握りの土を谷間へもちかえりはしない、
かれがもちかえるのは、獲得した純粋な一語、すなわち黄に碧に咲く
りんどうだ。[33]

「族長さま……ぼくを見て、赤いです、褐色です……黒です、族長さま……」
「リープヒェン[34]、ここは地球の裏側だよ。ドイツだったらおまえは黄と碧になるんだ」
鏡像形而上学か。想像の中の優美さ、書物的対称性に、ひとり悦に入っているだけでは。……それにしてもなぜ言葉を弄するのか。禿げ山と灼熱と、自身その蜜を吸った野生の花に向かって目的もなくしゃべるのはなぜなのか……なぜそれらの言葉たちを無為に失ってしまうのか——蜃気楼の中へ。黄の太陽と渓谷の凍てつく碧の影の中へ。それが予言であるなら別だ。破局以前のすべての症候を超越し、寄せる年波を思う恐怖を〈一瞬たりと、"対処"の可能性などありえぬと知りつつ〉超越した予言であるなら。「向こう」とは、なにやらうねり、渦巻く、永遠に彼の言葉以下で以前の世界。恐ろしい姿をした時の到来を見ることができるもの。その恐ろしさは、この冬の恐ろしさを、いま〈戦争〉が、不可避のラスト・ピースを押しはめて示そうとしてるジグソーパズルの地獄図の恐ろしさをも超えるだろう——金髪碧眼の若者と、その押し黙った分身であるカッチェと演じるこの〈か

33 『ドゥイノの悲歌』「第九の悲歌」二八〜三一行。手塚富雄訳。

34 英語の「ダーリン」や「スイートハート」に当たるドイツ語の愛称。

きどこのゲームの顛末（だが南西アフリカで彼女に対応するのは誰だ。いまだ見ぬどんな黒人娘がいるのだ。眩暈のする日射しの中、石炭殻を敷きつめた列車がしゃがれた音を立てる夕の線路わきに潜んでいるのか。誰一人、どんな「反(アンチ)リルケ」も名づけたことのない暗黒の星座の中に……）——だが一九四四年ともなってしまえば、もはやどうしようもない。それらのシンメトリーは戦前の贅沢品であり、予言が可能なことなど何ひとつ残っていない。

カッチェの突然のゲームからの離脱にしてもそうだ。こればかりは予知できない。その事態にあらかじめ備えなかったのは、実際カッチェの対極をなす黒人娘が見えてこなかったからだろうか。もしかしたらその黒人娘はメタ解法[35]の天才であったかもしれない——チェス盤をひっくり返すとか、審判を撃ち殺すとか。だが、損傷と破壊を経た後、このミニ国家はどうなるだろう。修復可能なのか。新たなもうひとつの適切な形態へ……射手と息子と頭上のリンゴからなる……そうだ、暴君役は〈戦争〉そのものがつとめてくれる[36]……それで続けていけるだろう……ほころびを修復し配役をふり直して。まだ外に打って出るときではない……

艦の中でゴットフリートが見ている、束縛(ボンド)をすり抜け、その一軒家から出ていくカッチェを。直射日光の下で初めて見えるゴットフリートの足の毛は、繊細な重さのない金の毛網だ。まぶたは早くも皺を刻んでいる、老若の意味を同時にこめたその奇妙な文様は、署名の文字か装飾の曲線のようだ。瞳のブルーはなかなか見られない色だ。天候とうまく同期すると、そのブルーはアーモンドの形をした目には受け止めきれず縁から染みだし、ブルーの流血となって顔じゅうを青い光で覆う。ヴァージン・ブルー、溺死者のブルー、か

35 問いそのものでなく、問いの枠組み自体に応えるもの。

36 「ウィリアム・テル」の伝説は、ハプスブルク家（神聖ローマ帝国）の強権支配に抵抗する英雄の物語。ロケット部隊を率いるブリツェロも比喩的に「射手」であるといえる。

CamScannerでスキャン

つて平和時の昼どきに自転車でめぐった地中海の通りの、チョークのような白壁に吸いこまれつづけていくブルー。……彼にカッチェを止めることはできない。大尉が訊ねたら見たままをしゃべるだろう。以前にもゴットフリートは彼女が抜けでるのを見ている。噂もある——彼女は〈地下組織〉の一員だ、スヘーフェニンゲンで会ったシュトゥーカ[37]のパイロットに恋をしている。……しかしブリツェロ大尉も愛さずにはいない。ゴットフリートのスタイルは受身の観察者だ。彼はその年齢に達して徴兵通知が届くのを、生意気な恐怖心ともいうべき態度で待っていた。自分にとって初めてのカーブがぐんぐん近づいてくるのを見ながら、横滑りを制御しつつそれに向かっていく感覚。「ぼくを取って(ティク・ミー)」と叫びながら。ぎりぎりの瞬間までスピードを上げていく。連れていって——これが就寝時のおきまりの祈りだった。自分は危険を必要としていると思いつつも、その危険はまだまだ想像の産物で、彼がたわむれに弄ぶ世界にリアルな死の結末としての死はなかった、ヒーローはいつも爆撃の中心から、煤だらけの顔に不敵な笑いを浮かべて歩み出てくるし——爆発は騒音と変化と、身を伏せるダイブを意味するだけ。ゴットフリートはまだ死体に接したことがなかった、間近には。ときどき家からの便りで、友達の死を知ることはある。長い、中身のぐにゃりとしたキャンバス地のズタ袋が毒の灰色をしたトラックへ積みこまれ、ヘッドライトが霧を照らして行くのを遠く眺めたことはある。……だが、発射に失敗したロケットが、発射係のきみと、細長い塹壕にすし詰め状態で身を伏せて汗臭いウールを臭(にお)わせて笑いを固くこらえている十二人の仲間の上に倒れてくる、その瞬間も思うことは——すごいやコレ、食事時の会話が盛りあがるぞ、母親(ムティ)にも知らせよう。……ロケットは彼のペットなのだ。まだ充分に飼い慣らしていない、ときに問題を起こし、自分を襲う

37 ドイツ軍の二人乗り急降下爆撃機「ユンカース87」の通称。

CamScannerでスキャン

こともある。それを愛するのは馬を愛するのと同じこと。別の戦線に送られたとしたら、同じやり方でタイガー戦車を愛しただろう。

軍隊は自分を取られた(テイクン)感覚が味わえて、心から安らげる。〈戦争〉がなかったとしたら何を望んでいいかわからなかった自分にも、こんなすごい冒険の一役を与えられたのだ……ジークフリート役で歌うのは無理でも、槍持ちくらいにはなれる。その言葉を聞いたのはどこの山腹だっけ。どんな愛しい日焼け顔の男(ひと)が言ったのだっけ。山なみを這い上がる純白の記憶だけが残っている。キルトを敷きつめたような高原の上を雲が立ち上っていた。……いま彼は見習いのロケットの番人だ。〈戦争〉が終わったらエンジニアになるための勉強が始まるだろう。ブリツェロ大尉が死ぬかここを去るかすれば、自分も檻を出るのだ。それは理解している。でもそれは〈戦争〉が終わったときの話で、〈かまど〉に終わりが来るとは考えない。囚われの子供たちは危険が最大化した瞬間に解放されると、彼もみんなと一緒に信じている。しばしば無力に萎えたまま無抵抗の口に押しこまれスラストを始める大尉のペニスの、先から根本までの塩っぽさも、身を刺すような折檻も、大尉のブーツに口づけするとき映りこむ、ベアリングのグリースとオイルとこぼれた燃料アルコールでまだらになって自分の顔とも思えぬほど黒ずんだ像も——そのひとつひとつが必要なのだ。彼の囚われに具体性を与えてくれる。ただの軍隊生活の圧迫とか抑圧とかいう話とは違うものにしてくれる。恥ずべきことに、自分はそれらがつくづく好きだ——売女(ビッチ)という言葉をあるトーンで言われると、それだけで逆らいがたく勃起してしまう——実際神の裁きで地獄に堕ちるのでないにしても、狂気に落ちたのではないかと、そんな不安に苛まれる。砲兵中隊の連中は、何が執り行われているか、みんな知っている。大尉の命令

CamScannerでスキャン

で口はつぐんでいるけれども、彼らの顔を見ればわかる。計測中の鋼尺を揺らされたり、注いでもらうスープが自分のトレイにこぼれたり、分隊の着替えの時間には右袖を肘でつつかれたりする。このごろはよく怖い夢を見るようになった。肌の異様に白い女に求められるのだ。話しかけることはせずに、絶対の確信の目で見つめている・・・が、自分のことを知っていて、顔で招けば言葉など必要ないと思っている——そう確信した彼は恐ろしくなって、深夜のベッドで弾かれるようにして震えながら目をさますと、皺のよった銀の絹布を通してすぐの高さに大尉のやつれた顔があって、見つめる自分の眼を弱々しく見つめ返している。そのザラザラの髭づらにゴットフリートは頬ずりをせずにはいられない。すすり泣きながら、夢の女のありさまを、じろり見つめられたその眼差しを必死になって伝えようと・・・

大尉ももちろん彼女を見ていた。見ていない者がいるだろうか。大尉は子供をなだめるのに、こんなことを言う——「その女は、この世に実在するのだよ。おまえがとやかく思ってはならない。彼女に求められていることを理解しなさい。そんなことで叫ぶんじゃない。わたしの眠りを邪魔しても何の得にもならないだろう」

「でも、あの女がもしまた来たら——」

「望まれるままをするのだ、ゴットフリート。すべてを差しだす。彼女がどこへおまえを連れていってくれるか見るんだ。俺が初めておまえを犯したときのことを思いなさい。おまえは実に堅かった。だが、俺がおまえの中でイク気だとわかると、かわいい薔薇のつぼみが花開いただろう。おまえに失うべきものはすでになかった。汚れなき唇さえもな・・・」

だが少年は泣きつづける。カッチェは助けてくれない。もしかして眠っているのか。わからない。カッチェと心を通わせたい。だがふたりの間に言葉はほとんど行き交わない。冷たくミステリアスな人。ジェラシーを感じることもある。彼女と交りたいと思ってそれを巧みに大尉に阻まれたりすると、どうしようもなく彼女への思いが高まってしまう。大尉とは違って、この女のことは、自分を檻から出してくれる忠実な妹のようには思えない。彼は解放を夢みてはいても、それは外で進行するダークな〈過程〉として、自分たちの思いなどとは関係なく生起することなのだ。カッチェが出ていこうが留まろうが関係ない。だから実際カッチェがゲームを終わりにして去っていったときも、ゴットフリートは無言でいる。

ブリツェロが彼女を罵る。高価なテル・ボルフ[*38]の画布をめがけてブーツ立てを投げつける。爆撃の音が西方、ハーグセ森から聞こえる。屋外の池の水面が風に波立つ。スタッフの車がエンジンをうならせ、ブナの林を抜ける一本道を走りさる。靄のかかる雲間に半月が輝いている。影に埋もれた半円は古びた肉色だ。大尉は全員に地下シェルターへの避難を命じる。そこはジンの入った茶色い瓶の並ぶセラーで、細編みの竹籠の中はアネモネの球根。あのアバズレのせいで我が砲兵中隊にイギリス軍の照準が合ったか。今にも爆撃機が襲ってくるぞ！　みなペタリ尻をついてオード・ジュネヴァを飲みまわし、チーズを包んだ蠟をむく。戦争が始まる前の、可笑しな話を物語る。夜明けまでには全員酔いつぶれた。木の葉のような蠟を床にちらしたまま。スピットファイアは一機も飛んでこない。

だが発射台3号は、午前中の移動となった。徴用していた家も打ち捨てて。彼女も消えた。イギリス軍の陣地へ入った。大規模なパラシュート作戦の残骸が冬の沼地に散乱する

38 ヘラルト・テル・ボルフ（一六一七〜八一）は精緻な筆づかいで人物の日常風景を描いた、絵画全盛期オランダの画家。

CamScannerでスキャン

戦線学出撃を終えて、イートリートのブーツを履いて。ふくらはぎまでの長さの古い黒いサテンのドレスはワン・サイズ大きすぎ、ダラリとして見苦しい。これが最後の変装。ここから先、彼女はただのカッチェになる。義務を負うのはブレンティス大尉に対してだけ。他の者は、パイロットもウィムも、ドラマーも、インド人も、みんな彼女を見捨てた。見殺しにして去っていった。さもなくば、これは彼女からの警告——

「わるいが、ダメだ。これは渡せない。弾丸はこっちで必要なんで」影が覆ったウィムの顔はもう自分の眼では捕えない。ヘーフ・ニンゲンの桟橋の下、息を殺した、苦々しげな彼の声。頭上には歩行者の耳障りな足音。「手に入る弾丸は一発残らずだ。とにかく音を立てずにいないとな。死体を始末する人手を出してる余裕もないし。もうあんたとこうしてた分も無駄にしたよ……」そう言って、ウィムは最後の出会いを、もはやカッチェには共有できない技術的な話に費やすのだ。ふと振り向くと彼は消えていた。ゲリラらしく、物音ひとつ立てずに。この日の彼が、前の年に冷たいシ・ニールの獲物にくるまってしばらく一緒に過ごしたウィムと同じ人間だとはどうしても思えない。あれはまだ逞しい筋肉がつく前のことだった、肩と腿の傷もなくて——遅咲きの花というのか、政治的ではなかったのに突き動かされて閾を超えた、その前の彼は愛しかった……愛さずには……

もう自分はウィムたちにとって価値はない。彼らは発射台3号を追っていた。それ以外のことはみんな闇にしたが、大尉のロケット発射位置の正確な情報を教えることだけは、なんとか理由をつけて避けていた。その理由がどれほど正当なものだったか、もう完全にバレているだろう。場所がしばしば変わったのは事実だが、それを教えたからといって、カッチェが組織の中枢に一歩でも近づけたわけではない。無表情な使用人の顔を装って近

ついて、低いテーブルの上、シュナップスを注いだグラスや葉巻の煙越しに覗きこむだけ。コーヒーカップの跡のついた見取図、クリーム色の紙面に身体の傷跡のような紫色のスタンプの押された書類を覗きみるのがせいぜいだ。ウィムと彼の仲間はたしかに時間も人命も費やした——ユダヤ人が三家族、東へ送られた——でも、自分だって、スヘーフェニンゲンにいた数ヶ月の間に、それに見合う分以上の働きはしている、でしょう？　あそこの若い男の子たち、神経質で寂しがり屋で、みんな話し好きだった操縦士や乗組員。北海を超えてトップ・シークレットの書類の複写を全部で何把送ってやった？[*39]——飛行編隊（スクワドロン）のナンバーの情報、燃料補給用停泊地の情報、機体のスピンを安定させる技術、その旋回半径の、推力設定の、無線チャンネルの、飛行セクターの、飛行パターンの情報。みんな教えてあげたのに、それでまだ足りていないというの？　カッチェは本気で詰問している。まるで情報と人命との間に現実に変換因子でもあるかのような言い草——だけど、実際そうなのだ。うそだと思ったら、〈戦争局〉のファイルに収まった〈マニュアル〉を読んで。忘れちゃいけない、〈戦争〉というビジネスの本業は売り買いだってこと。殺戮や暴力はおのずと鎮静化するものだから、素人にも任せておける。戦時にあれだけ大量の死者数が出ることは、いくつもの意味で便利であって、ひとつには、壮大な見世物を提供して、〈戦争〉の現実の動きから人びとの目を逸らしてくれる。〈歴史〉を語る素材も提供してくれる。子供たちも〈歴史〉とは暴力の連続だ、バトルまたバトルの連続なんだと学んでおけば、大人の世界に備えるのに役立つ。でも、最大の利点は、大量死が一般の、そこらの人たちへの刺激になって、まだ生きてそれらを貪れるうちに〈パイ〉のひと切れをつかみ取ろうという行動に走らせるところ。市場の祝祭、これが戦争のほんとうの姿なのだ。い

39　ナチスのロケット隊、オランダのレジスタンス、イギリスのSOE——（最低でも）三重スパイを演じるカッチェの課報活動の全貌は把握しきれない。

CamScannerでスキャン

たるところで自生の市場が頭をもたげ、それがプロの慎重な手さばきで「闇市」という"ブラック"な様式をとる。もちろんスクリップとスターリングとライヒスマルクも動いている——冷ややかな大理石の部屋の中をクラシックバレエのような厳粛な舞で舞い進む。でも、その外で、その下の、民衆の間で、より真実の通貨が誕生する。そう、ユダヤ人が通貨性をもつ。タバコ、オンナ、ハーシーのチョコバー、どれと比べても遜色はない。おまけにユダヤ人には罪悪意識の要素もついて回る。将来脅しに使えるぶん、プロには好まれるわけよね——叫ぶようなカッチェの弁舌を静寂が包む。希望の北海が、"海賊(パイレート)"プレンティスが包む。この人とは何度か顔を合わせたことがあった——街中の、広場というにはあまりに狭いバラック小屋に囲まれた空間で。心地よい木の香りのする梯子のように傾斜がきついうす暗い階段の下で。油っぽい波止場の魚を引きあげる足場で琥珀色の猫に上から見つめられながら。それから中庭に雨降りしきる古いアパートの、旧式マシンガン「シュヴァルツローゼ」*40がトグル継手やオイルポンプに分解されて散乱する埃っぽい部屋で顔を合わせた——そんなときはいつも、馴染みの顔が一緒だったし、彼女のことは、任務の周縁でチラホラ見ていただけだった。その顔といきなり、文脈抜きで向かい合う。背景には巨大な空と高くたっぷりとわき上がった海の雲。彼女のあまりに孤独なようすにパイレートは危険を嗅ぎとる。そう、まだ名前も聞いていなかった。そう、〈天使(エンゲル)〉の呼び名をもつ風車小屋のそばで出会うまで……

カッチェは話す、なぜ自分は今ひとりなのか、なぜ戻れないのか。だが顔はここにない。彼女の顔は画布に描かれ、デュインディフト近くの例の家に掛けられ、部屋に残った他の品々と一緒に〈かまど〉ゲームを見つめている——紫に染まる雲が流れるように、幾世紀

40 第一次大戦中に活躍したオーストリア製の重機関銃。

もな過ぎゆき、彼女自身とパイレートとを分かつ薄いニス膜が黒ずんだ、そのおかげで彼女は必要だった静寂の楯を得た、古典派的無関与性（クラシック・イレレヴァンス）を・・・

「しかし、これからどこへ行くんだ」ふたりとも手はポケットのなか、首にはきつくマフラーを巻いている。波が引いた跡に残る小石の黒びかりが、夢で綴られる文字のように、驚くほどくっきりした形で浜辺に印字され、意味が立ちあがるのを待っている・・・

「わからない。どこがいいか、聞いていいかしら」

「〝ホワイト・ヴィジテーション〟はどうだろう」パイレートは薦めてみた。

「〝白きおとずれ〟、けっこうよ」と言って、彼女はその虚空へ足を踏みいれた・・・

「オズビー、おれ、狂ったのかな」雪の降る晩──きょうは午後だけで五発のロケットが落下した──海賊プレンティスは蠟燭のともる台所で震えながら問いかけた。この家のイディオサヴァンたるオズビー・フィールは今夜はナツメグ相手に忘我のトリップ中、よってこの質問もきわめて適切なものに思える。蒼白いセメント製の処女峰（ユングフラウ）は薄暗い隅にうずくまり、デンと落ちついて見えるのだが、きっとイラツいているだろう。

「狂ってる、狂ってる」そう答えながら指先と手首を流体のように動かしているのは、映画『ホワイト・ゾンビ』[41]の中でベラ・ルゴシが睡眠薬入りのワイングラスを間抜けな主役の少年に手渡すシーンの真似だ。これはオズビーが最初に見た映画であるとともに、ある意味、最後の映画であって、『フランケンシュタインの復活』[42]『フリークス』[43]『空中レヴュー時代』[44]と並んで、彼のオールタイム・ベストに入る。もう一作、『ダンボ』も入るかもしれない。これを彼は昨晩オックスフォード・ストリートまで見にいって、途中で気がついたのだが、長い睫毛の赤ちゃん象の太い鼻に巻かれていたのは魔法の羽根ではなく、ユ

41　一九三二年公開。ハイチを舞台に、『魔神ドラキュラ』（一九三一）でスタートなったルゴシを起用したハリウッド初のゾンビ映画。当時の邦題は『恐怖城』。

42　ルゴシがイゴール役で初登場した *Son of Frankenstein*（一九三九）はシリーズ三作目。

43　*Freaks*（一九三二）は、『魔神ドラキュラ』同様トッド・ブラウニング監督作品。巡回見世物小屋を舞台に〝奇形〟の登場人物が迫真のドラマを演じる。

44　*Flying Down to Rio*（一九三三）。フレッド・アステアとジンジャー・ロジャースがラテンのリズムで踊りまくる。

CamScannerでスキャン

ーモアのかけらもないアーネスト・ベヴィン[45]のグリーンとマゼンタ[46]の顔だったもので、オズビーは、これは席を外さないと失礼だと思って出てきてしまったのである。「違うんだ」オズビーの先ほどの答えの意味を取り違えたパイレートに説明する、「狂ってるっていうのは、アンタがってことじゃ、プレンティス、ない。全然そんなつもり…」

「だとしたら、どうだ？」オズビーの沈黙が一分経過したところで問いかける。

「はぁ？」とオズビー。

パイレートがうたぐり出している。森の家について何か言うたびにカッチェが話を避けるのはなぜだ。そのことが彼の頭から離れない。森の中の出来事を一瞬振りかえってはたちまち目を逸らす。出てくる言葉は、真実の結晶板に当たって乱反射するだけ。ところどころ涙に埋もれ、まるで意味がとれないし、そこにきらめく真実の水晶が何であるか推量すらさせてくれない。そう、いったいどうして発射台3号（シュスシュテレ）を去ったのか？ われわれは何も知らされていないじゃないか。だが、ゲームの演じ手はときに、凪のときも危機にあっても関係なく気づくことがある。結局のところどうなのか、と。本気でプレイしていても、あるとき同じには続けられなくなることが。…その瞬間は急に、派手にやってくるとは限らない——ジワジワと来るかもしれない——スコアにも観客数にも関係なく、スタジアムに満ちる期待にも、連盟から課せられるペナルティにも背いて、プイとその場を出ていくことはあるだろう、カッチェも、タフで若々しい孤立者のように肩をすくめ、長足のストライドで、知ったことか（ファック・イット）のセリフを吐いて出てきたのではないだろうか…

「わかったよ」パイレートはひとり言を続ける。麻薬人間（ドーパー）の夢見心地のスマイルに包まれたオズビーは、部屋の隅のアルプスの、熟れた女性の雪肌を追っている——見上げる氷の

45 当時チャーチル政権の労働大臣。

46 緑と紫赤の配色はサイケデリックな模様の定番。二十年後のヒッピー文化を先取りしているかのようなオズビーは、トリップしながら映画を見ていたのか。

山頂と、青い夜のランデヴー……「一時の自分離れってやつだろ。変な趣味だってことは認める。メンドーサ機関銃をもち歩くのと同じさ」〈社（ファーム）〉に属する他の連中はみんなステン・ガンをもち歩く。メンドーサの重さは三倍もあるのだ。メキシカン・マウザーの7ミリ口径の弾丸なんて、このごろじゃ目にすることもない。ポートベロ・ロード[*47]でだってお目にかからない。すばらしい「分解の容易さ」にも、速射の能力にも欠けるが、この旧式のメキシコ製機関銃をパイレートは愛してやまない（そう、最近の入れこみようはまさに「愛」）。「何をとって何を捨てるかの問題だろ」ルイス銃[*48]スタイルの直引きボルト・アクションへのノスタルジア、しかもメンドーサは一瞬のうちに銃身を取り外すことができ（ステン・ガンの銃身を外そうとするヤツなんているか）、撃鉄（ストライカー）はダブルエンド式だから片側がやられても大丈夫なんだ。……「重さで判断なんて俺はしないぞ。物好きといわれようとこれが俺の趣味なんだ。重いなんて言っていたら、女を連れ帰ってこられるかよ」

「わたし、あなたの責任（おにもつ）じゃないから」そこに立っていた。ワインカラーのファソネ・ビロードで首から手首、そして足の甲まで包んだ美女の影像。いつから、みなさん（ジェントルメン）、このひと、ここに立っていたのでありましょう。

パイレートは急に弱気な声で、「おれの責任範囲でしょうが」

「ハッピー・カップル！」オズビーが奇声を発し、嗅ぎ煙草をつまむしぐさで、ナツメグをもうひとつまみ手にとった、模型の山にすっかり同化した目玉が白くグリグリ回っている。台所であたりかまわず大きなクシャミ、その瞬間に気がついた、このふたりがいま同時に同じ視野に収まっている、すごい、信じられない。パイレートの表情にバツの悪そうな影が差す、カッチェの表情は不動だ、隣室からの光が顔半分を照らしている。残りの半

47 ハイドパークの北西。現在も土曜の骨董市で有名。

48 アメリカで開発、第一次大戦中にイギリス陸軍と空軍に採用された軽機関銃。その後ブレン軽機関銃が出回るにつれて時代遅れに。

CamScannerでスキャン

分はスレート色した影の中。

「きみをあのまま置き去りにすればよかったの?」そういわれたカッチェがたまらず口元をゆがめたときにもう一発、「それとも、こちらには誰か、きみを連れ出すべき負債のある男がいるってことか」

「違うわ!」ヒットだったか。こんなことを訊ねたのも、その〈誰かさん〉というのが、数限りなくいるのではないかという疑心暗鬼にかられ始めていたからだ。だがカッチェにとって、負債などは掃いて捨てるためのものだ。その血には揺るがしがたい悪徳が流れていた——彼女の望みは海を越えること。その間に交換のレートも存在しない国と国とを結びつけること。ご先祖さまは中期オランダ語で詩った——

ic heb u liever dan ên everswin,
al waert van finen goude ghewracht.*49

愛しさをたとえる比喩に、黄金や黄金の幼牛(ゴールデン・カフ)をもちだすことはあるにしても、「黄金の豚」をもってしても較べようのない愛とは。だが十七世紀の中葉にすでに黄金の豚はなく、豚はみな生身の肉でできた死すべき存在だった。豚と同じく生身の存在だったが、カッチェの別の先祖さまフランス・ファン・デア・フローフは、生きた豚を船いっぱいに積みこんでモーリシャスへ旅立ち、銃を抱えて黒檀の森の中を歩きまわった。*50 沼地や溶岩流の谷をさまよい、何故そんなにもその計画的殺戮に入れこむのか自分でも判らないドードー鳥の殲滅に十三年を無益についやした。オランダ産の豚どもが卵と幼い雛をかたづけ、フラン

49 この詩はヤーコプ・グリムの『ドイツ神話学』にある。ストーリーブラスによる英訳を訳すと「大切なひと、野の豚よりも/その全身が金の糸であったとしても」。グリムの説明によれば、好戦的な北方神話のさらに古層に、愛と平和の象徴として「黄金の野豚」の信仰があった。

スは（へ）なし（こ）（メ）ートル先にいる醜鳥の、羽根の剥げた灰色悪い鳥の肌に狙いをつけ、銃身をフックにかけ、引金をゆっくり絞る。ワインで湿らせ蛇が口を開いたような点火孔に挟みこんだ火縄を、赤い火の花が開くように下へ下へつたっていく。熱が頬をこがす。その火をフランスは、僕自身の小さな光明、と書きつけて、故郷(くに)に住む兄ヘンドリックに送った、僕の星座の支配者、と・・・点火薬を覆っていたもう片方の手を開く――火皿に突然の閃光、火門から火花が舞い上がり、険しい岩々に銃声が跳ねかえる。反動により台尻がはねあげた彼の肩は、当初の生傷が一度火ぶくれになり、やがて夏が過ぎるころ固いたこを生じた）。飛翔の意志もなく、足が遅かろうと逃げようともしない愚図で不器用な鳥――そもそも何のために存在するのか――自分の命を奪った者がどこにいるかもしらぬまま粉砕し、血を飛びちらせ、耳障りな断末魔の鳴き声を上げた・・・

故郷(くに)もとに手紙がついたのは数年後。何年分もが一度に届いた便箋は、乾いてカサコソいうものもあり、海のしみがついたものもあり、判読不能なものもあった。兄は一応拾い読みはしたものの、内容はほとんど理解できなかった。兄としてはただその日をいつものように庭や温室で、当時のオランダの熱狂であったチューリップいじりをして過ごせればよかったのだ。わけてもお気に入りは、現在の情婦の名前をつけた品種――鮮血の赤に紫の刺青が混ざるもの。・・・「近頃来島する輩はみな新式のスナップ銃を手にして居ります。が・・・僕は不恰好ながら昔式の火縄銃を手放す積りはありません・・・あの様に不恰好な獲物には此の火器が適役でせう」[51]と書きながら、冬の島を襲うサイクロンの日も休まずに、日焼けした髭もじゃの顔と汚れた服で鉄砲に詰めた鉛弾を軍服の端切れで押しこんでいるのは何故なのか、その理由に手紙はまったくふれていない。身体が汚れていないのは、雨

50 オランダは二度に亘ってモーリシャスの植民を試みた。カッチェの先祖のフランスが参加したのはその二度目の試み（一六六四～一七〇〇）で、オランダ東インド会社による永住と農地開墾の試みが続いたが、撤退を余儀なくされた。島に棲息していたドードー鳥が植民者（と連れてきた豚）によって絶滅したというのは史実の通り。

51 火縄銃は十五世紀から主流の火器で、ポルトガルが種子島に伝えたのもこれだったが、すでに十七世紀前半には火打式のフリントロック銃が実戦での効率の良さを示していた。

にわたったあとか、高地へ登ったときだけ。そこでは旧火山口が、空の青さそのもののような雨水を溜めて天に向けて差しだしていた。

撃ったドードーは腐るにまかせた。その肉は食うに耐えなかった。通常ひとりで狩りをした。だがしばしば何ヶ月もそれが続くと、孤独が彼を変えはじめる。変調は知覚自体に及んだ——白昼のぎらつきの中に見る鋸山は燃え上がってサフランの花になった。藍色が流れ、空は彼のガラスの家に、島全体が彼自身のチューリップマニアの花園に変じた。さまざまな声が——不眠症の目に南半球の夜の星々は、星座を結ぶには濃密すぎて、集まり合っては顔をつくり、ドードー鳥以上にありえない寓話世界の珍獣の形をなした——眠れる者らの言葉たちが、ソロで、デュエットで、コーラスで聞こえる。リズムも発音もオランダ語、なのに覚醒した理性に対して意味をなさない。ただ、警告を発してはいた…叱っている、彼が理解しないのを怒っている。いちどフランスはドードーの白いたまごを、草の盛り上がりの上に置かれたそれを、まる一日みつめていた。餌をあさる豚たちも入った例(ためし)がないほどの奥地だった。孵化を待つ——最初の一突きが白亜の殻に網目を走らせるのを、出現を、待つ。鋼鉄の蛇の歯にしっかり咥えられた麻縄はいつでも点火可能。輝く太陽から黒い火薬の海へ向けてパチパチと降りくだり、飛びこみ、稚児を吹き飛ばす、その瞬間光明(いのち)のたまごが暗黒のたまごに転じる。世界に向けて見開かれた瞬間の目に驚くべき光景が差し込んだ直後に、濡れた羽毛を南東よりの貿易風が吹きさますなかで。…毎時毎時が一本の銃身の先を凝視するうちに過ぎゆく。このとき彼は理解しただろうか。理解の光がおとずれたなら、きっとこのときだ——自分と餌食(いけにえ)との間を結ぶこの一本の軸に、地軸のような揺るぎなき力があることを。たまごの中には太古へ遡る鎖があって、それと

CamScannerでスキャン

自分とは今も結ばれているのだと。一瞬、現世の光によって飛びちろうと、それは永遠に続くのだと。黙するたまごと狂気のオランダ人、中をむすぶ火縄銃、三者は縁どられ、フェルメール[52]の絵のように輝きながら動かない。動くのは太陽だけ。天頂の日は傾き、落ちて、反っ歯のような山脈の背後、さらにはインド洋。あとはタールのような闇夜。たまごはピクリともしない。嘴のノックは始まらない。さっさと始末してしまえばよかったのだ。未明までにヒナは孵ってしまうのだから。だがもう巡り（サイクル）は完了していた。彼は立ちあがる、ひざと腰が痛む、頭の中は内なる指示者たちの声でいっぱいだ。寝言のような声がうゎんうゎんと重なり響く中をフランスは、銃を両腕で右肩にかつぎ、足を引きずり、その場を去った。

孤独のためにこんな状況に追いこまれてくると、しばしば居留地（セツルメント）にもどって狩猟隊に加わった。酔っぱらった学生集団の異常な興奮のようなものが彼らをとらえた。夜の夜中に駆けだして、まもなく銃を発射する。木のてっぺんも撃つ、雲に向けて撃つ、耳に届かぬ高音で叫びまくっている革（コウモリ）の悪魔も撃つ。夜の丘を吹き上がる貿易風が男らの夜の汗を冷やす。夜空を薄紅に染める火山の深い轟音は、頭上の蝙蝠同様、人間の可聴域を超えていた。中間のスペクトルに囚われた男たちは、自分らが発する声と言葉の周波数帯から抜けでることができない。

怒り狂う軍勢は敗残兵、神に選ばれた人種に扮した敗者だった。植民の試みはもはやどうみても失敗だった——連中が切りだす黒檀さながら彼ら自身が島から抜かれ、哀れな醜鳥さながら彼ら自身の足跡も地上から消えつつあった。一六八一年にはディドゥス・イネプタスが絶滅、モーリシャス島に最後まで残った植民者も一七一〇年までには島を離れる。

52 有名なオランダの画家ヤン（ヨハネス）・フェルメール（一六三二〜七五）。

この地での彼らの企ては、ひとりの人間の一生ほどの歳月しか生きつづけなかった。
それを無意味な企てと思わぬ者もいた。まともに歩けもしない鳥の姿に、悪魔による介入が見えたから。その存在自体が、創世の神の信仰に楯突くほど醜かったから。〈地〉を守る堤防をすり抜けて流れこむ最初の毒の一筋がモーリシャスであるのなら、キリスト教徒たるもの、ここを食い止めねばならない。さもなくば今度は〈神〉ではなく〈敵対者〉の手によって二度目の〈洪水〉が地上を覆いつくすかもしれない。マスケット銃に弾薬を押しこむ行為は、かくして神への忠誠を象徴した。そのシンボリックな意味を彼らは理解していたのだ。

だが、もしかれらが選ばれてモーリシャスに来たのなら、なぜ失敗し、去っていくことになったのか。選ばれたというのは間違いで、実はふるい落とされたのではなかったか。自分らは〈選ばれし者(エレクト)〉なのか、それとも〈過ぎゆかれし者(プレテリット)〉、ドードー鳥のように破滅を運命づけられた者なのか。

フランスには、レユニオン島[53]にいる少数を除いてドードー鳥が生息するのは地上でこの島だけであり、自分の行為がひとつの種の殲滅に手を貸すものだということは、知るよしもなかった。だがときに、異様なまでの狩りの規模と熱狂には心穏やかならざるものを感じてもいた。「これが若し、かほどに醜く歪んだ生き物でなければ、わが同胞の活力源として末永く資することもできたでせう。ぼくにはこの鳥が他の連中ほど憎めぬのでありますが、さりとて殺生の手をゆるめるのは、はや遅すぎます。……少々嘴に可愛気があり、まともな羽根を有して僅かなりと飛べたらば……創造主のデザインの細部のことです。或いは島に土人でも居たなら、この島の珍妙さは北米に野生する七面鳥とかわらぬ程度であ

53 モーリシャスと共にマダガスカル東方のインド洋上に浮かぶ島。当時フランスが入植を進めていた。

CamScannerでスキャン

ったやもしれません。鳥の顕著たる生命形態でありながら、ことばを持たぬところにドードー鳥の悲劇があったのでせうか」

ことばがなければ、それまでだ。丸々とした亜麻色の侵入者どもが〈救済〉と称するものに選ばれる可能性はない。ところがフランスはある日、とりわけ寂しい朝の光の中で、奇跡を目にせずにはいなかった。〈ことばの賜物〉を……〈ドードー鳥の入信〉を。光り輝く岩礁を背にして磯辺に数千羽、火山が一時なりをひそめた無風の朝に、整列した数千羽の啼き声だけが聞こえていた。彼らの上に昇りはじめた秋の陽が深いガラス状の光を投げる……みんな出てきた、それぞれの巣から、繁殖の地から、溶岩台地のトンネルから川水の吹きだすそばから、北海岸沖の、波に洗われる漂積物のような小島から、突然の滝から、錆びた斧の刃が打ち捨てられ腐った懸樋が風に倒れる荒涼たる熱帯雨林から、切株と化した山かげのぬれた朝の中から、ヨチヨチと、不恰好な巡礼者として、集会へ集まってきた――清められ、神に導かれんがために。……ドードー鳥とて神の被造物であり、理性の言葉を交わす能力(ちから)を賜り、神の〈ことば〉の中にのみ永遠のいのちが見いだされることを知っているかぎりにおいて……だが見よ、ドードーらの目に光る至福の涙を。彼らも兄弟ではないか、きのうまで迫害を続けてきた人間らと、キリストに於いて兄弟なのだ。いまドードーらは夢みる、厩のなか、救いの御子の近くに、安らかに羽根をたたんですわり、御子を、その愛らしき顔を見まもる、一晩中……

ヨーロッパの進出のもっとも純粋な形がそれだ。ぜんたいあれは何のためだったか。暴れる海を越え、壊疽の冬を抜け、飢餓の春を耐え、神をしらぬ者どもを徹底して追いまわした。〈獣〉と真夜中のとっ組み合いを演じ、汗も凍り涙も淡雪の薄片となった、あれは

みな、ひとえにこの奇跡の回心に立ち会うためではなかったか。視界にあふれるほどの改宗者たち、こんなにも柔和な、信頼しきった表情で――そう、その鋭い爪がどうして恐怖に握りしめられよう、我らが必然の剣(ブレイド)を前にして、どうして非信心の啼き声を発せられよう――浄められたいま、鳥たちはわれわれの食糧となり、浄められたその屍と糞は穀物を実らせるだろう。われわれはドードーに〈救済〉について伝えたか、〈神の都市〉への永遠の居住を、〈永遠のいのち〉についての約束を？　この世の楽園は復興し、その島は以前のようにドードー鳥に返されると？　おそらくは。われわれ自身の祝福の仲間のうちに、この弟分たちも含めて考えていたはず。実際もしドードーのお蔭でわれわれが飢えずに済むのならば、彼岸のキリスト王国でのわれわれの救済も、同様に、不可分のものとなろう。さもなければ、ドードーはこの世のいつわりの光がとらえた姿である以外にない。われわれに撃たれて死ぬだけの存在に。神がかように残酷たりえようか。

　どちらのヴァージョンもフランスにとっては現実味のあるものだ。奇跡があったのか、それともただ延々と人間の記憶を超える年数の狩りが続いただけなのか、可能性としてどちらも同程度にリアルだった。どちらにせよ、結局ドードーは死ぬことに変わりはない。彼は何を信じたのかといえば、肩にかついでいる火器を、その鋼鉄のリアリティを信じた。それだけを信じた。「火打ち式の銃のほうが軽量で、コックとフリントとスチールによってより確実な発射が保証されるということも彼は知ってたんだ。それでも懐かしの火縄銃への思いを捨てることはできなかった……重いからってそれがなんだ、物好きといわれようとそれがフランスの趣味なんだから……」

　パイレートとオズビー・フィールは屋上の縁にもたれている。蛇行する河――帝国の蛇

かつてこの都の[illegible]たちは壮麗な日没のなかで、群れたる[illegible]も公園も、傾けた尖塔この街のうえにも、[illegible]ひかりは奥深い道路と切れぎれの屋根が何マイルも続くうえに注がれ、S字にくねるテムズは燃えるオレンジのどぎつい絡みとなって、旅人に生のはかなさを知らせる。視界にあるすべての戸と窓を封印し、または抉りとる。旅人の眼は束の間の友を求めているだけなのに。通りすがりにひと言ふた言かわす言葉があればいいのだ。あとは階段をあがって石鹸の匂いがする借間の、床の一角を珊瑚の夕陽が四角く染める部屋へもどるだけ——このアンティークな、おのれを燃やすだけのひかりは、メーターつきの冬のホロコーストで消費される燃料か。さらに遠くにある、煙の撚糸と織布に包まれた形象は、いまや完璧に灰と化した焼け跡だ。より近くの窓は一瞬太陽光(フェイディング)に打たれたがまったく跳ねかえさずに吸いこんだ、同じ破壊のひかりを。強烈なひかりの後退。逆戻りはありえない。ひかりは歩道のわきに停めた政府公用車に赤サビをふかせ、冷気の中を、まるで巨大なサイレンの音がいよいよ鳴ったかのように、店の前を急ぎ足で過ぎる最後の顔々をてからせる。街路を行き交うもののなき凍てついた運河に変え、何百万羽ものムクドリで満たすひかり。夕べのロンドン市街に、大群が集まり舞い降りる、かすみのかかる石の台座へも、人気(ひとけ)の消えた広場へも。全体がひとつの巨大な集合的な眠りをなして。レーダーが捕らえた鳥たちは、凝集する同心円をなしている。技師たちは彼らを「天使」と呼ぶ。

「ご先祖様に憑かれちまった？」ベニテングタケの煙草をふかしてオズビーが言う。

「たしかにな」屋上菜園の端っこを歩くパイレートは、日没に苛立っているようだ、「それだけは信じたくないがね。子孫のほうだけで、もうたくさんって感じだ・・・」

CamScannerでスキャン

「彼女のこと、どう思ってるの」
「誰か使いたい人が使えばいい、と思うね」そんな気持ちになったのはきのらのチャリング・クロス駅[54]でのこと。"白のおとずれ(ホワイト・ヴィジテーション)"に向かったカッチェを送っていったのだった。
「彼女は、そこの誰かにとって、予期せぬ配当金ってことになる」
「その場所、何をたくらんでるところか、知ってます?」
何か巨大なタコを使った計画が進行中だということしか聞いていない。あそこで何をやっているのか、ここロンドンで正確につかんでいるものはひとりもいない。"ホワイト・ヴィジテーション"の内部でも、このところ人の入れ替えがきわめて激しく、その理由も沼地のような曖昧さ。マイロン・グラントンがロジャー・メキシコに向ける視線には、同志以上の何かがある。かのズアーブ兵[55]は、北アフリカの〈ロレーヌ十字〉[56]のもとへ戻ったが、その前に、独軍が不吉に感じるであろう彼の「黒さ」を、誰あろうゲアハルト・フォン・ゲール監督直々のメガフォンによってフィルムに収められた。フォン・ゲールといえば、かつてはラング、パープスト、ルビッチら[57]の親密な仲間であり、現在も彼らと比べられる映像の巨匠。氏は近ごろ、亡命政府（いったいどれほどの数の?）をつなぐ網目を飛び回って、乱高下する通貨と、戦闘続行中の欧州大陸にいきなり現れてはふっと消える、驚愕の市場ネットワークの樹立と消滅にかかわっている。銃撃戦の弾丸が通りのあちこちを掠めて、巻き起こる火災が酸素原子を上空へ巻き上げ、買物客が殺虫剤にやられた虫のようにバタバタ倒れる…そんな中でもビジネスからフォン・ゲール的なタッチが失われない——ばかりか最近そのタッチはますます繊細になった。これら初期のラッシュプリントは、ナチス親衛隊の制服を着こんだアフリカ人がひとり、ロケットを積みこんだマイラ

54 ホワイトホールに近い、ロンドン中心部の鉄道ターミナル。

55 180ページで〈ブラックウィング作戦〉の撮影に駆り出されたアフリカ兵。

56 横棒二本の十字架で、フランスのヴィシー政権に対抗するドゴールの軍隊のシンボル。

57 フリッツ・ラング（一八九〇～一九七六）、ゲオルグ・ヴィルヘルム・パープスト（一八八五～一九六七）、エルンスト・ルビッチ（一八九二～一九四七）は、みな一九二〇年代のサイレント期、すでに国際的な名声を得ていた映画監督。

CamScannerでスキャン

ーヴァーゲン（の木槽と粗布製の模型）の間を動きまわるというもので（ロケ地がイギリスだとバレないよう、常に遠くのアングルから、松林と、降りしきる雪を通しての撮影）、駆り出された一同が、それっぽく黒塗りにした顔ではしゃいでいる。ポインツマン氏も、ノキンコも、エドウィン・トリークルも、ロッロ・グローストも、アブリアクション研究施設神経外科班アーロン・スロースター医師も――マイロン・グラントンさえも――存在をでっちあげられた〈黒の軍団（シュヴァルツコマンド）〉の、黒肌のロケット射手として、セリフもなくぼんやり映るだけのエキストラ役で登場するのだ。上映時間三分二十五秒、場面（シーン）の数が十二。フィルムは、古めかしく偽装され、黴をつけられフェロタイプ処理[59]までされてオランダへ送られ、レイクスヴェイクシャの森の偽装ロケット発射基地の〝残留品〟に仕立てられるだろう。そしてオランダのレジスタンスがこの基地を〝襲撃〟し、タイヤの跡をつけ、あたり一面荒らしまくって慌ただしく出発したかのように見せかけるだろう。火炎瓶で襲撃された軍用トラックの内部に、灰と焦げた衣服、溶けかかった黒焦げのジンの壜にまじって、〈シュヴァルツコマンド〉を記録したフィルムの一部が見つかるというシナリオだ。わずか三分二十五秒ぶんが焼け残ったかのように工作された、細心の偽造映画作品。これぞわが最高傑作なりと、フォン・ゲールはまじめな顔で豪語する。

「まさしく、後の展開を鑑みるに」著名な映画評論家ミッチェル・プリティプレイスはこう書いている、「彼の自己評価の正しさは論を俟たないであろう。しかしながら本作がそれほどの傑作となった理由は全く別であった。フォン・ゲール自身は、監督の特異な視野をもってしても予見しえぬものであった」

〝ホワイト・ヴィジテーション〟の資金源はまるで当てにならず、そのため映写機も一台

58 V2ロケットを移送するトレーラーが、そのままロケットを直立させ、打ち上げ台として機能するように設計された車。

59 現像した印画紙を、クロームメッキした鉄板に密着させて加熱・乾燥し、光沢のある写真に仕上げる方法。

CamScannerでスキャン

しかない。毎日のおひるどき、〈ブラックウィング作戦〉関係の人びとが似非アフリカ人ロケット部隊のフィルムを見終わると、ウェブリー・シルバーネイルが映写機を運んでいく。木の床の磨り減った寒々しい通路を通り、ARF棟の奥まった部屋へ。そこの水槽では表情のないタコのグリゴリがゆんわりと体をうごめかし、別の部屋からは犬の泣き声が。悲しげに長く引っぱるもの、激しい痛みに吠えるもの、そこにない、けっしてこない刺激を求めてクンクン鼻を鳴らすもの——そして雪は旋回をつづける、緑色のブラインドの向こう、神経のない窓に不可視の刺青針が刺さった。リールから引きだされたフィルムが映写機に差しこまれ、電灯がパチンと消える。タコのグリゴリの注意はスクリーンに向かう。画像はもう動いている。カメラは追う、部屋いっぱいの空間をわざと無目的に歩きまわる女、長い脚で少女のように伸びやかなストライド、肩のあたりをちょっと丸め、髪はそこらのオランダ娘とはまるで違えた流行のアップスイープ、それを古い変色した銀のかんむりで留めてある・・・

□□□□□□□

まだ早朝である。彼はひとり、よろけた足取りで湿った煉瓦道へ出た。南方に浮かぶ防空気球は、寄せる朝で波乗りをしているよう。日の出を浴びて、桃色に真珠色に発光している。

スローストロップはふたたび放し飼いになった。ストリートに戻された。チェ、セクション8[1]で帰れる最後のチャンスだったのに、みすみす逃してしまったぜ。精神病棟にもっと長く入れておいてくれる約束だったじゃないか——数週間っていってなかったか、なのにひと言の説明もない——「チェリオウ!」でさようならだ、ぺらぺらの紙一枚に、ACHTUNG(アハトゥング)に戻れと指令して。ここ何日か、スローストロップの全意識を占めていたのは、ケノーシャ・キッドと、西進男クラッチフィールド、その相棒のワッポだった…まだ問題が解けてないでしょ、冒険だって終わっていないし、強制執行やら取引算段やらも大量に、豚に柵を跨がせて家に連れ帰ろうという老婆の話[2]規模に膨んでいる。それを、なんと乱暴な、いきなりロンドンの街なかに放り出すとはねえ。

しかしどこか違うね…何か…変えられてる…いや、文句を言ってるわけじゃない

1 精神的な問題による除隊を表すカテゴリー。

2 その豚の足を犬に噛ませようとしたら犬が言うことを聞かない。その犬をこらしめようと、棒に犬を叩くように言うが、棒も言うことをきかない。以下、順ぐりに、火、水、雄牛、ブッチャー、縄、鼠、猫に「こらしめ」を依頼する……というユダヤの民話。

んだけど――でも、ほら、いまもたしかに尾けられている。少なくとも監視の眼が光ってる。尾行者の中にはすばしっこいのもいるのだが、顔が見えてしまうのもいて、きのうなどウールワース[3]でクリスマスの買い物中に、オモチャ売り場に一対の小さな丸い目玉を、バルサ材の戦闘機と子供用エンフィールド銃の向こうで見てしまった。ハンバーに乗りこむときも、バックミラーに映っているのが、いつも同じ車のような気がする。色とか車種が特定できるわけではないが、小さなミラーに縁どられていつも何かが映っているのが気になって、このごろ朝の出勤には別の車を借り出すようになった。ACHTUNGの自分の机の上もいじられているような気がするし、女の子らも何かしら理由をみつけて約束をすっぽかす。聖ヴェロニカ病院に行ってきてから、それまでの暮らしと静かに切り離されてしまったかのようだ。映画館に入っても、後ろの席から、声を出すまい、紙の音を立てるまい、あまり大声で笑うまいと気づかっているようすが伝わってくる。スロースロップは映画館の常連なので、ささいな異変も感じるのである。

グローヴナー・スクウェア近くの勤務先の、自分の机を囲いこむ狭い空間が、だんだん自分を捕らえたワナのように感じられて、ときどき追っ手のこない場所を求めてイースト・エンドをくまなく歩く。テムズ河から立ちのぼる不快な空気を吸いながら丸一日を過ごすこともあった。

ある日、狭い路地へ折れたとき。煉瓦の壁に呼び売りの行商人が並ぶ場所で、スロースロップの名を呼ぶのは誰だろう――おお、おお、カモン、ベイビー、三つ編みのブロンドヘアが左右に跳ねる。玉石の道をウェッジ・ヒールがカッカッ叩く。看護婦の服に身をつつんだトマトちゃん、名前が、えーと、ほれその――ダーリーンだ。聖ヴェロニカ病院勤

3 アメリカ資本のデパート。一九一〇年にロンドンに進出している。

務で、近くのクォード夫人の家に間借りしている。夫人はだいぶ昔に夫と死別し、以来、古風な病いをつぎつぎと病んできた——萎黄病、皮疹（テター）、皸（あかぎれ）、紫斑病、膿瘍、リンパ腺炎、加えて近ごろは壊血病の気味もある。そこで家主さんのためにライムを探しに出たら、揺れる麦わらのバスケットに入った実が飛び出して通りをコロコロ。ナースのキャップをかぶった姿で駆けおりてくる若々しいダーリーンちゃん。その揺れる胸は柔らかなフェンダー——灰色の都会の海に生じた衝突を和らげる。

「戻ってきたのね、ああ、タイロン、戻ってきてくれたの」涙がひと筋。もうひと筋。ふたり一緒に屈んでライムを拾い上げるとき、糊の利いた彼女のカーキの制服がカサコソ音を立てる。これでけっこうおセンチなスロースロップの、おやおやっ、鼻がグスッと鳴った。

「ほら、おれだよ」

　半分溶けた雪のぬかるみに淡いパール・カラーのタイヤの跡が見える。この界隈の窓のない高い煉瓦の壁を背に、カモメがゆっくり巡航している。

　暗い階段を三つのぼった先がクォード夫人のお宅である。キッチンの窓から、煙を透かした遠景に、日によってセントポール大聖堂のドームが見える。居間の薔薇色のフラシ天張りの椅子にクォード夫人の小さな身体があって、ラジオからプリモ・スカラのアコーディオンバンド[4]の演奏が流れている。病弱というようすではない。が、テーブル上の丸めたハンカチには、羽状に染みた血が、複雑に捻れた地の上に、絞りの花模様をつくっている。

「わたくしの悪寒がひどかった時期にいらした方ね」夫人はスロースロップを覚えていた。

「ヨモギのお茶をいれましたよね」おお、来た来た、あの日のテイストが、いまスロース

4　このバンドは、四台のアコーディオンにピアノ、ギター、ウッドベース、ドラムスを加えた編成。「GRC」によれば、ピンチョンは「タイムズ」紙の番組欄一九四四年十二月二十三日、十時の欄のBBCラジオから拾ったようだ。

ロッジの靴底からじんわり上がってきて、彼をいざなっていく。彼らが組み立てなおしている……これはきっと、記憶が外からいじられているのだ……クールでクリーンなインテリア、少女たち、女たち、地図に書き留めた星々、それと関係なく……あんなに数が多いのだし、女の子の顔も、風吹きすさぶ運河沿いの景色も、一間（ひとま）の部屋も、バス停での別れも、とてもじゃないが憶えきれないのに、なぜかこの部屋の記憶はどんどん鮮明になってくる。自分の内に棲む誰かが、その後の数ヶ月を頭の外に締めだして、保存しておいた記憶を、ざらついた影の向こうから、いま親切にも届けてくれた。あぶらに霞んだ薬草の壜も、キャンディやスパイスの壜も、棚に並べたコンプトン・マッケンジー[5]の小説もぜんぶ、マントルピースの上の、金メッキの額入りで立てかけられた亡夫オースティンの、埃にまみれたアンブロタイプ写真[6]も。その脇には、前来たときにユウゼンギクが活けてあって、彼を騒がしく迎えてくれた。その小さなセーヴル焼きの花瓶は、大むかしの土曜の午後にウォーダー・ストリート[7]の店で主人と一緒に買ったのだった……

「夫がわたくしの健康でした」と夫人はよく口にする。「逝かれてしまってからというもの、自分の身体を守るのが精一杯、もう魔女のように生きるしかありません」キッチンから切ったばかりのライムを搾る匂いがただよう。ダーリーンは部屋から出たり入ったり、あれやこれやの薬草ものを探したり、チーズクロスはどこへ行ったのとたずねたり、「タイロンおねがい、あなたなら届くでしょ——それじゃなくて隣の背の高い壜、ありがと、ラヴ」とかいってキッチンへ。ピンクが目映い糊のきいたその服は、ダーリーンの動きに合わせて軋んだ音がする。「ここで記憶があるのはわたくしだけですから」クォード夫人のため息、「おたがい助け合うことね」そしてクレトン更紗の迷彩模様をめくって大きな

5　著名な俳優一家出身の多作作家（一八八三～一九七二）。

6　ダゲレオタイプの銀板の代わりに、感光コロジオンを塗ったガラスの湿板でネガティヴ像を捉え、そのガラス板の下に黒い布か紙を置いて、反転したポジティヴ像を見る、一八五〇年代に開発された写真術。

7　その後ロンドンの映画界の中心となった地区。当時はイミテーショ

キャンディの器を取りだし、「ほら」とスロースロップにほほえみかけ、「ご覧なさい、ワインゼリーですよ。戦前のもの」

「ああ、それで思いだしました——あなたは軍需省で働いていた方だ」だがスロースロップは、いまさら礼儀正しくしても、もう手遅れだと知っている。前におじゃましたとき何があったか。後から彼は母ナリーンにこんな手紙を書き送っている——「ママ、イギリス人の味覚というのは本当に手がつけられない。おれたちのとは違うんです。気候のせいかもしれないけど、こんなものを口に入れるかと驚くようなものが大好物なんだ。胃がひっくり返りますよ。この間ワインゼリーというものを食べました。これを彼らはキャンディのように思っているんです。信じられない。こいつをなんとかヒトラーの口の中に押しこむことができたら戦争なんか明日にでも終わります！」いまふたたびスロースロップはこの、深紅のゼラチン物体を眺め回している。クォード夫人に投げかけた笑顔がひき攣っていないことを願いながら。ゼリーのそれぞれには、別のワインの名前が浮き彫りで記されている。

「ハッカ味がほんのりね」クォード夫人がポンとひとつ口に入れた。「おいしいわ」

スロースロップがやっと手で持ったそれには、ラフィット・ロートシルト[8]の文字がある。それをグイと口へ押しやる。「ああ、おお、う、うまい」

「ほんとうの珍品がよろしければベルンカステラー・ドクトール[9]をお試しなさいな。あらっ！　あなたじゃなかったかしら、アメリカ製のスリパリー・エルムの飴を持ってきてくださったの。ササフラス風味のきいたメイプル味でしたわね」

「スリパリー・エルムですか、まいったな、すいません、きのうなめ終えちゃいました」

ンの骨董品店が並んでいた。

8　フランスの最高級種のボルドー赤ワイン。

9　ドイツ・モーゼルワインの有名銘柄。

CamScannerでスキャン

ダーリーンが湯気の立つポットとカップを三つ、トレイで運んでくる。「なんだい、それは」質問のタイミングがとても早い。

「知らないほうがいいわよ、タイロン」

タイロンは一口啜って、「そのようだね」地の味の、むかつく苦みを、もっとライムを効かせて抑えてくれればいいのに。ほんと、狂ってる、この国の人たちは。ノー・シュガーで当然って顔をして。キャンディの器に手を伸ばし、ひとつ摘んだらそれは黒筋入りの甘草ドロップだった。まあ危険はないだろうとガリッと噛んだその瞬間、ダーリーンの奇妙な視線が彼の口に注がれた。この言葉を発するタイミングがすばらしい、「やだ、まだそれあったの、何年も前にぜんぶ――」陽気な、ギルバートとサリバンのオペレッタに登場する純情娘のアクセント[*10]――「始末したと思ったのに」その瞬間にスロースロップの舌が、中心から滴る、マヨネーズとオレンジの皮を一緒にしたような味の液にふれた。「わたくしの、とっておきの、マーマレード・サプライズ、あなた、食べてしまわれたの！」クォード夫人が叫ぶ。そして手品師の早業でパステル系の、緑色した卵形の、一面ノンパレイユをまぶした菓子を取りだして。「それなら、こちらは食べさせるわけにいきませんわね、この、すばらしいルバーブのクリーム」次の瞬間、それはまるごと夫人の口に消えた。

「自業自得ですから」と自分で言ってる言葉の意味がわからない。マヨネーズ・キャンディの味を流し去ろうと、ハーブ・ティーを一口含んだら――これが間違いで、口の奥へ恐ろしいアルカロイドの荒涼が広がり、歓口蓋にきつくしみた。看護婦のダーリーンが、満面ナイチンゲールの献身をもって渡してくれた、ラズベリーにかたどった固くて赤いキャ

10 16ページ註**7**でふれたパイレートの名の由来にしても、また、初期短篇「スモール・レイン」に登場する"リトル・バターカップ"にしても、ピンチョンは、ギルバートとサリヴァンによる田舎の純情娘のモチーフに関心が深いようだ。

ディは……おや、奇妙にも実際ラズベリー味なのだが、この強烈な苦みにはまるで太刀打ちできない。ちくしょう、とばかりに噛みくだいたら、アホめ、また、してやられた。舌を襲う、なんだこりゃ、硝酸百パーセントの結晶か。「たまらん、死ぬほどスッパイ」と、まるでホップ・ハリガン[11]がタンク・ティンカーのオカリナを止めさせようとしているみたいだが、それも唇がすぼんでしまって言葉にならない。バアさん、なんちゅう悪さをするの。アメリカはイギリスの敵じゃなくて味方だろ。ひでえ仕打ちだな、ちくしょう、目も見えない。鼻孔を突き上げるわ、痺れた舌をいたぶるわ、奥歯はガラスを噛んだみたいにジャリジャリしている。一方のクォード夫人はチェリーキニーネのプチフールをひと噛みひと噛み、上品に味わっておられる。キャンディの器越しに若いふたりを見てはニッコリ。スロースロップは、もう忘れたか、ふたたびティーに手を伸ばした。この責め苦から、見苦しくなく撤退するのはもう無理だ。ダーリーンが棚からもう二つ、三つ、キャンディの壜をおろしてきた。スロースロップは突撃開始。どこかの敵意に充ちた小惑星の中心へ掘り進むように、大きなボンボンにムシャリとかぶりつく。チョコレートのマントルから、強烈なユーカリ味のフォンダンをつぶして核へ噛みこんだら。そこは粘っこい葡萄味のアラビアゴムだった。歯の間にはさまったそれを爪で掻きだして見つめる。紫色をしている。

「そうなんですよ、おわかりになったようね」根生姜とバターボールとアニスの実が大理石模様に入り交じった飴を振りかざしながらクォード夫人、「目でも楽しまないと。アメリカの方は衝動的でいけませんわ」

スロースロップは口ごもって「毎日ハーシー・バーみたいな単純なのしか相手にしてな

11 空軍パイロットのホップと、機械技師のタンク。アメリカABCラジオの戦中戦後の人気番組。

いもんで」
自分の喉を手でつかんでダーリーンは、「食べて、これ」と大声を出し、スロースロップに体を傾ける。
「そいつはスゴそうだ」怪しげな褐色のアイディア商品を疑わしげに見つめれば、そいつはミルズ型手榴弾[12]の正確な四分の一縮尺模型だ。レバーもピンも揃っている。そうか、砂糖不足が深刻になる前に、こういう愛国飴が売り出されたのか。壜の中を透かし見ると——455口径[13]ウェブリーの弾薬筒(カートリッジ)はピンクの縞々タフィー、六トン地震爆弾[14]は銀をまぶした青いゼラチン、バズーカ砲は甘草(リコリス)である。
「ほらほら」ダーリーンはスロースロップの手にお菓子を握らせて、アーンと口へ。
「その前にさ、よく見せてよ、クォード夫人も言ってたじゃないか、目でも楽しめって」
「握りつぶしたらだめよ、タイロン」
タマリンドの上薬の中に透けて見えるミルズ爆弾は、ペプシンのフレーバーが甘く香るヌガーに、砂糖で煮こんだ強烈なクベバ[15]の実を埋めこみ、中心に樟脳のガムを配したもの。これは口にできないほどひどい味だ。樟脳の発する臭気でスロースロップの頭はクラクラだし、涙も垂れおちて、舌はほとんどホロコースト状態。クベバだ? それ、おれ吸ってたよ[16]。「毒に、やられた・・・」しゃがれ声を出すのがやっと。
「シャンと男らしくなさい」クォード夫人が檄をとばす。
「そうよ」ダーリーンの声は、舌で溶かしたキャラメルを通して、「いま戦争やってるのよ、わかってるの? ほら、お口開けて」
涙目でよく見えないが、クォード夫人の「うま、うま、うま」という声と、ダーリーン

12 第一次大戦期の英軍のパイナップル型手榴弾。

13 直径約一一・五ミリに相当。この弾丸を英国軍は第二次大戦終了時まで使用した。

14 この巨大爆弾は、一九四三年八月十七日のペーネミュンデ爆撃の際に使用されている。

15 スマトラやジャワに自生する非常に辛いスパイス。

16 クベバ・タバコは喘息等に効くとされ、商品化されていた。

CamScannerでスキャン

が笑っている声は聞こえる。口に入れられたそれはとても大きく、柔らかく、マシュマロみたいだが、しかしおかしい——自分の脳がおかしくなってしまったのなら別だが——ジンの味がする。「な、なんな」痺れた舌でたずねると、
「ジン・マシュマロ」とクォード夫人が答える。
「オーー・・・」
「そんなの何でもないわ、こっちを食べて——」一瞬間、歯が倒錯的な反射運動を起こし、固くて酢っぱいスグリの殻をグシャリと潰した。ピュッと口の中に広がる不快なものは——タピオカであってくれとの望みもむなしく——粉末クローブのたっぷりしみた膠質状の塊だった。
クローブの粉が喉に入って咽せかえるスロースロップに、「ティー、もう一杯いかがかしら？」とダーリーンがたずねる。
「しつこい咳ねえ」と、夫人が持ちだした缶の中は、イギリスの咳止めドロップの中でもとびきりの、信じられない〈ザ・メゲゾン〉だ。「ダーリーン、このお茶美味しいわ、わたしの壊血病が消えていくのが感じられるよう、ほんとですよ」
〈ザ・メゲゾン〉の効果を喩えれば、アルプスの直撃を頭にくらった感じだといえよう。一瞬にしてスロースロップの口蓋にメンソールの氷柱が降りた。ブドウ状に凍りついた肺の気泡を這い上がろうと、北極熊が爪を立てた。歯がしみる。息ができない。鼻からも無理。ネクタイを解いて、オリーヴ色の褪せたTシャツの下に鼻を持っていってもダメ。ベンゾインの蒸気が脳にしみる。頭は氷でできた光輪の中にある。
一時間後、屈辱的な英国式キャンディ演習は過去に消え、股間をホンワカ彼女の尻にピ

CamScannerでスキャン

タリつけた時になってもなおメゲゾンは、ミントの霊となってあたりをふわふわ漂っている。彼が試さなかった唯一のキャンディは、クォード夫人も差しだそうとしなかった〈楽園の火〉（ファイア・オブ・パラダイス）という高価にして変幻自在なテイストで有名な糖菓——ある者はこれを「塩漬けのプラム」と評し、別の者は「合成のチェリー」…「砂糖づけの菫」…「ウスター・ソース」…「香辛糖蜜」…と、そのフレーバーはかくも簡潔に、自信たっぷりに、二語で言い切れてしまうのだ——その簡潔さは、訓練マニュアルに書かれた毒ガスや麻酔ガスのケースと似ているといえる。「甘酸っぱいエッグプラント」というのが、これまで知られた最長の記述だ。〈楽園の火〉は今日では戦略上の絶滅状態にあり、一九四五年の時点において遭遇するのはむずかしい。少なくとも陽光に照らされたボンド・ストリート[*17]のピカピカのウィンドーや、甘やかされたベルグレヴィア[*18]で見かけることはありえない。だが時折、こちらの世界へ、ふつうはお菓子じゃないものが売られる場所へ浮上してくることがあるのだ…古びて曇った大きなガラス壜の中に、似たような品々に混じって、ときには大壜の中にひとつだけ、周囲をジャーマン・ゴールドのコインやトルマリンの原石に囲まれ、あるいは前世紀風の彫り黒檀の指サック、ペグ類、バルブのピース、見かけぬ楽器の弦つきの金物、電子機器の松脂や銅製の部品などなど、常にすべてを呑みこむべく口を動かしている〈戦争〉が、いまだその暗黒の胃袋に呑みこんでいない品々の間に混じって見つかることがある。自動車の大きな騒音がけっして聞かれない、道沿いに樹の植えてあるような場所で。奥まった部屋に年老いた顔が現れる、年の瀬の空の光からずり落ちた、黄色みを帯びた光のもとで…

覚醒と睡眠の間のゼロを横切って、彼の半萎びの陰茎は今も彼女の中にあり、ふたりの

17 おしゃれなショップの並ぶウェスト・エンドの商店街。

18 バッキンガム宮殿の南西にある世界有数の富裕居住区。

19 この謎の皇族は、スロースロップの出身地マサチューセッツ州バークシャーを舞台にした短篇小説「シークレット・インテグレーション」で、大人の昔話を聞いた子供たちの想像に登場している。

20 この年、ロシアの対トルコ戦勝利を受け、ベルリンで一種のサミットが行われ、列強間の権益調整が図られた。トル

脚は力なく同じ角度に曲がっている・・・ベッドルームが木と冷気の中へ沈降する。どこかで夕陽が沈んでいく。彼女の背中の暗めのソバカスが微かに見える程度の明るさ。夢見るクォード夫人はボーンマスの庭のツツジの中にいて、突然の降雨に襲われ、オースティンの叫び声を聞く、**妻の喉にお触れください、王さま、どうか！** するとイリヨが[19]——彼は王座にはないが正真正銘の王であって、一八七八年のベッサラビアをめぐる陰謀[20]で血筋の不確かな傍系の者に王位を奪われた——そのイリヨは、袖に金の細ヒモが輝くむかしのフロックコートを着て、彼女の前に屈みこみ、王の邪悪（キングズ・イーヴル）を彼女の中から追いだす[21]。雑誌のグラビアで見たままの姿で、愛馬ヒリスラは一、二歩下がって優しく神妙に待ち、あたりに雷雨が轟々と降りおちるなか、王は手袋を外した白い手を蝶のようにしなやかに曲げてクォード夫人の喉の凹みにふれる、奇跡の、ジェントル・・・タッチ・・・

稀光——

スロースロップが欠伸をしている。「何時だい？」 眠りの湖からダーリーンが浮かび上がったその瞬間、何の警告もなく、目も眩むほどの白光が部屋に飛びこんだ。彼女のうなじに流れる髪の一本一本が昼のようにはっきり見える。と、次に衝撃の震動がきた。貧弱な骨組みが軋み、ブラインドが打ち鳴らされる。あたり一面、白黒の、お悔やみの格子模様（ラティス）が走る。後を追ってロケットの金切声が頭上で膨らむ。空を走る超特急の落下——波紋を拡げる静寂の中へ。戸外に窓ガラスの割れる音、長い不調和なシンバル音が通りに響きつづける。床がカーペットを揺すったみたいにベッドもろとも引き攣った。スロースロップのペニスがそそり立っている。疼いている。突然目をさまされたダーリーンは胸がトクトク、恐怖のせいで指先が手のひらに痛く食いこんでいる。彼女にとっては、脈打つペニ

コ勢力から解放されたバルカン諸国のいくつかは、ドイツ・イギリスを利する形で）オーストリア＝ハンガリー帝国の権力に組み入れられ、ルーマニアの黒海に隣接するベッサラビア地方はロシアに割譲され、ノヴィ・バザール（33ページ註20参照）にはオーストリア軍の駐留が許された。このときに生じた抑圧の力が、三十数年後、第一次大戦を引き起こしたともいえる。

21 瘰癧（るいれき） と呼ばれる結核性頸部リンパ節炎。英名「スクローファラ」。そのむかしは「キングズ・イーヴル」と呼ばれ、十八世紀初頭のアン王女の時代までは、実際に王が治療にかかわる習わしが生きていた。

CamScannerでスキャン

スが、白い光および大爆音と一体になって襲ってきたのだ。その爆発が、黒い影の上に赤く強く揺らめく光にまで収まったとき、彼女はやっと気づきはじめた…たしかタイロンと一緒に…と思ったときにはすでにファックの真っ最中。それもいい。空襲（ブリッツ）だって、たまには何かの役に立ってくれなきゃ、やってられないわ。

　でもあれは誰だろう？　オレンジ色のブラインドの隙間から息を潜めて覗いているのは？　観察ですか？　地図に記入するの？　そうなら答えて、次はいったいどこに落ちるの？

□□□□□□□

最初にふれあったのは——彼がイジワルを言っていて、そう、いつものメキシコ風の自己非難を——おれのことわかってないんだ、おれ、ホントは私生児（バスタード）みたいなもんなんだぜ——「やめて」と彼女の指が彼の唇を押さえた、「それ、言わないの・・・」顔面に来た彼女の手首を何も考えず彼は握って押しもどした。それはただの防御——なのに握りしめたまま離さない、手首を強く。眼と眼が見つめ合い、どちらからも離れなかった。握った手をロジャーが引き上げてキスする間も離れなかった。いっときの躊躇。心臓が跳ねて胸板を強く叩いた・・・「オーッ・・・」という音が彼女の口からあふれた。彼女は飛び込み、しがみつき、力を抜き、構えを解いて抱き合いながらうち震えた。後で告白した、手首を握られたそのときにもうイッてしまった。そして、彼の手が最初に自分の性器にふれたとき、下着（ニッカー）の上から柔らかなソコを握りしめたとき、太腿上部をふたたび震えが這いあがった。ちゃんと挿入される前に二度もイッてしまった。これはふたりにとって重要なこと、なぜなのか、ちゃんとわかってはいないけれど。

でも、それが起きると、ふたりの光はいつもとても赤くなる。

CamScannerでスキャン

一度ティー・ショップで会った。赤い半袖のセーター、脇におろした素肌の腕が赤い光に染まっていた。ノーメイクの顔を彼に見せるのはこのときが初めてだった。車まで歩く間、ジェシカが彼の手を握ってほんの一瞬押し当てた、前後に動く太腿の間に。心臓がビクビク勃ってイッてしまいそう。マジにそういう気持になった。体の中心から鋭い突き上げがV字をなして肌の層まで上がってきて、彼の両の乳首をザワザワと洗っていく……恋だ、驚愕の。彼女がいなくても、夢を見たあともザワザワ、通りを歩く影が一瞬、そんなはずはないのにジェシカに見えてもうザワザワ。ロジャーにはどうにもできない、完全にそれの手中。

ビーバー（とは渾名で、この男の母親にとってはジェレミーというのだが）のことはなるべく考えないようにしている。だが男女のことの細部になると穏やかではいられない。やってないよな、おれとしてるアノことをジェレミーともやってるなんて、ありえないよな、ジェレミーが、あのキザな顔して、おまたの間をペロペロかよ――ファックしてる最中にジェシカの手がアイツのケツにまわって、いたずらっぽい指が（あのイングリッシュ・ローズが）やつのケツノアナの中へスルリかよ。やめろ、オマエ、なに考えてんだ（――だけどジェシカ、フェラはするのか？　あの男の傲慢で固まった顔面がジェシカの尻っぺたの間を這うのかよ）、ばか、くだらんことで時間を無駄にして、その間にティヴォリ・シアターでマリア・モンテスとジョン・ホールの映画[*1]でも見てたほうがマシだろ、さもなきゃリージェント・パークにでも行って、動物園で豹とかヘソイノシシとか探して、四時半まで雨が落ちてこないか心配してろ。

ロジャーがジェシカと過ごした時間はまだトータルでも数時間ほど。交わした言葉をぜ

1　モンテスはドミニカ出身。一九四〇年代を代表するエキゾティックな美女の一人。ホールはおきまりの相手役だった

たる寄せ集めでしかない。SHAEFから来る過去文書の一回分程度だ。しかも、統計学者として初めての経験だが、これは数値をひねって統計学的な意味を与えられる代物ではない。

一緒にいればふたりは一枚の長い肌（スキン）製のインターフェイス。流れる汗。肉も骨も、これ以上は無理なくらいきつく寄せ合って、たがいの名前を呼び合う以外、言葉も交されない。体が離れれば、とたんに映画ごっこだ。ボフォース[2]から空へ放たれた砲弾の振動がドアを揺さぶる夜、ビーチ沿いの有刺鉄線を風が揺らす夜、メイフェア・ホテルで、ふたりで演じる即興のシナリオを作り上げる――「これはこれは、わたしら、まさにジェット推進器をつけてるみたいですな。たった半時間しか遅れていない」

WRNS（レンズ）やNAAFI（ナーフィ）の女の子[3]、宝石をつけた若い未亡人たちが横目でチラチラ、ふたりのわきを怪訝そうに通りすぎていく。「そのお時間、あなたは無駄になさったりしませんでしたわよね」

「そうだな、いくつか仕事をこなせた」と言って腕時計を見やるしぐさは、当世流行のWWIIスタイル。文字盤が手のひらの側にきている。「今ごろはもう、妊娠のひとつやふたつは、確認されているだろう――」

「あらっ」うれしそうに跳んで（跳びつくのではなく、上向きに）「思いだしたわ。あたしからも報告があるの」

「ややや、や」ローランド・ピーチー楽団の軽やかなサクソフォンの調べが「あ、また言ってしまった（ゼア！アイヴ・セッド・イット・アゲン）[4]」を奏でるなか、ロジャーは鉢植えのほうへ後ずさりして、恥ずかしそうに身を屈める。

[illegible]

2　スウェーデン製の40ミリ対空機関砲。

3　ジェシカは陸軍のATS勤務だが、海軍の婦人補助人員はWRNS (Women's Royal Naval Service) に所属した。NAAFIについては72ページ註19参照。

4　ヴォーン・モンロー楽団による、この年のミリオンセラー。

CamScannerでスキャン

「あなたの心の中が透けて見えたわ、なんて不粋なんでしょう」
まわりの人は何がなんだかわからない。ふたりとも、あまりに罪のない顔をしている。この子たちを守ってあげたいとみんなが思う。死の話から、ビジネスのだまし合いの会話から——それほど何もかも不足している。歌も、ボーイフレンドも、映画も、そしてブラウスまでも……
髪の毛を耳のうしろ、柔らかな顎先をしたプロフィールは九つか十の少女でしかない。窓辺にひとり、日射しに向けた目をまぶしそうにパチパチさせて、向き直ってベッド掛けを見つめるその目に涙がこぼれる。子供が泣きだすとき赤く染まった顔面にシワがよるのとおなじだ、オウオウ……
ある晩ベッドの中の暗く冷たいキルトの中で彼は、自分も眠りそうになりながら、ジェシカを舐めて眠りにつかせた。舌先のまわりにこぼれる熱い息が陰唇に届いたとき、ジェシカの口から猫の鳴き声のような音がこぼれた。しゃがれた、何かに憑かれたような音が二つ三つ同時に鳴って、夕闇の記憶の中を舞いおちる雪片と一緒に吹き散る。風は通りの枝々を吹きぬけ、姿の見えないトラックが街路を走りぬける。家並みの裏手から、運河を渡り川を渡り、通りすぎる素朴な公園には、そう、犬も猫もいて、粉雪の上に小さな足跡が点々……
「……絵というか場面がポッと明るく浮かびあがってくるの、ひとりでによ、ロジャー、わたしが生みだしてるんじゃなくて……」一面ほんのり明るい天井をバックに、一群のイメージが明るく輝きながら通りすぎていく。激しい息がまだ収まらず、ふたりの口は上

向き、ロジャーの一物が太腿の上に倒れかかり坂を滑って頭を垂れる。夜の部屋がため息をふくらます。えっ、ふくらます?[5] そうそう、ここは往年のコメディ・タッチの部屋で、おっと、私もしょうがないな、生まれながらのジョーカーなもんで、縞々の緑の服にパンタロン、ひだ飾りをつけて鏡の縁を抜けて出てくる——ってのはさておくとして、実に古風でしょ、今の時代、部屋ってものはたいてい「うなる（ハム）」か「呼吸する（ブリーズ）」かするもんだ。さもなきゃ息をひそめて待つとか。するってえと、ここの部屋がため息を「ふくらます」っていうのは、ここ特有の、奇怪な習わしなのか。香水の濃い、ケープを纏った長くてほっそりしたご婦人方が、夜な夜な部屋で襲われる、螺旋階段に刺し貫かれ、青い花びらをつけた頭上のパーゴラにのしかかられる、そんなとき誰がため息をふくらましたりしますかね、お嬢さん、やれといわれても、頭がヘンになっていても、そりゃない、ふくらましたりなんかしませんって。

しかし、おっ、こっちの若い女性はですね、ギンガム・チェックを着て、不揃いの眉毛を威勢よく生やして、まるでレッド・ベルベットのケーキのようだ。一度彼女は挑発されてブラウスを脱いだ。ローワー・ビーディング[6]に近い幹線道路の車上での出来事である。

「アチャー、おまえ頭が狂っちまったのかよ、なんだ、どうしておれにばっか、こういうことが降りかかるんだ」

「アハハハ」ジェシカはストリッパーよろしくアーミー・ブラウスのネクタイを振り回している。「だって、できっこないって言うんですもの。言ったでしょ、臆病者って、こわがりんぼって」ブラウスの下はノーブラ、彼女はブラジャーをしない子なのだ。

「いいのか」顔をそむけたままのロジャー、「逮捕されるんだぞ。あ、きみは大丈夫なの

5 「重々しいため息をつく」という意味の英語の成句 "heave a sigh" をわざと字句通り解釈している。

6 ロンドンとブライトンを結ぶ幹線道路沿いの村。

CamScannerでスキャン

か」と、その時ハッと気づいた「おれが逮捕されるんだって!」

「みーんなあなたのせいだもんね、ララーッ」と、下の歯を突きだす。イジワルな女の子のほほえみ。「わたしは罪のない子羊、そしてこちらは——」振り上げた小さな前腕にブロンドのうぶ毛がきらめく。小ぶりの乳房が自由自在に揺れ動く。「この淫乱男がやらせたの、ロジャーはケダモノよ、こんなことをさせちゃうなんて……」

このときロジャーが生まれて初めて見るほどの巨大なトラックが、ガタガタ揺れる鋼鉄の車体を器用に接近。運転手一人だけじゃなく何人も——えーと、これは、見たところどうも、うっ……ミゼットですな。変なオペレッタの衣装を着て、どこか中央ヨーロッパの亡命政府の一行でしょうか、みなさん高い運転席に身を押しこんで、下を見ようとひしめきバタつく姿は、まるで母豚の乳房にすがる子豚のようだ。飛び出た眼玉はくろぐろと、口からはヨダレをたらして、胸のはだけたジェシカ・スワンレイクの姿をむさぼり、スピードを落としてトラックをやりすごそうと必死になっているロジャーをじろり——だがうしろからトラックと同じスピードでせき立てるのは、なんてこった、軍警察の車じゃないか。ブレーキも踏めないし、アクセルを踏みこんだら、マジ、追跡が始まってしまう……

「たのむ、ジェシー、服、着ろよ、お願いだ」大げさに手をバタつかせて、いつものように失くしてしまった櫛を探すふりだ。容疑者は名うての櫛マニアのようであります……

轟々と走るトラックの運転手がロジャーに何やら合図を送った。コビトたちは窓に近寄ってヤンヤの歓声、口もとからベッタリと、しゃがれ声の笑いが垂れおちる、リーダー格のコビトの英語は液体的で、いやったらしいヨーロッパのアクセントつき、やたら目をしばたたかせ、まわりを肘でつつきながら「ミースタァ、あんた、まってーな、ウェータ

ァ・ミニーッ！」そこでどっと笑いが起こる。バックミラーの中に見えるおまわりの顔は職務に燃えたピンク色だ。赤のバッジも前のめり、頭をひょこひょこ動かしながら何か相談したと思ったら、今度はキリッと向き直って一点を見据えている。前のジャガーに乗ったふざけたカップルを――「あいつら、いったい何をやっているんだ。プリッグズベリ、おまえわかるか」

「男と女のようですが」

「バカもん」会話はそこまで。あとは黒い双眼鏡。

雨をくぐり・・・夢みるガラスを通りぬけ、夜の緑が掛かる。彼女は椅子に深くすわり、懐かしのボンネットをかぶり、西の果て、大地のデッキの向こう側を染める地獄の赤を、その先の褐色と金色の雲を眺めている・・・

それから突然の闇夜。からっぽのロッキング・チェアに映りこんだ蒼い白亜の光。月光なのか、それとも天空から届く別の光か、ここにはただ、晴朗な夜の中を落ちてくる冷たい光と、からっぽの堅い一脚の椅子。

イメージがめくるめく花開いては、消えていく。美しかったり、ただ怖かったり・・・だが彼女は子羊に、彼女のロジャーにくっついている、彼の首筋がいきなり愛おしくなり――見れば目の前にある、彼のボッコリした十歳の男の子のような後頭部の下に。その肌に、塩辛い酸味を含んだ広がりに、唇を走らせる。腱の張りの上をキスが流れる。流れて止まらぬ吐息そのもののようなキスが流れる。

彼女と最後に会ってから二週間になろうというある朝のこと、〝ホワイト・ヴィジテーション〟の独房で、勃起したまま目覚めたての瞼をこすっていたロジャーは、口に一本、長い淡褐色の毛がからまっているのに気がついた。自分の髪ではない。ジェシカ以外思い当たるふしはないのだが、それはありえない――会っていないのだ。彼は二度ほど鼻をすすってくしゃみをした。窓の外で朝が展けていた。右の犬歯が痛んだ。その毛には、唾液のビーズが連なり、歯垢とか、口で息をする生き物の一夜の垢がくっついている。それを伸ばして熟視する。どこから入ってきたんだろう。気持ちわるい。言葉にできない不吉感。小便がしたい。灰色に変わりつつある官給のパジャマ、そのネル地をゴム紐のゆるんだズボンの中へ押しこんで、すり足で便所へ向かう最中にひらめいた――これって藤色の世紀末の話によくある幽霊の復讐なのではないか。この一本の髪の毛が最初のステップ…と思うのはパラノイアか？　洗面所では心霊セクションの連中が蹴つまずき、屁を垂れ、剃刀傷をつくり、空咳とクシャミをし、鼻づまりをきたしている。その間を、動きながら、さまざまなコンビネーションをこなしていくロジャーは見ものだ。あれこれ終わるころになって思いが走った。ひょっとしてジェシカの身に。おお、何と考え深いロジャーよ。もし、もしだよ、ジェシーが夜中に、弾薬庫の爆発事故でやられて…で、あの世への去りぎわにこの世で唯一大切だった人間に託すことができたのが、髪の毛一本だけだったとしたら。…確率のクモの巣に住むスパイダーが聞いて呆れる。〈次の考え〉が出てくる前に、ロジャーの目には早くも涙――蛇口しめろ、矢口、ほら、この可能性と向かいあえ。洗面台の上に前屈みになったまま動けない、ジェシカの安否を案じる気持ちにもホールドが掛かり、うしろを振りかえりたいと思っても、鏡の中を覗きたいと思っても、体が固ま

7 原文は Turn off that faucet, Dorset.。この日はロジャーもジェシカも、押韻ゲームにハ

っている……一瞬にして……解けた、すばらしい解が彼の脳に宿った。こいつは、心霊セクションの連中が秘かにグルになってやったんじゃないか？ そうさ、ヤツラが本当に人の心を読めるとしたら！ それで、これが、催眠術（ヒプノティズム）とかだったらどうなんだよ、え？ まいったぜ。オカルト系のヤツラ全員集合か？――幽体離脱、マインド・コントロール（こりゃオカルトとは違うか）、他人をインポにする呪い、おデキの呪い、狂気への呪い、ヤアア、そうだそうだ――薬品か！（と、ここでやっと屈んだ腰が伸び、心眼をオフィスに向けて、喫茶室にいる連中の姿をきわめて慎重に捉える、オー・ゴッド……）制御機構とのサイキックな合一かよ、ロジャーが彼になり彼がロジャーになる？みたいな考えが、次々と彼の頭をかけめぐる。どれも考えとして健やかじゃない――とりわけこの職員用洗面トイレの中だと薄気味わるい、というのもギャヴィン・トレフォイルの顔は赤くテカって風に揺れて輝くクローバーの花のようだし、ロナルド・チェリコークは大理石のように琥珀色の筋が入った痰を洗面台に吐きだしている――何なんだ、こりゃ、こいつらいったい誰なんだ。……みんなフリークだぜ、フリーク野郎の群れに取り囲まれちゃった！ あいつら昼も夜も、戦争中ずっとおれの頭を精査してやがるんだ、テレパシーを使い、魔女みたいなサタンみたいなのをあらゆる種類とり揃えて、おれの記録をとってるんだ――ジェシカとベッドでやってるときも――

ほら抑えて抑えて、パニクるのもいいが後にしろ、ここじゃいかん。……ほの暗い電球に照らされた洗面台の鏡は、石鹸水のハネが何千もこびりついて、ロジャーが頭を動かすたびに、雲のケバが、肌と煙とが混ざり合ったよう。レモン色とベージュに、油煙のブラックと薄暮の褐色がそちこち混じって、ボロボロに剝げ落ちそうなテクスチャーだ。

CamScannerでスキャン

おはよう、第二次世界大戦さん。彼の心の前面にいつもはり付いている言葉があって――テンソク・キボウ ***I want to transfer***――鏡に向かって、メロディもつけずハミングする。さっそく要望票に書きこむとしよう、ドイツ戦線に志願、したいで〜す、タラッ、タラッ、タラ。ついこの間の水曜にも、『ナチス・イン・ザ・ニューズ』の求人欄に出ていた、「労働党リバプール支部広報掛モトム」ってのと、「除隊者即時雇用」というロンドンの広告代理店の案内に挟まれて。その広告を出したのは、今後「G5」[8]として活動するところで、「再教育」の専門家が入用らしい。これって重要任務だよな。ゲルマンの野獣に大紋章とか、スポーツマンシップなんて教えるわけでしょ。ババリア地方のカッコー時計みたいにさ、神経症的な村に出かけていって、奇怪な妖精よろしく夜中の森から出てきて、家々の戸に体制転覆のビラを貼ってまわる。「いいですよっ、やりましょう」ロジャーはパタパタと自分の仕事机に戻ってつぶやいた。「どんな仕事も、ここよりゃマシだろ・・・」

それほどひどい気分だった。この心霊セクションに比べたら、ドイツに行って〈敵〉の間をうろつくほうが、まだ心安らかでいられる気がした。季節がまた、クリスマスときた。**Bwweeeeaaaagghh!** ロジャーは胃をひっつかんで大げさに吐きもどす声を挙げる。ジェシカがいなきゃ、おれ、人間でいられない。毎日が耐えられない。ジェシカ・・・

その時ある思いが降ってわいた。たっぷり三十秒間彼の心をとらえていた。十二月の明け方である。長袖の下着姿で寒さに震え欠伸をしているロジャーは、本やファイルの鋭いエッジに囲まれ、複写の薄紙やチャートや地図に取りまかれると、いかにもヤワで目立たない（中でひときわ目を引くのが、貴婦人ロンドンの顔の図で、彼女の純白の肌には赤い

8 軍の「第5セクション」の意味。占領軍として戦勝地区の統治を行う。

膿疱のブツブツが多数ついている……待てよ……〈レディー・ロンドン〉は皮膚病なのか……皮膚の内側に致命的な病原を抱えていて、できものが噴きだすところはあらかじめ予定されているのか？　シティに潜在する噴火の時刻表に合わせてロケットが飛んでくるのか……だがその考えは保持できない、ポインツマンの「刺激した音の逆転」へのこだわり同様、理解しようとしても無理だ、だから、悪いけど、ちょっとこれは放棄して……）
湧き上がってきた思いに包まれる。それが去って、やっと明確に理解した。いまや日々のより誠実なハーフであるジェシカのことがどれだけくっきり見えているか、彼女の美しさに、ロジャー自身もちょっと前から信じていた死の体制から生意気にも自由でいられる軽やかさに、我が母である〈戦争〉はどれだけいきり立っているだろう。いつまでもついえない未来への希望（なのに計画するのは嫌がるのだ）いつまでも子供の国から出てきたままの心でいられる（なのに想い出には無頓着）……

自分はこれまで過去にしばられて生きてきた。ロジャーの人生は不毛な海を進む波頭の一点であって、既知の過去から投射可能な未来へ向かって進んでいた。その波を崩したのがジェシカ。突然ビーチが目の前にあった。予想もできない、ニューライフ。過去と未来とは岸辺で止まる、それは最初から決まっていたことだが、しかしロジャーは信じたかった。ジェシカへの愛と同様、すべての言葉を超越して信じたかった――どんなひどい時代にも、固定されたものはない、すべては可変的であって、自分の過去の暗い海も、ジェシカが否定し、愛の力で消しさってくれる、と。そして（自己本位にも）信じていたい――死の上に立ち、死の上を進む波動のような陰鬱な少年だった自分がいま、ジェシカとふたり生と悦びへの道を見出したのだ、と。いや、そんな話を彼女にしたことはない。自分に

さえ、言わないようにしてきた。しかし、〈戦争〉の七度目のクリスマスが、彼のやせ細った震える脇腹にまたもぶち当たろうという今、ロジャーの信じる気持はこれほど強くなって・・・

やかましく動き回るジェシカ。同じ寮の女の子たちが吸っているシケたウッドバインにたかったり、ナイロン・ストッキングの修繕キットを貸してよとせがんだり、戦争を皮肉るセリフを雀のようにチュンチュン明るく吐きだしたり（それがお互いへの思いやりなのだ）。今夜はジェレミーと、そう、彼女の中尉さんと一緒だけど、でもほんとうはロジャーと一緒にいたい、でも行かない、そうでしょう？　こんなに頭が混乱したこと前にあったかしら。ロジャーと一緒にいるときはアッアッでいられるのに、ちょっとでも、ほんのわずかでも距離ができると、彼のことで気がめいってくる。怖くもなる。どうしてかしら。激しい夜は、彼の上で堅い棒を軸にして一途に身体を上下させながら、からだがクリームの蠟燭のようにとろりと溶けてオーガズムとともにベッドの上掛けに流れおちてしまわないよう背筋をしっかり保っている、その時は息の尽きるまでロジャー、ロジャー、ロジャーなのに、ベッドを出て歩行(ウォーク)や会話(トーク)が始まると、彼の心に苦々しさが、ダークな思いが、〈戦争〉よりも冬よりも深く流れているのを知らされる。イギリスを憎み、体制(システム)を憎み、悪態ばっかついて、戦争が終わったらイギリスなんかおん出てやると言い、書類と冷笑の洞窟に閉じこもっては自分が嫌でたまらなそうにしている・・・そんな人を引っぱりだしたくはない、でしょう？　ジェレミーと一緒にいたほうが安全でしょう？　あまり考えないようにはしているけれど、そういう疑問が引っかかっていることは確か。ジェレミーとは

もう三年。三年っていえば、ほとんど結婚してるようなもの、何か実を結んでもよさそうなのに、日々の継ぎはぎと取りつくろいばかり。彼の古びた浴衣も自分は着たし、お茶もコーヒーもいれてあげた。トラックの駐車場、娯楽室、雨でゆるんだフィールド越しに彼の視線を探し求めたこともあった——その日一日のじめじめと嫌ったらしい出来事も、親しげな、信頼に満ちたビーバーの目にふれさえすれば消えていってくれると思って。古風な装いや微笑のために言葉が呼び出されるような季節に。その安らぎをぜんぶひき裂いてしまうなんて。三年もよ。あの突飛で気まぐれな自己中心の子のために？——そうよ、まだ子供なの。泣き虫。もう三十は越えてるはず、わたしよりかなり年上のくせして、何か学んでいても……だめか、人生のコクなんて柄じゃないか。

最悪なのは話せる相手がいないことだ。ここは男女混成の砲兵中隊特有のポリティクスで、職場結婚とか男女関係、どこそこの誰が昔誰に何を言ったか、みたいなことへの不健康なこだわり。一九四二年の春にケント州のグラフティ・グリーンで誰がどう答えるべきだったのにそうせずに、別の誰かにこう伝えてそれが今日も憎しみの連鎖を繁茂させている——六年も続いている中傷と野心とヒステリー、そんな中で誰かに秘密をうち明けるなんて、マゾキズムの骨頂だ。

「きょうは苦悩のジェシカでしか？」マギー・ダンカークが通りがかりに声をかけた。長手袋のたるみを伸ばしながら。タンノイの拡声器（スピーカー）から、BBCのスイング・バンドがホットなリズムで演奏するクリスマス・ソングが聞こえている。

「ねえ、マグ、ファグ[9]ない？」このくらいのレスはジェスならオートマティックに出てくるのだ。

9 fag は巻きタバコの意味のイギリス俗語。このあたり、名前と韻を踏む単語を使うゲームが進行中。

CamScannerでスキャン

さあどう来るか。「あなたのところは、ガルボ映画みたいに、[*10]ニコチン不足と無縁なのかなって思ってたんだけど？　ごめーん、また勘違いしちゃった、タターッ…」

もう、早く出てってよ。「クリスマスのお買い物に行こうかなと思って」

「それでビーバーへのプレゼントは何にするの？」

ナイロンの靴下をガーターで留めることに専念しながら——前上がりで後ろ下がりの時代物が、指の間からふわりと記憶のままに浮き上がる、白く洗われシワの寄ったゴム状物質が直線に伸びて、いま太腿前面のたおやかな曲面に接する、赤いマニキュアの爪の下で、後ろで、サスペンダー・クリップが銀に輝く、赤い刈り込み(トピアリー)の背後に噴水がきらめくように——ジェシカが答える。「あ、そうね、パイプかしら…」

ジェシカの属する砲兵中隊の近く、ケント州のどこかをある晩ロジャーとドライヴしていたとき、暗闇の中に地面からぽっこり浮かび上がった教会の灯りが見えた。日曜の晩の、夕べの祈りが始まろうとしていた。厚地のコート、油布製の雨具、黒のベレー帽を入口で脱いで入っていく男たち。アメリカ人の飛行機乗りは羊毛の裏地が付いた革ジャンパーを着ている。婦人たちの中には金具の鳴るブーツや肩広のコート姿もあるが、子供はいない、一人の子供も見えなかった。大人だけが、爆撃の野から、気球[*11]の上がった露営地から、浜辺にできたコンクリ製の前哨地から出てきて冬枯れの蔓がからんだノルマン式のドアをくぐっていた。「憶えているわ…」ジェシカの言葉は続かない。脳裏をかけめぐったのは別の降臨節のこと。窓から見える、羊のような雪が積もった生け垣と、また今年もお空に貼るお星さま。

10　男の人生を狂わすファム・ファタールの演じ手グレタ・ガルボは、数々の映画で印象的にタバコを吸った。

11　敵機の低空攻撃を防ぐべくケーブルで係留された阻塞気球。

ロジャーが車を止めた。ネズミ色の一群が足を引きずり夕べの祈りへ向かうのをふたりで見つめた。風が新雪の匂いを運んできた。

「だめよ、帰らないと」少ししてジェシカが言った。「もう遅いから」

「ちょっとだけ覗いてみよう」

ビックリした、ほんと、何週間も辛辣なセリフばかり吐いておいて、礼拝だとはなんかを信じる連中と一緒で頭がおかしくなるって文句ばっか言ってるくせに。クリスマスまでのショッピングの日数が減ってくるとそれにつれてどんどんスクルージ[12]みたいになってくるくせに——「柄でもないことはよしなさいよ」とジェシカは言った。でもほんとうは、自分も教会に入ってみたい。今夜の雪空にはノスタルジーが垂れこめて、いまの彼女の声にも、言葉とは裏腹に、駆けだして聖歌隊に加わりたい気持ちがありありだ。降臨節の日々が過ぎゆくにつれクリスマス・キャロルの歌声は頻繁に、凍てついた丘を越え、プディングに埋もれたプラムの実のように地雷が埋まった丘を越えて聞こえてきていた……ときどき、融けて流れる雪の上を吹いてくるクリスマスの空気じゃなくて、時のエーテルがそよいでいるような風が、子供たちの歌声——六ペンスの白銅貨を投げてもらう歌声を運んできた。それはジェシカに滅びゆく我が身を感じさせることはなくても、この歌声を失ってしまうかもしれないという不安は与えた——いつか、ある冬の日に、ハッと気づいて門まで走り、木立ちまで追っていっても、子供たちの声はどんどん遠くへ行ってしまう……

雪道にできた足跡をたどって歩いた。ジェシカの手はロジャーの腕を神妙につかんでいた。風が髪をかき乱し、氷の上でヒールが滑った。「音楽を聞きに行くんだ」ロジャーが

12 ディケンズ作『クリスマス・キャロル』のケチな老人。

CamScannerでスキャン

説明した。
今夜の聖歌隊は男声のみ。エポレットのついた肩が白いローブの大きくあいた襟ぐりから見えている。誰の顔もほぼ一様に白いのは、ぐっしょりとぬかるんだフィールドで深夜の見張りをしていた疲れからか。雲の中からナーバスな釣り糸を垂らしている気球のケーブルを風がつまびき、中の灯りがうすぼんやりした光核をなすテントはまるでガーゼのよう、その膜を風が打ち鳴らす。ところが、聖歌隊の中にひとつ、黒い色の顔があった。カウンターテナーを受けもつ伍長はジャマイカ出身、暖かな島からここへ連れられてきた——子供のころは、ハイ・ホルボーン・ストリート[13]のラム酒に煙る酒場で歌っていたのだ。そのスイングドア越しに、赤いマンチェスター爆竹が——ダイナマイトの四分の一もありそうなのが——飛んでくる、そいつを投げた船乗りが道の向こうへ笑いながら逃げていく、別の船乗りは短いスカートをはいた島の女、中国女、フランス女を連れて通りへ出ていく……つぶれたレモンの皮の香りがドブにただよう早朝にも、彼は歌っていた。オウ、おれの可愛いあの娘を見たか、名前はローラ、ボディラインはコカ・コーラ。水兵たちが茶色い路地の影を走りまわる、ネッカチーフをなびかせて、ズボンをはためかせて。女の子らはヒソヒソ、クスクス……朝はポケット半分ジャラジャラたまった各国の硬貨を、数えながらまわりに与えた。椰子の繁るキングストンから、「アングロ=アメリカン帝国」（一九三九〜一九四五）内部の事情によって徴用され、いま彼はこの冷たい野ネズミのような教会に連れてこられた。景色など見ることもなく渡ってきた北の海にもほとんど声が届きそうなところにある、その教会で終禱をつとめる。今晩は英語の単旋律聖歌、それはときどきハインがついてポリフォニーをなす。トマス・タリスやヘンリー・パーセル[14]、さらにはハイン

13 ジャマイカの首都キングストンの中心街。

14 タリス（一五〇五

[illegible]ドイツ語とラテン語が混じりあった十五世紀の
[illegible]を歌う——

In dulci iubilo 甘キ歓喜ニアリテ
Nun singet und seid froh! イザ歌え、喚べ
Unsers Herzens Wonne 溢るる悦び、流るる先は
Leit in praesepio, カイバ桶
Leuchtet vor die Sonne 陽のごとくに輝きて
Matris in gremio. 母ノ膝ニ抱カレル
Alpha es et O. αニシテΩナル人

黒人シンガーの高音が合唱のひときわ上を乗り進む。裏声なのではない、腹の底から偽りなく出してくるバリトンの声、長年の鍛錬によってここまで上りつめた……この男は、どぎまぎしながら見つめるヨーロッパ新教徒らの前に、褐色肌の女のすり足ダンスを運んできたんだ、古来きまっている音楽の経路を通って、ビッグでリトルなアニタちゃんも、スティレット・メイも、うれしそうな顔してタダでおっぱいに挟んでいかせてくれるプロンゲットも連れてきた——しかし、ラテン語に加えて、何だこのドイツ語は。それもイギリスの教会でさ。いや、これは異端ってのとは違うな、むしろ帝国主義の必然だろう。その黒人さんの存在も、帝国主義が生みだしたんだ。ちょっとしたシュールリアリズムさ。これが大衆レベルで起こったら自殺行為だが、夢を抜いた、病的に醒めた現実の中でなら

[illegible]（一八五[illegible]）と[illegible]（一八六五から一九五[illegible]）は、共に英国王室お抱えのオルガン奏者にして作曲家。賛美歌を数多く残している。

15 英語読みの「ヘンリー・スゾー」の名でも知られる十四世紀の聖職者。

CamScannerでスキャン

〈帝国〉は、この手のシュールな行いを日々何千となく、無自覚のまま繰りかえしている。……というわけで、この純粋なカウンターテナーの声が高音域を舞い上がる。ジェシカの心を浮き立たせ、きっとロジャーも……と、レチタティーヴォ[16]やリリーズ[17]のところで、お隣りをうかがってみれば、褐色の霊のようなジェシカの髪を通して見えるロジャーの顔はニヒルじゃない。チープなニヒルさもない。いまの表情は……

こんなロジャーを見るのはジェシカも初めてだ。何台かのオイルランプに照らされて——炎は揺るがず、とても黄色く、ランプのガラスには花粉のような聖堂番の指の跡が、勝利のVを記している——ロジャーの顔はピンク色で子供のようだ。眼がキラめいているのは、灯りが映りこんでるせいじゃない、でしょう？ それともジェシカの願望が映りこんでるの？ 建物内の空気は戸外と同じ、ジンメリとした冷たさ、湿ったウールの匂い、教会特有の、蠟燭と溶けた蜜蠟と抑えた屁とヘアトニックと燃える油の混じり合った匂いが、母親がそうするように他の匂いを包み込んで押さえつける。〈地〉に属する、深層に、別の時代に属するものは匂ってこない。聴け……聴くんだ、これが〈戦争〉の夕べの祈りだ。〈戦争〉の定めた正統な時間に歌われる、真にリアルな夜に。黒の厚地の外套が集まってくる。からっぽのフードの中に教会の中の色濃い影が入りこむ。海岸沿いではミソサザイ[18]が夜番の動物だ。枠組みだけの寒々しい建物に、懐中電灯の青い光が夜の満ち引きを捕え新生の雇々のよう。船体の板は空中で揺れる大きな鉄の巣、支えるケーブルがギーギーと裂けるような音を立てる。作業を終えた、番を待つ者のトーナランプの炎は和らいで、赤い封蝋のガラス面を暗色に染める。水柱の下から配管工の小屋が、海峡を強風が吹きぬけるたびシュシュと音を立てる。小屋の中は使い古された歯磨きチューブの山だ。幾千個

16 叙唱。歌というよりむしろ朗読のように歌う。

17 AABA型式の歌のBの部分。

18 海軍婦人部隊員の通称が「ミソサザイ」なのは、略称WRNSが「wrens」と読めるため。

もがしばしば天井にまで積み上がっている。幾千個もの陰気な人間の朝を、ミントの泡とわびしい歌に変換して耐えられるものにした歯磨きの、その残骸。泡と歌はハロー[19]からグレイヴセンド[20]まで、水銀鏡に白いスポットを残した。幾千もの子供らが、その柔らかな口の中を掻き回しながら泡の間に、千倍の言葉をぶつぶつ吐いていただろう――就寝時の不満も、好きな女の子の名前も、毛布をつっかぶった田舎出の、デブだったり半透明だったりぼんやりしてたり大人しかったりする少年のうわさも――泡と甘草（リコリス）の時のカケラ（モーメンツ）が、みんなペッと吐きだされ、下水を通って河口にできる灰色の薄膜へ流れつく。朝の口腔は、一日の進行とともに煙草と魚の垢に覆われ、恐怖の乾きが累積し、怠情に汚れ、ありつけるはずもない食事を想って出てきた涎が、今週の分泌腺パイに入った臓物とハウスホールド・ミルク[21]と、いつものカケラの半分しかないビスケットパンと混ざりあう。メンソールって素晴らしいよな、それらの匂いを毎朝いい按配にぬぐい取って排水溝へ運んでくれる。流れだしたらボコボコ大きな泡に育って、頑丈なモザイクになって瀝青色の海岸線へ流れつく、繊細な図形を描きながら下水出口からドドーッと海へ注ぎこむ――その一方で歯磨きチューブはひとつずつ空になって〈戦争〉へ戻っていくんだ。ほんのり香る金属の山、冬の小屋に宿るペパーミントの亡霊、ロンドン子の無意識の手によるシワと箔押しをつけたまま、指また指の圧力で干渉縞ができたそれらは、いま待っている、真の回帰を待つ、溶かされてハンダになって、板金に、鉄に混ぜられ鋳物に、ベアリングに、ガスケットに、煙の叫び（スモークシュリーク）を発する内壁になるのを待つ。子供たちは見ない。家の中で別の輪廻をめぐっている子供たちの目にはふれない。それでも、身体と同族の金属を、家庭と生け垣のない海とをつなぐ連続性が存在した。これらの転生を分けるのは死ではない。ペイパーだ。紙

19 ロンドンの北西の郊外。バイロンもチャーチルも学んだ名門寄宿校（ハロー・スクール）で知られる。

20 テムズ河口に近い町。

21 戦時中、食糧省の管理の下で売られていたパッケージ入り粉ミルク。

CamScannerでスキャン

の契約書、書類のルーティン。〈戦争〉は、〈帝国〉は、われわれの生を隔てる仕切りを張り巡らせる。やれ統一だ同盟だ団結だとふれ回るくせに、〈戦争〉というヤツはいつだって分け隔てに走る。果てしない細分化を必要とする。戦争は、民族意識など望んでいない。「アイン・フォルク、アイン・フューラー」とドイツ人は叫ぶが、民族を束ねる指導者すら必要としていない――戦争が欲しがっているのは別個の部品を無数に組み合わせたマシーンだ、一体性（ワンネス）じゃない、複雑な合体性（コンプレクスシティ）……しかし、〈戦争〉が何を欲してるかなんて、誰に言えるね？　あんな茫漠とした、超然とした……現場にいないんだ、この戦争ってやつは、おそらくひとつの〈意識〉でも、〈生命〉ですらないだろう。生命に似たふるまいをするといっても、そりゃ偶然に、残酷にもそう見えるだけなんだ。〝ホワイト・ヴィジテーション〟に、病歴の長い分裂病患者がいてさ、こいつは自分が第二次世界大戦だと信じている。新聞も読まない、ラジオには耳をふさぐ、それでいてノルマンディ侵攻の日にはなぜか体温が四〇度にはねあがった。で、いま東西から挟撃作戦で戦線が反射収縮みたいに縮退するだろ、するとこの患者さん、自分の心に暗黒が侵入してくるというんだ、自己が削りとられるとね。……それがさ、ルントシュテット[22]の攻勢で立ち直った。新たな生気がみなぎってきて――「すばらしいクリスマス・プレゼントですな」って、病棟のヤツラに言ったんだと、「何といっても降誕の季節ですから、起死回生ってわけで」　ロケットが落下して、それが耳に届くとニッコリと起きだして病室を歩きまわる、うれしげな目の縁からいまにも涙がこぼれそうだ。赤ら顔の強壮状態で病棟の仲間に活を入れずにはいられない。死期は迫っている。VEデイまでしか生きられないんだ。この男、戦争そのものではないにしても、父なる戦争のあらわれとしての「子」ではあって、一定期間、気高く

22　カール・ルドルフ・ゲルト・フォン・ルントシュテットはドイツ陸軍最長老の元帥。西方軍総司令官として年末のアルデンヌ攻勢を指揮した。

CamScannerでスキャン

生きた後、セレモニーの日を迎える。さて、その日にどうなるか。真の王(キング)は死なないんだ、死ぬ儀式をするだけで、身代わりに死んでいくのが無数の若者さ。で、真の王は死なない。狡猾な古ダヌキみたいに生きながらえる。その王様、例の〈星〉の下にやってくるのかい？　冬至の季節が近くなると、何食わぬ顔して他の王様と一緒にベツレヘムに跪くのかい？　スルタンの宮殿からどんな贈り物を持ってくるの？　タングステンと爆薬と、ハイオクタンのガソリンか？　黄金の藁の地面から「子」が顔を上げ、マントを広げて深く身を屈め、贈物を差しだす老いた王の眼を覗きこむの？　そのとき視線が合うのかな？　王と幼い王子との間にどんなメッセージが交わされるんだ？　グリーティングか、それとも協約かい？　で、幼な子はほほえんでる？　それともこの話、誰かがデッチ上げたのかい？　みなさん、どっちがいいですか？

　降臨の風が海から吹く。今夜の日没、海は緑にかがやき鉄分豊かな鏡のように輝いた。生まれくる救いを孕んで風が日々われらに吹きつける、見上げる空に聖人の顔とほっそりとした使者の喇叭が見えてきそう。冬の中に置きざりにされ、今年もお呼びのかからなかったウェディングドレスの、物言わぬサテンの列、白いギャザーに黄ばみを生じ、きみの足音が通りすぎるときだけほのかに波打つ。きみは観る……街のあらゆる行き止まりを訪ねて……ウィンドーに映ったきみのうっすらとした影が、ドレスを着ている姿が一度、二度、目に入る。ボードソワ[23]の上をかすめていく肉色の霊がきみを招く、ほら、ここに入ってごらん、ちょうど生えてきたばかりの白カビが、うまいこと花嫁の匂いを消しさってくれるよ、中流の娘らしい汗の匂いも、お上品な石鹸と白粉の匂いも。それでも心は純白(ヴァージン)だ、希望は白い。だがここにはスイスの冬山のような結晶のまぶしさはない。田園をガウンの

23 サテン織りにした光沢のある絹地。

CamScannerでスキャン

ように降る雪はどんよりと波打つ冬の雲から落ちてきた。冬のガウン、それは夜は優しく、きみのまわりを無風の息のように包む。都市の駅にインドシナから捕虜の兵士が帰ってきた。[*24] 骨の浮き出た体があまりに軽くて、夢の中か月の上を歩いているようだ。一緒に進む乳母車の列――クロームのスプリング、黒革から太鼓の音が響きそう、ブロンドウッドのハイチェアのピンクと青の花模様は剥げかかり、コーンミールのこぼれ跡がついている。折り畳み式のベビー寝台と、赤いフェルト古のクマさんと、小さな毛布が、石炭と蒸気の臭うこの金属の空間に、明るいパステル調の雲となって流れていく。列をつくり、漂流し、用心しながら眠る人びとが、その何百人ものかたまりが押し寄せる。クリスマス休暇を楽しもうって。モリソン[*25]の陰鬱な警告など――川の下をくぐる地下鉄チューブを今この瞬間にもドイツのロケットが貫通するかもしれないのです、行く手は全滅し、行き先の住所も街から消えているかもしれません――お構いなしだ。百の困難を生きぬく女たちの列にビルマからトンキンから復員した兵士の眼が注がれる――彼らの青っぽい軌道から、アラシル錠剤も癒せない頭痛を通して届く視線。郵便局の袋を背負ったイタリア人戦争捕虜が悪態をつく。毎時、蒸気とクランクの音を響かせ駅構内に貨物列車が入ってくるのだ。雪のかかった貨車の中からマッシュルームのようなのがあふれ出ている、一晩中地下の冥界を走ってきたのか、いやそれ全部が積荷なのだ。こいつらが、もしいま歌を歌いだすなら、それは「ジョヴィネッツァ」[*26]ではなくて、きっと『リゴレット』か『ラ・ボエーム』[*27]のアリアだろう――実は英国郵政省が〈禁止歌〉のリストの発行を検討中だ。ウクレレ・コードが付いていたりする歌は、それを目印にしてダメと決める。彼らの陽気さと歌好きは本物だ、だがそれにも限度はある、クリスマス・グリーティングの攻勢が日を追ってかくも

24 日本軍から一九四四年九月に解放された二万人に及ぶ英国兵捕虜の一部だろう。捕虜の虐待が国際問題になったのは周知の通り。

25 内務大臣ハーバート・スタンリー・モリソン。戦後の労働党政権では副首相を務めた。

26 Giovinezza は、「若さ」「若人」の意味のイタリア語。ムッソリーニ時代に国家ファシスト党の党歌として、国歌に代わる扱いを受けていた曲。

27 ヴェルディの『リゴレット』も、プッチーニの『ラ・ボエーム』も恋心を歌うアリアで知られる。前者の「女心の歌」は特にポピュラー。

病的に激しくなり、ボクシング・デイ*28までは封じ込めの見込みもたたないとあっては、歌に替わって繰り出されるのは、よりプロフェッショナルなイタリア男の腕前だ——疎開へ旅立つご婦人方のほうへグルリと目玉を回したまんま、片手で荷袋のバランスを取る。もう片方は〝死んだ〟ふりをしているのだが、それはつまり、条件次第で生の躍動を開始するってことであって、人混みに女性が密集し列の流れが止まった時……うん、期待が高まり、生が昂ぶり、ああ、もちろんイギリス人の捕虜にしたって気持は同じだ——ではあるけれども、CBI*29からの復員兵に死に手の技はない。それっぽいお尻や太腿のお許しあらば、一挙に生へひとっ飛び——ってわけには、彼らはいかないのだ。生と死とで戯れるとは不信心な！ 彼らはもう冒険にこりごりしている。古女房が古びたストーヴに不平をこぼし、古びたベッドを暖める生活も、それはそれでいいじゃないか。冬枯れの日のクリケット、二軒一棟の家の日曜日の枯葉だらけの眠気に充ちた乾いた庭、それで満足、すばらしい新世界がタナボタで落ちてきたらそのときはそのとき、適応できないはずもないだろうって。……そんな彼らも今週ばかりは、勝利の日までおあずけのはずの贅沢に心が走る、子供に電動電車セットを買ってあげたいと、そんな思いに顔を輝かす——いや、とりすました表情がくずれないよう計算しながらなのだけれど、そのひとつひとつに（どれも写真でよく見るすました小顔に）命の光がさしてきて、オー、アー、だが感情の露出はおあずけ、こんな駅構内じゃ、ダメだダメだ、なんとしても抑えるべし。〈戦争〉に禁止されている、そんな不注意で破壊的な愛のシグナルは、土に埋めろと。去年子供たちはおもちゃの袋を広げて何を見たか。スパム*30の缶詰の生まれ変わった姿だったろ。子供もちゃんと知ってるんだ、クリスマスのゲームの醒めた面に気づいていて、それは仕方ないのだ。

28 十二月二十六日を、イギリスでは休日に定めている。使用人が暇をとり、子供たちがプレゼントを開くのはこの日。

29 チャイナ、ビルマ、インドを一括した呼び名。

30 戦時の食糧節約の[illegible]

と思っているのかもしれない。田舎の疎開先で過ごした春と夏、子供たちは本物のスパムの空き缶で遊んでいたんだ——これはタンク、こっちはタンク・デストロイヤー、あれがトーチカで、これはドレッドノートだよ。物置部屋でも、酒貯蔵室の埃っぽい床にも、病院や診療所の寝台やソファの下でも、肉色と黄色とブルーの戦陣を配置していた。ほら、またプレイの季節が来たよ。石膏の赤ん坊、金の葉っぱをまぶした雄牛、人間の目をした羊か、また本物に戻るんだ。ペンキの膜も生きた皮膚に早変わり。信じることは彼らにとって代価じゃない、全部が自然に起こること。ほら、この子が〈ニュー・ベイビー〉だよ、生まれる前の魔法の晩に、動物たちは言葉をしゃべり、お空はミルクになるんだ。爺さん婆さんも待っている。〈ラジオ・ドクター〉[*31]の質問を——ウォット・イズ・痔？　ウォット・イズ・気腫？　ウォット・イズ・心臓発作？——毎週のお楽しみにしていた年寄りたちは、その夜はいつもの不眠を引きのばし、起こるはずのない奇跡が今年もやっぱり起こらないのを見届けるだろう。だがその残滓は残るのだ。丘はそこにあり、空だってそれなりの光は与えてくれるのだから——だからこれはスリルのある、待ち遠しすぎるお楽しみで、完全にダメにされたとはいえないが、しかし、これのどこが奇跡だよ？…セーターとショールで寒さをしのいだ不眠の一夜、大袈裟に失望はしてみせたけれど、期待の残余は心の中で冬の間も熟成する。年々弱まっていくにせよ次の冬には必ず息を吹きかえす。…老人たちはもうハダカも同然だ。若い時分には一張羅を着てパブを回った、そのスーツもひき裂いて、給湯パイプやヒーター（所有者の大家は顔も知らない）の断熱布にしてしまった。そうでもしないと屋内にいる意味を、冬将軍から守ることができないから。石炭は〈戦争〉にもっていかれた。もう終わりの手前まできてしまった。自分の体のことな

31　戦時中のBBCホーム・サービスで流していた、木曜夕方の5分間番組。

ら分かっている。〈ラジオ・ドクター〉のお墨付きをもらっている。クリスマスのこの季節、彼ら鵜鳥のような裸身を、くすんだウールの老人用安物ガウン一枚でグルグル巻きにしている。部屋の電気時計は進みが速い。ビッグベンの大時計さえ早回り——新しい春が走りこんでくるまでは。まわり中で時間が早回りしているのに、誰もそのことを理解しないし、気にも留めない。電気も〈戦争〉にもっていかれる。〈エレクトリック・モノポリー〉という勇ましいゲームだよ。電力会社と中央電力委員会と他の戦争執行機関が一体になって、彼らの決める〈グリッド・タイム〉[*32]をグリニッジ標準時とシンクロさせておくのが狙いだ。夜の深み、夜のコンクリートの井戸の底で、極秘のダイナモがひそかに速度を上げる。それに応じて国中の年老いた眠れぬ眼(まなこ)の脇で電気時計の分針がグルグル、うなりの音程を上げながらサイレンのめまぐるしさで回っている。夜のマッド・カーニバルだよ。分針の影が陽気に踊る、文字盤の蒼白い顔面がヒステリアの症状をきたす。電力会社は説明する——負荷が大きいのですよ。戦争の消費は莫大です。夜の間にこうして進めておかなくては、時計が遅れてしまうのです。だが実のところ日中にそれほどの負荷はない、だから〈グリッド・タイム〉はぐいぐいと進行を早めていくのだ。老人たちは時計の顔とにらめっこして、こりゃ陰謀だ、と考える。数字がくるくる戻っていくではないか、御子の誕生(ネイティヴィティ)へと、われわれの首をグルリと回して、存在の忘れられたルーツへと永遠にくくりつける。見よ、心の新星爆発だ、と。だが海の向こうに目を向ければ、いまもただ霧が静かなホタテ真珠の光沢を発している。遠い街路ではアーク灯がバチバチと怒りの音を立てて、センターラインの先へと走るくすんだ光は、氷の色をしてキャンドルには向かないし、冷たい夜露が付着してホロコーストにも適さない・・・背の高い赤いバスが走る。ライ

32 〈グリッド〉という表記で、電気の流れを制御する権力機構を表す。

CamScannerでスキャン

トの響いは今は外れた。払いのけ、夕わり、横切り、ギラつくビーム、巨大な拳が引きちぎった霧が、濡れた風となって吹きぬけていく。真珠の霧に包まれた浜辺も陸地と変わらず荒涼として、電流の突き刺すような痛みを知らない有刺鉄線が、悲惨に冷たくサソリのようにチクチクする身を水底の草のようにグルリと横たえ、ただ静かに腐化の過程に身を任せている。その先、足跡のない砂浜が何マイルも続くところに、平和な夏の休日を満喫させた遊覧船が集められている。〈戦争〉の向こう側ではワインとオリーブの木立とパイプの煙の夕を演出した船体。それがいま見る影もなく剝げおちて、錆びた舳と腕木をむきだし、中は浜辺と同じ匂いがたちこめる。その浜辺に〈戦争〉は散歩を禁じた。草丘の向こうには幾筋ものスポットライトが見える。秋には渡り鳥がこれに群れ、光線を押さえ込もうとする闘いを死ぬまで続けて、力尽き、死んだ鳥のシャワーとなって地に墜ちた。その光の向こうに教会はある。紋縞の礼拝者たちは腰のない教会で身を震わせ、口を結んですわっている。聖歌隊が問いかける。喜びはいずこにあらんや。〈天使〉が新たな歌をうたうところ、〈王〉の宮廷に鐘の鳴るところ。アイア――奇妙な一千年の吐息――ça. Warum wir da! アア、ネガワクバ、カノチへ!……疲れた会衆と先導する黒い羊は、可能なかぎり上りつめる。羊としての彼らの身から今年さまよい出ることができるかぎり。さあおいで。戦争なんか、紙の戦争も鉄の戦争も放っておけ。ガソリンの戦争も肉弾の戦争もほっぽりだして、恋人と一緒に来いよ。喪失のおそれも、きみの疲労もぜんぶ一緒にかなぐり捨てて。一日じゅう戦争はきみを追い回してきたじゃないか。無理強いし、だまくらかし、真実でもないことを信じこませてきたじゃないか。おいおい、それが本当のきみか？ 身分証明書に貼ってあるその犯罪者めいた顔がきみなのか？ 政府のカメラのレ

33 249ページと同じ讃美歌「甘き歓喜にありて」の歌詞。

34 ブロードウェイの西四十丁目にあった軍人向け娯楽施設。同名の映画から。[illegible]

ャッターが、ギロチンのように落ちて、そのとききみの魂も抜きとられたみたいな顔してるぜ――それとも例の「ステージ・ドア・キャンティーン」[34]で、心臓(ハート)と一緒に魂までも置いてきたのか。NAAFIの女の子が今夜の収穫を数えてる、アイリーンって名前の子が、冷蔵容器に（黄色い脂の付け合わせのついた）くり色のゴム状臓器を注意深く仕分けしてる。ねえねえ、リンダ、こっち来てよ、触ってみてよ、すごいわよ、指をこの心室に入れると、ほら、うっとり(スウーニー)でしょ、まだトコン・トコンっていってる。‥みんなグルになってるのさ、思いもよらぬ人たちが、仲間でないのはきみだけだ――牧師も、医者も、きみのおふくろさんだって金星章[35]をつけたがってる。ゆうべのBBCホーム・サービスの番組で気の抜けた歌唱を聞かせたソプラノ歌手もだ。死と来世を描いて観客を笑いに包む、ミスター・ノエル・カワードも忘れちゃいけない。ああいう芝居でダッチェス劇場を四年続けて満杯にして[36]。ハリウッドへ行った若者が、そのスケールの壮大さに舌を巻く。面白いんだ、ウォルト・ディズニーが、子象のダンボに羽根をつかませるだろ[37]、今夜の雪の下に墜落して埋もれている屍だって、みんなそうじゃないか。白く塗りこめられた戦車の間には、凍りついた手がいっぱい、その手は何を握ってる？〈奇跡のメダル〉かい、幸運の古骨片かい、自由の女神の薄衣の裾からニヤケた太陽が覗いている半ドル銀貨か、バカ、88[38]の砲弾が降ってるんだ――これって、子供向けの話だろうか？ あんたはどう思う？いや、子供なんかここにはいない、子供はよそで夢を見てる、帝国内に夢見る場所なんかないんだよ、今夜のこの光景は成人指定さ、深々とランプが燃えるこの避難所には、先カンブリア紀の呼気がただよい。焦げた料理の風味と、煤の重々しさに充ちている。そして上空六〇マイル、漆黒の北海の上空の一点で、いまロケットが一瞬止まった。重力がそれ

at the Stage Door Canteen』という歌がヒットした。その「ハート」を臓器に解釈したブラックユーモアが続く。

35 アメリカでは、名誉の戦死を遂げた兵士の母親は、金の星のついた腕章をする習慣が第一次大戦中に始まり、戦後「ゴールド・スター・マザーズ協会」の設立を見る。

36 芝居の題名は『陽気な幽霊』。降霊会を催した主人公が、亡き妻の魂を呼び出してしまう。

37 ディズニー四作目の長編アニメーション『ダンボ』の公開は一九四一年。

38 ドイツの88ミリ大砲弾。

な引きおろすスピードがかかったん。オレンジの熱光、降誕節の星、クリスマス・スターがよ地に向かっていく、なすすべなく堕ちていく。低空層には飛行爆弾が〈魔王〉のようにうなりながら歩いている。お回食を求めて飛び去りそうだ。今夜は長い家路になりそうだ。その天使が夢見ていたんだ。聞こえていたらいいか、会衆に届くことがみんなの望みなそのまま、その闇を乗り越える恐怖なその手を話していたとしても、聞いてみな。キリストが語りかけるず、夜も曲がったその祈りはあったはずだ。そうさ、今夜みたいなひどい夜を太古の人間も生きてきたんだ。彼らも何にすがりはしなかった。だから——何かが現れ、晩だけでも、少しはやさしくしてもらえるよう、暖を求めて夜明けの光をもって家路を照らし、〈魔物〉ならもたないように、土地の境界を消し、肉なるものを練りし、人間の本来の姿についてのウソで固めた物語も消してくれ、その晩だけは、ただ明るく照らしだされた家路よいつか見た幼なじみの記憶だけが浮かんでいることを。望みはあまりにか弱く、道は寒い、ばかりで、ファウストに何やら外でうろうろしてる。そのためにかかれば幼な子はのどたまりもない、ただのありふれた〈教内者〉にされてしまいかねない。ほらみろ、もう賭けを始めたヤツがいるぞ。町では、ユダヤの裏切り者か〈帝国諜報部〉の役に立つ〈イレッツ〉を売ってるし。地元の娼婦からって者の割礼していないこえを慰める。お代はなんでも手持ちのものでけっこうだ。宿屋の亭主も、台帳を手にしてはくそえんでる。帝国の都じゃ、全員片っぱしから番号つけようって話だから、これでSPQR[19]の記録係も喜ぶだろうって……ヘロデもヒトラーも同じだぜ、いいか。みんな〈バルジ戦線〉に出ていった牧師さんは、大酒飲みの、荒くれ男だ。まったくなんちゅう世界なんだ（会衆の後ろのほうからヤジが飛ぶ〈神父さん、ローズヴェルトを忘れちゃいないか〉声の主の姿は見えない。怪しい声か、

19 「ローマの元老院と人民」の意味で、ローマ帝国の公文書などに記された略号。

神父さんの夢の中までつきまとう——「ウェンデル・ウィルキー[41]もだろ!」「チャーチルは?」「ハリー・ポリット![42]」)、トレドの秤[43]の針を揺らせた三四〇〇グラムの赤ちゃんがよ、大きくなって世界を贖うなんて、そんなことがありうるかい。そいつの脳を、診てもらったほうがいいんじゃないか……

でも、今夜の帰り道、きみはその幼な子を拾い上げてみたかった。少しの間抱いていられたらと願った。ただ抱き上げるだけでいい、その子を胸にぴたりと抱き寄せ、ぐっすり眠ったその子の頬を肩のくぼみに押しあてる。まるでその子をきみが救いうるかのように。その瞬間、自分が誰であろうと、そんなことはどうでもよくなる——自分がどんな人間として記載されるかなんてことは、シーザーたちがきみにどんな烙印を押すかなんてことは。

O Jesu parvule,　オオ、幼キ イエス
Nach dir ist mir so weh…　あなたを思うと心が痛む

かくしてこの雑多な集合の聖歌隊——亡命者、色気づいた若者、召集された気難しい中年市民、空腹にもかかわらず腹の出た、空腹ゆえガスがたまった、潰瘍になりかかりの、しゃがれ声の、鼻水たらしの、目の赤い、咽頭痛の、小便のたまった男たちが、腰痛と翌日いっぱい続いた二日酔いに悩まされ、憎き将校たちの死を願いながら歌っている。むっつり顔で街を歩いているのを見かけたことがあったにしても気に留めなかった、むこうもこちらを見かけたが忘れてしまった、そんな連中が、睡眠を貪るべきこの時間に、見知らぬきみのために夕べの祈りを捧げているのだ。いまはそのクライマックス、三つ四つのパ

40 この時期アルデンヌ地方の戦線ではドイツ軍の最後の総反撃が続いていた。105ページ註**12**参照。

41 一九四〇年のアメリカ大統領戦の共和党候補。選挙後は、解放者アメリカのスポークスマンとして「ひとつの世界」をうたい文句に世界を回った。

42 イギリス共産党書記長を二十年にわたって務めた。

43 アメリカ、オハイオ州に本社を持つ秤の老舗。

CamScannerでスキャン

ートが重なりあった歌声が、古代の音階の断片を駆けのぼる、反響がうつろな教会の全体に充ちる。ここには人だましの幼な子はいない、〈王国〉からのお告げもない、このひどい夜にほんの少しの明かりと暖をもたらそうというのでもない。ただ、義務として引っぱり出され、むさ苦しい、小さな叫び声を、外へ向かって精いっぱい差しだしているだけなのだ——神に称えあれ！——おつとめを果たしたら、あとはトボトボ戦争のなかのきみの住所へ、戦争が決めたきみのアイデンティティへと、雪上の足跡とタイヤの跡をたどり、最後は暗闇のなか、あんたの足跡を新たに刻しながら闇夜の道をひとり進む。望むと望まざるとにかかわらず、どんな海を渡ってきたかにもよらず、きみの家路をたどる・・・

□□□□□□

パラドクシカル・フェイズ。弱い刺激が強い反応を引きだす逆説の相。……それがいつ起こった？ 眠りの初期の段階だろう。モスキート[*1]とランカスター[*2]が上空をドイツへ向けて飛んでいくのをあんたは聞いていない。丸一時間、無数のエンジンが空を打ち、揺り動かし、ひき裂き、鉄板が釘付けされた夜の腹部の下を流れる冬の千切れ雲が、出撃する数多の爆撃機の恐怖を受けて休みない震動を続けたのに、それが聞こえていなかった。あんたのからだは不動のまま、口で息をして、狭い寝台にひとり仰向けに横たわっていた。脇の壁は、絵もなく、図表も、地図もない。この一面のブランクに彼は馴化していた。足指の見える先には、壁面の上方に細いスリット状の窓があって、そこから星明かりと、出撃する爆撃機の変化のないエンジン音と、真冬の隙間風とが入りこむ。散らかったテーブルには背表紙の落ちかかった本と、ノートに書きつけた表（その各欄に、ぞんざいな字で、時間、刺激、分泌量（三十秒）、所見、という見出しが書いてある）と、紅茶のカップとソーサー、鉛筆、ペン。あんたは眠ったね。夢を見た。顔面上数千フィート、鋼鉄の爆撃機が波をなして次々に通りすぎていった。どこなのだろう、巨大な屋内の集会場に、大勢が

1 英空軍初の、レーダーを搭載した夜間戦闘機。

2 大きな爆弾搭載量を誇った英空軍の爆撃機。

集まっていた。近ごろある時間になると丸くて白い強烈な光が一本の直線上を滑空して落ちてくる。突然ソレがまたも姿を現した。右から左へ、軌跡が一直線であるところはいつも通りなのだが、今回のは光の強さが定まらない——ときどき短いバーストを起こしてジャーン、ジャーンと音を立てて燃えさかる。集まった人びとは今回の突然の「おとずれ」を、警告と受けとめる——きょうはマズイぞ、何か恐ろしくヤバイことが起きそうだ・・・丸い光の意味するところは誰も知らない。委員会ができて調査が行われ、真相究明までもう一息のところまできたのだが——いまになって光のふるまいが変わってしまった。・・・総会は解散。こんなふうに光がジャンジャラ降ってくるのを見れば、恐ろしいことを予期するだろう——空襲ではないにせよ、何かそれに近いことを。あんたは急いで時計を見やる。六時ジャスト、時計の針が一直線だ。光の顕現は六時に起こるとあんたは知る。夕闇へあんたは出てゆく。そこは子供のころに住んだ家の前の通り。石ころだらけで、車の轍にひびが走り、水溜まりが光っている。あんたは左へ向かう（ふつう故郷の夢を見るときには家の右手の景色を好ましく思うのに——広々とした夜の芝生と、その上に枝を広げるクルミの老木、丘陵、木の柵と、その向こうのうつろな目をした馬たち、遠景には共同墓地。・・・これらの夢の中で、あんたには任務があって、多くの場合それは向こうへ渡ることだ——木の下を通り、影を抜け、事が起こらないうちに向こうまで行きつかないといけない。あんたはよく、墓地のすぐ下の草むらに入る。そこは秋の野バラと兎がいっぱいで、ジプシーも住んでいる。ときどきあんたは空中を飛行する。しかしある高さ以上は飛べない。だんだん動きが遅くなってついに止まる——が、墜落の恐怖はない。抗弁できない停止を余儀なくされるだけだ・・・景色がだんだん薄れてくると・・・ほら・・・もう・・・）

だが今夕、丸い光の現れる午後六時に、あんたはいつもと変えて左手の道を進んだ。連れの女性がいる。あんたの妻だ。あんたに結婚歴はないし、この女性とも会うのは初めてだが、古くから知っている。彼女は口を開かない。雨が降り止んだばかりで、すべてが淡く光っている。物のエッジが異様にくっきりとし、ほのかな透きとおった光があたりを包んでいる。目を向ける先々に白い小さな花の房が顔を出す。あらゆるものが花開く。上空の丸い光が下向きに傾いてから、一瞬点滅するのが目に入った。新鮮な、雨上がりの、花咲く野辺、その光景があんたの不安をかき立てる。景色にふわさしい匂いを嗅ぎとろうとするのだが、何も匂ってこないのだ。何ひとつ音がしない、何ひとつ匂わない。光のふるまいのせいで、これから何かが起こる。それを待っているしかない。風景が光り輝いて、舗道は雨でぬんめりとしている。首筋と肩を暖かいフードで包みなおして、あんたは妻に言葉をかけようとした。「いまが今夜で一番不吉な時間だ」と。だが正確には不吉(シニスター)よりピッタリの言葉がある。あんたはそれを探す。それは誰かの名前なのだ。薄暮(トワイライト)の向こう側、透明さの、白い花の向こうに、その名前は控えている。光がやってきてドアを叩く。

あんたはベッドの上に跳ね起きる。胸が恐怖に脈打っている。もう一度、ドアを叩く光を待つうち、上空を爆撃機の一隊が飛んでいるのに気づいた。二度目のノック。トマス・グウェンヒドウィだった。スペクトロ博士の悲報をもってロンドンからやってきたのだ。飛行機の轟音は気づかずに眠っていたのに、グウェンヒドウィの小さな気の進まぬノックの音で目がさめた。〝パラドクシカル〟な相(フェーズ)。実験の犬とよく似た大脳皮質の反応が、あんたの脳にも起こったか。

幽霊たちが軒下に群がっている。伸び上がって雪の積もった煙突や通気孔の間をヒューッと（しかし存在のはかなさゆえに実際には無音のまま）過ぎゆき、撓った強風にもけっして千切れない体をくねらせ、ス――ッと伸びてもプツンと切れず、数多の屋根の上にガラス製の雲形定規のような軌跡を描きつつ立ち並ぶ屋根を飛び越え、緑色の草丘の上を進み、岸にぶつかる波頭が凍てつきながら飛びちるところもかすめていく。日を増して濃密な集団になっていく幽霊、イギリス人の幽霊、夜になれば大挙して騒ぎ回る。抱えた記憶は冬の風に散ることも、種子になって根を下ろすこともない。まったき喪失、とはいえ時たま言葉となって生者に手掛かりを与えることもある――「foxes（きつね）」スペクトロE[3]が声を発した。霊界の空間を渡ってきたその言葉は、ポインツマンに宛てられたのだが、会に出席していない彼のもとに届くことはあるまい。この交霊の場で少数の心霊研究者がキャッチしたとしても、どんなセッションにもよくある謎めいた雑音のひとつとして片付けられがちだ――たとえ書き留められたとしても、行き先はミルトン・グローミングの頻度計算プロジェクトになるのがオチ――"foxes"。午後聞かれた無意味な発声、"白のおとずれ（ホワイト・ヴィジテーション）"の専属霊媒師キャロル・イヴェンター（天然の巻き毛が頭皮を覆っている）が非常に赤くて細い唇を動かして発した・・・聖ヴェロニカ病院が被弾したのは午前中[4]。建物の半分が、イック・リージスの古い聖堂（アビー）のように屋根を吹き飛ばされた。粉塵が粉雪のように舞い散った。ロケットの落下地点に居合わせたあわれなスペクトロは爆風に飛びちった。閃光を浴びた小部屋もろとも。暗黒のうちに破壊された病棟もろとも。落下音は爆発後に遅れて届いた。ロケットの亡霊が、みずから生みだした人間の亡霊たちに呼びかける音。そして静寂。ロジャーにとってこれは一個の「出来事（イヴェント）」にすぎない。地図を刺す丸頭のピンが一個増え、

3　Eはイヴェンターを表す。霊媒Eを通したスペクトロ、の意味。

4　スロースロップのアプリアクション（120ページ〜）が行われていたのはこの病棟。ポインツマンは当然、彼が原因で、ロケットがここへ落ちたと疑っているだろう。

方眼のそのマス目のヒット数が二から三へ上昇した。なかなか達しなかった期待値に、これでやっと到達した・・・
　ピン一個？　いや、それにすら相当しない。紙にあいた針穴ひとつ――その紙にしても、ロケットが落下をやめるか、統計学の若造がカウントを止めるかすれば、掃除婦の手で片付けられ、ひき裂かれ燃やされる。・・・ポインツマンはうす暗い仕事場でひとり、出てくるクシャミをどうにもできず、寒さで平坦に、途切れがちになる犬の鳴き声を聞きながら首を振る。違う・・・私の中では、脳の記憶の中では・・・一個の「出来事」を超えて・・・人間の死すべき運命を・・・この時代の悲劇を。・・・だが彼の身体はすでに震えはじめている。堅い視線が部屋の向こうの〈正典(ザ・ブック)〉に注がれて――最初は七人いた所有者が、いまは二人になってしまった。自分と、そしてステップニー[*5]の先に住む哀れな患者の相手をしているトマス・グウェンヒドウィの二人だけ。透明な五体の霊が天に釣り上げられた。パムはジープの事故で、イースタリングは初期のドイツ空軍の爆撃で。砲弾降下地区(シェルファイアー・コーナー)に居あわせたドロモンドはドイツの大砲の餌食となり[*6]、ランプライターは飛行爆弾(フライング・ボム)。そしてとうとうケヴィン・スペクトロ・・・自動車に始まり、空爆、大砲、V1と来て、今度はV2。ポインツマンの思考は止まり、恐怖一色だ。肌にヒリヒリ痛みが走る。ひとりずつ、順を追って、工学の枠を凝らしたものが襲ってくる。それの背後には一つの弁証法的展開が明らかだ・・・
「ミイラの呪いだ。ばか者め、それに決まっとるじゃないか。ふむ、そろそろ私もDウィング行きだな」
　D翼棟とは〝ホワイト・ヴィジテーション〟の活動を隠蔽するカバーとして機能し、い

5　イースト・エンドの貧しい地区。ドイツ軍の爆撃でもっともひどく破壊された。

6　大陸のカレーに設置されたドイツ軍の大砲は四年間にわたり、ドーバーへの攻撃を続けた。

CamScannerでスキャン

まも本物の精神病患者を少数ながら収容している。PISCESの連中はここを避けており、人員整理後も残った正規の病院スタッフは、専用の食堂と、WCと、寝台部屋と、事務室を使って戦争以前と同じ仕事をこなしながら、割りこんできた〈よそ者たち〉を迷惑顔で眺めている。それはまあ、お互いさまで、PISCESだって、D翼棟ののどかな、平和時の精神疾患などにかかわりたくはない。治療や徴候の情報を交換するのもごく稀だ。もっと強い結びつきがあってもいいんじゃないか、ヒステリアは、結局のところヒステリアなんでしょう?——と思うと、これが違う。来て見てくれ、違うんだ。正統派の人間がこれだけ大きな変転に長いこと心安らかでいられるはずはない。コーヒーカップの中に蛇のトグロが見えるとか、手が麻痺するとか、言葉の恐怖で視線を逸らすとか、そんなヤワな症状から、こっちに移ってみろって。いまや爆風に消えた病棟でスペクトロが毎日どんな症状と接していたのか……ポインツマンの犬にしたって同じだ——ピョートルも、ナターシャ、ニコライ、セルゲイ、カティンカ、それからパヴェル・セルゲヴィッチとヴァルヴァラ・ニコラエヴナと、その後その子供たちでも観察された——医者の表情にも、あんなにハッキリ読みとれるんだ……もじゃもじゃの顎髭に包まれたグウェンヒドウィにもいつもの落ち着き払った表情はない。注射器を手にして自分の〈キツネさん〉のところへ急ぐスペクトロもだ。空襲（ブリッツ）に終わりがこないかぎり、〈闇の王のアプリアクション〉は止まらない。空襲が止み、ロケットが解体され、フィルム全体逆回しにならないかぎりは——ロケットのつややかな肌が鉄鋼に戻り、それがまた鋳塊に、溶鉱炉の白熱に、原鉱に戻って大地に埋められるまでは。だが現実は可逆的でない。最初に焔の花を開かせ、次に爆音、最後に落下を聞かせるとは。そんな可逆性のまがい物を見せつけるとは〈何か背後に意図

CamScannerでスキャン

があるにきまっている)。一回ごとに、〈王〉（ロード）は自身の〈国〉（ステイト）を正当化していく。なのに彼を見いだせない、目にすることもできないわれわれは、死について相変わらずの無頓着ぶりだ・・・警告を受け取ることができず、ましてや飛来するものを撃ちおとすことなどできずに、空襲（ブリッツ）を知らなかった時間の中を生きているふりをするしかない。死に見舞われたら、それは「偶然（チャンス）」なのだと。そう考えるようにしているわけだ。偶然なんてものは、あるレベルまで突きつめれば消えるものであるのに。ところがロジャー・メキシコのような徒がいて、彼らにとって偶然は一種の音楽になっている。それなりの威厳もあるではないか、$Ne^{-m}\left(1+m+\frac{m^2}{2!}+\frac{m^3}{3!}+\cdots+\frac{m^{n-1}}{(n-1)!}\right)$という冪（べき）級数には。各項の数字は、網目の一マスのロケットの落下数と相応する。ポアソン分布というのが成り立つのは、逃れえない厄災だけではない。騎兵隊の事故も、血球数のカウントも、放射能の減退も、年ごとの戦争の数をも支配しているのだと・・・

　ポインツマンは窓のそばに立っている。ぼんやり映しだされた顔を夕暮れの風に吹かれて飛ぶ雪が横切る。草丘の連なりの遥か向こうから、夕霧のように切れ切れの列車の汽笛。――・――・――と、それは雄鳥の鳴き声を発した後に、長いホイッスルを連ね、ふたたび雄鳥、それから線路際に火の手が上がり、ロケットの音、さらにロケットの音、落ちたのは森なのか谷なのか・・・

　なあ、どうだろう、ネッド・・・そろそろ〈本〉（ザ・ブック）の教えを放棄しては。なあに、ギブアップするだけさ、簡単だろ? データも時代遅れだし、その洞察にしても、師匠（パヴロフ）一流の独特

な詩的ひらめきの産物だ、所詮は紙だろ、本当に必要なのかね、呪いのかかったその〈本〉が……いまならまだ遅くはない。……そう、自説を取り下げる、深々と頭を下げる、そりゃまた法外な、誰の前にひれ伏すって？　誰が聞きたがる？　だが彼はすでに机に戻り〈本〉の上に手をかけていた……

「意気地なしめが、迷信深いアホめ」何も考えられず、ただ部屋をうろつくだけ……そんな症状がこのごろ頻繁である。みずからの墜落を思って、寒気が肌を這い上がる。パムも、イースタリングも、ドロモンドも、ランプライターも、スペクトロも逝ってしまった……ならどうしたらいい？　心霊研究班を訪ねてイヴェンターにお願いするのか、降霊会でそのうち誰かの声を届けてくれってか……悪くないじゃないか……よし……何をぐずぐずしているんだ。「おれは」ガラスに向かって微かにつぶやく、「そ」の音が歯を擦り、「プ」の破裂とともに息が、暖かくも陰鬱な息が、扇状に拡がって冷たい窓ガラスを曇らせる——「そんなにプライドが高いのか？」あの廊下は渡れんだろう、思いを漏らすこともできない、仲間の死をどれほど痛切に感じているのか、メキシコにさえ言えない……ドロモンドやイースタリングとはまともなつきあいもなかったが……アラン・ランプライターの死は心から悼んでいる。あいつは何でも賭けにしたから——犬のこと、雷のこと、路面電車の数、風の日の街角ではどのスカートがめくれるかに賭けた。飛行爆弾が飛んでくると、どこまで届くかに……なんてことだ、そのV1が自分の上に落ちてきてしまったよ。……パムのやつはよくピアノを弾いていた、派手にアレンジして酔っ払いのバリトン声で歌いだして……看護婦ともいろいろあったっけな……スペクトロ……頼めないことはないじゃないか。ものは言いようだ、ズバリでなくても……

CamScannerでスキャン

そうすべき…べきだった。…自分の生涯は、しようと思ってしなかったことの連続ではないか――彼女と結婚すべきだった、彼女の父親の助言にしたがうべきだった、ハーレー・ストリート[*7]に住みつづけるべきだった、人にもっとやさしく、他人にもほほえみかけ、今日モーディ・チルクスに挨拶されたときも笑顔を返すべきだった…なぜできない？　口をニタッとさせるだけでいいのに、何が私にそれを禁じるのだ、いかなる抑制機構が、脳のモザイクより発するいかなる怒声が？　官給の眼鏡の奥の、琥珀色の目はそれなりに端正なのに…女たちは敬遠するのだ。なぜなのか、漠然とはわかっている。自分は薄気味わるいのだ。どんなときに薄気味わるいのかもわかっている――顔面のどの筋肉の、発汗をともなうどんな動きが…わかっていても無理なのだ、意識で抑えつけようとしても長くは続かない、いつのまにか顔面から薄気味わるさを発散している…それに対する彼女らの反応は予測通り。逃げ出すのだ。叫びながら。その叫びはまわりに聞こえない――だが私には聞こえる。ちくしょう、いつか、その喉から、絶頂の叫び声を上げさせてやりたい…

　下腹部がもぞもぞ。今夜もまた自慰をして眠りにつくのか。快感などなきに等しいルーティン。彼の人生における定数。だが目の前が明るく開ける直前に、彼を絶頂に駆り立てるイメージの渦は、飾り小塔、ブルーの海水、帆船と教会の塔――これはストックホルムの街だ――黄色の電報用紙、式典に向かうリムジン、振り向いて車中の彼を見つめる長身の美しい女性、彼女は彼を知っていて、式典後、ちゃんと理由があってグランド・ホテル[*8]のスイートルームに訪ねてくる…といって、ルビー色の乳首と黒いレースのキャミニッカーで、ってわけじゃない。静まりかえった戸口、中の部屋の紙の匂い、いくつもの委員

7　173ページ註12参照。

8　ノーベル賞受賞者とその家族が滞在することで知られる北欧の最高級ホテル。

会でのサテライト投票、受賞者の椅子、そして〈賞〉そのもの・・・これに比肩する何かある！ あとで、歳を重ねてみればわかることだと彼らは言った。ほんと、その通りだ、心に取り憑いたこの思いは、戦時には毎年、平和時の十年分も成長する・・・

彼には強運が備わっている。彼の大脳皮質の奥には動物的生存の才覚が埋めこまれている。ほかの優れた男たちが〈死〉へ連行されても生き残っていられる天与の才能が彼にはある。その才能が知っている、ドアはここだと。長年テカテカの研究人生の回廊をひとりでテセウス[9]のように歩きながら思い描いていたドアは。正統派パヴロフ主義の思考の迷路を抜けでられれば、その向こうは、ストックホルムのまばゆい景色——ノルマルム[10]、セーデルマルム[11]、鹿公園、そして古市街区・・・

ひとりずつ毟りとられていく。同僚の研究者のうち死者対生者の比率はどんどん頭でっかちになる。冬が来るたび幽霊が増え生者が減る・・・一人逝くたびポインツマンの大脳皮質のパターンが立ち消え、永遠の眠りにつくのが感じられる気がする——それまで自分の一部としてあったものが輪郭を失い、知性なき化学反応へと還っていくのが・・・

ケヴィン・スペクトロはポインツマンのようにきっちりと〈内〉と〈外〉とを区別しなかった。スペクトロにとって大脳皮質とは、内にも外にも同時に帰属し両者を媒介する器官だった。「事実をあるがままにとらえればわかるだろう。人間はみなつながっている、どんなやつでも」とのたまわったこの男をポインツマンは自分にとってのピエール・ジャネだと思っていた・・・

まもなく、〈本〉の弁証法的展開[12]は、ポインツマン一人をこの世に残すだろう。彼を囲む黒いフィールドはイソトロピーへと落ちこみ、ゼロの地点に彼ひとりがたたずんで、最

9 ミノタウロスを倒す、ギリシャ神話の英雄。

10 ストックホルム中心街の商業区。

11 中心部南側の島をなすトレンディな地域。

12 向きによる差異が

CamScannerでスキャン

ない状態。等方性。

後に自分が召されるのを待つ・・・それまでに間に合うだろうか。なんとしても生き残らなくては・・・〈賞〉は一人の栄誉のためならず――約束したのだ、かつて七人が構成したフィールド、その生き残れなかった友と約束したのだ・・・この部分はミディアム・ショット、ポインツマンは逆光を受けてグランド・ホテル上階の窓辺に立ち、北極近くの輝ける空に向けてウィスキーグラスをちょっと傾ける。あんたがた全員に乾杯だ、あしたは全員舞台に上がる、たまたまネッド・ポインツマンが存命しただけの話だからな・・・いざストックホルムへ、これがネッドのバナーの文句、彼の雄叫び、ストックホルムの後はおぼろだ、長い金色の黄昏にかすんでいる・・・

いや、たしかに、かつてはミノタウロスが彼を待ち構えていると信じた。最奥の間へ駆けこんで、きらめく剣を振りかざし、特攻隊員の叫び声をあげながら、積年の思いを果たすことを夢みた。人生の、後にも先にも一回きりの、真に燃える瞬間。怪物の顔がこちらに向けられる。古代の、疲れた顔が。その眼はポインツマンを人間として見ていない。ただ長年のお定まりの角の一突きと蹄の一蹴りで始末しようと（だが今度はそうはいかん、闘いだぞ、ミノタウロスよ、オマエのけだものの血を吹きやがれ。腹の底からわき出る勇猛さ、荒々しさに自分が感激している）。・・・これが夢だった。朝一番のコーヒーと平たいベージュのベンゼドリンを一粒飲んだ後で、その夢は形を変えた。構造自体は同じであっても、セッティングも登場する顔ぶれも変わった。たとえば、夜明けの大きなトラック駐車場。舗道は新しく水を撒かれ、ところどころ茶色い油の染みができ、オリーヴ色の幌のかかったトラックはそれぞれが秘密を持って待機している・・・しかし彼は知っている、このうちの一台の中にいることを・・・とうとうその一台の、声にできない認識コードを探

り当て、荷台の幌の下から潜りこみ、埃だらけの茶色い光の中で待っていると、やがて運転台との仕切りの、横長の曇った窓から頭が見え、ある顔が、彼の知っている顔が、こちらを向きはじめる・・・だがそれが、振り向く顔と目が合うことが、夢の基底構造なのだ・・・大股で犬が歩く、名前はライヒスジーガー・フォン・タナツ・アルプドリュッケン。[13] ナチの犬の中で最速の逃げ足を誇る、一九四一年のヴァイマル種ポインターのチャンピオン。416832という血統登録証のナンバーを耳の内側に刺青して。ロンドン化したドイツの町を駆けていく犬は肝灰色（レバーグレイ）。夕闇迫る運河沿い、戦争の瓦礫が散らばる中を、ゆったりとした長足で逃げていく。次々と爆裂するロケット。その直撃を免れながらの追跡は終わらない――銃弾の掻き傷を刻んだプレート、生贄にされる都市の地図、ヒトとイヌの脳の地図、犬の革製耳覆いがふわりふわり揺れる。頭の上部に冬の雲を反射させながら、シェルターへ、地下数マイルの深みへ、鋼鉄に囲まれた避難所へ。だがバルカンの陰謀のオペラの、不規則な周期でブルーの不協和音群に取りこまれる、密封された安全の中へは、完全に逃げこむことはできない。なぜなら第三帝国のチャンピオン犬は悠然と追っ手を引っぱる走りを止めないから、止めることができずに、こうして文字通りの追跡に戻ってしまうから。追っ手としても、熱病のように繰りかえされるロンドの舞いに戻るしかない。世界の終わり（アルマゲドン）の報せが届いた午後も日暮れて、ここはどこか丘陵地帯の土手道、ブーゲンビリアの赤い花が咲いている、埃の立ち上る金色の道の遠景にはいま通ってきた街、蜘蛛のようなその街から幾筋もの煙の柱。空をわたる声が告げる。南米は灰燼と化した、ニューヨーク上空は圧倒的支配力をもつ新型爆弾で赤紫に輝いている。そのときついに、犬がこちらを向いた。その琥珀色の眼がネッド・ポインツマンの眼を覗きこむ・・・

13 この犬の名には後出の主要キャラクター（ミクロス・タナツ）の名と、彼の妻が主演した映画名「アルプドリュッケン（夢魔）」が埋めこまれている。訳せば「死と夜の恐怖の帝国のチャンピオン」。

どの夢でも、相手が何であっても振り向かれると彼の心臓と血流は刺激され、高揚した心が白燐弾の引き金で燃え上がり、テルミット[14]を溶かしながら膨張を始める。光を押さえこめない。部屋の壁が血の輝きに染まり、それがオレンジからホワイトへ変化して滑落する。蠟のように流れ出す。迷宮の同心円状の隔壁が外側へ崩れていき、英雄も恐獣も設計者もアリアドネーも呑みこんだ。すべては彼自身に発する光、狂乱の自己爆発…

何年前だったろう。もう記憶からも薄れてしまった夢だ。以後、最後に待つ獣との間にいろいろなことが割りこんで、みずからの死を思慕するという小さな倒錯すらポインツマンに許そうとはしなかった…

だがそこにスロースロップが出現した。突然の天使か、熱力学上の驚異か、それはともかく…これで状況が変わるのか？ ポインツマンはいよいよミノタウロスに向かって進んでいくのか？

スロースロップは今ごろリヴィエラに到着し、暖かい空気と、食べ物と、たっぷりのセックスを楽しんでいることだろう。[15] ここ晩冬のイギリスでは用なしになった犬たちがなおも裏通りや厩の並びをうろつき、ごみ箱を漁り、雪の絨毯に足をとられ、喧嘩し、逃走し、プルシアンブルーの水たまりで震えている…ソレを逃れることはできないのか。臭いもない、姿も見せない。だが到来の雄叫びはものすごい。その猛獣（プレデター）の前で犬たちは弱々しい鳴き声とともに雪に沈みゴロリと寝返って柔らかな無防備の腹部をさらすしかない…

ポインツマンは犬たちを見捨て、まだ試されていないひとりの男に研究テーマを鞍替えしたのか？ いや彼にしても、おのれの計画の正当性に、少なくとも疑念は抱いている。道義的に「正しい」かどうか、これは部局担当の牧師ドゥ・ラ・ニュイに任せておけばい

14 白燐弾に使われる混合粉末。金属アルミと酸化第二鉄からなる。

15 ポインツマンが仕組んだこの"実験"は、第二部で詳しく語られる。

CamScannerでスキャン

いことだ。しかし・・・犬たちは？　犬の心なら、自分は知っている。犬の意識の箱にかかった錠前を自分は巧みに外したのだ。もはや犬に秘密はない。狂気に追いやるのも、適量のブロム剤によって正気に戻すのも意のままだ。しかし、スロースロップは・・・

パヴロフ主義者ポインツマンは迷う。自分の専門のことで迷い、落ち着きを失い、うち寄せる年齢の波を感じる。眠らなくてはいけないのだが、眠れない。これは単なる条件反射ではないぞ、そんな大昔のことで、こんなことが起こるはずがないという反応を、彼は長年の医学研究の中で条件づけられている。これには奥がある。深いわけが。スペクトロがやられたその二日前に、スロースロップのやつ（おっと、おっさん、被迫害感情(サンディマン・ダンプリーズ)に走ったらいけませんぜ）、ここ聖ヴェロニカ病院からほんの数ブロックのところでダーリーン嬢とお愉しみだったたではないか。

あることが次々と、こんなにも恐ろしい規則性を備えて起こった——といって、もちろんそれだけで因果関係を推断するものではない。だが事態の理解の助けとなるメカニズムを探すのは当然だろう。手探りしながら、ささいな実験をやってみるのだ。・・・スペクトロに報いるなら、それだけはやらないといかん。あいつは、あのアメリカ人は、法的な意味では殺人者でないとしても、病んでいることに間違いはないのだ。その病因を探ることだ。治療法を見つけだす。

この企画には誘惑の危険がある。それは承知の上だ。シンメトリー・・・こいつに魅せられて、つい庭園の迷路を先へ先へと進んでしまったことが以前にもあった。実験結果を見て・・・一つのメカニズムがその鏡像的イメージを内包しているに違いないと考えてしまったのだ——たとえば〝放散〟[*16]とか、〝逆誘発〟[*17]とか・・・そのような過程が存在する必然性

16 「放散」はパヴロフ

を誰も語ってはいないではないか。だがこの対称性の思考から逃げ切るのはむずかしい。〈外〉に目を向ければ、V1とV2の音が対称的だ。独軍の空襲(ブリッツ)を構成するふたつの兵器の音は、まるでたがいの映し身のよう。……パヴロフは〈内〉なる鏡像イメージ──たがいに正対しあう観念──が、どのようにして混乱をきたすかを示した。だがいま〈外〉にいかなる病理が生じたのか。出来事の世界──歴史そのもの──に生じたいかなる病変が、これほどの対称的に逆転した一対のロボット兵器をこの世に送りだしたのか？

示現(ヴィジョン)と症候。スペクトロの言っていたことは正しかったのか？〈内〉も〈外〉も、どちらも同じフィールドの部分だということがありえるのか？もしも公平のために、公平を期すだけのためにも、ポインツマンが答えを求めるべき領域が、内と外の界面だったとしても……調べるべき大脳皮質はスロースロップ中尉のそれをおいてほかにあるまい。あの男も苦痛は被るだろう──ある種の臨床的な意味で破壊されるかもしれない──だが、それを言えば、あいつの名の下に今夜もどれだけの人間が苦しんでいる？いいか、毎日毎日英国政庁(ホワイトホール)は、たいへんな決断を通して、大きな賭けを背負いこんでいるんだ。それに比べれば当人の苦痛などほとんど取るに足らんと言っていい──ほとんど。そこには何か透明で素早くて把握の手をすり抜けてしまうものがある──心霊セクションはそれをエクトプラズムと呼ぶのだろう──しかしうってつけのタイミングで恰好の実験材料を手中にしたという確かな感触がポインツマンにはある。しっかり握りしめろ、さもないと、この敷石の廊下とともに自分の研究人生も解体されることになる。だが可能性にはオープンでなくてはならない──心霊研究の連中が正しいという可能性に対してすらも。「われわれはみなそれぞれ正しいのかもしれない」と、今夜の日記に書きつける。「これまで考えて

の用語で、英語では[illegible]。大脳皮質の特定の点に生じた興奮や抑制の過程が、近隣の領域へ必然的に拡がり、その後また限られた領域に集中すること。

17 英語で[illegible]。条件づけによって生じた興奮の地点が、その後、抑制の過程を誘発したり、抑制の地点が興奮の過程を誘発すること。

きたことのすべてが、それ以上のことが。見いだされる事実がどうであろうと、あの男が、生理学的にも、歴史的にも、怪物であるということに疑問の余地はない。制御の手を放してはならん！　戦争終結によって、やつが一般社会に紛れてしまうと思うと、我が脳は消しさることのできない深い恐怖で満たされるのだ・・・」

□□□□□□

天の使いの訪れと彼らの声明(コミュニケ)で明け暮れる今日このごろ、キャロル・イヴェンターとしては、自分の怪異(フリーク)な才能に虐待されている思いである。この特殊能力を、ノラ・ドズスン＝トラックは一度「あなたの立派な弱さ」と呼んだ。その「弱さ」が最初に発現したのは人生もだいぶ進んで三十五歳になってのこと。その朝彼はテムズ河沿いにエンバンクメントを歩いていた。片側に二本のパステルを揮って鮭肉色(サーモン)や子鹿色(フォーン)の陰影を表現している街頭画家。もう片側に二十人ほどのボロを着たヒョロリと哀しい通行人が鉄の欄干や河の煙と交錯する。その瞬間誰かが突然イヴェンターの口を借りてしゃべりだしたのだ。とても静かな声で、一緒にいたノラには何をいっているのかほとんどがキャッチできず、誰が憑依して彼を使っているのかもわからなかった——まだその時は。語りの一部はドイツ語で、単語はいくつか記憶できたから、午後にサリー[*1]で夫[*2]に会うとき聞いてみようと思ったのだが約束に遅れてしまった。男と女と犬と煙突の影が広大な芝生の上に黒々と伸びる日没時、ノラの手に握られた、夕陽の眩しさでほとんど見えない黄土色(オーカー)の小片が、垂れかかる彼女のヴェールの先に扇形を描く——その朝、街頭画家の木箱からつかみ取ったパステルだ。

1　ロンドンの南西に隣接した州。

2　第二部に登場する博識のサー・スティーヴン・ドズスン＝トラック。

CamScannerでスキャン

つかんで彼女はくるり体を翻し、片方の靴の爪先とパステルの二点だけで接地して、柔らかなパステルの先をボロボロ崩しながら路面を擦って、路上に大きな一筆書きのペンタクル[*3]を描いたのだった——薄紫(ヘリオトロープ)と海緑色(シーグリーン)の二色で描かれたむっつり顔のロイド・ジョージ[*4]のすぐ隣、上流の側に。そしてイヴェンターの手を取って中心の星形の中に立たせると、頭上に鳴き回るカモメが白いディアデム[*5]をつくる下、ノラは本能的に、母的(マザリー)に、一緒に五角形の中へ入った。愛する相手には誰であれそうせずにはいられない、このペンタクルも遊び半分で描いたのではない、警戒はいくらしても足らない、まわりからいつも魔(イーヴル)の手が

・・・

あのときからすでにイヴェンターはノラが退きはじめていたのを感じていたのか・・・そのために〈壁〉のアチラ側から支配霊(コントロール)[*6]を呼びだして縋(すが)ろうとしたのか？　彼のノラは覚醒視覚の深みへ退いて、日常の視界が夕闇を縁どる光のようになる、その危険な十分間ほどは為すすべもない。眼鏡をかけランプを灯しても、西側の窓辺にすわってみても効果はなくて光は遠ざかるばかり。今度こそ永遠の闇へ連れさられてしまうのではと思う・・・降伏する術を会得するにはいい機会だが——光のように、ある種の音楽のように、すーっと自分を消していくこと。イヴェンターの才能とは、この降伏する能力に尽きる。あとから思いだそうとしても何ひとつ出てこない。ごく稀に、漠とした感覚が——言葉ではなく、自分が言ったに違いない言葉のまわりに意味の光輪(ハロー)のようなものが——残っている。しかしそこにどんな「意味」があったのかは憶えていない。あとに残った感覚も夢の残滓と同じで、保持することも展開することもできないまま消えてしまう。"ホワイト・ヴィジテーション"に来てからは、ロッロ・グロースト[*]に何度も脳波測定にかけられた。結果はおお

3　一筆書きの星形に円が外接する図形。星形の中心の五角形の中に入れば、呼び出してしまった霊から身を守ることができる。

4　第一次大戦中と戦後に首相を務めたデヴィッド・ロイド・ジョージはこのとき八十一歳。現職議員としてチャーチルの路線に反対してきたがすでに健康優れず、翌年三月に死去。

5　東方の王が頭に巻く帯状の飾り。

6　65ページで、ペーター・ザクサが彼の支配霊になっていた。その経緯が語られている。

むね正常な大人の脳波だったが、一度か二度、側頭葉から五〇ミリボルトほどの電圧の棘波（スパイク）波形が飛び出ていた。左脳からかと思うと今度は右脳という具合で、何のパターンも作らない――だからイヴェンターの脳に関しては、もう何年も火星の運河論争みたいな議論が戦わされている。アーロン・スロースターが緩慢なデルタ波の波形が前頭葉の左から出てくるのを見たと言って脳腫瘍の疑いを指摘したのに対し、昨夏エドウィン・トリークルが「てんかんの小発作（プチマル）を示す棘波（スパイク）とデルタ波[*7]が交互に出現、そのサイクルは奇妙にも、通常のデルタ波の毎秒三回という値よりだいぶ遅い」と。ただしその前夜、トリークルはアラン・ランプライターをはじめとするギャンブル仲間と連れだってロンドンで一晩中遊んでいた。それから一週間たらずで、飛行爆弾（V1）がランプライターを彼方（アチラ）へ連れていった。だからランプライターは、その気ならアチラからイヴェンターに取り憑いて、イヴェンターこそまさしく霊界と地上を繋ぐインターフェイスだと証明できてしまうわけだ。みずからその説に5対2のオッズで賭けていたランプライターの霊は、しかし平静を保っている。柔らかいアセテートやメタルの盤[*8]にも彼がしゃべった形跡はなく、タイプライターで書きとられた言葉もすべて正体のわかっている一ダースほどの常連だけによるものだ……

彼らはみな、異なる時期にやってきた。中にははるばるブリストルの研究所から来た者もいる。だがここ心霊（サイ）セクションのフリークたちの異様さにはひと目で啞然とし、観察してからは断固として不信の念を募らせている。たとえば名うてのサイコメトリスト[*9]として知られるロナルド・チェリコーク。この男は目を軽くパチパチさせ、両手は一インチ離して包み紙でくるんだ箱を包みこむようにしている。箱の中は、暗いえび茶の首巻（クラバット）、シェーファーの壊れた万年筆、変色した白金の鼻眼鏡――みな大戦初期の遺留品だ。この持ち主

7 リラックスした状態で出るアルファ波、活発な活動期に出るベータ波に対し、障害を持つ部位が時に発する、非常に緩慢なサイクルの脳波。てんかん（epilepsy）は、ヨーロッパでは昔から「天界からの憑依」だと考えられていた。

8 レコード制作は、まず柔らかいアセテート素材の盤をカットして凹盤をつくり、それを元にメタルの凸盤をつくって、これにプレスをする手順をとる。

9 物体から、その履歴を、特にそこに染みついた人間の思念を読みとる霊能者。

CamScannerでスキャン

はロンドンの北のはずれに駐屯していた聖ブレーズ空軍大佐。〈殲滅請負人〉の異名をとった名飛行士である。見たところ（やや肥満体ながら）ふつうの若者と変わらないチェリコークが、中部イングランド訛りの、旋盤がうなるみたいな発声で空軍大佐の私的な身上書を物語っていく。このごろ抜け毛が多くてな、と愚痴で始まったその語りは、ドナルド・ダックの漫画映画への偏愛の告白を経て、リューベック空襲のさ中[*10]に起きた一件にふれた。これを知るのは大佐と（すでに彼方の住人となった）ウィングマン[*11]のふたりだけであって、報告はしない約束だった。しなくても国家の保全が侵されるものでもなかろうと考えた。その秘密を今に至って抜き取られてしまった聖ブレーズはポカンと口を半開きにして、おいおい、たしかにそれは俺のことだ、と苦笑いしてみずから確認してしまう。まったくの話チェリコークはどうやって情報を引きだすことができるのか？　いや、不思議なのは、ほかの異能者たちも同じだ。マーガレット・クォータートーンは何マイルも離れたところから、しゃべることも装置にふれることもせず、どうやって音盤やワイアレコーダー[*12]の中に声を生みだすのか？　ここに集まり始めた「しゃべり手」たちはいったい誰で、ここの牧師にして自動筆記者(オートマティスト)[*13]のポール・ドゥ・ラ・ニュイがもう何週間も書きつづけている五ケタの数字の暗号はどこから来るのか？　不吉な報せの気配がただようだけで、ロンドンに送っても誰ひとり解読できない。エドウィン・トリークルの最近の飛翔の夢は何を意味しているのか？——中でもノラ・ドズスン゠トラックの墜落の夢との時間的相関から見えてくるのは？　いったい何が彼らの間に群れているのか？　それぞれの怪異(フリーク)な方法では示すことはできても、直接的に言葉では語れないし、部局全体として共通語(リンガ・フランカ)もない。エーテル界の乱流。カルマの風における不確定要因。ともあれ私たちが「死者」と呼ぶ、

10　一九四二年三月二十九日（棕櫚の主日）未明に起きた英空軍による、軍事的に重要でもなかった北ドイツの都市への爆撃。V兵器による報復のもととなった。いまPISCESの「サイ・セクション」では、チェリコークが、大佐の遺留品に手をかざして当日の出来事を読んでいる。

11　リーダーの戦闘機の脇および後方を固めるパイロット。

12　テープレコーダーに先立って実用化された、鋼やステンレスのワイアを用いる音声磁気記録装

界面の向こう側の住人は、近ごろとみに不安げでハッキリ物を言ってくれない。キャロル・イヴェンター自身の支配霊であるペーター・ザクサも、普段はクールな皮肉屋で、あの朝のテムズ河畔の降霊以来、伝えることがあると気さくに降りてきてくれたのに、その彼までも何か気を揉んでいる雰囲気だ・・・

ここ“白のおとずれ（ホワイト・ヴィジテーション）”には、このごろ新種の異能者がどんどん集まる。ＢＢＣが何かしらエーテルの周波数で“Ｘ番目のプログラム”を流していて[14]、それを聞いてやってくるのだろうか。夜も昼も、時間を問わず集まってくる。閉じた口、凝視する眼、しかるべく応対してもらって当然という顔。黒い金属機器やガラスのジンジャーブレッドを手に持ち、蠟人形のような忘我の表情。と思うと質問の引き金が引かれたとたん、自分の特殊でめちゃくちゃな才能について、毎分二百語のスピードでしゃべりだす。まさに襲撃だ。たとえばこのギャヴィン・トレフォイルという青年をどう理解したらいいのだろう。彼の能力にはまだ名前がない（ロッロ・グローストは「オートクロマティズム」[15]というのを提唱しているが）。ギャヴィンは、ここでは最年少の十七歳で、アミノ酸の一種であるチロシンを自由意志で化学分解することができる。これによって、人の肌色の加減を司る黒褐色の色素メラニンが生成されるのだが、彼は——おそらく血液中のフェニルアラニン値を変化調節することで——チロシンの分解を抑えることもできて[16]——彼の皮膚の色は、ほとんど幽霊みたいな「ホワイト」から濃紫色の気味を帯びた「ブラック」までなだらかなスペクトルを自由に移行することができるのだ。集中さえしていられれば、好きな肌色のレベルに数週間は留まっていられる。しかしたいてい気をとられたり忘れたりで、休息状態の自分、すなわち赤毛とソバカスの白肌少年に戻っていってしまう。この“才能”は、〈黒の軍団（シュヴァルツコマンド）〉

霊。

13　意識を伴わずに文章や絵画作品などを生みだしたり、自分の知らない外国語をしゃべり出す異能者。

14　ＢＢＣラジオは戦時中、兵士の娯楽向けに九つの番組を、戦用周波数帯から流していた。

15　「自動染色症」などと訳すことができる。

16　フェニルアラニンはチロシンに変化する酵素。チロシンは皮膚細胞の基底部のメラノサイトでメラニンが生成されるときの元になる物質（アミノ酸の一種）。

を撮影中のゲルハルト・フォン・ゲール監督にとってありがたいことこの上なかった。ギャヴィンを「可変反射板」として使えば、メークや照明の調整にかかっていた幾時間もが節約される。どうしてそんなことが可能なのか、最良の説明はロッロの理論だが、それも雲をつかむような話である――皮膚にあってメラニンを形成する細胞「メラノサイト」は、胚成長の初期にあっては中枢神経系（CNS）の一部をなしていたが、胚が成長し組織が分化するにつれて神経細胞の一部はCNSから分断され、それが皮膚へ移行してメラノサイトとなる。したがってそれはツリー構造、つまり神経細胞の図に見られる軸索と樹状突起による分枝の構造を保持しており、ここを電気信号に代わって皮膚の色素が通っていく。ここでロッロ・グロースト は考えた。メラノサイトの細胞の中に発生の遠い記憶が残っていて、これがレトロ－コロニアル[*17]に働いているのではないか。つまり未知のリンクを通って、おそらくトレフォイル本人も意識しないまま、脳内メトロポリスからの指令を受けているという可能性はないだろうかと。「太古から続く秘密の陰謀です」――ロッロは自説をこんな話にまとめ上げて、故郷ランカシャーに住む兄に書き送る（幼いころ「緑の歯のジェニー」[*18]の話でさんざ怖がらせた兄への、念の入った復讐である）。「われわれの認識など到底及ばないレベルで展開されているドラマの一部。人間の身体を調べても、謎のドラマのかすかな暗示しか見ることができない。われわれに測定可能な身体などは、劇場近くの路上に丸めて捨ててあるプログラムのようなものでしょう。その壮麗な石造りの劇場には入れない。ドラマを綴る複雑怪奇な言語がわれわれをその偉大な舞台に寄せつけないのです。タイロン・ガスリー演出の暗黒演劇[*19]さえ足元にも及ばない暗黒のシアター。…金のメッキ、鏡、赤いビロード、何重にも積み上がったボックス席、そのすべてを包む影、舞台にはわれわ

17 ここではCNS―メラノサイトの関係が、白人支配者―有色人種の類比によって語られる。「レトロ－コロニアル」とは、植民地の独立以後も、過去に退行して中央（宗主国／シティ）の支配や指示を受ける状況。

18 主にランカシャーの子供たちの間で継承された沼の精霊または小悪霊。体に藻や水草を生や

れのあずかり知らない深遠な幾何学による深い深い奥行きがあって、たくさんの声が、人知を超えた秘密をしゃべっているんです…」

——CNSからくる情報は、すべてここにファイルしておくのよ。そのうち退屈でやりきれなくなるわよ。こんなもの、だいたいが役に立たないんだから。それでいて、たまにひょっこり指令がくるのよね。真夜中でも、最悪の紫外線砲撃のさ中でも。[20] それでいて、たまにそんなこと、アチラさんの知ったことじゃないんでしょ。

——あのう、外出は、ちょくちょくあるんですか…その、〈外界レベル〉まで？（長いポーズ。相手の顔を直視する先輩作業員、最初は面白いことを言うわねという顔をしていたが、しだいに憐れみと懸念の表情に変わっていく——若い方が言葉をつぐ）あ、ごめんなさい。いけないことを言っちゃったかな——

——（だしぬけに）どうせ伝えなくちゃいけないことだし、これも申し渡し事項のひとつだから。

——伝えるって何を？

——あたしもむかし言われたの。世代から世代へ伝えていかなくちゃいけないんです。（何か逃げ口上を探すが見つからないといったようす。彼女自身、まだこの伝達の仕事に慣れていないようすが伝わってくる。品位を保って、努めて静かにしゃべろうとするが、「やさしく」とはいかないようだ）。わたしたちはみんな〈外界レベル〉へ行くんです。いますぐ行ってしまう人もいれば、まだしばらくお呼びのかからない人もいるけど、遅かれ早かれ、この世界の者はみんな必ず〈表皮〉へと行きつくことになるのよ。例外なしに。

——必ず…

した姿で水面下に潜んでいて、子供が近づくと沼に引き入れる。

19 ロンドンのオールド・ヴィック・シアターで演じられていた暗黒のステージを特徴とするシェイクスピア悲劇。

20 次のドラマは、若いメラノサイトと先輩の会話。ここではCNS（中枢神経系＝精神界）から落とされて外皮になり剝離していく細胞の一生が、宗教的な意味での破滅の過程と重なり合っている。

CamScannerでスキャン

——そうです。
——でも、あの……ぼくは〈外界〉ってところがただの「層(レベル)」だと聞いたもんで、訪ねていけるところかと思ってたんだけど……そうじゃないのか。
——不思議な異世界が〈外〉にあると思ってたのね、うん、あたしもそうだったわ——見たこともない造形、きらめく〈外の光輝〉[21]、一度でいいから見てみたいって。でもね、そこは元はといえばぜんぶ私たちなの。この身に生まれたからには、いずれはインターフェイスとなって角化する、完全に無感覚、音ひとつしない。
——オー・ゴッド！（しばしポーズ、いわれた事態をなんとか飲み込もうとするが——パニックを起こして拒絶する）うそだ——そんなことがあるはずない——あなたは想い出(メモリー)を感じることがないんですか。後ろ髪を引かれるような故郷への思いが……ぼくたちは国をあとにしてきた亡命者なんです。帰るべきホームがある！（相手は沈黙したまま）回れ右だ！ インターフェイスへ上るのやめ！ CNSへ戻ろう！
——（おだやかに）そう考える人、多かったわ。堕ちた閃光(スパーク)、〈創造〉で破壊された容器(ヴェッセル)[22]の破片、いつか終末の前に家(ホーム)に召される時が来るとか、最後の最後に王国の使者が現れるとか。でもね、いいこと、そんなメッセージはこないの、召還されるホームもない——あるのはただ無数の最後の瞬間だけ……最後の瞬間(ラスト・モーメンツ)の積み重なりが私たちの歴史なのよ。
彼女[23]が横切る。複雑で濃密なその部屋にはしなやかな獣皮、レモンで磨いたチーク材、うなるように立ちのぼる香の煙、きらめく光学器械、金と紅の色の褪せた中央アジアの絨毯、吊り下げられた錬鉄の肋(あばら)。そのとても長い舞台の上を手前に進む、オレンジを一房一

21 原文は、the Outer Radiance。

22 ユダヤ教神秘主義で、身体的存在は、本来的に聖なる光を運ぶためのヴェッセル（容器）なのだが、これが破壊される瞬間が訪れ、その後、あらゆる存在は損傷だらけの世界をさまよい、完全だった過去へ向けて贖われなくてはならない。ちなみに最悪の損傷を受けた容器が「クリフォト」（338ページなど）である（『GRC』）。

23 ノラ・ドズスン＝トラック。カッチェが戦場での諜報において男たちを操るのと似たはたら

房酸っぱそうに食べながら。流麗なファイユ地のガウンの、思いきり広く仕立てた肩幅の両端から下がる複雑な仕立ての袖は、長いボタンの列が閉じる袖口に向かってギャザーをなして絞りこまれる。その全体が名状しがたい土（アース）のトーン──生け垣の緑と粘土の茶色に、酸化（サビ）の気配とわずかばかりの秋の息吹だ。フィロデンドロンの茎と多指の葉をつかんだまま最後のひと伸びをして消えていく太陽光線、差しこむ街灯の光が葉の間を抜けて靴の甲に落ち、その彫金のバックルを黄色い静寂で染め、パテントシューズの側面と高いヒールに光の縞を走らせる。完璧に磨かれた彼女の靴に柔らかな蜜柑色の光が当たるところはまるで無色に見え、ふれようとする光をスルリ拒むところはまるでマゾヒストのキスのよう。踏みしめられた絨毯の毛が天井に向かって緊張をほぐし、ウールの毛並から靴とヒールの跡形が消えていくさまがありありと見える。ロケットの爆音が一度、ロンドン市街を横切って、遠く東方から届いた。東南東の方向だ。靴面の光が、昼下がりの車流（トラフィック）のように流れて停まる。彼女の足も。何か思いだしたのだ──震える軍服のフロックコート、絹の衣に密に織りこまれた何千本もの横糸の揺れ、無防備なふたりの背中にゆらゆらと這う光。ジャコウやビャクダンの香り、革とこぼれたウィスキーの匂いが、部屋に濃厚に立ちこめている。

彼は[*24]トランス状態にあるのか、無反応だ。彼女の美しさが自分を包もうと離れていこうと、それは相手の望むまま。自分はおとなしく受身であって、沈黙を充たす、それ以上ではありえない。この部屋の行動半径はすべてノラが支配する。いま踵を返して回転した。その円と接線をなして、乾いた音とともに濡れたセロファンの光が、ノラが後退する瞬間にこちらへ差しこむ。もうほとんど十年になるのか、彼女を愛して。信じがたいことだ。

きを、ノラは霊界との通信においてなしているのか。

24 キャロル・イヴェンター。

「立派な弱さ」を見ぬくプロである彼女を動かしているのは愛欲ではなく、淡い期待ですらない。それは虚空。すべての人間的希望が拭い去られた虚空。彼女は恐怖を催させる。誰だったか、彼女をエロティック・ニヒリストと呼んだ者がいた……チェリコークも、ポール・ドゥ・ラ・ニュイさえも、きっと若いトレフォイルもだろう、マーガレット・クォータートーンもだという噂もある、みんなこうやって〈ゼロ〉のイデオロギーに使われて……結果的にノラの大いなる拒絶の威厳を高めている。というのも……仮に彼女が自分を愛していたとしたらどうか。彼女が過去に発した言葉のすべてに、過去十年一緒にいた部屋と交わした会話に何かしらの意味があり……自分を愛しているにもかかわらずなおかつ自分を拒絶するのなら——自分の特異な才を5対2のオッズですら信じてくれず、自分の全細胞に行き渡っているものを否定するなら……それは……

仮に彼女が自分を愛していたとしたら。彼はあまりに受け身であって、チェリコーク[25]のように探りを入れる度胸がない。……もちろんチェリコークは変人だ。すぐに笑いこける。ただ笑うのではなく、自分に見えているものが他人にも見えていると思い込んで、そのおかしさを笑っているのだ。みんなして深刻なニュース映画を見ている、乳白色の映写光が、パイプ、両切り葉巻、アブデュラやウッドバイン[26]から立ち上る煙によって深みを増す、その雲の縁に軍人と連れの女性の照らされた横顔がある。ギャリソン・キャップの凛々しいクレープがキリッと尖って画面の暗がりに刺さっていきそう、絹の光沢で丸く包んだ足先は内向きに曲げて前列の椅子の間の隙間に置かれ、ビロードの縁なし帽の鋭利な影の下には羽根のような睫毛が伸びる——今宵また息を潜めて欲情する男女の間に、チェリコークの笑いが炸裂し、誰とも共有できない寂しさにひび割れ、逆にけたたましくなり、その割

25　『メイスン&ディクスン』には、この男の祖先であるウィックス・チェリコーク牧師が語り手として登場する。

26　どちらも代表的な英国の両切りシガレットの銘柄。

れ目からゴムの樹液をにじませる、まるで不安定な合成樹脂でできたマック[27]のような笑い。……ノラのいわゆる「立派な弱虫さん」たちの中で唯ひとり敢然と彼女の虚空に入っていけるのがチェリコークだ。ハートを探し、その拍動リズムをみずから呼び出そうとする。ハートレスなノラもきっとドギマギだろう。跪いたチェリコークが彼女の衣をうごめかせる。掌の間に彼女のどんな過去が渦巻き流れるのか――ライム、アクアマリン、ラベンダー、さまざまな色のスカーフにまつわる渦流。ピンとブローチ、トリスケリオン[28]をかたどる金の台座に埋めこんだオパールの蠍（蠍は彼女の誕生宮だ）、靴の留め金具、壊れた真珠張りの扇と劇場のプログラム、黒く長い（節約が必要なかった時代の）ストッキング――どれもみな霊気の渦となる……ひざまずいた慣れない恰好で、両の手が行きつ戻りつ、物たちの流れの中に今にも失われてしまいそうな頼りない分子の軌跡を感じ、彼女の過去を探りだす。すると、それを彼女が否認する、それが彼女の悦楽。だから事実を言い当てられても（かすめる言葉も、ど真ん中を射ぬく言葉も）シラをきって切りぬける、まるで上流社会の風俗劇のように……

チェリコークは危険なゲームを敢行している。自分を焼き切ってしまいそうなほど多量の情報が指を伝わって入りこんでくる……ノラは彼を圧倒しようと、過去の物語とその苦痛とを全開にしてきたようだ。そのエッジは、いつも砥石で研ぎたての刃のように鋭利であって、彼の望みを、ふたりのあらゆる望みに切りかかる。ノラに対しては敬服している。彼女のしぐさに「女の芝居っ気」などない。実際彼女は、その顔を〈外の光輝〉に向けたのだ。一度だけのことではない。そこに無を見いだすたびに、自分の内にゼロを抱えこんできた。それは彼女の中で勇気となった――悪く言うなら、自己誘導したとも取れるが、

27 ゴム引きの防水外套、マッキントッシュの略称。

28 三つ巴、または三つ脚のパターン。ノラの衣服に見られる「土」「金」「錆」のイメージや、ここで描かれる装身具も、冒頭のパラグラフに出てきたペンタクルやディアデムと同様、古代的なイメージがある。

そういう部分は限りなく少ない。果敢さを賞賛すべきだ。ただ、彼女のガラスの荒涼――怒りの日[*29]へではなく最終的(ファイナル)な冷淡さへと訴える点――は許容できない。…チェリコークが自分に関する真実として知っていることを彼女が許容しないのと、それは同じか。だが自分は、発散してくるもの、印象を刻むものはそのまま受け入れている…石の内なる叫びだって…一枚の古シャツの肩貼(ヨーク)に接吻のあとが不可視のステッチとなって縫いこまれているのも感じるし…裏切って秘密を漏らした罪悪感が咽頭癌に病変して、それがぼろぼろのイタリア製手袋の指の間から日光のようなチャイムを鳴らしているのも感じられる…「殲滅請負人(バッシャー)」聖ブレーズの見た天使もだ。指定の場所を何マイルも超えてあの棕櫚(パーム)の主日(サンデー)[*30]、リューベック上空に立ちあがった。天使の足下には毒々しい緑青色のドーム、爆撃機が機体を傾け降下するたびに、千のトンガリ屋根から舞い上がっては舞い落ちる赤煉瓦。それらが執拗に空中を交差しつづける流れ。もうもうと立ち上る火煙がバルト海を遮蔽する。ここに天使がいた。翼の後端から氷の結晶が音を立てて飛び去り、徐々に開いて新たな白い深淵をつくるところに。…沈黙していた無線機が三十秒だけ割れるような音で鳴った。交信内容――

聖ブレーズ：フリークショー・ツー、あれを見たか、どうぞ。

ウィングマン：こちらフリークショー・ツー――見ました。

聖ブレーズ：よし。

任務に同行した他の者が、無線通信を行った形跡はない。爆撃の後、聖ブレーズは基地に戻った攻撃隊員の装置を点検したが異常はなかった。鉱石検波器はすべて設定された周波数にあり、電源の供給にもまったく欠けるところはなかった――だが、飛行中に起こっ

29 最後の審判における裁きの日。

30 復活祭の直前の日曜日。282ページ註12参照。

31 オランダ系アメリ

た異様な「顕現（ヴィジテーション）」を覚えていた者たちもいた。ほんの短い間だったが、ヘッドフォンの中の騒音がピタリと止んだと。高音の歌声を聞いた者もいたかもしれない。ドックヤードに停泊する冬の艦隊の帆（マスト）や横静策（シュラウド）やベッドスプリングやパラボラアンテナの間を吹き抜ける風が歌うかのような……しかしそれを目撃したのはパッシャーとお供のパイロットの二名だけだった。リューベックの街全体が何リーグにもわたって燃えさかる中に顔があり、眼があった。それは何マイルも伸び上がり、向きを変え二機を追い回した。天使の眼の虹彩は、残り火のような赤から次第に黄色へそして白へと変色。そいつを目がけて爆撃機は抱えた爆弾すべてをとにかく落としまくった。できそこないのノルデン照準器め[31]。ぐるぐる回る接眼レンズのまわりから汗が空中に飛び散る。こんな高度まで来てしまった。地を爆撃するつもりが天を撃っている。

聖ブレーズ空軍大佐は公式の事情聴取の席上で、天使のことを証言しなかった。彼を尋問したWAAF[32]の女性将校が最悪の堅物で、基地周辺では逐語解釈の鬼として有名だったせいもある。ペーネミュンデにかかった虹の橋[33]をのぼっていくヴァルキューレ[34]を見たというプロウィットも、自分の操縦するタイフーン戦闘機[35]の翼から鮮やかなブルーの小鬼（グレムリン）が蜘蛛のように散ってハーグの森まで同じブルーのパラシュートで降下していったと報告したクリーファムも、彼女は精神科へ送りこんでいる。だが真実は真実だ。あれは雲などではない。リューベックの爆撃から、その復讐を誓ったヒトラーが「報復的性格を有する恐怖の攻撃」――Vの頭文字をもつ兵器のことだ[36]――を宣言する二週間の間に〈天使〉のうわさは広まりをみせた。空軍大佐自身は嫌がっていたようだが、爆撃に携行したいくつかの物品がチェリコークの霊的パワーにさらされ、かくして〈天使〉がヴェールをぬいだので

カ人カール・ノルデンが開発した、爆撃の照準を定める装置。

32　空軍婦人補助部隊。

33　原文でrainbowの語はここが初出。ペーネミュンデでは実験用V2ロケットの打ち上げに成功したのは同じ一九四二年のこと。

34　主神「戦争と死の神」ヴォータンに仕えて死や勝敗を定め、死んだ勇士を戦場からヴァルハラへ迎え入れる複数の女性的存在。

35　強力なエンジンを搭載した英空軍の一人乗りの戦闘機。

36　V1、V2のVは、ドイツ語で「報復兵器」Vergeltungswaffeの略。

ある。

次はキャロル・イヴェンターが、聖ブレーズのウィングマン、テレンス・オーバーペイビーへの接近を試みた。空一面のメッサーシュミット機に逃げ場を失った霊。届く情報はしかし混濁している。ペーター・ザクサが暗に言うには、該当する〈天使〉には多くのヴァージョンがあるらしく、オーバーペイビーの天使とはなかなか易々とはつながらない。階位（レベル）の問題も絡むし、[37] タロット的な意味での審判（ジャッジメント）の問題もからんでいる。[38] ・・・これもまた、死の壁を挟んだ両サイドを吹き抜けるストームの一部。なんともやりきれない。こちら側ではイヴェンターがだまされたような、やや憤慨した気持になっている。むこう側ではペーター・ザクサが柄にもなく、生前の時代へのノスタルジアを募らせ、ヴァイマル時代[39]の安らかな飽食と頽廃の日々を回顧する。一九三〇年、ノイケルン[40]でのデモで浴びた警棒によって生死のアチラ側へ追いやられたペーターがいま感傷の中に思い浮かべる——よく擦られたダークな木製ウィジャ盤とシガーの煙の晩。ご婦人たちを飾る翡翠彫り、パン[41]の衣、ダマスクローズの香。壁にかかった最新流行の角々しいパステル画、テーブルの多数の小さな引き出しに入った最新の薬物。集まった人びとはきわめて多様だ。ただの「サークル（クライス）」に留まらない。ほとんどの晩に社会のマンダラの華が十全に開く。あらゆる層の人たちが、首都ベルリンのあらゆる区画からやってきて、有名な血の合板の上に手のひらを置き、小指の先だけをふれ合わせる。ザクサを待つ盤は森の深い池のよう、その水面下で物事が回り、滑り、無音のまま立ち上る。・・・ヴァルター・アッシェ（"雄牛（タウルス）"）にある晩とんでもないのが憑いて、連れ戻すのに「ヒエロボン」[42]（二五〇ミリグラム）を三錠飲ませた、が、まだ眠ろうとしない、みんな体操のフォーメーションのように不規則に

37 天使は「熾（し）天使セラフ」を最高位に九つの階級に分かれる。

38 ピンチョンが依拠するライダー版のタロット・カードで「審判」は、両手を挙げて見上げる裸体の人びとの上に、ラッパを吹く天使の図像が描かれる。

39 一九一九〜一九三三。共和国憲法制定からヒトラー政権への全権委任法の成立まで。

40 ベルリン南東部の、ボヘミア等からの移民が多かった区域。

41 艶のあるビロード地。

42 「神聖な」を意味する hieros を接頭辞にした、架空のドラッグ。

並んで見ているのがIG（イーゲー）ファルベンの男ヴィンペ、その視線の先には、市民として参謀本部にかかわるザーグナー、ザーグナーの両脇に最近南西アフリカから戻ってきたヴァイスマン中尉と彼が連れてきたヘレロ族の副官[43]、見つめている、みんなを、まわりのすべてを…背後の人だかりを衣ずれの音を立てながら縫いすすむ婦人たちのセクイン地のまぶしさ、きらめくストッキング、白黒のメーク、上品そうに鼻にかけた驚きの発声、目がカッと見開いて、オウ。…ヴァルター・アッシェを見る顔はどれも人形芝居のよう、それぞれが別個のルーティンをこなしている。

…手がいい具合だダラリとして手首から上の筋肉をゆるめて呼吸を楽に圧力を抜いて…

…同じ…同じ…鏡の中のわたしの白い顔三時三時半四時　時が進むカチカチ刻む部屋だめです入れません灯りが足りないだめだ　あああ——

…芝居だ決まってるヴァルターだ頭を見ろアングルがインチキだ光をほしがっている充分なフィルライトの投光イエローのゼラチン…

（空気式のゴム蛙が蓮の葉の上に跳びのり震えている。水面下に恐怖が…いまさら捕獲される…だが今はまだ浮かんでいる、引き戻そうとするものの頭上に…彼の目を読むことはできない…）

… mba rara m'eroto ondyoze . . . mbe mu munine m'oruroto ayo u n'omuinyo[44] . . .

（さらに奥には糸や紐が縺れている、巨大な網、深夜に何かに飛びかかられ格闘した、毛皮がつかまれ、筋肉が捻られる…死者の霊がたずねてきた感覚もあった、親しく思えたがそうではなく、あとで嫌気が沸いた…目覚めて叫び、まわりの人に訳をたずねるが納

43　この時はまだ中尉のヴァイスマンは、カッチェの回想を通して登場したブリツェロ大尉のこと。副官とはエンツィアンのこと。

44　アルファベットで書き取られたヘレロ語。意味は「私は悪夢を見た……私は夢の中で、まるで生きているような彼を見た」（『GRC』）。

CamScannerでスキャン

得のいく返答は得られなかった。死者は自分に話しかけた。一緒にすわって彼のミルクを飲み、先祖の話をし、ヴェルト[45]のそちこちに住む霊たちの話をした——死者の側では時間も空間も何の意味もない、すべてがみな共にあるのだ)。

「社会という研究対象にもいろいろあって」エドウィン・トリークルの髪はクシャクシャに立っている。火を点けたパイプの中身は惨めにも、わずかなシケモクに落ち葉と糸屑を混ぜたものだ。「まだ研究が始まってもいない分野もある。たとえば、われわれ自身が関わっている社会についてはどうだろう。ここの心霊セクション、SPR[46]、デビルを呼び出そうとしているオルトリンガム[47]のご婦人連、それはみんなわれわれの側だろ。それだけじゃ、ソサエティ全体の半分だ」

「〝われわれ〟って、一緒にしてほしくないね」きょうのロジャー・メキシコはいろいろなことで気が散りっぱなしだ。カイ二乗分布の計算がどうしても合わない[48]、教科書はなくなる、ジェシカはいない……

「アチラ側へ逝ってしまった人たちも含めて考えるんでなけりゃ意味がない。われわれとかかわっているわけだからね——イヴェンターみたいな専門家や、彼らをコントロールする霊たちのお世話になって。その全体がひとつのサブカルチャーを構成しているわけだ——お好みならサイキック・コミュニティと呼んでもいい」

「おれの好みじゃないけど」メキシコはドライに言い放つ、「そのコミュニティを調査する人間がいていいと思うよ」

「世界には、このヘレロ族の男のように、御先祖様と日々通じ合っている民族もいるわけだよ。死者だからといって生者よりリアルでないということはなくてさ。彼らのことを理

45 アフリカ南部の、ところどころ低木のある平原。

46 176ページ註**15**。

47 マンチェスター郊外にある歴史の古い市場町。

48 ロケット落下の確率計算がランダムな標準型に収まらないのか。

解しようとしたら、死の壁の両側に対して、同じ科学的アプローチで臨まないとだめだろう」

だがイヴェンターにしてみれば、トリークルの頭の中に理念として存在する社会的相互作用など関係ないのだ。アチラのことは記憶にも残らない。パーソナル・レコードはゼロであって、他人のメモを読むか、ディスクに耳を傾けるかしないかぎり何もわからない。つまり他人を信じるしかない――これは社会関係としてきわめて複雑だ。人からそう見なされる自分と自分自身との間に、他人が作るインターフェイスがあって、そこで役を演じる人たちが、どれほど人間的にまっとうであるかということに彼の人生の大きな部分がかかっている。霊界にいるザクサと、とても近い関係にあることは知っているが、それを記憶しているわけではないし、おまけに西ヨーロッパのキリスト教徒に育った自分は、「意識的な」自己と記憶の優位を信じて、それ以外は異常な、とるに足らないものと見なす性癖から抜けられない、これは辛い・・・

書きとられた記録はペーター・ザクサが接する諸々の魂についてのドキュメントでもあるが、同時に彼自身についてのドキュメントでもある。そこからはペーターがいかにレニ・ペクラーとの愛に執心していたか読みとれる。レニはある若きケミカル・エンジニアの妻だったが、ドイツ共産党の活動家として第十二地区で活躍しながら、ザクサの配属先にも通っていた。彼女がやってくるたび、ザクサは囚われの身にあるレニをまざまざと見せられて泣きたくなった。レニの潤んだ目には、それでも捨てられない結婚生活への、あきらかな憎悪が宿っていた。夫は愛せないし、子供をすんなり愛せない罪悪感からも抜けだせない。

CamScannerでスキャン

夫のフランツは軍の兵器との関わりがあったが、どんな関わりなのか、あまりに漠然としていてザクサには接近のすべがなかった。おまけにイデオロギー上の障壁もあって、それを乗り越えるだけのエネルギーは、ふたりとも持ちあわせていなかった。レニは街頭活動に出かける毎日で、フランツは、家に集まった婦人たちが、はやく出勤してくれないかと苛ついているのを感じてはそそくさと一杯の紅茶を飲みほし、ライニッケンドルフのロケットの研究施設[49]へ出勤する。彼女たちは早朝から集まってくる、パンフレットの束をかかえ、ナップザックを本と左翼系の新聞でいっぱいにして、夜明けのベルリンのスラムの中庭をこっそり抜けて……

49　ロケット開発の中心は、ベルリン市内から北西に数マイル行ったこの地から、市の南東のクマースドルフへ、さらに一九三七年に北海沿岸のペーネミュンデに移行する。

□□□□□□□

からだが震える。おなかが空いた。学生寮は暖房がなく、明かりもわずか。ゴキブリが百万匹。キャベツの匂い、第二帝国時代の[1]、祖母たちのキャベツの匂い、ラードの煙とそれを押し流そうとする空気との長年の相克がデタントに到達して醸しだす匂い、長い闘病の、死の床の匂い。崩れかけた壁にそれらの匂いが渦巻いている。上階の下水の漏れが一枚の壁に黄色くしみ出ている。レニは四、五人の仲間と床に腰を下ろし、黒いパンの塊を回す。誰も読まない『ディー・ファウスト・ホッホ』[2]の湿ったバックナンバーに囲まれた部屋で娘のイルゼが眠っているが、寝息はあまりに浅く、見た目では息をしているのかどうかもわからない。そのふっくらしたほほに睫毛の影が長く伸びる。

今回は帰らぬ覚悟で家を出た。ここにはあと一、二日居させてもらえるとして……その先、当てはない。……母と子と旅行鞄がひとつ。レニは蟹座だ[3]、蟹の母がホームのすべてを一個の鞄に詰めて生きる、その意味が彼にわかるだろうか？ 手持ちの金は数マルク。フランツには月ロケットとのお遊びを残してきた。これでほんとに終わった。

頭の中で繰り返し夢想していた家出は、ペーター・ザクサのところへ直行するというも

1 一八七一〜一九一八。ビスマルクの台頭からヴァイマル共和国の成立まで。

2 *Die Faust Hoch* は「突きあげた拳」。いかにも左翼系のジャーナル名。

3 「水の星座」として蟹座の人間は、繊細で情に深いが、所有と過去への執着は強いとされる。

のだった。そのまま一緒に暮らすというのは無理でも、職探しの力にはなってくれるだろう。でも本当にフランツと切れてしまったいま・・・ペーターはときどき陸生生物の星座特有のいやらしい、激しい気性を見せることがある。・・・近ごろはムラ気で当てにならない。かなり上層部から指示を受けているせいか、プレッシャーをやり過ごせずにいる感じ・・・

でも、たとえペーターが子供のように激怒しても、魚座の夫との穏やかすぎる晩よりはましだ。あの人は空想の海を、死の願望とロケット神秘主義の海を、一人静かに泳ぎ回るだけ。そういうタイプは彼らにとって都合がいい。その性格が使いやすいことを知っている。彼らはほとんどの人間の使い方を知っている。使えない人間はどうされてしまうのか？

ルディ、ヴァーニャ、レベッカが揃った。これでベルリンの暮らしの一片が描ける。ウーファ[*4]映画の傑作が作れるかも。『ラ・ボエーム』[*5]に出てくるみたいな学生がひとり、スラヴ人がひとり、ユダヤ女もひとり。見てよ、まるで〈革命〉を地でいくみたいなトリオ。もちろん〈革命〉は起こらない。映画のなかでも。ドイツ版『十月』[*6]なんて存在しないのだ、この“共和国”には。〈革命〉は死んだ。まだレニが政治的な考えを抱くには幼すぎたころ、ローザ・ルクセンブルクとともに死んだ。[*7] いまとなっては、亡命先で潜行している革命に期待を寄せるくらいしかない。火種を絶やさず、ヴァイマル時代の寒々とした辺境で生きつづけて、機をうかがう。ルクセンブルクに生まれかわりを待つ・・・

恋人たちの軍隊も不敗ならず。[*8]“アカい地区”の壁に夜の間、こんな落書きが現れる。どれひとつ、誰が書いたのか、作者も描き手もわからないので、どれも同一人物の仕事だという気になる。民衆意識というものを信じる気持がわいてくる。これらはスローガンと

4 第一次大戦中、ドイツが国家的イメージ戦略の一環として既存企業の合併によって作った映画製作会社。サイレント時代の芸術映画を多数生みだしながら、しだいにナチスの体制下に組みこまれていく。

5 アンリ・ミュルジュールの戯曲および小説『ボヘミアン生活の情景』

いうよりテクストなのだ。それについて人びとが考えるために、拡張し、行動へと翻訳するために掲げられる……

「その通りよ」とヴァーニャ、「資本主義の下でどんな表現形態がはびこるか見てごらんなさい。ポルノグラフィーばかり。愛も――エロティックな愛、キリスト的な愛、犬と少年の愛――すべてポルノ化されてしまう。日没のポルノ、殺しのポルノ、推理のポルノ――ああそこか、と殺人犯がわかったときの気持ちよさ――小説から映画から歌から、よってたかって人びとの気持をなだめてくれる。程度の違いはあってもみんな絶対的な慰み（アブソリュート・コンフォート）の極致をめざしている点は同じよ」ポーズをついてルディがすばやく苦みの利いた冷笑を差しはさむ。「自家製オルガスムスか」

「〝絶対的〟?」レベッカがむきだしの膝でいざってきて彼にパンを渡す。湿けたパンは、レベッカの噛じった跡が濡れてとろけている。「それならふたり必要でしょ――」

「ふたりでという考えにみんななびくんだ」ルディの口元はニヤリとまでは開かない。注視するレニの視界を男性優位主義という言葉が、悲しげに横切った（これは前にもあったこと）……男たちはどうしてマスターベーションなどを後生大事に抱えているんだろう?

「自然界ではほとんど見られないことだがね、たいていは孤独に射出する、それはきみも知ってるよね」

「私が知ってるのは一緒にいくこと」とだけ言いかえす。彼と愛しあったことなどないのに、彼を非難するかのような口ぶりで。だがルディは顔をそむける。まるで相手の信条告白に困惑して二の句がつげなくなったかのように。

ひとりでいくことならレニだってベテランだ。空虚に過ぎたフランツとの愛の生活。な

の物語にもとづく、プッチーニのオペラ。一八九六年初演。

6 十月革命を描いたセルゲイ・エイゼンシュテイン監督によるロシア映画（一九二七年製作）。

7 ドイツ革命による第二帝政の崩壊後、盟友カール・リープクネヒトとドイツ共産党を結成。一九一九年、呼応する労働者や兵士と「一月蜂起」を起こした、反共産の義勇軍によって虐殺された。

8 プラトンの『饗宴』におけるパイドロスの議論「恋人たち（＝同性愛者）の軍隊は不敗なり」のもじり。

んでも受身の役だから、最初はオルガスムスまで達しなかった。そのうち彼の受身がもたらす自由を好きに埋めることを覚え、それからは慰安が増した。ふたりの間に（やがては別の男たちとの間にも）愛が満ちていると空想するのだ——ただし孤独は深まるだけだった。だからといって、そのままどんどんシワが増えていってはくれないし、唇から弾力が抜けていくわけでもない。鏡を覗けば白昼夢に耽る子供の顔があった。自分で見ても驚くほどだ。ポッチャリした、ぼんやりした、弱さ丸出しの表情。こんなのを見たら男たちはレニのことを「他人（ひと）を頼る女の子」だと思うだろう——ペーター・ザクサでさえそんな目つきを見せたことがあった。そして、その女の子が夢みることは、今も変わらない——隣りでフランツが暗い苦痛願望を夢にして呻いているときに見ていたのと同じ夢だ。優しさの、光の、ハートから罪を洗い流される夢。もう逃亡も揉み合いも必要ない穏やかな自分の前に優しくたくましい男が現れ、街頭デモを遠い記憶に追いやってくれる——そんな夢に、いまこの場所で浸るわけにはいかない、絶対に。今は別の自分を装う時。イルゼもこのごろレニの顔をよく見ている。あの子だけは権力（かれら）に使わせない。

　レベッカがヴァーニャとの議論に愛の戯れを混ぜてくる。相手のなまめかしいしぐさをヴァーニャは知的なやりとりの中に枠づけようとするけれども、ユダヤ女のレベッカは肉体の伝達に固執する…なんて官能的な——太腿の内側の、膝のすぐ上のところがオイルのように滑らかで、筋肉はすべて堅く締まり、表情も真剣そのもの、ユダヤの鼻面（ユーダンシュナウゼ）から押しだされる偽りの吐息と厚ぼったい唇から押し出される眩しい舌先…どんな感じだろう、この女にベッドに連れこまれたら。ふつうの女とではなくユダヤの女とするのは。…彼女の動物的暗黒…汗ばんだ尻が荒々しく彼女の顔に押しかぶさる、ふたつの半球の割れ

目に沿ったヘアと細い三日月状の暗がり・・・肩越しに振りかえる野卑な悦びの顔・・・それはいきなりだった、ちょっとだけ入り込んだ壁の黄ばんだ部屋で、クスリでニンマリした男子の顔が廊下をうろついているところで・・・「ダメ痛いから、そっとおねがいね、激しくしてほしいときはそう言うから・・・」 レニの肌は白く表情は清廉、ユダヤ女の浅黒い肌、荒々しい行為とは好対照のデリケートな骨格と肌。股からお腹にかけて骨盤が蜘蛛の巣を拡げる。レニはひとりだ―― スライドし、うめき、あえぐ・・・ほら、同時にいったでしょ・・・目覚めると赤ん坊のように眠りに落ちたのか、もうどこか次の部屋へ出かけてる――どの瞬間にこんな経験したことはなかった。・・・指先で髪を梳いて叩き、そんなしぐさにベッドを共にした相手への気持ちをにじませながら浴場へ歩いていく。注がれる視線にかまわず裸になって、体温のぬくもりに、いつもながらのお湯の香りに包まれる。・・・とそのとき見えたのだった、ざわめきと湯気の立ち上る、ぼやけた視界の向こう、壁の張りだしから見下ろしているあの顔は・・・間違いない、リヒャルト・ヒルシュだ、もう何年になるだろう、マウジッヒ・ストラッセ[9]で彼と・・・あらら、こんな無防備な目を見られてしまった、見たぞと彼の目が言っている・・・

　風呂の中では湯水が跳ね、愛の交わりやらコミックなモノローグやらが続く。みんなリヒャルトの友達だろうか、そうそう、あの蛙足で泳いでいるのはジッギだ、みんな「トロールのジッギ」と呼んでいた、むかしのまま、背も一センチも伸びていない・・・運河沿いの道を一緒に家まで走って帰る途中、世界一固い丸石が敷かれた上で思いっきり蹴つまずいたっけ、そう、目をさますと荷馬車の車輪のスポークに雪が積もって、年老いた馬の鼻

9　訳せば「ネズミ通り」となる架空のストリート。

から白い息が出ていた。…「レニ、レニじゃないか」リヒャルトはオールバックの髪に金色の身体、湯気もうもうの浴場から彼女を抱きあげ、自分の脇にすわらせる。「あなた、こんなところで…」動揺している、言葉に詰まった。「フランスに行ったきり帰ってこなかったって聞いていたけど…」そういって自分の膝を見つめる。「フランス娘さえ僕を引き留めておくことはできなかったのさ」リヒャルトはまだそこにいる。自分の目が覗きこまれるのをレニは感じる。彼のしゃべりはシンプル、生き生きしている、フランス娘ってすごく押しが強いんだぜ、イギリスのマシンガンなんかよりずっとだ——わかる、彼の純粋さに胸が詰まる。こんな彼がフランス女と実際一緒に暮らせるはずはない、フランス娘はいまだに彼の、美しく遠く輝く愛のエージェントなんだ…

レニのいまのようすに、長いやりくり人生の痕は見えない。職になど就いたことがないみたいだ。公園の小道の向こうで見かけたり、焼きパン色（クラスト・ブラウン）の夕陽に染まった路地（ガッセン）をとぼとぼと家に帰る子供のころのレニそのものだ。そのふっくらした顔はうつむきかげんで、金髪の眉毛は不安そう、学校のカバンを背負い、両手をエプロンのポケットに入れて…壁の石の中にはペーストのように白いものも…向こうからリヒャルトが近づいてきたのに気がついただろうか…でも彼は年上でいつも友達と一緒だった…

騒いでいたリヒャルトの仲間たちが静まりかえる。厳かに、すこし恥ずかしそうに幸せなふたりを取り巻いて、「長かったけど、ゴールインおめでとう！」祝福するジッギはこびとの早口だ。爪先立ちしてメイワイン[10]をみんなのグラスに注ぎまわる。レニは髪のスタイルを変え、今より明るくしてもらうために部屋を出る。レベッカがついていく。ふたりの計画について、将来について話すのは初めてだ。リヒャルトの肌にはふれたこともない、

10 夏の到来を祝う「メイデイ」に、ドイツでは定番のワインベースのドリンク。

CamScannerでスキャン

でも恋に落ちた、あのころはそれで当然だった。彼がレニを連れていくのも当然のことと見られていた・・・

ここ数日、次々と到着する、ギムナジウム時代の友だち、外国の珍しい食べ物、ワイン、新しいクスリ。セックスに関してはみんなとっても気楽であけっぴろげだ。服なんか着なくても構わない。お互いの体をさらし合う。乳房が大きかろうと小さかろうと、ペニスの長さがどうであろうと気にしない。・・・みんな美しくリラックスしている。レニが新しい名前を口ずさむ「レニ・ヒルシュ」リヒャルトと朝のカフェで同席しているときもだ。「レニ・ヒルシュ」するとリヒャルトははにかむように笑う。目を背けようとするけれどレニの視線に捕まって引きもどされ、ついにレニの顔を正視して大声で笑いだす。純粋な悦びをこめて。彼の手が伸びる。いとおしい手のひらが彼女の頬を包む・・・

何層も積み上がったバルコニーとテラス。それぞれから、階にわかれた聴衆たちが見下ろしている。腰に緑の葉っぱを巻いた若い娘たちのギャラリー。背の高い常緑樹、芝生と流水と国家的荘厳。大統領の、聞きなれた鼻づまりの声[11]、連邦議会（ブンデスターク）に巨額の戦時予算の承認を求めているとき、突然「やめたやめた（フィクテス）[12]」のフレーズが永遠の生を得て空に轟き、国家全体に響きわたる。ヤー、フィックテス！「兵士はみんな召還だ。兵器工場は閉鎖、すべての武器を海に捨てる。戦争なんてやってられますか。毎朝、きょうも生き延びられるかとビクビクしながら目覚めるなんてこりごりだよ」この男、もう憎めなくなった。突然の大変身で、モラルのある、人民の誰とも同じ、死すべき人間のひとりになった。これから新しい選挙。左翼陣営からは女性候補が立つという。名前は発表されてないけれど、それがローザ・ルクセンブルクだということはみんなの了解事項だ。ほかの候補者はみんな

11 パウル・フォン・ヒンデンブルク（一八四七～一九三四）。一九三二年の大統領選には、ヒトラーの当選を食い止めるために高齢を押して再出馬し勝利したが、まもなくそのヒトラーを首班指名せざるをえなくなる。

12 原文 Fickt es! は、英語の Fuck it. をドイツ語に直訳したもの。

小物で魅力もなく票は取れない。革命だ。革命を大統領が約束した。

　酒場の中はたいへんな歓喜だ。仲間の盛り上がり。真正なよろこび。出来事の弁証法的過程からは生じないだろう、このハートの爆発は。愛がみんなを包んでいる・・・

　恋人たちの軍隊も不敗ならず。

　ルディとヴァーニャは街頭戦術のことで議論になった。どこかで水が滴りおちている。〈街頭〉が勝手に伸びて、どこにいてもつきまとわれる。レニはそれを知って嫌っている。これでは息もつけない・・・見知らぬこの人たちを信じなくてはならない。警察と通じているかもしれないのに。今は信じられても、この先、ストリートが彼らにとって耐えるに辛すぎるところになったら・・・ストリートからイルゼを遠ざけておく方法があったらとは思うのだが、それももはや遅すぎるのだろうか。フランツは――フランツはそもそも街頭には出なかった。いつも何かしらの口実。身の安全を不安がった。闘争の輪の辺にはいつもレザーコートのカメラ男がいて、偶然のフレームにいつ捕えられるかわからないと恐れた。さもなければ、「イルゼをどうする。乱闘になったらどうするんだい」　まったくよ、乱闘にでもなったら、フランツが心配でたまらないわ。

　彼に説明しようとした。デモの渦中ではどういうレベルまで上昇するかを。両足踏みこんで恐怖心をなくしてしまうの、すると全部が消えて、今の瞬間に全存在が浸る、グルーヴの中へ完璧に溶けこむ、メタルのグレイでありながら乳液のように柔らかい世界へ突きぬける。するとみんな、振りつけられた通りの動きを始める。バブーシュカを巻いた子が屈んで石を拾うと真珠色のワンピースから膝小僧がキラリ。黒いスーツと茶色の袖なしセーターを着た男が片腕ずつ警官につかまれながらキッと頭を起こし歯を見せている。こち

らへ曲がってきたデモ隊を身を翻して避けた年長のリベラルが薄汚いベージュのオーバーの襟越しに叫んだ、何をするんだ、あるいは、何を見てる、おれじゃないぞ。その眼鏡一面に冬の空がきらめいている――この一瞬、可能性がうごめく一瞬。

彼女はその説明に、昔習った微積分の知識まで繰りだした。Δtはゼロに近づくわよね。限りなく近づくんでしょ。切りとられる時間はどんどん薄くなって、連続する仕切りの壁がどんどん銀色に、透明になっていって、ゼロの純粋な灯りが近づいてくる[*13]・・・

しかしフランツは首を横に振った。「レニ、そういうのとは違うんだ。関数の極限値を得ることが大事なんであって、Δtというのはそのための便宜上のものにすぎない。リミットに到達できればいいんだ」

ほんの数語で、それも適当に選んだ言葉で、魅惑のすべてを拭いさる。以前から。本能的に。ふたりで映画へ行ったとしても寝てしまう。『ニーベルンゲン』[*14]の上映中もずっと眠りこけていた。アッティラ王が東方から猛然と攻めてきてブルグント一族を一掃するシーンでも目をさまさなかった。映画好きのくせして、いつもコックリを始めてはまた画面に向きなおるというのが彼の映画鑑賞法なのだ。「あなたは原因結果が命なんでしょ」彼女は声を荒らげた。目覚めているときにだけ入ってくるバラバラの断片をどうやってひとつにつなげるの?」

実際フランツは因果関係に執着する男だった。星座のめぐりを信じる彼女に容赦なく口を挟み、何を信じるべきかを諭して、占星術は否定した。「潮位や電波障害は影響を及ぼしうるとしても、それ以外の外的変化が内的変化を生みだすことはありえない」

「生みだすなんて言ってないし」彼女も対抗してはみた、「引き起こすとも言ってないわ。

13 ピンチョンが「微分」を映像化した類例は『競売ナンバー49の叫び』(新潮社)161ページにも。逆に「積分」を視覚化した例としては、本書の572～573ページ参照。

14 第一部「ジークフリート」第二部「クリームヒルトの復讐」合計五時間に近いサイレント作品。中世の叙事詩『ニーベルンゲンの歌』を映像化したヴァイマル時代のウーファ映画の代表作。フリッツ・ラング監督、一九二四年。

CamScannerでスキャン

並存するの。パラレルなの。直列じゃなくて並列。メタファーとも言えるし、きざしや兆候と言ってもいいし、異なる座標へのマッピングっていうの？…よく知らないけど…」知らないなりに、フランツの心に思いを届かせたいと思って。

なのにフランツときたら、「きみのいうようなやり方で設計して、ちゃんと作動するものがあるのかい？」

ふたりは『月世界の女』[15]を見た。フランツは楽しんでいた——子供だましの娯楽として。技術的なことになると口を挟んだ。特殊効果を担当した何人かを個人的に知っていた。レニが見ていたのは飛翔の夢だった。多くの可能性のうちのひとつ。夢の飛行と現実の飛行とは併存する。両方が合わさって同じひとつの動きをつくる。Bの前にAが来るのではなく、全体がひとつなの…

フランツのすることとで、何かひとつでも続いたことがあったろうか。あのユダヤ狼のブフラウムバウムが、運河沿いの自分自身のペンキ工場に火をつけなかったら、フランツは不可能なペンキの開発の仕事にふたりの日々のすべてを注ぎこんでいたかもしれなかった。あのユダヤ人なら模様ペンキとかの開発も命じるだろう。結晶を溶かし、辛抱強く次のを溶かし、細心のケアを重ねて微妙に温度を調節しながら、冷却中のある時点で、無定型の渦の中から突然、縞模様や水玉模様や格子縞、ダビデの星[16]が生まれるのを待つ。ところがある朝早く工場に行ってみたらあたりは黒い焼け焦げだった。ペンキ缶が大音響とともに真っ赤な、そして暗緑色の炎をあげて爆発し、焦げた木やナフサの臭いが立ちこめるなか、ブフラウムバウムは揉み手をしながら嘆いていた。オイオイオイって、保険金が目当てのくせに、卑劣よ、偽善者め。

15 原題 *Die Frau im Mond*。人間の月面到着を描くSFサイレント映画、フリッツ・ラング監督、一九二九年。

16 正三角形を二つ重ねたヘクサグラム。「ダビデの楯」とも呼ばれ、シオニズム（ユダヤ人のパレスチナ帰還運動）のシンボルとなった。イス

それからフランツとレニは、イルゼがお腹の中で日々大きくなっていくあいだ、ずいぶんひもじい思いを強いられた。ありついた仕事はみな雑役で、稼ぎといえるほどの額にもならない。フランツは滅入り、壊れはじめていた。沼地の広がる町外れで、ミュンヘン工科大学時代の旧友と出会ったのは、そんなある夜のことだった。

プロレタリアート[17]の夫として彼は一日、宣伝のビラ貼りをやっていた。マックス・シュレプツィヒのおめでたいファンタジー映画の宣伝ポスター。その間レニは集合住宅の一番奥手のヒンターホフ[18]に面した、家具つきのゴミ箱のような部屋に大きなお腹を横たえ、腰の痛みに耐えかねて寝返りをうっていた。糊を入れたバケツがカラになったのは日没をだいぶ過ぎ、寒さが肌身を刺す時間だった。貼れば破られ、小便がかけられ、鉤十字が落書きされるポスターを、フランツはとにかく貼り終えた。（それは割り当て消化のための映画[19]のポスターだったかもしれない。だから印刷のミスということもありえるが、書いてあった上映日に出かけたところ、映画館に灯りはなく、漆喰の破片がロビーの床に飛びちっていた。館内の奥からものすごい破壊音。劇場を取り壊しているのだが、それにしては作業員の声もないし、中に灯りのついているようすも見えない……呼びかけても、破壊が続くだけ。入口のひさし(マーキー)の奥、館の腹底からギーと大きく軋む音が聞こえるだけ。見上げるとマーキーは真っ白だった……）[20]すでに彼は北方向へ何マイルも歩いて疲れ切っていたが、そこはもう、ライニッケンドルフだった。小さな工場の並ぶ一角。錆びついた屋根と売春宿と掘っ建て小屋、夜闇と廃物に向かって延びる煉瓦の列、修理場の大桶に溜まった古い冷却水を覆う浮きカス。明りはまばらだ。空き屋、空き地の雑草、人気(ひとけ)のない通り。住宅の窓ガラスが連夜割られる地区の石ころだらけの道を通って彼をそこまで連れていったの

ラエル建国後は国旗に描かれている。

17 この架空の男優の名前は第三部で重要になる。

18 ベルリンの古い住宅には、通りからアーチをくぐると中庭（ヒンターホフ）が幾重にも続くつくりのものがある。具体的には下巻80ページで描かれる。

19 当時のドイツは外国映画の攻勢から国内映画を守るため、各映画会社は法令によって一定数の製作と上映を義務づけられた。

20 296ページ註49参照。

CamScannerでスキャン

はきっと風だったのだろう。地方警察署になった昔の軍隊の要塞を過ぎ、バラックと道具置き場を通りぬけると、金網のフェンスがあって、入り口を押すと開いたので中に入った。前方のどこかで物音がしているのが聞こえる。第一次大戦が始まる前の夏休みのことだが、両親に手を引かれてシャフハウゼンに行ったことがあった。ラインの滝まで電車に乗り、階段を降りて、トンガリ屋根のついた小さな木造りの展望台へ出た。一面の雲と虹、燃える水滴。そして滝のとどろき。両手でつながったムッティとパピと三人して、冷たい飛沫(しぶき)の雲に浮かんだ。視界の上部にかろうじて見える——滝の縁にしがみついた木々が、ぬれた緑のシミを拡げていた。下を見れば瀑布がライン河の水面に怒濤となって落ちるすぐそばに小さな観光船の姿があった。しかし今、冬のライニッケンドルフの中で彼はひとり、両手には握りしめるべき何物もなく、霜に固まった泥土の上をつまずきながら、樺や柳の木と一緒に成長した弾薬の山が遠くにうねる中を進んでいくだけ——闇のなか、大地は遠くの丘に向けて上り、沼に向けて下る。中景にはコンクリートの兵舎や土塁が四〇フィートの高さに聳え、その向こうから滝の音がだんだんと大きくなって、記憶の中から彼を呼んだ。時の深みから戻ってきた声の主は、人間たちではなかった。それはエネルギーの、抽象物の、集団だった……

胸壁の隙間から小さな銀色の卵が目に入った。その下から、純粋で揺らぎない炎を噴出し、その光が、掩蓋や塹壕から見つめるスーツやセーターやオーバー姿の人影を照らしていた。それはロケットだった。発射台に乗せての、静止テスト。

音が変わり始めた、ときどきバリッと途切れる。驚嘆の中にあったフランツには、不吉には聞こえず、ただの耳慣れない音だった。だが光が強まり観ていた者たちが突然身を伏

21 これは、熱したアルコールと液体酸素を、適正な圧力のもとで混合させて、爆発の推力を調

サンペロケットは乱れた轟音をあげ、つづけて一発、パーンと音を響かせた。「伏せろ」の号令に地面に身を投げ出した瞬間、壮絶な爆発。銀色の物体が粉々になって彼の立っていた空中を飛びちる。フランツは地面に抱きついていた。耳が鳴り、そのときは冷たさの感覚すらなく。自分の魂が身体の中にあるのかどうかも一瞬わからなくなった[21]……

駆けてくる足音に目を上げるとクルト・モンダウゲンの姿があった。その晩吹きつづけた風が、きっと一年中吹いていて。ふたりを引き合わせたのだと彼は信じることにした。風のおかげだと。生徒だったころの丸みを帯びた肌は精悍な筋肉に置き換わり、頭髪の生え際も後退し。顔は真っ黒けだった。その冬フランツが通りで見かけた何にも増して黒かった。固体の影が折り重なるなか、散乱したロケット燃料がチラチラ燃えるこの場所でも黒さがきわだった。それでもこの顔はモンダウゲンに間違いない。七、八年会ってはいないが、お互い同士一目でわかった。ミュンヘンのリービヒ通りにある、隙間風の吹きこむ屋根裏部屋でふたりで住んでいた。（フランツは化学者ユストゥス・フォン・リービヒ[22]を信奉していたから。同じ名前の通りの住所を幸運なめぐり合わせだと思った。その幸運を確実にするため、後に彼はラスロ・ヤンフ教授博士に師事してポリマー理論を学んでいる。ヤンフ教授は、リービヒから、アウグスト・ヴィルヘルム・フォン・ホフマン[23]、ハーバート・ガニスター[24]を経て受け継がれた正統なる連鎖の、最新の継承者だった。工科大学へは、ふたり一緒に市電で通った――細い昆虫の足のような三本の連結アームが頭上のワイアをキーキーと音を立てて滑る車体に揺られながら。モンダウゲンの専攻は電気エンジニアリング。卒業後は、とある無線波の研究プロジェクトで南西アフリカに渡った。しばらく手紙をやり取りしていたが、やがてそれも途絶えた。

べる実験であるようだ。ピンチョンが愛読した一冊、ヴァルター・ドルンベルガー著『V2』第三章に、彼が陸軍兵器局でロケット開発の責任者となった一九三二年、ベルリン工科大学の学部を卒業したばかりのフォン・ブラウンを交えて行った実験のようすが記されている。

22 一八〇三〜七三。炭水素定量法や化学肥料の開発に数々の業績を残す。ギーセン大学に長く勤めた後、ミュンヘン大学へ。

23 一八一八〜九二。リービヒの下でコールタールを研究。巨大な化学産業が拓けていく基を築いた。

24 317ページ注35参照。

再会の宴は、ライニッケンドルフのビアホールで夜が更けるまで続いた。労働者の酔っぱらいに混ざって、失敗に終わったロケット実験について、大学生に戻ったみたいな、喜び勇んだ壮大な議論を繰り広げた。ぬれたペーパーナプキンになぐり書きをし、グラスをガチャガチャ鳴らしながら、テーブルを挟んで同時にわめき合う。煙と騒音が熱流束をなし、比推力や推進流を生む中を議論が行き交う……

「失敗だった」フランツの影が午前三時か四時の電球の下で揺れている。口元はニタリとして締まらない。「レニ、失敗だったよ。だけどな、連中は成功のことだけをしゃべる！二十キログラムの推進力がほんの数秒だったとしてもさ、それが前人未踏の偉業なんだ。おれも目を疑ったよ。未だかつて誰もやっていないことが起こったんだから……」

この人、わたしを非難してる、とレニは根拠もなく思った。絶望を感じるように条件づけているのよ。でも、そうじゃないの、ただ大人になってほしいだけ。だって夜中に沼地を駆け回って、おれたちは〈宇宙飛行倶楽部〉[25]だとか叫ぶなんて、あまりにワンダーフォーゲル的な愚行でしょう？

レニはリューベックのトラーヴェ河畔の小市民的（クラインビュルガー）な家庭で育った。家の前の丸石敷きの道の向こうは川縁で、すっきりとした木が等間隔に立ち並び、大きな弓なりの枝を川面に張りだしていた。寝室の窓から、大聖堂の二本の尖塔が家々の屋根の上に突きでているのが見えた。だからベルリンの集合住宅の奥まった臭気のただよう部屋での暮らしは、彼女にとって、心の減圧ロックとなった。生家の、趣味に凝ったビーダーマイヤー様式の家具[26]の、絞め殺されそうな圧力を逃がしてくれるもの。〈革命〉が成就した後のよりよき時代に入るのに、そのくらいの課徴金は当然と思っていた。

25 ドイツ語で Verein für Raumschiffahrt という。この団体は一九二七年創設。青年フォン・ブラウンの出発点が、このアマチュア研究会。

26 「ビーダーマイヤー」は、十九世紀前半、ウィーン体制成立後のドイツ・オーストリアの小市民文化を総称する語。

CamScannerでスキャン

フランツは戯れによくレニのことを「レーニン」と呼んだ。ふたりのうち、どちらが活動的でどちらが受動的かは明白だったが、それでもレニはフランツに成長を期待していた。精神科医とも話した、思春期のドイツの男子のことなら自分も知っている——草原や山で仰向けに寝ころがっては、空を見て憧れに胸をふくらませながらマスターベーションをするのだと。その子たちを運命が待ち構える——夏の日の風の中に織りあわされた暗黒が。運命はあなたを裏切り、理想を潰す。運命はあなたを、日曜日の教会帰りに川縁に並ぶ家々の前を漫然とパイプをふかして散歩した父親と同じ、忌まわしい市民根性（ビュルガーリッヒカイト）の中へ送りこむ。マイホーム主義者の灰色の制服を着せられたあなたは、文句ひとつ垂れずに一生の刑期を終える。苦痛から義務へ、歓喜から仕事へ、没入から枯渇へあなたは飛ぶ。それはみんな運命の力。

フランツはレニを神経症的に、マゾヒスティックに愛した。フランツはレニに隷属した、レニが自分を背負って運命の力が及ばぬところへ連れていってくれると信じて。運命は重力のようなものだったのだろうか。ある晩彼は、半分寝ぼけたまま彼女の腋の下に顔を押し当ててつぶやいた。「きみの翼……ああ、レニ、きみの翼……」

でもレニの翼は自分ひとりの重量しか運べない。イルゼならしばらくは運べるだろう。フランツは死んだように重かった。彼を乗せて飛んでくれるものは、「ロケット発射場（ラケーテンフルークプラーツ）」にあるはず。彼は毎日そこへ出ていく、軍とカルテルに使われるために。月面の死の世界へ飛んでいきたい？　それならどうぞご自由に……

イルゼが目をさまして泣いている。一日中何も食べていないのだ。やっぱりペーターを頼っていくしかないのだろう。ペーターのところへいけばミルクもある。レベッカが食べ

家具は実用的で落ちついたスタイル。

CamScannerでスキャン

ていたパンの耳の残りを差しだした。「赤ちゃん、これ食べるかしら」

レベッカの内面はあまりユダヤ人らしくない。知り合いの左翼の半分がユダヤ人なのはなぜだろうかとレニは考え、すぐにマルクス自身がユダヤ人だったことに思い当たる。あの書物に人種的親近感があるのだろうか、マルクス主義には、声高な論争を好むラビのようなところが…もらったパンの一かけをイルゼに与え、抱きあげる。

「フランツがここにきたら、わたしの姿は見なかったことにしてね」

レニとイルゼがペーター・ザクサの家に着く。日はとっぷり暮れ、ちょうど降霊会が始まるところだ。急に自分のみすぼらしいコートが気になった。木綿のドレスも（スカートの裾がこんなに高いのは私だけ）、すり傷と町の埃だらけのシューズも、宝石ひとつもないことも。それを気にする自分のいかにも中流の出らしいところがうとましい。過去の痕跡が疼いているだけであってほしい。だが御婦人連の多くはお年寄りで、それ以外はキラキラさせすぎのタイプ。男たちはいつもの集まりより裕福な感じだ。襟についた銀の鉤十字が、そちこちに見える。テーブルのワインは、一九二〇年と二一年のヴィンテージものがずらり。シュロス＝フォルラッド、ツェルティンガー、ピエスポルター――そうか、今夜は特別な会なんだ。

その目的は元外務大臣、故ヴァルター・ラーテナウ氏と接触すること。[27] ギムナジウムにいた頃、ほかの子供たちと一緒に、ユダヤ人差別丸出しのチャーミングな俗謡を歌ったのを思いだす。

Knallt ab den Juden Rathenau.　　ユダ公ラーテナウ射ち殺せ

27　一八六七〜一九二二。産業界の大物として、第一次大戦後にドイツ民主党結党に参加。ヨーゼフ・ヴィルト政権の外務大臣となり、ソ連との間

ラーテナウ暗殺ののち何週間も、レニはどんな唄も歌うのをやめた。歌が殺しの引き金を引いたのではなくても、予言(プロフェシー)の言葉にはなると思ったから、一種の呪い(まじない)に・・・
　今夜の降霊会は具体的な情報を求めるものだ。前大臣へ質問がなされる。入り口でそれとなく入場者のチェックが行われている。セキュリティ上の理由だ。ペーターの居間に入れるゲストは最初からきまってる。断られた落伍組(プレテリット)は外に立ってゴシップを語る。強張った表情で歯茎を見せ、手を動かしながら。・・・IGファルベン周辺での今週のビッグ・スキャンダルは、子会社のシュポットビリッヒフィルム社が、OKW[28]への武器納入計画に、半径十キロ内の全住民の目を完全に潰すことのできる新型機上搭載光線の設計案を送ったこと。その責任をとって、経営陣全員がまもなく更迭される。[29] IGの検討委員会がその計画を見つけて、なんとか事なきを得たのだが、シュポットビリッヒの連中は、そんな武器がはびこったら、次の戦争後、染料市場がどうなってしまうのかという認識が、会社ぐるみで欠落していたようだ。〈ゲッターデメルンク・メンタリティ〉[30]の一例といえようか。
　その武器の名はL-5227。Lは灯り(リヒト)のL。ドイツ人は可笑しな婉曲表現をする。たとえばロケットは集合体(アグレガート)の意味のAで表すし、IG自体、インテレッセン・ゲマインシャフト、すなわち「利益共同体」の略だし・・・プラハで起きた触媒中毒事件にしても、その「緊急事態」への対応を任されたのがCIA、すなわちChemical Instrumentality for the Abnormal（対異常化学対策）なる組織の第6b班のスタッフだったというのは本当だろうか。その原因がセレニウムにもテルルにも同時にかかわる——名前を聞けば「癌」

にラパロ条約を締結。その二ヶ月後に国家主義者に暗殺された。

28　国防軍最高司令部。実質上ヒトラーが陸海空の国防三軍を直接指揮する形になっていた。

29　一大コンツェルンを形成しつつあったIGファルベンが、実際にOKWと癒着的な関係にあったことは史実だが、シュポットビリッヒ（訳せば「嘲笑の安物」）というフィルム社の名は創作。

30　訳は「神々の黄昏」。悪との戦いにおいて神々全員が世界とともに滅びるという北欧系神話の結末。ヴァーグナーの歌劇『ニーベルングの指輪』第四作（第三夜）の題名でもある。

CamScannerでスキャン

と同じで会話も凍る——毒性物質だったというのだが…

今夜の会に着席を許された選ばれし者(エリート)は、ナチ企業体連合のグループを代表する面々だ。IGの一支社の取締役(ジェネラルディレクトール)スマラークト[*31]の姿があるのがレニに見えた。彼の会社はある時期フランツとコンタクトをとっていたが、ある日からプツリと接触がなくなった。どうしてか、謎めいて不吉な気配もただようけれども、あの時代のことだから、経済的な理由だといわれれば疑うわけにもいかない…

人混みの中でペーターと目があった。握手を交わすとき「家出してきた」とささやいて、うなずく。

「どこのベッドルームでも、イルゼを寝かせつけておいで。あとで話ができるかい?」

今夜の彼の目つき。色めき立った牧神のようにつり上がっている。自分はフランツのものじゃないし、ペーターのものでもない。そのこと、わかってもらえるだろうか。

「もちろんよ。今夜は何の会なの?」

彼は鼻をフンと鳴らした。聞かされていないという意味だ。自分はただ使われるだけ——さまざまなかれらがもう十年も彼を使っている。それなのにどのように使っているのかは知らされていない。稀に、ある偶然から、さりげないひと言から、微笑の傍受から、何か仄めかされそうになることはあっても。永遠に曇ったままの歪んだ鏡に映って見えるかのように、依頼人の笑みが何かを伝えるように…

なぜ今夜ラーテナウに登場願うのか? 死に際にシーザーが何をささやいたかと尋ねるのと同じ。「ブルータス・オマエモカ」みたいな公的なウソしか彼らは漏らしはしない。あれは厳密に何も言っていない。暗殺の瞬間には「権力」と「権力の無知」とがひとつに

31 ドイツ語で「エメラルド」という意味。この人物は創作。

なる。それを〈死〉が見届け正当化する。そういう瞬間に伝達される言葉が「プルータス・オマエモカ」などという日常の暇つぶし的発言になるはずはないだろう。死の瞬間には、歴史——歴史とはよく言って「紳士」とは見なせない者たちによる虚飾の陰謀だ——が認めるには恐ろしすぎる伝達が生じる。その真実は抑圧され、あるいは、特有の上品さが求められる時代であれば、何か別物につくり変えられる。死の瞬間を超え〈あちら〉に存在するようになって久しいラーテナウが、生者の世界のことに関して何が言えるのか知らないけれど、銃弾のショックが彼の生身の神経に閃き、空から天使が飛びかかった瞬間にこそ伝達しえた真実の衝撃は期待できそうもない。

まあ、それはいずれわかる。ラーテナウは——歴史の書き記すところでは——カルテル化した国家を予言し構築した人物だ。ベルリンの陸軍局の小さな部署から出発して、世界戦争の只中にあるドイツ経済全体の調整者となった。供給量・割当量・価格の制御を行い、各企業間を画していた守秘事項やら私有資産やらのバリアを切り崩した彼はまさにビジネス界のビスマルクであって、その権力の前では、特権を主張できる帳簿も、秘密の取引もありえなかった。[32]父エミール・ラーテナウはドイツのゼネラル・エレクトリックに相当するAEGの創立者だが、息子のヴァルターは単なる事業の継承者ではなかった。彼は哲学を持ち、戦後の〈国家〉に関するヴィジョンを持っていた。いま起こっている戦争は世界革命であり、それが終結した暁には——アカの共産主義でも感情まかせの右翼でもなく——ビジネスこそが真に正当な権威をもつような合理的な構造が支配を確立しているだろう。その構造が、世界戦争を戦うために彼自身がドイツにおいて設計したものであっても別に不思議はない。

32 エミルは一八八一年、銀行の援助を得てトマス・エディスンからヨーロッパでの制作販売権を購入した。AEG（総合電機会社）創立は一八八七年。

CamScannerでスキャン

ということなら、オフィシャルな歴史書にも書いてある。壮大な見解だけど、スマラークト取締役も彼の同僚も、一般大衆すら信じるような話を告げられるために会に集まってきたのではない。なにしろ今夜のこの光景、これはまるで――パラノイドの眼で見れば――物質界と霊界が壁の両側から手に手を取っているかのようだ。権力のない者には知らされない、どんなことを彼らは知っているのだろう。企業活動の俗界的多様性の背後に、どんな凄まじい構造が隠されているのだろう。

冗談にしても薄気味悪い、呪われた室内ゲーム。スマラークトには実際のところ何一つ信じることができない。技術屋上がりの経営者である彼に、これを信じろといっても無理だろう。彼はこの会に、すでにこの世で形をなしている物事の示し(サイン)や予言(オーメン)や確証を求めているだけかもしれない。紳士クラブの集まりでひと言、「あのユダヤ人さえ、われわれを祝福してくれてるよ」と言って笑いを取れたらいい。霊媒を通して伝えられるものをあの人たちは、歪曲し、編集し、祝福のメッセージにしてしまう。まさに、天地をつらぬく侮辱ではないか。

中国の象牙や絹の壁掛けが数多く飾られた部屋の、その静かな片隅にカウチを見つけたレニは、片方の脛をソファから垂らして横になり、リラックスしようとする。フランツはいまごろロケットの実験場から帰宅し、電球の下で目を瞬いてお隣りのジルパシュラーク夫人が渡しに来たメモを読んでいるころだろうか。レニの最後のメッセージを。メッセージは今夜のベルリンの光を運ばれる・・・ネオンの光、電球の光、星あかり・・・メッセージは情報の網となる。その網からは誰も逃げることができない・・・

「路(パス)はクリアだ」声がザクサの唇とこわばった白い喉を動かしはじめる。「そちらにおら

33 それぞれ貝紫、茜色、藍色。どれも古代からの染料。

34 イギリスの化学者パーキンは、ドイツ人の師アウグスト・ヴィルヘルム・フォン・ホフマンから習ったやり方で、コールタールから得られるナフタリンから〈マラリ

れる諸君は、時間軸にそって、逐一ステップをたどるしかないだろうが、こちらにそういう制限はないのでね。一度に全体の形を見渡せる。いや、わたしはまだ新米なのでうまくできんが、こちらに居られる多数の方々には明瞭な…存在（プレゼンス）として――形（シェイプ）と言うと違うのだよ。…見えている。言わしてもらうとだな、もはや諸君の状況に自分を押しはめるのが億劫になってきている。諸君が思い悩んでいる問題は、いくらグローバルなものに思えても、われわれの多くにとっては、ちっぽけな寄り道にしか見えんのだ。曲がりくねった細道を行ったり来たりしているようで――そちらから見れば、広くてまっすぐなアウトバーンを軽快に飛ばしている気分なのだろうがね。諸君が現実だと見なしているものがみな幻影だと告げても、わたしの役に立つわけでもなし。きちんと受け止めてくれるのか無視されるだけかもわからない。諸君には諸君の路、諸君のアウトバーンがすべてなのだろうしね。

「よろしい。モーヴだ。モーヴもパターンの一部である。モーヴの発明によって、それが諸君のレベルへ到達したことが。聞いているかね、ゲネラールディレクトール？」

「聞いております、ヘル・ラーテナウ」IGファルベンのスマラークトが答えた。

「染料といえばティリアンパープル、アリザリン、インディゴ[*33]があり、ほかのコールタール系染料もあるが、鍵はモーヴだ。イギリスでウィリアム・パーキンが発見した。[*34] パーキンはホフマンの弟子で、そのホフマンはリービヒに鍛えられた。そういう連鎖があるのだよ。業（カルマ）の連鎖と言ってもいいが[*35]、きわめて限定的な意味でだな…もうひとり、イギリス人[*36]でハーバート・ガニスターという化学者とその教え子たちがいる。…それとオナイリンの発見だ。IGにヴィンペという男がいるだろう、彼に聞いてみなさい。環状構造にし

アに効くアルカロイドの）キニーネの合成を試みている最中、偶然にモーヴ色（彩度の低い紫色）の染料が生成されているのを発見した（一八五六）。この発見が、それまで廃物でしかなかったコールタールの活用を促し、織物やファッション産業と結びついて、ドイツのIGファルベンやイギリスのICIに巨利をもたらす過程が始動した。

35 ロンドン大学で教えたホフマンの弟子。ドイツのバイエル社（後にIGファルベンに吸収合併）の研究所で化学薬品の開発に所期の成果をあげる。

36 このドラッグはピンチョンの創作。詳しくは659ページ。

たベンジルイソキノリンの専門家だ[*37]。あのドラッグの臨床効果を調べてみるといい。いや、そちらの方向を探るといいのではないかということだ。モーヴ染料、パーキン、ガニスターという線に収斂していくラインを。だがわたしには分子のことしか見えていない、ほんの大まかなスケッチしか・・・メトナイリン、これは硫酸塩だ。ドイツではなく、合衆国を探るといい。合衆国とのリンクがあるのだよ。ロシアとのリンクもだ。フォン・マルツァン外務次官とわたしとがラパロ条約[*38]にあそこまでこだわったのはなぜだと思うね。東へ進む必要があったのだよ。これもヴィンペに聞きなさい。連結人（Vマン）[*39]のヴィンペはいつも現場にいたからね。ソ連に農業機器を売るように、わたしらがクルップ[*40]にかくも執拗に望んだのはなぜだかわかるかね。それもプロセスの一部だったのだ。当時は今のようにいたわけではないのだが。しかし、やらなくてはならないことはわかっていた。

「石炭と鉄鋼を考えてみたまえ。両者が出会うのはどこだ。コールとスチールのインターフェイス、それがコールタールだろう。石炭とはどのような存在か。地中に埋もれた、真っ黒な、光もない、まさに死をつくる物質だ。太古の、先史時代の、もう二度と目にすることのできない絶滅種の死骸。それがさらに古く、黒く、深く、永遠の夜の層に埋まっていく。鋼は地上の真っ赤な火の中で作られていくが、その鋼を作るには、より黒くより重いコールタールを石炭から取り除かねばならない[*41]。大地の糞便が、輝く鋼鉄の高貴さのために絞りおとされる。選びにもれて棄てられる。

「これをわれわれは単なる産業の進展としてしか考えていなかった。そんなちっぽけなものではない。われわれはコールタールを棄却した。その棄てられた（プレテリット）糞便の中で何千もの異なった分子がわれわれを待った。これは啓示のしるしだ。謎の包みがひらかれていく。そ

37 キニーネ分子の一部をベンゼン環で置き換えたつくりで、モルヒネ等さまざまなアルカロイドの構造的中心をなす。

38 ドイツ同様ヴェルサイユ体制下の鬼っ子となったソ連との間で秘密裡に交渉を続け、一九二二年に電撃的に締結。第一次大戦に関連する領土と金銭の主張を相互に放棄し、経済的協力体制の促進を目指した。

39 原文 V-Mann はドイツ語 Verbindungsmann の略。「フェアビンドゥング」は、「コンタクト」「リンク」「コネクション」の意味。

40 プロシアの時代からドイツの鉄道敷設や兵器産業を支えてきたエッセンの企業。

CamScannerでスキャン

ーツのひとつの意味がここにある。何マイルもの深み、何千万年もの時の墓場から掘り出され、地上の光に晒された。地上の新たなる色彩の第一号。もうひとつの意味としては・・・連綿とした系譜・・・そこまで遠くはわたしにはまだ見通せないがね。

「しかしそういう語り方では、生を装うことになってしまう。本当の動きは、死から再生ではない。死から死の変換へと向かう。人間にかかわれるのは、死んだ分子を重合体（ポリマー）※42にする程度のこと。しかし重合化は復活ではない。ゲネラールディレクトール、君のIGの話ですぞ」

「私たちの、でしょう、ヘル・ラーテナウ」いつも以上に冷ややかな、堅い調子でスマラークトは答えた。

「それは君のがんばり次第ではないか。これを、リエゾンと呼びたいなら、そうしなさい。わたしも必要とされるなら出てくるつもりだ。聞いていなくてもいいんだよ。君に関心があるのは〝ライフ〟というやつだろうからね。成長する、有機的なカルテルとしての生――だがそれも幻想なのだ。カルテルというのは巧妙にできたロボットで、君たちの目に活発に見えれば見えるほど、現実にはより深層の死へ向かって伸びているのだ。都市に煙突が増殖するのを見るがいい。オリジナルな糞滓を燃やして、その滓をぐんぐん広がるシティの上空へ撒きちらす。構造的にも、潰す力への耐久性は煙突が一番強いのだ、爆発にも耐えぬくことができる――新型の宇宙爆弾（コズミック・ボム）※43の衝撃波にさえもだ」――と、ここでテーブルの回りから小さなどよめき――「まあそれは諸君も知ってる通りだ。死に傾斜していく構造こそが持続性をもつ以上、死は、死以上のものへ変換され、かくしてその統治を完成させていく。地中に埋もれた石炭層がどんどん濃密に層を積み重ねていくのと同じだ――

41 製鉄所では、石炭を乾溜してコールタールやピッチ、硫黄などを取り除いたコークスを使って、高炉での高温燃焼を得る。

42 ナイロンやポリエステルなどは、単量体の分子（モノマー）が鎖状（または網状）に結合したポリマーである。

43 想定されたナチス・ドイツによる核開発に対抗する名目で一九四二年に実際のスタートを切った原子爆弾の「マンハッタン計画」は、一九四四年中には、ウラン235とプロトニウム239の着実な生産体制を完備し、爆発実験の手前まで進んでいた。

CamScannerでスキャン

ひとつの時代の上に別の時代をのせ、古い廃墟の上により新しい廃墟を積み上げる。みんな生を偽装する〈死〉のやり方だよ。

「それらの表われ、示し（サイン）はまやかしではなく現実である。であるとともに、プロセスの症状（シンプトム）でもある。このプロセスは同じ形態、同じ構造にしたがう。それをとらえるには徴し（サイン）を追うことになるだろう。原因と結果によって語られるのは俗な歴史だけであって、それは真の過程から目を逸らすはたらきしかない。諸君の役には立つだろうが、われわれにはもはや不要だ。諸君は真実を手にしたいか。手にしたいなら——そう思ってはいかんかな——こうしたことの技術的（テクノロジー）側面を見ていかなくてはならない。ある種の分子の内奥（ハート）を探ることだ。結局それらの分子が取り仕切っているのだからね——温度も圧力も流動率も、コストも利益も、塔の形も…

「諸君がするべき質問が二つある。ひとつ、合成（シンセシス）とは何か。合成の本性（ネイチャー）とは。二つ、コントロールの本性とは何か。

「わかっているつもりだろう。自分たちの答えにしがみつくのはけっこうだ。いつかは手放すことになるんだがね…」

一個の沈黙が生じ、それが伸びていく。椅子の上ですわり直す動き。だがテーブル上にふれあった小指と小指は離れない。

「ヘル・ラーテナウ？　ひとつ教えてもらえますかね？」手に負えないナチスのひょうきん者、ハインツ・リッペンシュトスが言った。テーブルを囲んだ人たちの間に笑い声が漏れる。ペーター・ザクサは席を立って自分の部屋へ向かう。〈神様がユダヤ人ってのはホ

□□□□□□□

パムも、イースタリングも、ドロモンドも、ランプライターも、スペクトロもだ。みんなポインツマンの聖夜の樅の木の星になって、それぞれが冷たい終末を告げている。留まることのない太陽たち、われわれを果てのない北に残して南へ南へ逃げていく。中でいちばん輝きの明るいのがケヴィン・スペクトロ、この星が一番遠いのだ。そしてナイツブリッジの繁華街[*1]は買い物客であふれ、ラジオからはクリスマス・キャロルが絶えず、地下鉄は暴動かと思うほどの人出。だがポインツマンはひとりだ。でも、Xマス・プレゼントをいただいた、ララッララ。今年のギフトはスパム缶の犬[*2]などではない。奇跡が起こって、人間の脳を授かった。かのタイロン坊やの。大人になってからも、その大脳皮質(コーテックス)のどこかに〈心理学〉自体の幼年期の一片を抱えている――そうです、みなさん、これは歴史の純粋なる一片です、包嚢に包まれたまま時の汚染を免れ、ジャズにも、不景気にも、戦争にも動かされずにいた――故ドクトル・ヤンフ御自身の一カケラと申してよろしいでしょう、それをプレゼントされたんです。死を超えて、神殿の中央の間の決裁(さばき)も通過して、なおもこの世に生きつづけるその一片をね。

1 ハイドパークの南、ハロッズやハーヴェイ・ニコルスなどが並ぶ高級商業地域。

2 255ページ註30参照。

誰からも聞かれない、誰にも言わない。私のハートが感じている、精と希望が充ちてくるのを。・・・リヴィエラからのニュースは申し分ない。こちらの実験のほうも急にうまく行きだした。プディング准将からは——闇の資金にダブつきがあったのか、一般流用というやつなのか、それともどこかの計画がポシャったのか——予算増額の通知さえ来た。准将も、ポインツマンのパワーを感じ、保険の意味で賭けてきたのか？

日中あらぬ時間にポインツマンは夢想を始め、股間を脈打たせている自分を見いだす。ジョークすら飛び出す。英国人パヴロフ学者のジョークとは？ ほとんどがひとつの不幸な偶然に絡むものだ。英語で「大脳皮質」を意味するcortexは、そもそもラテン語で「樹皮（バーク）」の意味[*3]——となれば、犬と樹木の、みんな知ってるユーモラスな関係がごていねいに指摘される（これだって充分にひどい、品格あるPISCESの面々は相手にしていない、だが続いて登場する常規を逸した作品に比べれば、まだまだウィットのきらめきすら感じさせる。たとえば、これ——「サン・アントニオからやってきたカウボーイにロンドン子（コックニー）が叫んだ。なんと言ったか？」[*4] 恒例のPISCESのクリスマス・パーティも宴たけなわの会場からポインツマン、モーディ・チルクスに手を引かれクローゼットの中へ入る。ベラドンナ製剤とガーゼと漏斗管だらけの、手術用ゴム手袋の臭いが立ちこめるなか、彼女はいきなり真っ赤なストッキングに包まれた膝をつき、ズボンのボタンを外しにかかった。ややや、度肝を抜かれたポインツマン氏はガタガタ震える手でモーディさんの頭を撫でてたら、ワインカラーのリボンで縛った髪の毛がバラけた——おいおい、これ、本物だ、つるんと赤くてホットにキュッキュと音のするストッキングに包まれた奴隷女のアンヨちゃん。どこか遠くの蓄音機からルンバが流れる。そうです、この蒼白な冬色の病

3 犬が「吠える bark」という意味がかかる。

4 『GRC』によれば、答のひとつは cortex をもじった 'Koh, Tex.'。コックニー（ロンドンの下町訛り）では「ゴッド！」という驚きの発声は「コー」となる。「テックス」はテキサス人への呼びかけ。

院ホールで、ベースと拍子木（クラベス）の刻むリズム、けだるいトロピカルなストリングの抑揚のなか、固いむきだしの床の上でみんなが踊る、その音の波を、パラディオ建築の天井の、千の部屋の巻き貝が受け、反響し、強弱の具合を変えて壁や梁に伝えている…おおっと、大胆にもモーディちゃん、ピンク色をしたパヴロフ主義者の一物を口一杯にくわえ、刀飲みの芸人のように顎先から鎖骨まで見事に垂直に差しこんだ。喉の奥から戻しぎわ、ウッフ、アッフと女らしくむせ返る。高価なスコッチの香りが花びらを拡げる。彼女の両手につかまれたズボンの尻のウール地のたるみが伸びたり縮んだり――あまりに突然のこと、ポインツマンはただ身体を揺らしながら、酔っぱらったようにとろけた眼をパチクリさせて、これは夢なのか、それともついに私はパーフェクトな調合比を見いだしたのだろうか、忘れるなよ、硫酸アンフェタミンを六時間毎に五ミリグラム、ゆうべ就寝時にアモバルビタール・ナトリウム〇・二グラム、[*5]けさ朝食の時に飲んだビタミンカプセル各種、それにアルコールがだいたい毎時一オンス、それがいつからだったか、cc換算では…おお何てことだ、達しそうだ、ホントに？　イエス…ウッ、ウー…で、モード嬢を見れば、健気にもゴクンと飲んだ、一滴もこぼさない…顔に静かなほほえみを浮かべ、今やっと、アンプラグド。垂れつつある鷹の首を冷たい独り者の巣に戻してあげると、なおもしばらくクローゼットに跪いたまま。隙間風と白い明りの入りこむ瞬間、一緒に入りこんでくるこの曲、えーとエルネスト・レクオーナ[*6]の何かだろう、「シボネー」か、その流れくる長い回廊がキューバの椰子の夜へ続く航路のようだ。緑の浅瀬にスライムストーンの胸壁…ポインツマンの脚に頬をあずけ、血管の浮きでた彼の手を顔に押し当て、モードはちょっぴりヴィクトリアンなポーズをとった。けれども見る者はいない。そのときも、それ

5　硫酸アンフェタミンは覚醒剤。アモバルビタール・ナトリウムは鎮静剤。ちなみに、スロースロップにトイレを下る幻覚を引き起こした「アミタール・ナトリウム」は同じ物質の略称。

6　キューバの代表的作曲家・バンドリーダーとして一九三〇年代、合衆国やヨーロッパにもラテン・ブームを作った立役者。

CamScannerでスキャン

以後も。この先、冬の廊下で、ふたりの視線が交わって彼女の頬がこの晩のひざ小僧のように赤く染まることはあっても、ラボから一緒に彼の部屋に同行することはあっても、この秘め事は二度と繰りかえされまい。戦争と英国の十二月（イングリッシュ・ディッセンバー）、その両方がひと息ついた隙に生じたトロピカルな、完璧な平和の瞬間は、二度ともう……

誰にも言えない。何かが起きているとモードは感づいている。PISCESの資金の流れはすべて彼女の手を通過するのだ。すり抜けるものはひとつもない。そのモードにさえ言わない……自分の望みを明確な言葉でさらすなど、とてもできない。自分自身に対しても、そんなこと、したことがない……彼の望みは前方の暗闇のなか、黒々とした恐怖に取り囲まれることで否定的に定義されているのだ。その希望もいずれは暗黒に飲みこまれる運命なのか。パヴロフ主義者の歴程（プログレス）の果てには、むなしくも馬鹿らしい冗談のような死が見いだされるだけなのだろうか。

仲間の医者のトマス・グウェンヒドウィも感づいている。ポインツマンの表情にも足取りにも、筋繊維の動きの変化があきらかだと。グウェンヒドウィはすばらしい恰幅と、その歳でもないのにサンタクロースの白髭を持ち、何事も思いのまま、ボサボサの恰好をしていつもショーマンシップを発揮する。コミカルなウェールズの田舎弁と、硬いダイヤモンドのような真実を伝える医学者の弁を、同時に重ね合わせる芸を披露する。この男の歌声がまた常軌を逸したボリュームだ。時間があくと戦闘機の滑走路までぶらり歩いていって金網を抜け、あたりを見回し、いちばんデカイ機体を探す――なぜかというと〝空飛ぶ要塞（フライング・フォートレス）〟B‐17がパワー全開で飛び立つときを狙って讃美歌「天つ御使いよ」[*7]の低音（バス）のパートを響かせるのが趣味なのだ。しかもその声が人の耳に届くのである。骨格を震わすそ

7　讃美歌一六二番。英語の歌詞を直訳すると「讃えあれ！　イエスの御名の力よ／天使も平伏し、舞いおちたまえ／ディアデムを差しだして／〈彼〉をすべての王となせ」。

の純粋な発声は爆撃機の飛び立つ音を振り切って、遠くストーク・ポージスまでも流れつく。[*8] いつだったかベッドフォードシャーのルートン・フーから、『タイムズ』紙に手紙で問い合わせた女性がいた。あのすてきな太い声で「ディアデム」を歌ってらっしゃる方はどなたでしょうと。ミセス・スネードという名前だった。グウェンヒドウィは酒飲みで、グラスの中にマッド・サイエンティスト風の調合品を混入する。ビーフティー、グレナディン、咳どめシロップ、吐きだしそうになるほど苦い立浪草（たつなみそう）・吉草根（きっそうこん）・益母草（やくもそう）・敦盛草（あつもりそう）など煎じ薬の数々。飲みっぷりがまた堂に入っている。伝説や歌を通して国民的に言祝がれる、矍鑠（かくしゃく）たるアル中の飲みっぷりなのだ。シェイクスピアの『ヘンリー五世』に登場するウェールズ人、[*9] みんなに韮を食べさせようとする男だが、恐らくはその直系なのか、グウェンヒドウィは静かにすわって飲んだりしない。ひっくり返ることもないし、まっすぐ立って飲むこともない。病人の顔と瀕死の顔が続く長い廊下を、巨体に縦揺れ横揺れ（ピッチ&ロール）を起こしつつ、ああだこうだ罵りつつ進んでいくその姿、ささいな身振り、声や息遣いの変化からは無骨ながらも人間愛が感じられ、その温かみはポインツマンにすら届いた。彼のうけもつ患者は黒人、インド人、中欧出身のユダヤ人（アシュケナジック・ジュー）――ハーレー・ストリートでは聞き慣れない言葉をしゃべる連中だ。爆弾で飢えと寒さの中に追いだされ、住むところも満足にない人びとの顔は、子供たちさえ、古い時代の人間の、苦痛と逆境に慣れきった表情を見せている。ポインツマンには驚きだった。自分が診てきたのは、神経性の無食欲症か便秘かという両極端、ウェスト・エンド流のお上品な徴候のかずかずだが、そんなものはグウェンヒドウィには診察にも値しないのだろう。この男の病棟では基礎代謝率の値がマイナス三五だの四〇だのという数値を平気で示すのだ。X線写真の骨の線は白く膨らむ。舌の裏

8 バッキンガムシャー南部の村。ロンドンの西にある空軍滑走路からさらに七マイルほど西。次のルートン・フーはロンドンの真北で、五〇マイルほど離れている。

9 王に仕える騎士フルエレンを指す。ローレンス・オリヴィエ監督、主演の映画『ヘンリー5世』は、大陸侵攻を前にしたこの時期、ちょうど製作中だった。

から採ったグレイの粘膜を旧式の黒い襞つきの顕微鏡に載せてみれば、ヴァンサンロ内炎[*10]の菌の大群が雲をなし、彼らを生んだビタミンの乏しい細胞を潰瘍化しようと狙っている。これはまったく別世界である。

「わからん、おれにはさっぱりだ」ハリネズミ色のケープから太いスロー・モーションの腕が伸びて、出てきたばかりの病院に向けられる。ふたりは降りしきる雪の中を歩いている。ポインツマンにとって、修道士と修道院、兵隊と駐屯地とは別々の存在なのに——グウェンヒドウィにとってはそうではないらしい。自分の一部が病院に残る——人質に取らせて。通りも閑散としたクリスマス・デイ、グウェンヒドウィの下宿部屋まで坂を登っていくふたりの研究者と爆弾に突き抜かれた建物の壁面の間には雪の幕。それが石の視差を生みだしながら行進を続け白い陰鬱の中へ霞んでいく。「どうしてあんなにシブトイのかわからん。貧者も、黒人も、ユダヤ人も！　ウェールズの人間もだ。ウェールズ人はむかしユダヤ人だったのか？　イスラエルの〈消えた部族〉の、黒き民族の、末裔か。陸地伝いにやってきたのか。[*11]何百年？　途方もない旅だな、その果てに見いだしたのがウェールズの地であるわけだ」

「ウェールズ……」

「そこに留まってカムリ族になった。どうだ、この世の人間はみなユダヤ人ってことはないだろうか。人類みんな、原初の握りこぶしから放出されたタネからできた。タネはいまもって外に向かって飛んでると。おれは信じるぞ」

「もちろん、君なら信じるな」

「お互い様だろ？　アンタは違うのか」

10　第一次大戦で塹壕内の兵士を襲った凄まじい口腔内の炎症。通称「トレンチ・マウス」。

11　イスラエル王国が紀元前八世紀にアッシリアに滅ぼされたとき、それまで聖書および他の歴史文書に記載のあった十の部族が謎の消失を遂げた。ウェールズに住み着いたカムリ族は、ノアの息子ヤペテの子孫だと信じる人が少なくなかった。

CamScannerでスキャン

「わからん。きょうはあまり自分をユダヤ人とは感じていない」
「発散している感じはないか？」　ポインツマンにふと、相手の言う意味が通じた。ダウェンヒドウィは孤独について、散り散りになる寂寞感について語っている。その一言が、驚いたことに、心のうちの何かにふれた。ダーツの裂け目からクリスマスの雪が滲みこむ。痺れるような冷たさが入りこもうとする。視界の横隅に、ダウェンヒドウィの茶色いウールの横腹が揺れる。白一色の世界の中で、孤軍奮闘している色彩の小さな陣地。飛んで散っていく。飛んで……ダウェンヒドウィの巨体が羽織ったケープには何百万もの白い氷の点々が斜めにかかり、それが一向に消えるそぶりも見せないので、ポインツマンにはいつもの不安が——偏揺れの酩酊のガタガタの恐怖、〈正典〉の呪いの恐ろしさが——舞いもどってくるのだった……頼むからコイツだけは連れていかんでくれと、しみったれたハートで思う……でもシャイであるがゆえに、ダヴィドゆえに、隣の男にはほほえみかけることもしない——ほほえみには必ず釈明がつきまとう男、せっかくの笑みも台無しだ……
ふたりが近づくと、犬が吠えながら駆けてくるが、ポインツマンの〈プロフェッショナルな眼〉に睨まれて静かになった。ダウェンヒドウィがハミングしているのは「アベリストウィス」[12]だ。守衛の娘エステルの足下にはガタガタ震えた子供がふたりほどまとわりついている。手の中にはクリスマスのボトルが一本、強烈に鼻をつく飲み物だが、飲みこんで一分後には胸の中がホカホカになる。歩く廊下は石炭の煙と小便とゴミと昨夜の肉野菜炒めが混ざった匂い。ダウェンヒドウィはボトルから一口飲みをして、エステルと走りながらのスキップ&ディッケル、太っ子のアーチとママの太いムートンの腰回りで高速度の「いないいないバー」をやり始めた。盛んにダウェンヒドウィを叩こうとする子をヒョイ

12 ウォーリスの美しい港町を題名にした讃美歌。

と鋼のような男の、身のこなしの軽いこと。
ダグェンヒドウィがガスのメーターに息を吹きかける。メーターがすっかり凍りついて、ダイヤルも凍らしてくれたのだ。くちばしめ、何ちゅう寒さだ。ガスのメーターを手でくるみ、眠りながら、身を屈めてケープの翼で包みこむ姿のしぐさは、シネマ・スクリーンで見る蝙蝠のようだ――ダグェンヒドウィは自前の光熱を発する太陽か・・・
居間の窓の向こうには、葉の落ちたアーモンド色のポプラの木、一本の運河、雪をかぶった鉄道操車場が続いている。さらに向こうで長いノコギリの歯のような石炭殻の山がきのう落ちたV爆弾でいまなお煙をくすぶらせている。不規則な煙が横に流れ、くるりと回っては消える。降る雪がそれを運んで着地させる。
「いまのは一番近い着弾だな」ダグェンヒドウィがヤカンを置いた。擦ったマッチの酸っぱい硫黄の匂い。ややあって、なおもコンロの火を見守りながら、「ポインツマン、すごくパラノイドな話を聞かせてやろう」
「君までか」
「最近、ロンドンの地図は見てるか。V爆弾の大流星群だが、どこを目がけて落ちてきてるか？ ここなんだぞ。ほら。官公庁(ホワイトホール)が狙われてしかるべきだろ？ だが、そうじゃない、おれのところが狙われてる。ひでえ話だ」
「そういう非国民的な発言はつつしめ」
「そうか」咳払いをして、ペッと流しに吐きだす。「信じたくないってのか。そりゃそうか。あんたはハーレー・ストリートの人間だもんな。おうおう、まいったまいった」
王立協会の人間をこうやっていびるのが、ダグェンヒドウィの十八番である。上空に異

常な気流が発生したのか、それとも温度躍層のせいか、米軍爆撃機の羽音のコーラスが流れ降りてくる。〈死〉の白きカマンヴァ・ゲイニー。[13] 地上では入れ替えの機関車が音もなく、操業上のレール網を移動する。

「ポアソン分布にしたがって落ちてるだけだろう」ポインツマンの声は、疑念を示すかのように遠慮がちだ。

「そりゃ、きっとそうなんだろう――いいポイントだ。イースト・エンド一帯には満遍なく落ちてるわな」アーチか誰かが、茶・オレンジ・青の三色でグウェンヒドウィを描いたことがあった――医者のカバンを持ち、一本の水平線にそって緑色のガス工場の前を通りすぎる。カバンに押しこんだ何本ものジン・ボトル、笑顔の下の顎ヒゲから、そこに巣をかけたコマドリが覗いている。空は青く、太陽は黄色く。「でもあんた、その理由を考えてみたことがあるかい。〈シティ・パラノイアック〉。この妄想都市が、何世紀にもわたって、どんどん田舎を飲みこんで繁殖してきた。知能を持った生き物みたいにな。こいつは役者だぞ、ポインツマン、物まねが得意だ！ いろんな力を正確に真似る。経済の、人口統計学の、そう、ランダムな力の作用も真似られる、ほら、わかるか」

「ほらと言われても、わかるわけがない」窓辺のポインツマンは、白い昼のバックライトを背にしている。顔面に浮かんでいるのは、眼球を縁どるふたつの三日月だけだ。手探りで後ろの窓の掛けがねを探るべきか。このヒゲもじゃのウェールズ男、完全に狂ってしまったのか？ ならば逃げるしか・・・

「あんたにゃ、彼らが見えんのだよ」緻密に織った錦のような蒸気が鋼鉄のシミのついた白鳥の口から立ちのぼり始める。「暗闇にいる、黒人たち、ユダヤ人。あんたに見ろった

13 ウェールズのアバリストウィスで毎年三月一日に行われる聖歌祭。無数のパートにわかれた大合唱がわき起こる。

って無理か。彼らの沈黙だって聞こえとらんだろ。言葉と光にばかり慣れてしまった」
「それはどうかな。犬が吠えるのには慣れたがね」
「わしの病院にはな、回復などないのだ。失敗が通りすぎていくだけさ」ぴたりと静止した、道化者のアル中の、笑みを含んだ凝視。「何を治すことができる？　送りかえすのか、また外へ放りだすのか、あんなところへ。大陸の戦場と変わらんだろ、戦闘だよ、副木を当てて麻酔を打って、なんとか人が殺せる最低の状態に戻して送りかえせってか」
「おい、国がいま戦争してるんだぞ」と言ってポインツマンは、相手の睨みつける視線を自分のカップで受けとめた。トンマな受けこたえでも構わない、とにかくグウェンヒドウィに〈妄想都市(シティ・パラノイアック)〉の話をやめてもらいたい、むしろ本日のロケット弾で病院に運びこまれた怪我人の話でもしてくれたほうがましだと思う。しかしポインツマン、グウェンヒドウィは、いまお祓い(エクソシズム)をやっているのだよ。白の騎手たち(ホワイト・ライダーズ)の無言の暴挙をだまらせるべく、この詩人は沈黙を唱いかえしているのだ。最初からそのつもりだった。きょうはこのシケた部屋で、話の通じない相手に向かってわめきたてて過ごそうと。ポインツマンにはいつも通りの、型にはまった、怒りっぽい、無理解な男でいてもらえばいい……
「金持ちが高台に住んで、貧乏人が下に住むような街(シティ)もあるし、金持ちが海辺を占めて、貧乏人は内陸に押しやられるというところもある。さてロンドンだが、ロンドンにゃ悲惨が勾配をなしている。そうじゃないかね。河が海へ向かうにつれて、惨めさも増えていくだろ。なぜなんだと、わしは問いたい。海運業のせいでそうなるのか？　土地利用のパターンが、工業化に伴ってそういう分布を生むってことか？　古代からの民族的タブー感覚がずーっとイギリス人の間に受けつがれて今も生きてるってわけか。違うな、そういうの

CamScannerでスキャン

は違う。ほんとうの理由は〈東からの脅威〉を感じているからだろう。もちろん〈南〉もだが。間違いないぞ、欧州大陸の大衆が脅威なのだ、わかるね。まず最初に東南側にいる連中がやっつけられる。わしらはやられてもいいってわけだ。一方ウェスト・エンドの連中、河の北に住むやつらがやられては困る。いやその〈脅威〉は、具体的な形があるもんではない。政治的な解釈は無用だ。〈妄想都市〉の見る夢を、わしらが理解することはできん。想像するに、ロンドンの街は、敵の街が、海をわたり河をのぼってやってくると妄想しているのだろうか……暗黒の波……戦火の波が押しよせてくるのを。……巨大な、沈黙の〈母なる大陸〉が、ふたたび自分を飲みこみにやってくる悪夢にうなされているのか。わしは知らん、都市が見ている夢のことなど。……だがもし、〈シティ〉が、増殖する腫瘍細胞だったとしたらどうだ。世紀を超え、絶えず形を変えながら、いつの日か、まさにおのれが秘かに抱えてきた最悪の恐怖を目の当たりにする。ボロをまとった歩兵も、俗世にまみれた僧正も、腰抜けの騎士も、みな糾弾され、歴史からふり落とされ、ここに残され、さらけ出され、ただ待っている。最初からわかってたことなんだ、知れてたことだ、ポインツマン！ 否定するなよ、ヨーロッパの前線がいつか、こんな展開をみせるってことは決まってたんだ。下々の民衆を東へ押しやっておくこと、ロケットが作られること、いかなる不具合で飛距離が出ずにどこへ落ちるか、ぜんぶ決まってた。あんたの友達の、メキシコといったか、そいつに聞いてみろ。やつの地図を見てみろ。どこが濃い？ 東だろ。東と、テムズの南、そっちばかり集中して落ちてるだろ。ゴキブリが集まっているところにかぎって、こっぴどくやられるんだ」

「君の言った通り、グウェンヒドウィ」と、お茶をすすって、裁くように、「明らかなパ

ラノイアだ」
「そうさ」彼は祝宴ムードでヴァット69のボトルを出してきた。グラスがふたつ、で、何に乾杯するの。
「赤ん坊だ？」
「赤ん坊のために」ときっぱり言ってニヤリ。こりゃ完璧にイカレてる。
「ああ。わしはな、自分でも、地図を、作ってきた。産科病棟からデータを取ってきてな。空襲時に、生まれてくる、赤ん坊もな、やっぱりな、ポアソン分布に、したがうのだよ」
「そんなものにしたがって生まれてくるとは、可哀想に。その奇妙さに乾杯だ」
時間がたって夕暮れ時、巨大ゴキブリが数匹、すごくダークな赤褐色の生き物が羽目板の隙間から妖精のように登場し、ガサガサと食糧貯蔵室のほうへ向かっていった――ひとはらの子を宿した母ゴキブリもいて、その前とまわりを進む半透明の赤ん坊ゴキブリが、付添いの護衛隊のよう。夜も更けて、爆撃機も高射砲もロケットの落下も一たん止んだ深夜の静寂に彼らは、ネズミのような大きな物音を立てながら、グウェンヒドウィの紙袋の中を食べ進み、その体色と同じ色の排泄物の跡や筋を残していく。ソフトな食感の果物・野菜は好物ではなさそうで、固いヒラマメやインゲンみたいなガリガリ嚙れるものがいいらしい、紙も嚙る、漆喰製の障壁も嚙る。堅い界面を食い破るこいつらは斉一化(ユニフィケーション)の担い手だ。だってほら、クリスマスのゴキブリだもの。ベツレヘムの飼葉桶の藁の奥に棲んでいたのさ、黄金の藁が格子状に織りなす中をヨロヨロ進み、登っていっては、赤肌をきらめかせてヒラリと落ちた。きっと何マイルも延びているように思えただろうね、上にも下にも食べることのできる棲み家が続く。ときどき嚙み切った拍子に、その神秘のヴェク

トルの束が崩れて近くの仲間がひっくり返り、触角とケツを逆さにしてきみの脇を落ちていく。でもきみは踏みとどまった、六本の足すべてを震えつづける金色の茎に差し入れて。静寂の世界は、保温も保湿もいい具合で、日々のめぐりは柔らかで、金色の昼からアンティーク・ゴールドの夕方へ、光は移ろい影になり、もう一度金色の夜明けが始まる。赤ん坊の泣き声が君に届く、目に見えない遠くで、ひとつひとつの泣き声がエネルギーの噴出のよう、はっきりとは聞こえない、気づかぬ者も多い。きみの救世主だよ、ほら。

□□□□□□□

ガラスの鉢に金魚が二匹、魚座(パイシーズ)のしるしをつくってる。頭と尻尾を巴(ともえ)のようにくっつけたまま動かない。前にすわったペネロピーは金魚の世界を見つめてる。沈んだ小さなガリオン船。潜水服のダイバーは瀬戸物だ。きれいな石と貝殻は、きょうだいで海から持って帰ってきた。

ジェシカおばさんとロジャーおじさんがキッチンでハグして、キスした。エリザベスは廊下でクレアをかまってる。ママはWC。猫のスーティは椅子でねんね、スーティはほんとは黒いカミナリ雲で、これから形が変わっていくけど、いまは猫の形をしているの。きょうはボクシング・デイ。夜はとても静かだ。最後にロケットが落ちたのは一時間前、南のほうだった。クレアがゴリウォーグ[*1]をもらって、ペネロピーはセーターだった。エリザベスがもらったフロックコートは大きくなったらペネロピーが着る。

きょうの午後、ロジャーおじさんが子供たちを『ヘンゼルとグレーテル』のパントマイムに連れていった。クレアはたちまち椅子の下にもぐりこんだ。椅子の下では、ほかの人たちが秘密の通路を通って動いている。おさげ髪と白い襟に、軍服を着た背の高いおじさ

1 十九世紀末のイギリス児童文学に登場した〝黒ん坊〟のキャラクター。現代人の目にはきわめて差別的なその人形は、長らく人気商品であり続けた。

人がかけまわって、椅子の背もたれにはコートが掛かって、舞台の上では、おりの中でヘンゼルが背中を丸めている。ヘンゼルは男の子だけど、ほんとうはノッポの女の子がタイツの上にスモックを着ているの。おかしな魔女のおばあさんが、怒りまくって口の中を泡だらけにして入歯を昇っていった。グレーテルはかまどのわきで構えてる・・・
そしたら劇場の通りのすぐ先にドイツのロケットが落ちた。小さい子が何人か泣きだした。すっかり怖がってる。魔女のお尻を叩こうと、ちょうどほうきを振りかざしていたグレーテルは、それを置いて、静けさが戻ってくるなか、スポットライトの輪に立って歌いだした——

ダメです、それにやられちゃダメ
ウカウカしてると　やられちゃうから
でもね、あなたに見えてないでしょう——
大きくて、悪いのが、真上から
あなたの頭をねらってる！
すし、八百屋さんが虹に祈るよ
ゴミ屋さんはネクタイ結ぶ・・・
みんな一緒に、陽気な歌で進行だ
空から出てきた、ペパーミント・フェイス！

「さあ、ご一緒に」ニッコリほほえむと観客席の大合唱だ。ロジャーまでも一緒に歌った。

空から出てきたペパーミント・フェイス
あなたのハートにゃ　しぼんだ夢
顔にパイが、ベシャッと当たって
パントマイム始まるよー
オー、イギリス兵は今夜は雪の中
ドイツ兵は　飛行を学ぶよ
月まで飛ぼうよ、天より高く
ポリエチレンの家で舞い上がれ

ポリエチレンのきれいな家で、舞い上がれ
プラチナのきれいなピンを持って
オー、ママはどでかい　マシンガーン
パパはさえない　ヤング・マーン

［スタッカート、ささやき声で］
オー、社、長が、吸います　社、長の、パイプ
頭、取が、食べます　頭、取の、奥さん
世界はまどろむ　バンドはかなでる
ポケットをひっくり返せば、サプライズ

ポケットをひっくり返せば、サプライズ
そこには誰も、いなかった
階段の上であかりが消えてく
舞踏会の季節が終わったばかり・・・
オー、浜辺の椰子が、ささやくよ
救命係がため息をつく
優秀賞に選ばれた子供たちにも、聞こえてますか
死ぬのを学ぶ子供の声が

隅の、ランプを置いたテーブルのお隣りに、ペネロピーのパパの椅子がある。からっぽの椅子がこちらを向いている。背にかかったクローシェ編みのショールの、灰色と黄褐色と黒と茶の編み目のひとつひとつが、驚くほどくっきり見える。それの模様か、それとも前に何かいるのか、わからないけど、何かが動いている。始めのうちは、ただの光のゆらめきだった。椅子の直前にストーヴでもあって、陽炎(かげろう)がゆらいでいるのかと思った。

「だめ」小さな声を出す。「出てこないで。あなたは違う人なの。知らない人よ、パパじゃない。消えてちょうだい」

そいつの腕と足は、黙って固まったままだ。ペネロピーは見入っている。

おまえを訪ねてきたくなってな。

「あたしに、とりつくんでしょ」

この家の魔物のうわさは今に始まったことではない。これは、本当にパパのキースなんだろうか。まだペネロピーの年齢が、今の半分だった時に戦争にとられた父親が、自分の知っている姿ではなく、殻だけになって戻ってきた――中に入っていたヌルリと軟かな魂はすっかり抜かれて？　笑って愛する、死を敏感に感じて恐れる魂は腐って溶けたか、さもなくば、政府という死神の、死の針を持つ口についばまれてたか――生きた魂が自分で望みもしないのに魔物になっていく過程が西洋魔術では知られていて、この魔物は伝統的に〈クリフォト〉、と呼ばれる。つまりは〈死者の殻〉。……いや、いまの時代には同じことが、この世でふつうに生きている男女の誰にも起こることだ。墓のこちら側だろうと向こう側だろうと、事は尊厳も慈悲もなく進む。ママたちもパパたちも、自分の好きなやり方を選んで勝手に死んでいくよう条件づけられているのだ。癌や心臓発作を発症する。自動車事故を勝手に起こす、さもなくば好きこのんで〈戦争〉に出かけて殺しあう。そして子供たちを森の中に置き去りにする。戦争に〝とられた〟とか、大人の人は言うけれど、それはウソだ。パパは勝手にいなくなった。大人たちが互いにカバーしあっているだけ。もしかしたら、こういう殻になっていてくれたほうがいいような気もする――ガラスみたいに乾いた体で部屋をはい回ったり、古い椅子にすわったりすべり降りたりしていてくれるほうが。愛するパパがまだ死んでいなくて、これから死ぬのを見なくちゃいけないよりましだわ……

台所でヤカンの湯が揺れる。沸騰に向かって軋んだ音を立てる。外で風がうなっている。どこか別の通りで屋根のスレートが一枚すべり落ちた。ロジャーがジェシカの手を取って、自分の胸で暖めようとする。かじかんだ手の冷たさが、セーターとシャツ越しに、しみ込

んでくる。でもジェシカは離れて立っている。彼女の震える身をまるごと暖めたい、とロジャーは思う。手足の端っこだけなんてお笑い草だ。ぜんぶに熱を伝えたい、それって望みが高すぎるのか。ハートが、煮え立つヤカンのように、カタカタ震える。

　ロジャーに理解の光が射してくる。彼女がいなくなるときは、命が尽きるように、あえなく去ってしまうのだろう。そして自分は泣くのだ。なぜなのか、いま初めてロジャーは理解した。いつかこの自分の、腕立て伏せ二十回が限度の腕の力でしかジェシカを引き留められなくなる日がくる、その覚悟を、彼は身につけつつあった。…いなくなってしまったらもう、ロケットがどこに落ちようと同じだ。だが地図と女とロケット弾がひとつに重なる偶然が、その概念が、彼の心に氷のようにひそかに忍びこんでいた。クウィシュリング[2]分子が勝手に格子状（ラティス）の配列を組んでロジャーの思いを氷結させる…もっと長い時間ジェシーと一緒にいられて…ふたり一緒のときにそれが起きたとしたら——別の時代だったらずいぶんとロマンティックな話だろう。でも死の文化にあっては、死ぬ状況などどれも似たりよったりだ。どっちが恰好がつく[3]かというだけのこと——ともかくジェシカといられる時間が少なすぎる…

　ロケットにやられなくても、中尉の野郎がいる。ビーバーって名前の、ジェレミーって名前の。あいつは〈戦争〉そのものだ。戦争が要求してくることをいちいち代弁している——おれたちは労働のため、政府のためにあると。鍛錬あるのみ。愛だの夢だの、魂の飛翔だの、五感の悦びだの、そんなハンパな代物にかかわるなと。そんなもんを大事に思う精神はたるんでると。…フン、よく言うぜ。あいつらホント狂ってるな。ジェレミーは天使の流儀でジェシカを連れていくのかな——悦びのない、曖昧めかした言葉を羽ばたか

2 ヴィドクン・クウィシュリング（一八八七〜一九四五）はノルウェーへのナチス・ドイツの侵攻を手招きし、傀儡政権の首長となった政治家。売国奴の代名詞。

3 原文は hep to the jive。キャブ・キャロウェイの歌を通して広まった黒人ジャズメンのスラングで、「ヘップ」は後に「ヒップ」に代わられた語。

CamScannerでスキャン

せて。ロジャーは忘れられていくのだろう。マニアックでおかしいけどさ、来るべき平和な時代の、合理化された権力の儀式にああいうヤツの居場所はないね。ジェシカは夫の命令にしたがい、家庭で事務を支える、官僚のジュニア・パートナーになるだろう。ロジャーのことは、犯したかもしれない人生の間違いとして、神への感謝の気持ちとともに思いだすのがオチだ。……一瞬、発作的な絶望感がロジャーを襲う——あああ、ジェシーなしにどうやって生きてきゃいいんだ。ジェシーこそ「英国の暖かみ」[*4]。前屈みのロジャーの肩を守ってくれる。ジェシーは越冬ツバメ、ロジャーが手のひらで暖めてあげるひと。ジェシーは枝々と乾し草の最奥部に秘めた無垢。願いが分化し、名づけられ、叶わないものになる可能性を与えられる以前を生きる。そしてジェシーは永遠の鏡の下の、しなやかなパリの悦びの娘。香水なんか絶対つけない、脇の下までくるケープスキン[*5]などはめたりしない。それではあまりにたやすくロジャーをメロメロにしてしまう。愛の値打ちをつり上げてしまう。

　きみはおれの中で、夢から夢へ動き回る。きみはおれの心の最後のみすぼらしい曲がり角までやってきて、ガラクタの間に命（ライフ）を見いだした。もう、どの言葉、どのイメージ、どの夢、どの霊がきみのものか、どれがおれのものかわからない。区切ることなどもう必要ない。きみとおれとで、何かこれまでにないような信じがたい存在になっている……

　ロジャーの信仰告白だ。通りで子供たちが歌う。

　　お告げの天使が歌います
　　シンプソン夫人が王様ぬすんだ[*6]

4 「ブリティッシュ・ウォーム」とは厚手の軍用外套のこと。

5 南アフリカ産のやわらかい羊皮（の手袋）。

6 一九三六年に即位

スーティの子のキムはとんでもなくデブで寄り目のシャム猫。そのキムがマントルピースの上で、このごろの唯一のお楽しみをしようと身構えている。食べて眠ってまぐわう以外、彼の頭を占めているのは、母猫の上にどうやって飛びのろう、倒れこもうという画策だけだ。そのたびに母猫がギャッと叫んで部屋を駆けまわるのを見てキムは寝そべったまま笑いこける。ジェシカの姉ナンシーがWCから出てきて、本気でケンカを始めたエリザベスとクレアを制止する。ジェシカがロジャーから離れて洟をかむ。鳥の鳴き声のような、ロジャーの耳にはもうおなじみの――イ、イ、イ、ジューンググ。ハンカチが鼻から離れる……「なんてことでしょう（スーパー・デューパー）。風邪を引いたみたい」

〈戦争〉を引いたのさ。戦争がきみに感染したんだ。おれにはわからん、どうやったら戦争を遠ざけておけるのか。オー、ジェス。ジェシカ。おれを置いていかないでくれ……

したエドワード八世は、アメリカ人女性ウォリス・シンプソンとの結婚のため在位十一ヶ月で退位したが、それを歌ったこの歌は、全英の子供たちに広まった。

CamScannerでスキャン